

肥後金工録



072248-000-1

147-157

肥後金工録

長屋 重名/著

M35

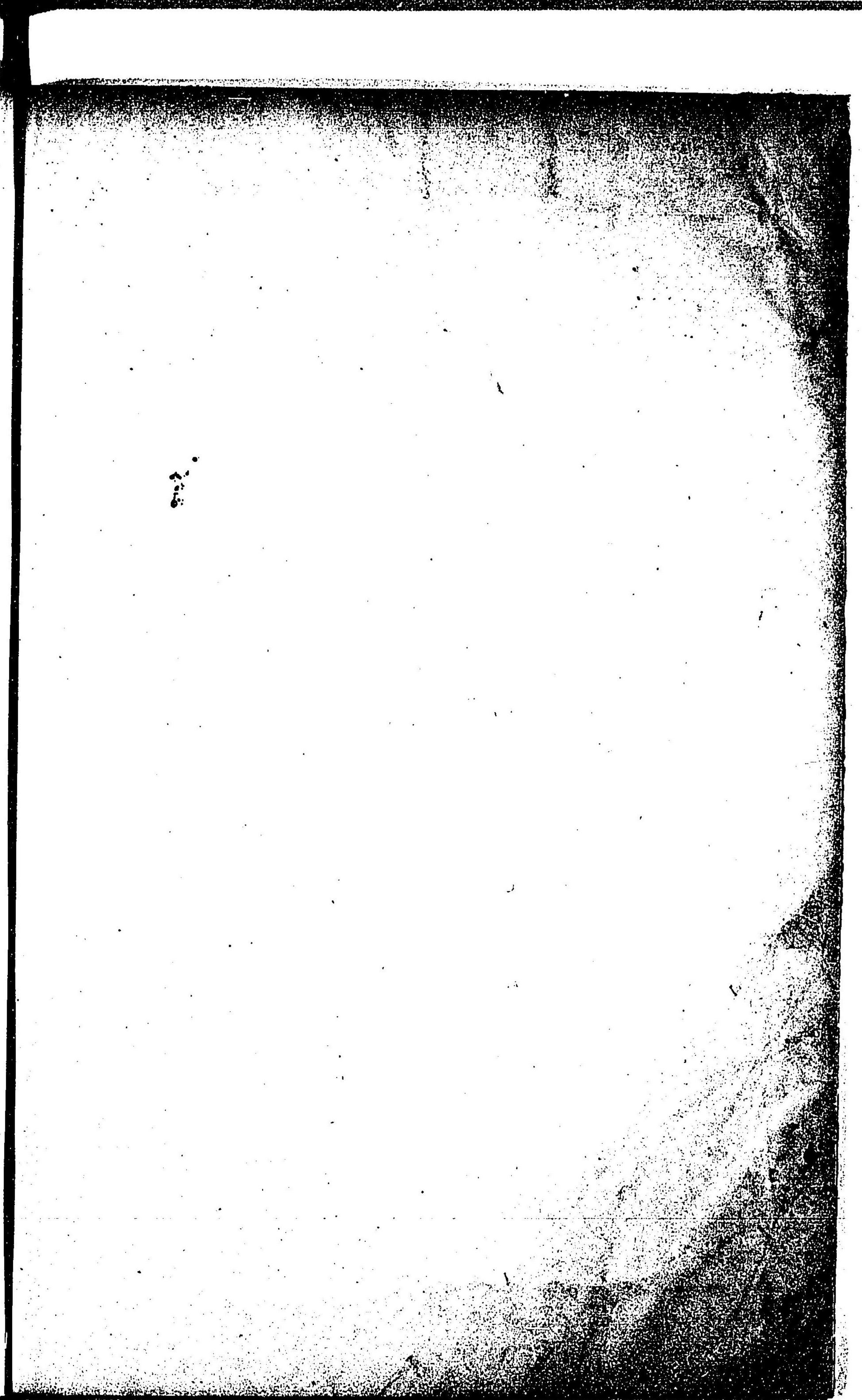
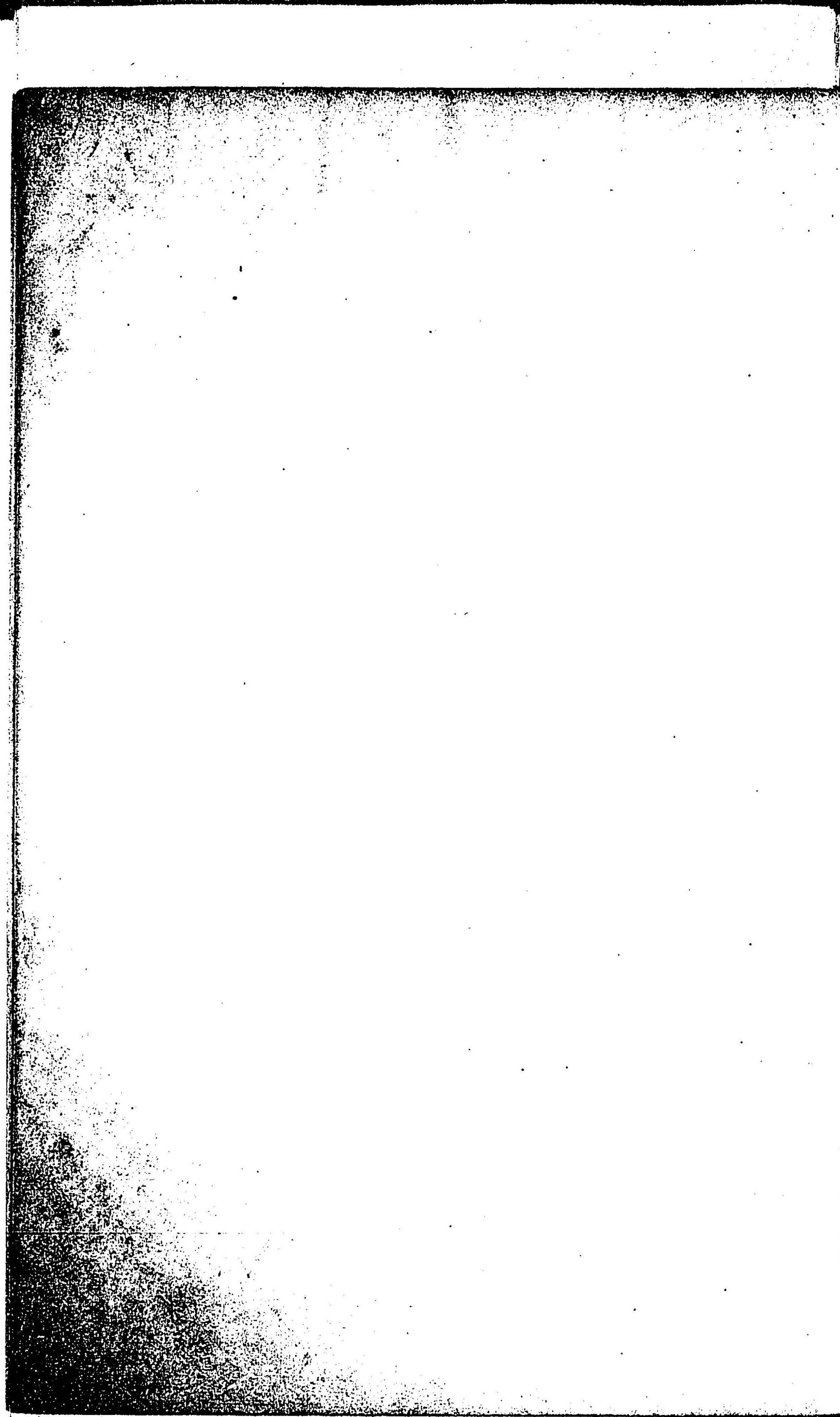
CEF-0150

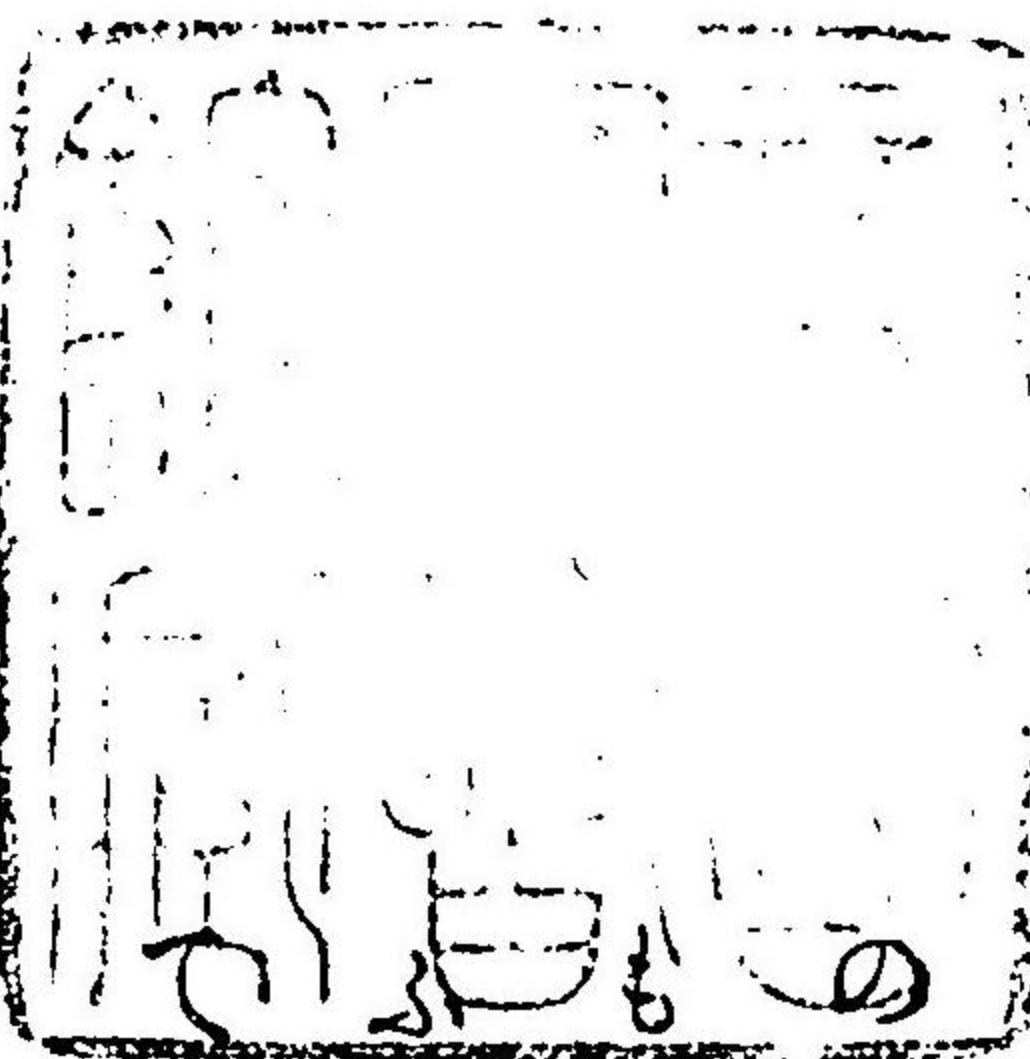


147  
1  
157

欽定  
金工錄  
全

30.6 30





昔我南海舊藩のとき少壯黨輩中特に某々等相好みて肥  
後刀を萃造せり予亦其一人たりき抑所謂肥後刀なるも  
の三齋細川公より始むること喋々を要せずといへど  
其製の品位如何に在ては専ら屬具の適否に關すとい  
是豈講ぜざる可けんや然に當時予輩外藩の士にあり  
は或は幸に其一轡を試るも奈何せん全鼎を窺ふに由  
なく常に以遺憾となせり明治初年以來予西遊數々該地  
に入るといへども匆忙の際復金工の事に及ぶに違あら  
ず越て十六年の夏月又赴くや餘暇を以て其見聞を貪り  
且分に隨て收拾をも勉め爰に多歳の宿念を果さんとす  
因て該作の品等及作者の系譜等を録取し以て備忘に供  
せり今茲齋らして東京に歸り試に同好に示す幸に其贊

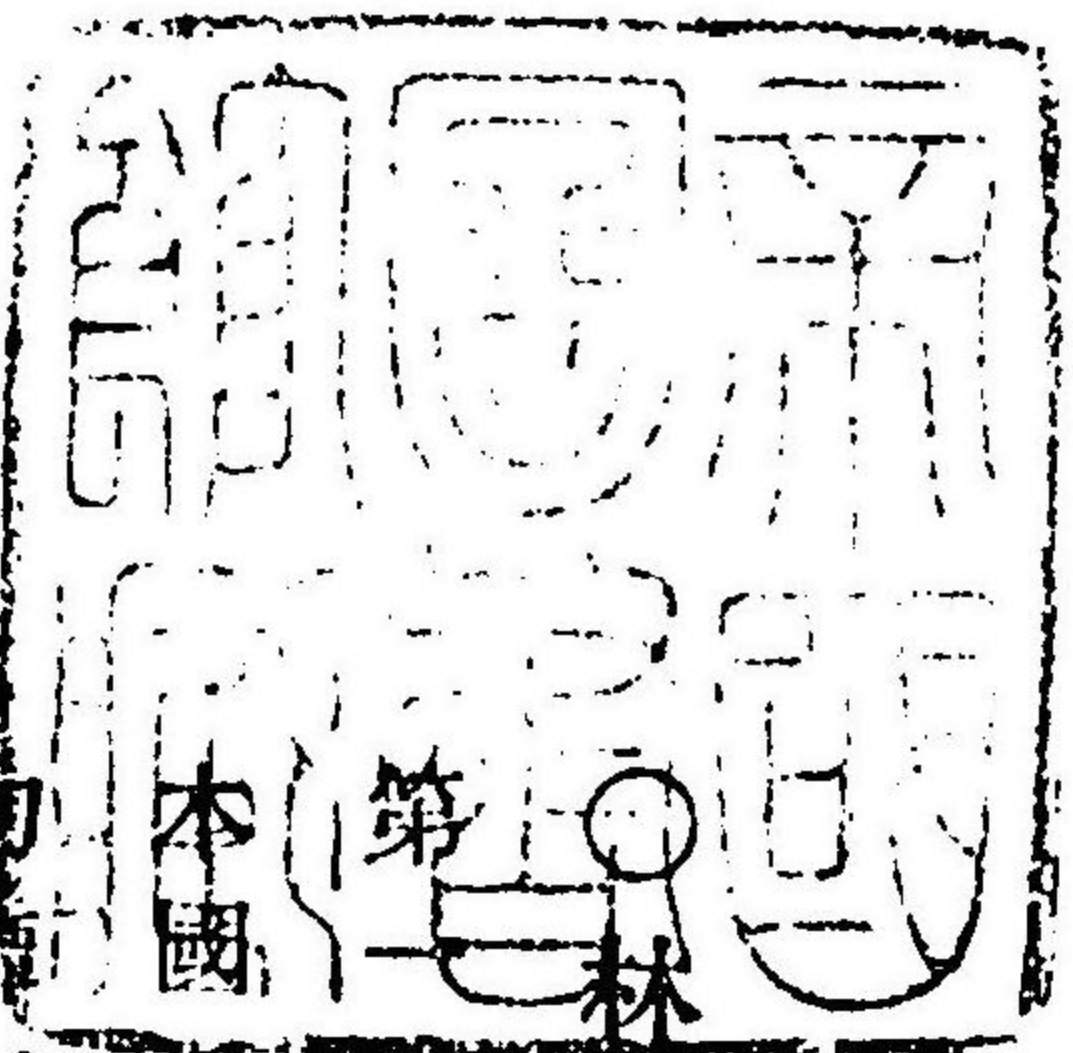
成を博し竟に此編をなすに至る予嘗世間此類の書物を  
閱するに往々口傳あり云云又見所あり云々是等漠然た  
る語少なしとせず殆看者をして五里霧中に迷はしむ因  
て窃に疑ふこれ編者の秘訣即ち遁辭に過ぎざるべしと  
予は此編を草するに臨み先こゝに注念を加へ努めて實  
録を期したり然に記するに際し間々誠に筆に盡しがた  
きものにあふ終にかの顰に倣ふの止を得ざるに至る請  
ふ看者幸に予が前人の著述を疑ひし疑を生ずる莫らん  
ここをこのころ聞或人此著を難し曰今や刀劍已に廢棄  
殆玩弄物に過ぎず何ぞ復金工を論ずるを要せむや此編  
到底無益に歸すべしと又某氏あり曰斯の如き金工亦美  
術の一に居る其古今名技名作を彰はしこれを世に紹介

するは其意深切決して無益の事にあらずと二説相反す  
乃此の如し然るに世自から公論あらむ予は必ずこれを  
辨ぜず但予元遠地の生産にも拘はらず該地特有の名技  
に對し口づから評論すら猶且妄なるを恐る況や之を筆  
記するをや又況や僅々數年間の淺見に過ぎずその所謂  
半鼎だも猶未嘗め盡すこと能はざるに於けるをや杜撰  
の責を免かれざるべし特に同好君子の是正を俟つと云  
爾

明治十九歲勉東京の市谷の寓居に於て誌す

肥後金工録

土佐 鐵 網 海 客 著



林家

第一 數枝重政薩摩守と稱す

本國 近江神崎に住す足利公に仕へ文龜年間知行三百石を領す

初鑄工たり鐵砲始て渡り爾來鐵砲師となる

享祿四年打死何役たるや分明ならず行年二十七歳

第二源左衛門重信

豊臣公に仕へ知行三百石を領す尾州中村に居り後播州に移る時に加

藤清正公の所望に依り轉仕す播州高取備中冠賤ヶ嶽等の諸役に出づ

さいふ

天正六年肥後國へ下る

此作有無分明ならず

寛永六年死年齢其他詳ならず

第三八助重直

肥後飽田郡横手村に住す後忠廣(加藤)改易に依り浪人となる其終を知らず

この作も分明ならず

第四又七(春日)初代重治後重吉實は清兵衛の初名か

細川公に仕へ鐺工専門に復す廿人扶持を賜ふ初捧安坂大木氏の家に寄宿す(案するに加藤氏改易後浪々となり此際大木氏は加藤の老臣たる由緒を以て身を托し後大木か細川公に仕ふるに當り隨て出身せしものか)後春日村に住す代々此に居るを以て春日鐺の名あり  
清正公相傳南蠻鐵明珍の名附源左衛門より受く其家譜に見ゆれども詳ならず

此作肥後金工第一等と稱す鐵及銅赤銅四分一等諸作あり就中鐵色は絶類にして其地合のしまりよく麗はしき事は譬へんものなし又布目象眼は盡く精妙を極め又彫込象眼は雅致あり共に絶品なり但据物はいまた見す

鐺の在銘は林又七或は又七と多くは金もて入る又林又七重治作と長銘もまれにはあるも概して無銘物たり其縁頭類にもまゝ、在銘もの見ゆれと大抵は後入の如し

鐺の式に至ては透板、共各種あり但アナリ形と環耳とは見へず象眼は二重唐草、枯木、桐、葛繫き、渦等は最著名なりまゝ、綸子、綱目もあり又一種(ホツレ)象眼は(ホリ込)妙也龍は春日代々なきか如し就中二重唐草は極めて細かき針金にて入る精工いはんかたなし二代以下及他家の夢たも見る能はさる所なり

象眼は大抵焼金を用ゆ別して艶あり枯木の如きはホリ込に作り鑽底

張りに切る故に金色最深くして奥ゆかしく見ゆ(二代以下は概して金色劣る)

有名なる肥後三枚と唱へる九曜櫻紋透しの鍔あり嘗其二枚を観るを得たり眞に非常の作にして透の精工なる先驚くべく象眼の綿密なる更驚くに餘あり三枚中二は地象眼二重唐草にして他一枚は綸子たり其圖下の附圖の部に出す

此作總て精工を貴ふ中にまゝ壯年の作とて稍粗の如きも見ゆ(重に透鍔多は鑽透なれば輕々見れば或は初代勘四郎作かと誤るべしされど諦視すれば粗のこく見ゆる所即其力の所にて迎もく他作の及ふへきにあらず又壯年の作と一概に極めかたし鑒定家注意を要すへきは専ら此等の作行に在る如し

縁頭鑑等の作行も他作とは特別にして其式は色々あれども先第一しまりて強く頭には袴腰丸形縁には蟻腰樋等は通例なり鑑の式は一定

なかるへし重に深き泥摺の類ならんかこれも甚稀なり又異體の頭は多くは銅及四分一にある如し或は結び或は行合或は鼻クリ形の類にて大かた玉縁を付す其上に鋌を打つもあり鋌頭長きも眞丸もあり鋌端裏迄貫きたるかたなり(他家にも鋌の式あれども大抵玉縁際に打つ例にて玉縁上に打つはいまた見す且鋌首眞丸にして稍小きものとす)又縁の仕掛は沸し織き蠟織二法あれど多くは沸し織のかたなり又縁金は惣して薄きかたにして形は長からず(勘四郎作の如くに)試に縁の小口より底のかたを(天上金に至る)のぞき見るに裏行あらはに見ゆるはあし、正眞の作はごこやら奥深く覺ゆるなり此獨又七に限らず肥後名作の縁はいつれも同じ

縁金の織き目肥後諸家皆沸し織に造るといへども獨春日には蠟織あり故に偽作にも大かた蠟織に造る但し前にもいふ如くごかく及ひかたき所はしまりに在り且織目の力金の所にも見所あるへし



布目象眼は肥後諸工皆あり中に八代作は最名代なり然も矢張此作を以第一とすそは又七象眼は疎密に拘はらず沈着して浮き出る如きはなし中には手置のあしきに依り脱けたるもあれと痕跡に就て能見れば他家と異なる所自から判然たるへし

某氏の藏鐔に金布目を以敗扇と散櫻を造るあり(又某にも同一の作を藏す一は丸形一は木瓜形にして小透及覆輪あるを異とす)此作行異例の如し極めて厚き象眼にして一寸見れば据物かと思ふ計なり又或は正阿彌の作と誤るへし名家時にこれあり眞に量り知りかたし然も其實矢張掟は扇の骨と櫻及ホツレ象眼の處に於て顯る(丸形最佳作圖下に出す)

馬針は殊に乏しきもの也正眞の作にてはいまた見す聞く細川侯の藏に一本ありと(象眼二重唐草)他にも名たけ高きものあれと皆疑ふへし其或藏品の如きは熊本第一の如くはやせとも一見正阿彌の作にてい

つの時なるか未熟鑑定者か妄に取り極めたるに過ぎさるへし大抵皆此類と知るべし

又七の妻は法橋來國次の女なり(國次は當時の刀匠なり)一日國次又七のもとに到り其鐔の作を見て大に嘲り謂ふ汝か鐔いまたきたひ足らす余か鍛ひたる刀を以てすれば忽切るへしと又七年若なればやつきとなり即答に能切るなれば切りて見よと國次切りけるに果して截れたり是に於て又七大に愧ち後鍛鍊法を嶽父に受け益精妙に至るこそか、る苦辛研究の上なれば地極めてしまり鐵色の美なる誠に他作の及ひかたき所とす(又七元來鐵砲師より出つ其地鐵のしまり已に尋常金工の類にあらさるへし況や刀匠の傳授を受けたるおや宜哉其二代以下他家皆及はず)餘は總論に譲る

慶長十八年生元祿十二年八月廿六日死行年八十七

二代目(春日二代目也)藤平重光

五人扶持切米拾五石

此作概ね初代の掟に依るといへども却て雅趣ありゆるに精密の作も  
のは寧ろ乏し重に透鐔にて板及象眼ものは甚稀也紋透も種々あれど  
初代の品格に及ひかたし其笹蟹武藏野桐等の作の如きは往々初代に  
迫るものを見るこれ平生得意のものか枯木象眼も曾て一見せり銀以  
て入る初代には銀は見す枝幹も針なく枝は稍長く且低れたるかた  
也或は彦三の枯木に近し此作行初代より下るは無論なり然り亦自か  
ら賞すへし鐔の作在銘多し通例は表に罽と切り裏に重光と楷書にて  
切るまゝ罽とまで表に切る金銘なるはいまた見す

二代は自ら二代の價ありて亦上手なり吟味の足らざる昔にては初代  
の作として通りしもの頗多しこそ  
縁頭鑑等の作さたかならず從來春日作にて初代迄上しかたく又三代  
には過きることなす作容易に此作に極める弊あれど其二代は自ら二代

の地鐵等ありて決して混評すへからず

寛文七年生延享元年五月十六日死行年七十八歳

三代目藤八重吉後房吉又重方

五人扶持(以下代々祿同じ)

此作總て家法を株守す亦一代の上手の名を博したるのみならず一時  
は二代より勝る如き好評を得るに至るといふ(其實二代より劣る其象  
眼ものを多く造り時好に適するゆるに此評ある以所か)

此作密なるもの多しこれ其初代の衣鉢といふ所なるへきか霞櫻、薇手、  
透等の如きは大かた葛菱を入手際甚美にして初代の風あれども其  
霞の透方譬は初代は細毛髪も啻ならざるも此作は棕栢の毛の如しこ  
れも其及ばざるの一證ならむ

象眼中カツラ菱は出来よきは初代に迫るといへど能く見れば殆死生  
の差あるへし初代には變化あり此は大抵同一物を聯り盡す酷評すれ

は紺屋の形の如し張金も肉太きに過く鐔の式多くは町人好みに入る  
へき様のものあり勝とす惜むへし(縁頭の作も亦同じ)

享保八年生寛政三年八月朔日死行年六十九

四代目平藏重次

延享元年生天明四年七月死年四十一

五代目又平重久重之又源保之と銘するは同人との説あり

明和七年生文政六年十一月死年五十四

六代目又八前名武兵衛

天保十一年八月死

七代目藤七

明治七年六月死

八代目即當代百雄

以上は春日の歴代たり然れども其の著名なるものは三代目迄とす以

下代を追ひ分ち評するに足らずすへて略す

三代以上の作行に就き猶細評を加ふへし初代は鐵色黒き中に紫光を  
帯て深し二代目はこれに亞くも稍上は色の氣味を免かれす三代目に  
至て漸赤味を呈す如し

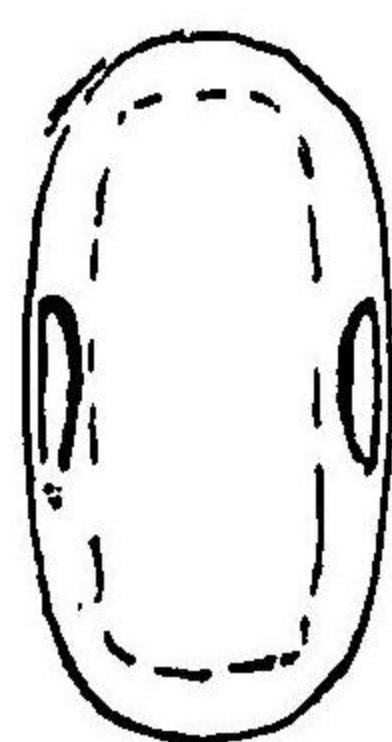
鐔の切羽臺も代を追ふてあまり方減す其櫃穴亦然り

初代の鐔の肉置にまゝ厚きに過る如きあれとたへは他作の如き水  
腫に似たるはなし所謂肉は骨を包むなれば骨の組織如何に關係すへ  
きは勿論たり只初代に限り必ず骨肉よろしきを得るなり二代の初代  
に及はずといふも重にこゝにあるへし三代の二代におよはざる亦然  
り概して二代目は骨稍肉に勝ち三代目は骨小なるに拘はらず常に肉  
過る如し其透物におゐて最此病を認む

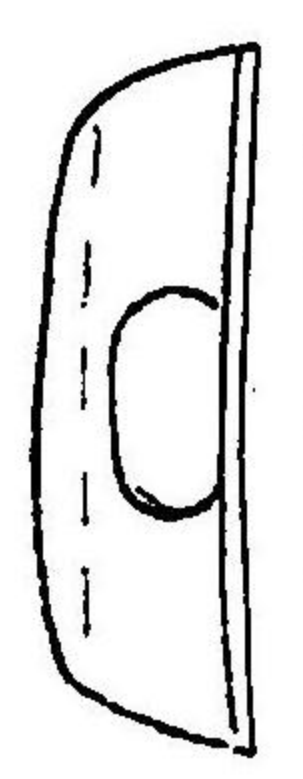
三代目の象眼に就き猶又補ひいふへし大かた姿よく造りたるもたゞ  
足さる所は精神に在り今試に畫を借り評せんか彼古法眼の彩色に倣

ひたる末狩野の筆に於ける如し徒に其家法墨守故に先形似を勉め人  
 物花鳥一見皆能摹したるを認むも奈何せん板病を免かれかたし是他  
 なし精神至らざるの責ならんか春日三代目の作は猶末狩野の畫と同  
 斷といふへし更に酷評するときは婦女子の好に入ものといはんのみ  
 四代以下は取らず然共名家の末況や連綿大諸侯の工人たれば時々の  
 作は勿論其他諸方へ贈進物の作類多くあるこそ  
 縁頭及鐙等の諸式概ね左圖の如し但専ら初代の作を擧ぐ

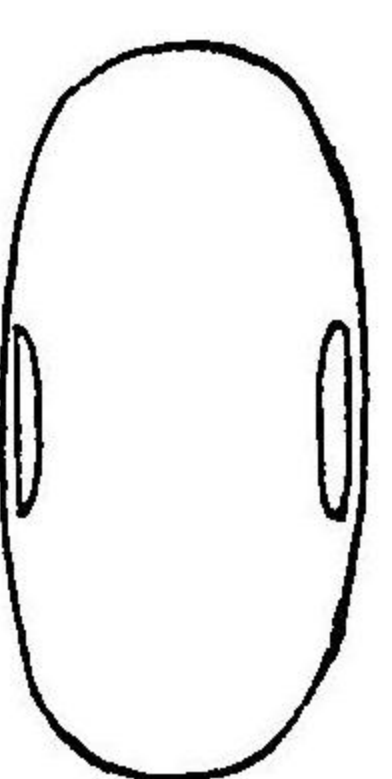
袴腰形



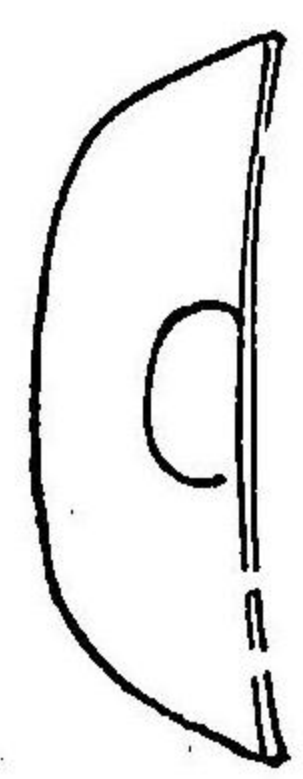
同 尙深キモノモアリ



丸形



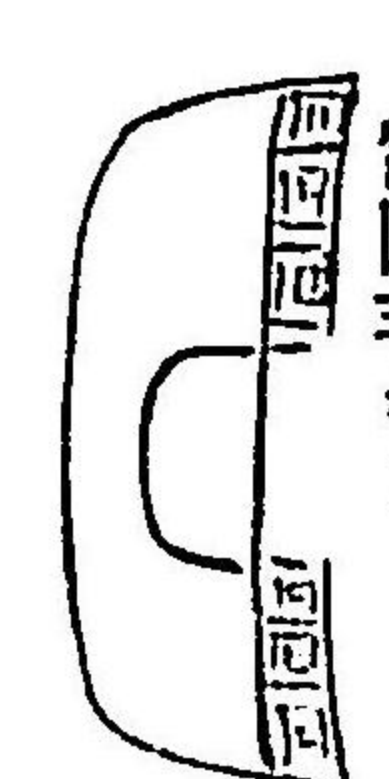
同



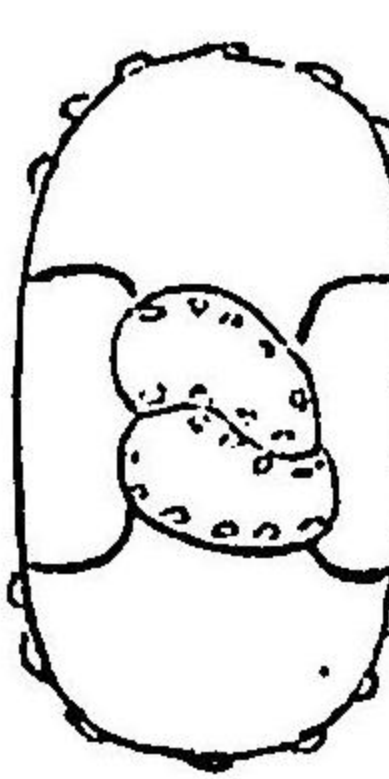
舟底形



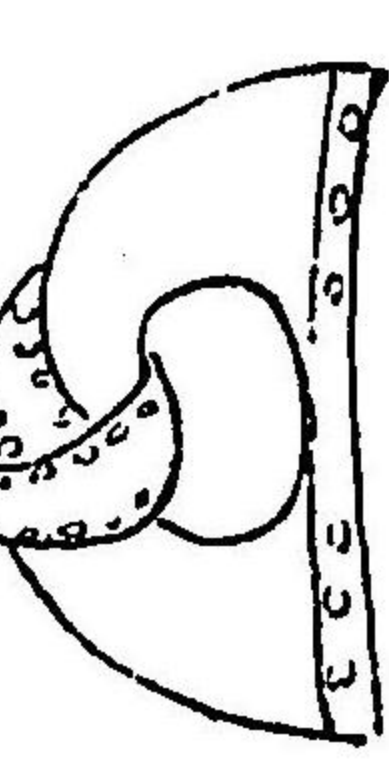
袴腰 雷門毛ホリ



結形 四分一



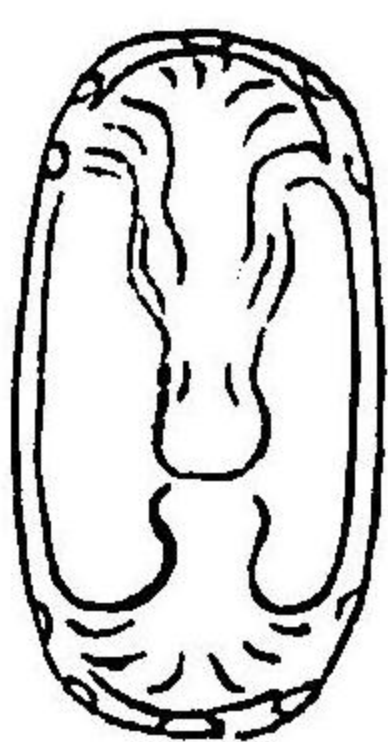
同



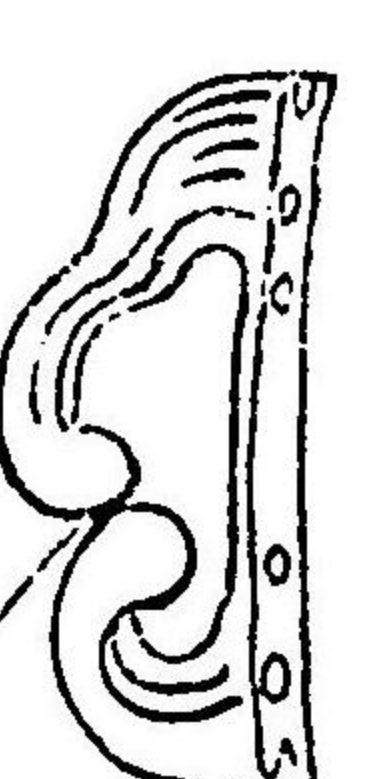
縁鉾赤銅

毛ホリ

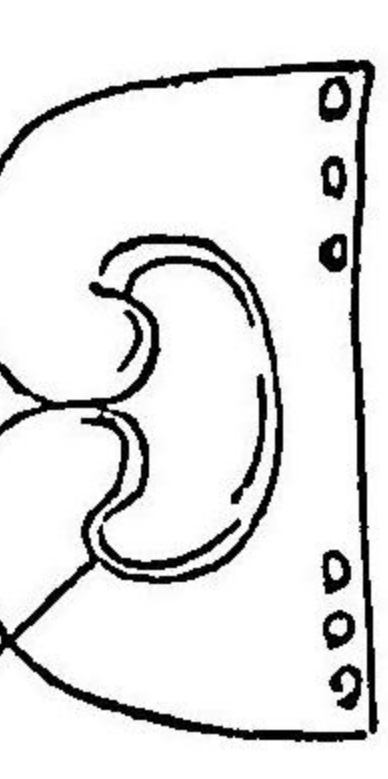
行合浪 四分一



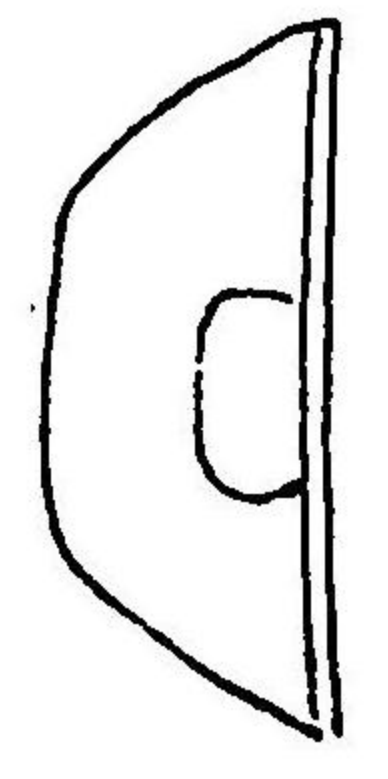
同



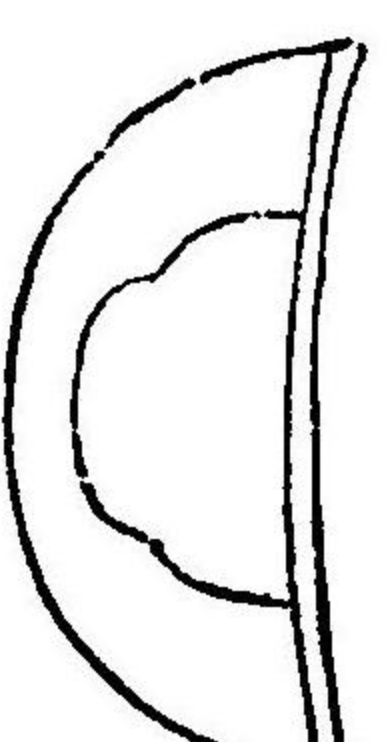
又一種 銅 鉾赤銅



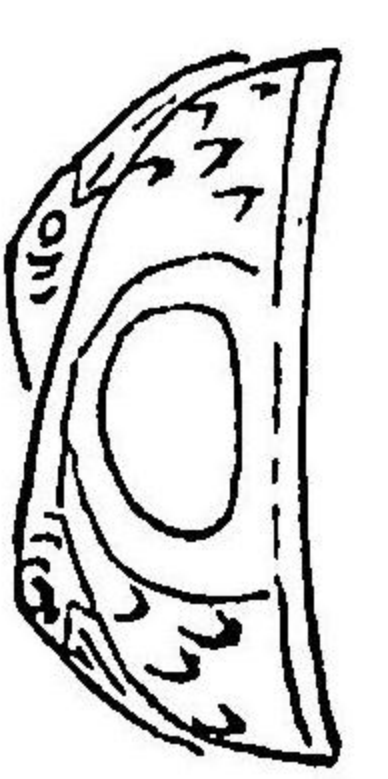
袴腰一種 尖ル方



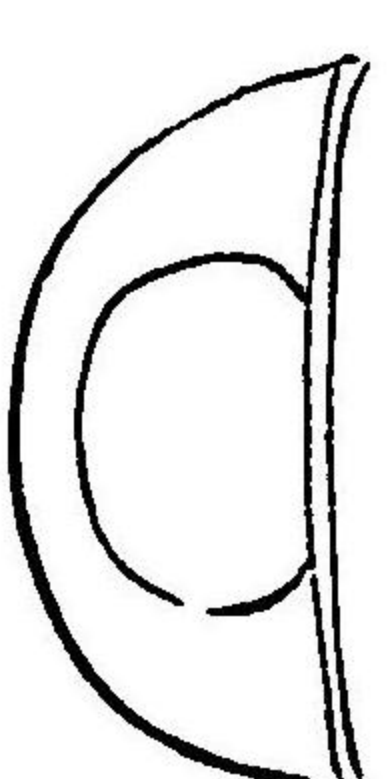
丸形一種



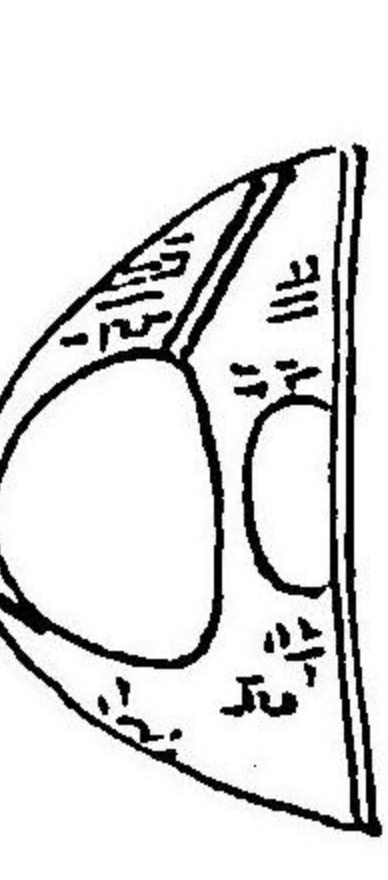
眼鶴 四分一 ホリ片切



鼻クリ形



又一種 繪子金布目象眼

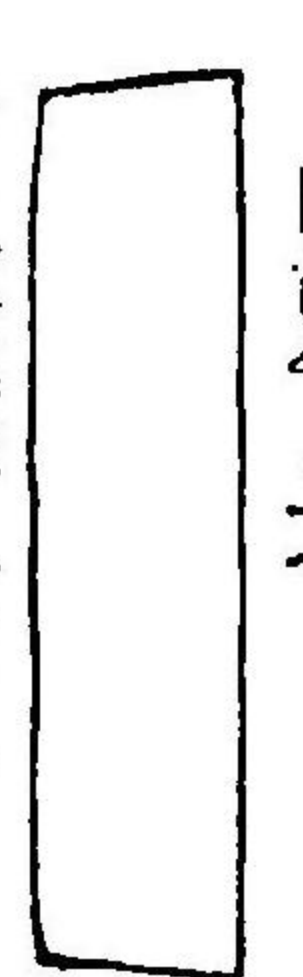


此處着モ離ルモアリ

毛ホリ

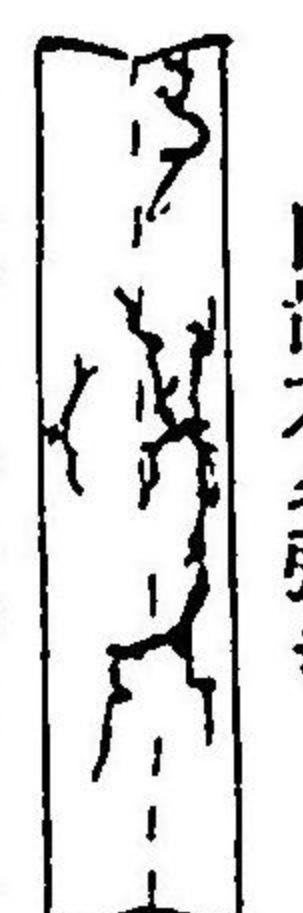
袴腰、丸、舟底、鼻換、等ハ専ラ鉾ニアリ浪鶴又袴腰ノ雷門ヘリノ如キハ多ク四分一銅等ニシテ銀赤銅共ニ  
 見ス鉾ハ専ラ白眼モノニ打ッ例ナリ  
 因ニ云西垣ノ鶴頭ハ鉾ニアリ或ハ金以テ眼ヲ入ルアリ作行自ラ別ナリ

通例縁 肉置平ノ方



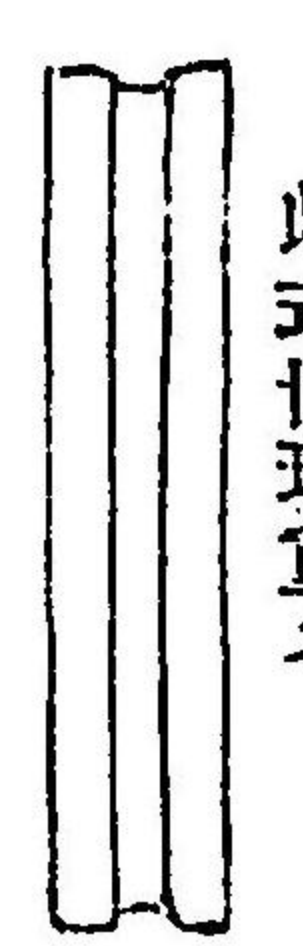
マ、天地縁ノモノアリ 肉置丸ク且深シ

蟻腰形 肉置丸ク強シ

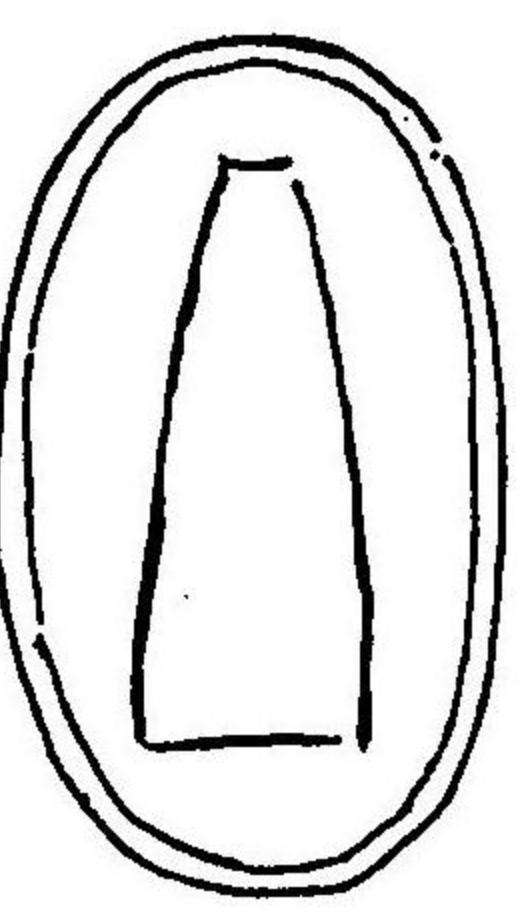


枯木金彫込象眼或ハ又 桐等モアリ

樋形 此式世珍重ス

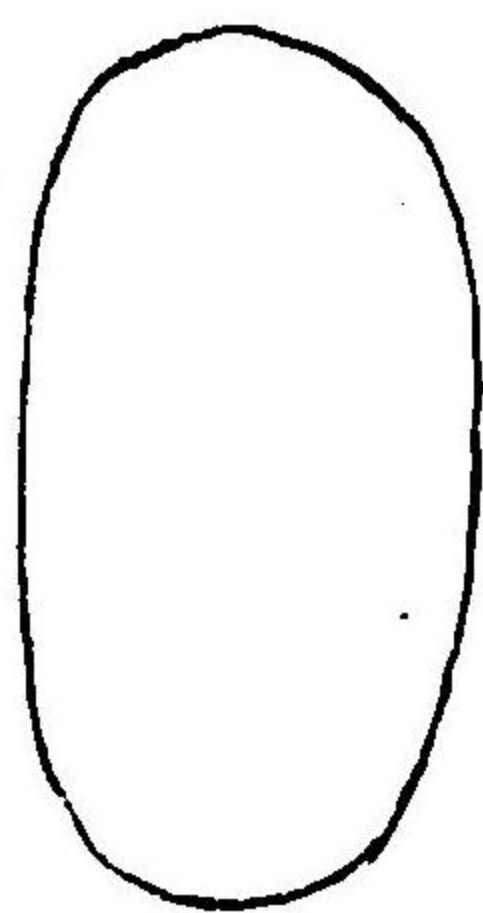


天上金 銅ニシテ縁金ト 平ナリ

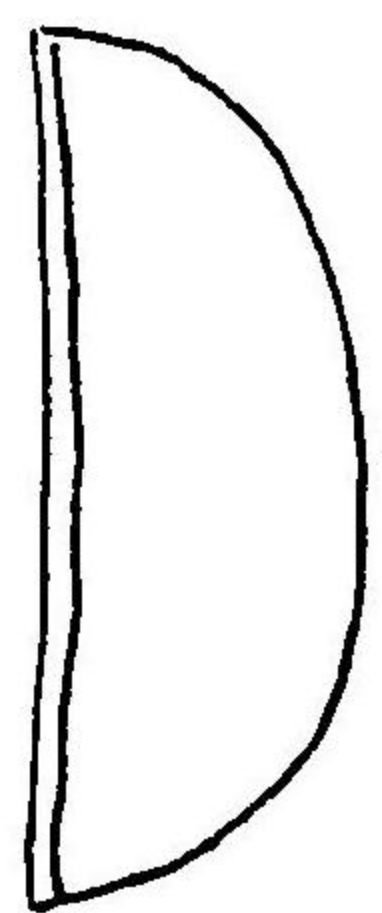


天上共金ニ作ルハナシ

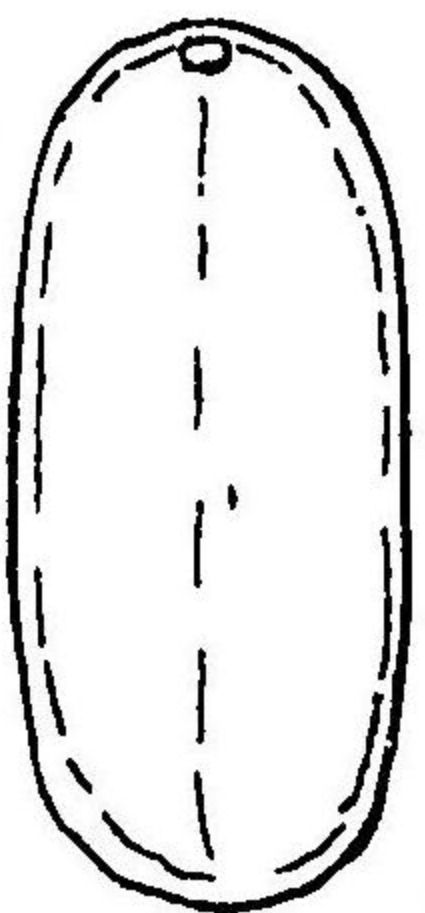
泥摺籠 深ク丸キ方 同



同舟底式 浅キ方



縁際肉置最強シ



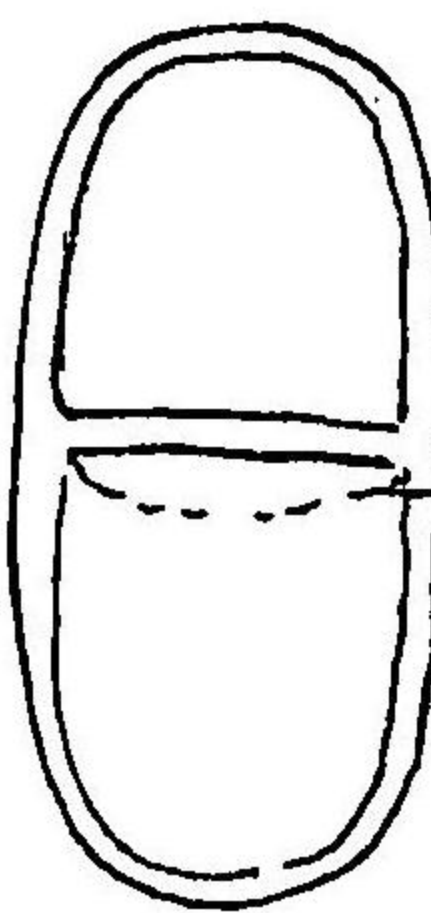
同 銀ナキモアリ又及宗共銀打ツモアリ但共金ナリ



因ニ云銀ハ諸工銀以テ打例アレト金ハ絶テナシ

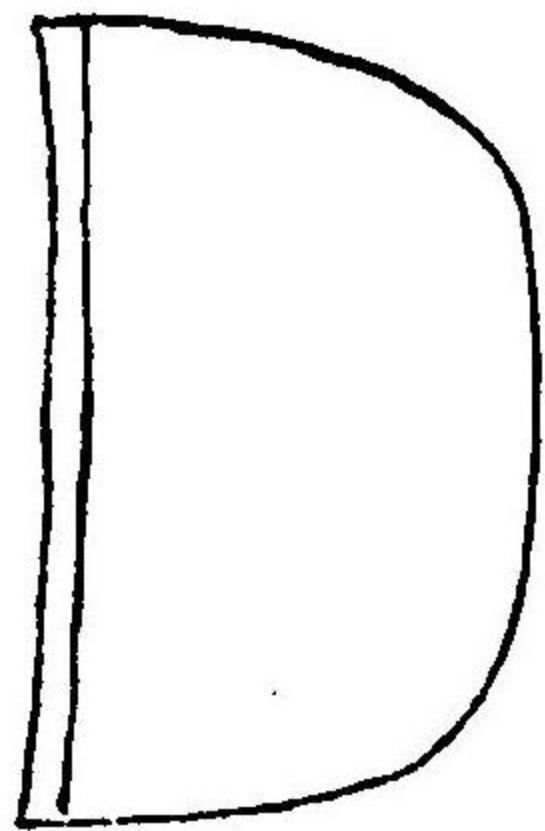
泥摺裏行

力金底ニ着モ着セサルモ共ニアリ又マ、二行ノ式モ見ル

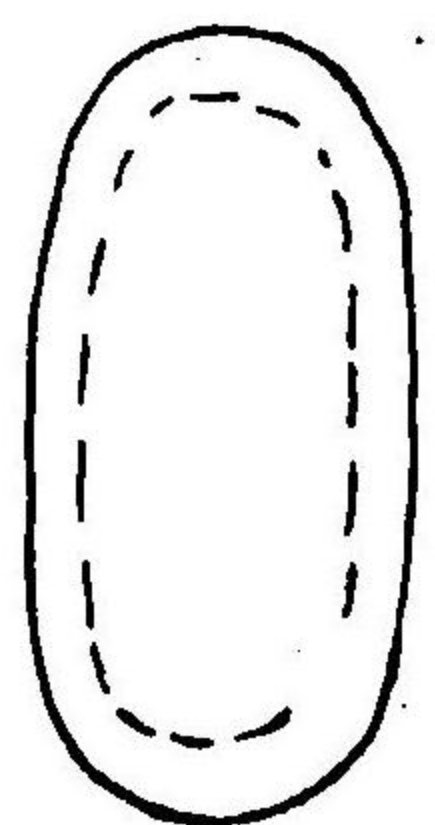


因ニ云泥摺ノ一種巾狭ク長ク瘦タル形モアリ多クハ舟底形ニシテ力金ハ棒ナリコレヲ帆柱形ト稱ス最得カタシ其何人ノ作ヤ知リカタシ或云春日初代ヨリ古シト御家刀拵ニ於テ珍重セラルモノトス

袋式



同

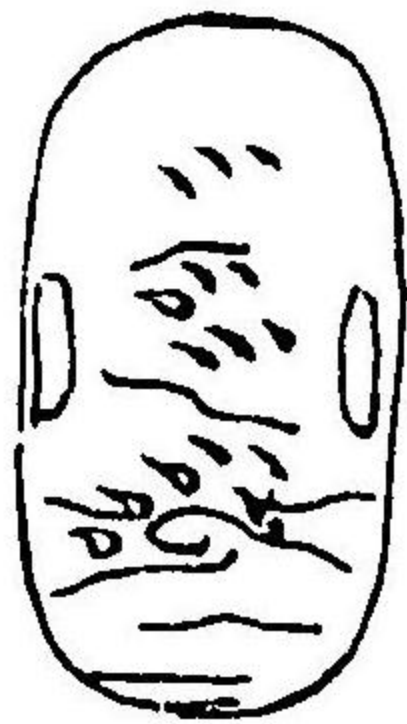


袋籠ハ初代二代共正真ハ見ス此ハ三代目ノ作行ヲ示ス世ニ三代目ノ作ト稱シ櫻或ハカツラツナキ等ノ象眼籠マ、見ルト雖大抵ハ疑フベシ其綸子又七寶雷門ノ如キハ最信シカタシ從前ハ諏訪幾平神吉祖父又ハ谷清兵衛ノ作等モ春日象眼ニ擬シタルモノハ動モスレハ三代目ノ作トナセシトソ

末春日も概ね以上の式なるへし又諸家にも同式を以て造るもの甚多し猶色々あるへきもこゝには有名にして正真のものを示すのみ神吉に圖す

樂壽舊愛にかゝる有名の不知火頭あり袴腰式にして形最強く眞に二あき作とす誠に賞すへし又余か愛藏にも絶品の籠あり二品特別に左に圖す

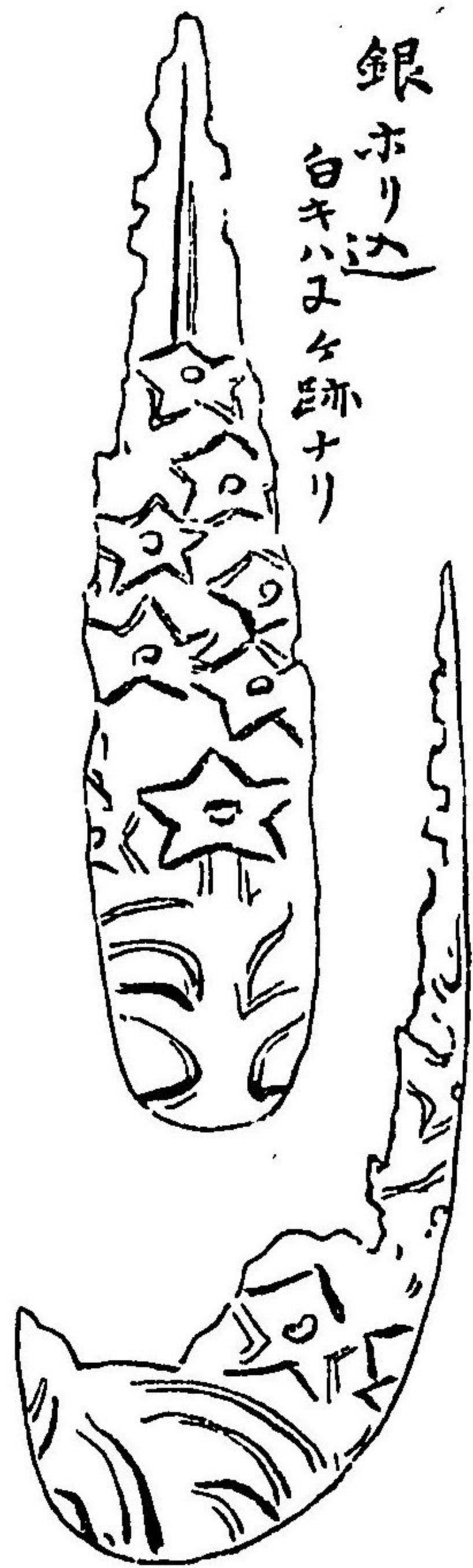
火金ニテ入ホリ込ナリ  
白キハヌケ跡ナリ



泥浪ホリ上最淺シ其浪ノ模糊タル所即夜景ヲ寫シ尤妙トス

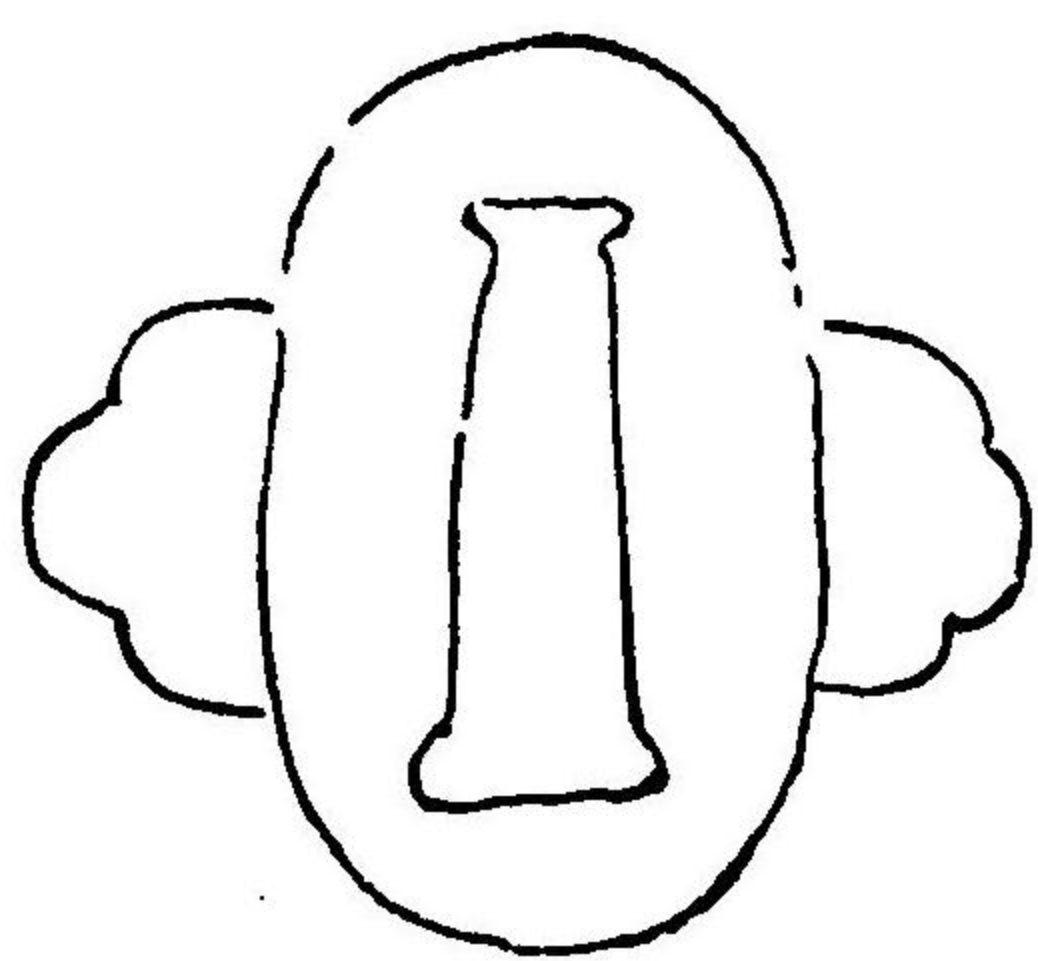
銀ホリ込

白キハヌケ跡ナリ

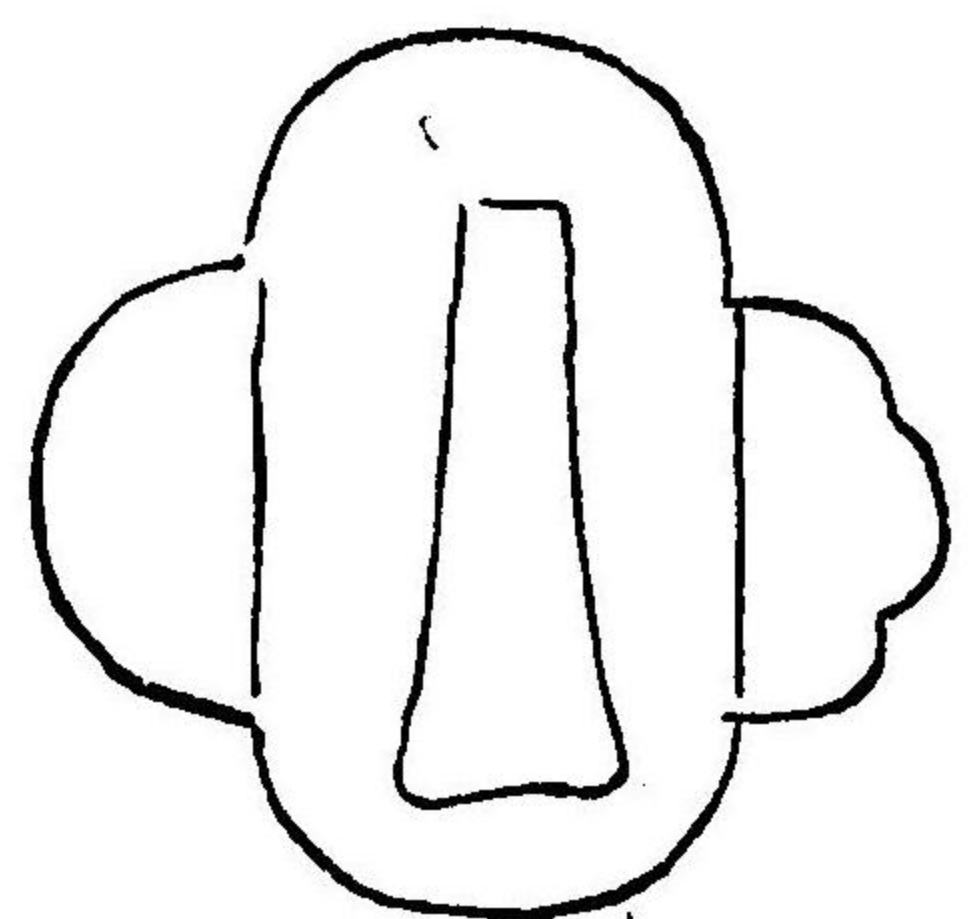


鐙の切羽臺并に櫃等の事は已に荒方述へしか單に形のみを唱ふときは代々左迄の差なき如しといへども其實大にあり三代目の如きは臺の四隅稍張るくせも見ゆ大略左に示す

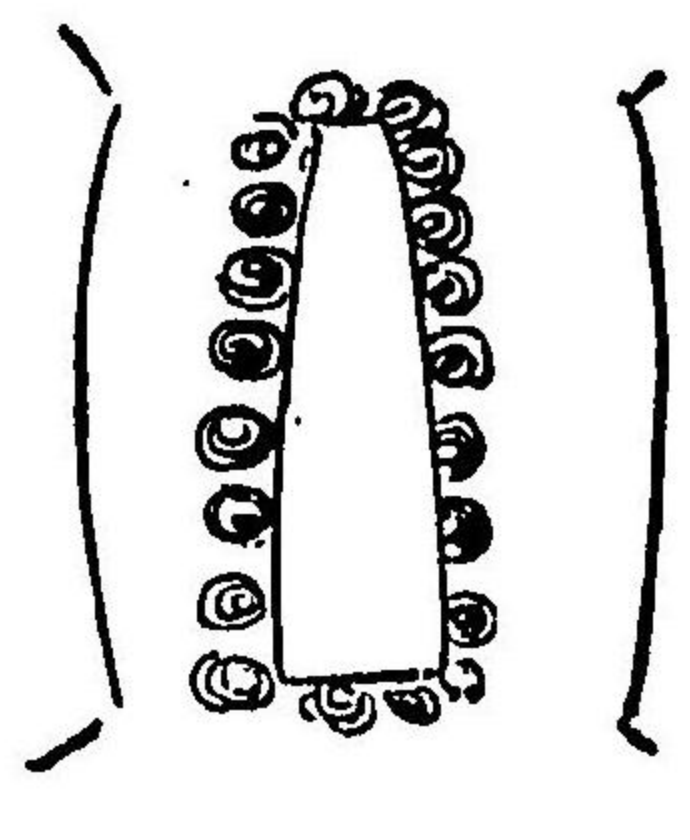
初代



同

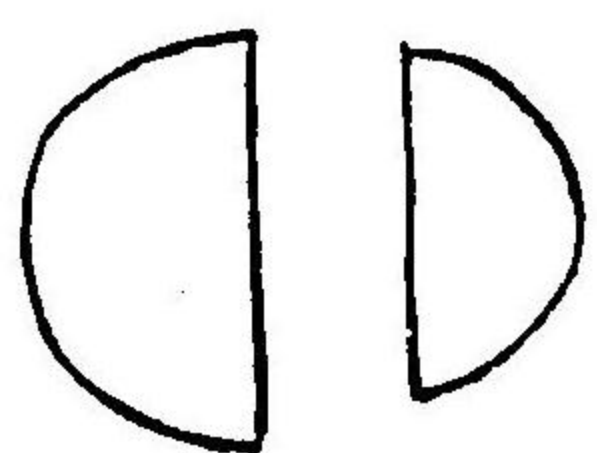


同



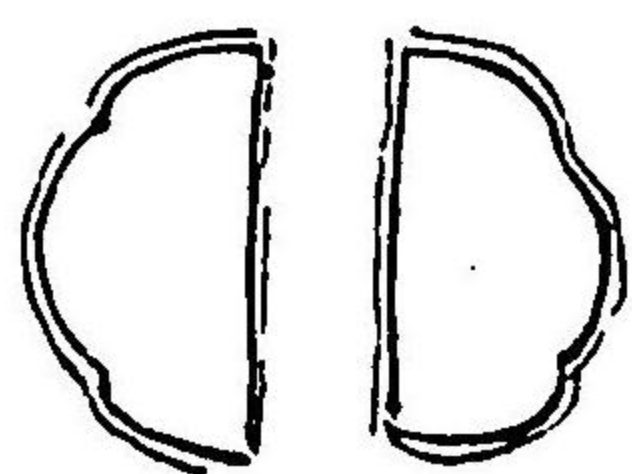
渦タカネハ至テ稀ナリ

同

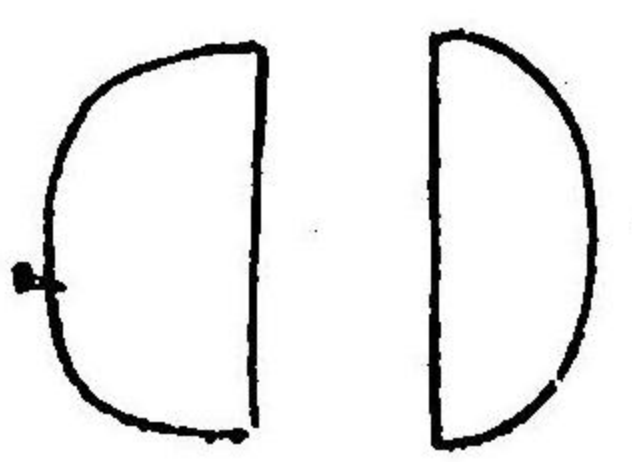


以下片楹ヲ探  
リ集メ圖スル  
モノ

同



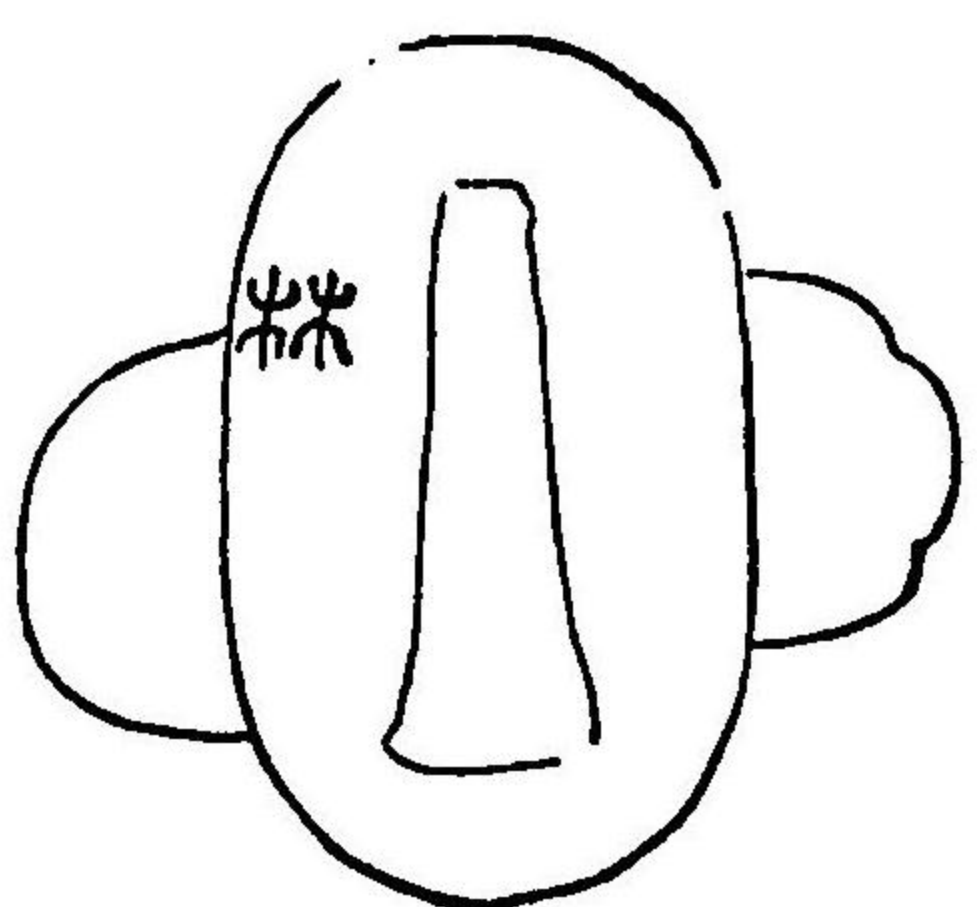
初代作ニハ毛ホリ  
如此殘ルモノアリ  
マ、二代ニモ又西  
垣初代ニモ見ル



此式初代以下皆あり

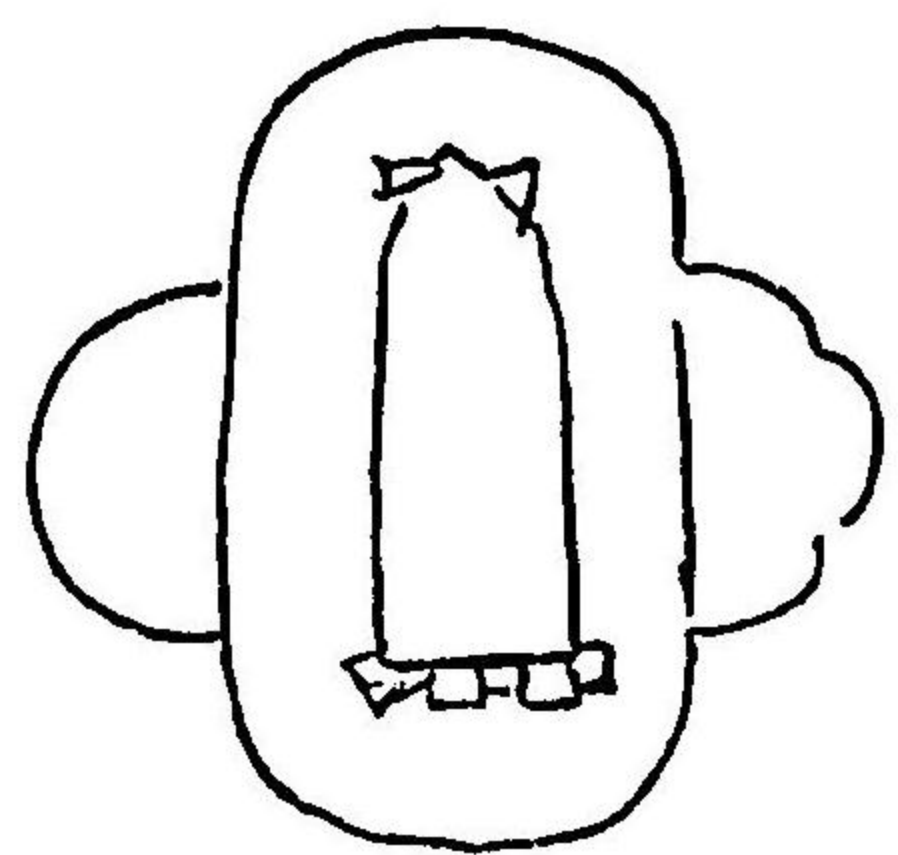
毛ホリ肉代々差あり  
三代目は肉稍大なり

二代目



ウラ  
重光

三代目



中心穴際ノ刻印代々種々アリ一定セス但三代目ハ多ク圖ノ如キ印アリ然ニ神吉祖父ノ作ニモ往々似タル印ヲ見ル

○平田家

元祖松本因幡守

江州佐々木氏の族たり佐々木没落の後浪人となる京都におゐる細川三齋公に仕へて丹後に隨行し知行百石を受く慶長年間石田三成兵をやり田邊の城を攻む因幡守防守能く力む後細川公豊前に入り爾來の

忠節を賞し知行三百五拾石を賜ふ

妻は小侍従と稱す明智日向守より秀林院三齋公室へ付人の女房といふ嫡子彦三幼年なるを以て甥松本助之允相續をなし祿二百石を賜ふ其終を知らず

初代平田彦三平田と改姓の事由詳ならず

別祿百石を給ふ案するに松本氏家祿の別なる如く又同時に革姓別戸に立ちたらんか又一説に彦三豊前小倉におゐて武家奉公辭退し細川公の特命に依り更に金銀鑑定の事を司ることもいふこにかく彦三は松本氏の子ならん然ども別祿云々見へ且因幡守助之允共に金工の事見へす依て彦三を以て金工平田家の初代と稱すへきなり

此作行春口とは別趣なり地鐵強くかつ澤あり鐔の式は木瓜形、丸形、長丸形、等種々あり其櫃の式概ね大形なり又地焼手クサランを用ゆもの多し時雨丸線(口クロ)にはあらず等掟なり鐔の作地金鳥銅、眞鍮、銅の類

最多く鐵地は割合には少なし總て古意ある作行にして絶へて俗氣なし其薄出来には古正阿彌の作の如き又或は三齋公作の如きものもあり概して品格高く見ゆ尋常工人の作と異なる所以なり

地透物中九曜櫻の如きは通例あり普通透鐔は稀とす象眼ものは金銀布目ケン込ミ眞鍮地赤銅ホリ込象眼其唐草は勝れて見事なり此法は肥後諸工絶て見す蓋甚難きものなりとぞ又象眼中物形、分明ならざるものあり是を塵紙象眼といふ甚雅趣あり蓋春日初代得意のホツレと異法同趣なる如し

枯木は一種の法にて枝幹共に針を設けすこれ却て雅なり据物はいた見す初よりなきや又彫は大小精疎種々あり多くは草々こ片切彫なり重にタカチ大ある方又一種殊に大肉片切も見ゆ

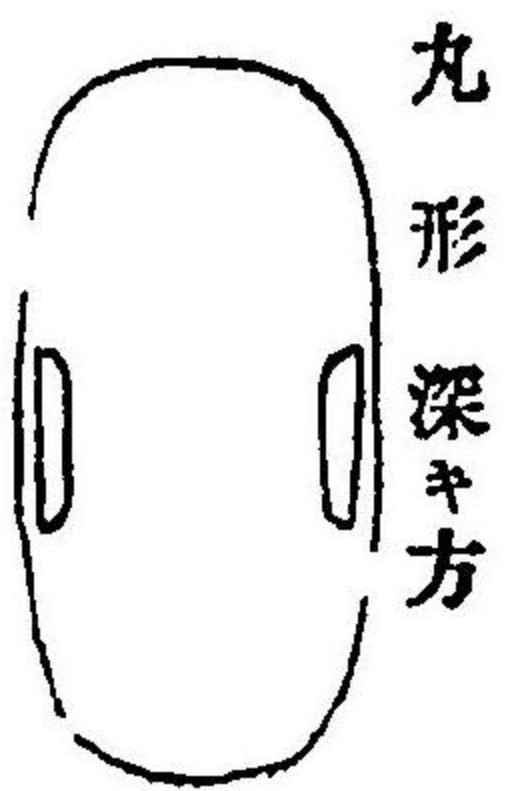
此作地金の何に拘はらず覆輪鐔多し至て見事にて就中小田原覆輪の如きは獨歩と稱す又細き打返し耳も能作る(神吉樂壽常にいふ他作の

覆輪は之を脱して檢するに耳甚疎略かスリ直しものにあらざるは殆  
 なし獨彦三の作は元覆輪を取る前におゐて十分仕上げ而して後掛け  
 たる事にて他作と異なる所以なり故に往々覆輪脱しのみ、用ゆるに足  
 るなりと

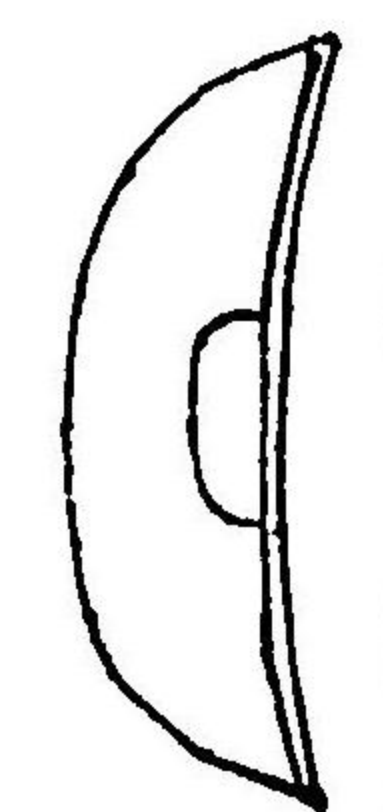
縁頭の作は彫及象眼共にあり重に毛ホリミズ(地石目多し)櫻花、唐草、時  
 雨、渦、等又立浪のホリ上皆掬ものなり(立浪は世久しく勘四郎を以第一  
 とす即勘四郎浪の稱あり其浪頭に一種の毛ほりありてこれを特有  
 の如くいへと何ぞ知らん彦三精作には已にこれあり勘四郎は恐らく  
 は彦三法に習ふものと神吉の説ありき)又彦三浪は腰稍高く勘四郎は  
 低し彦は高さ故に下張り勘は低きゆるるに横張るかたなり

此作在銘は絶てなくして獨其末に傳へる有名の三光の鐔にあるのみ  
 其圖下の圖部に出す

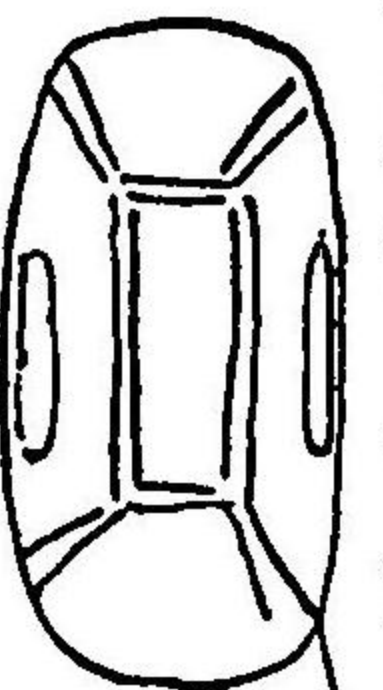
縁頭及其他の式概ね左圖の如し但縁頭は過半白銀ものとす



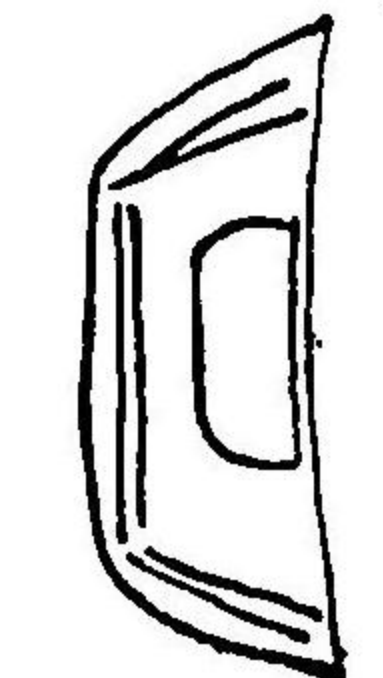
丸形 深キ方



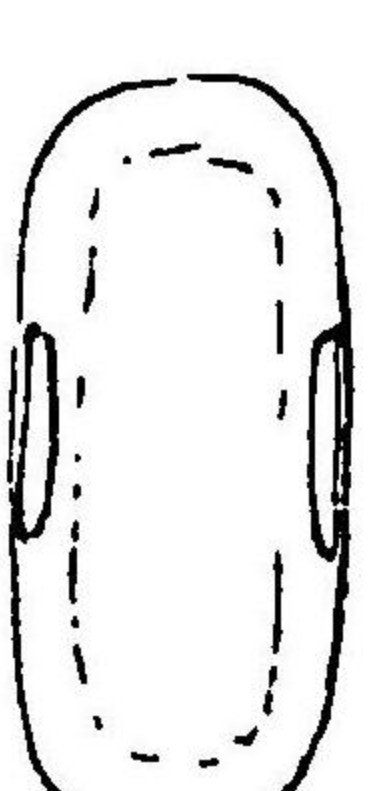
同 玉縁ホリ上細キ方



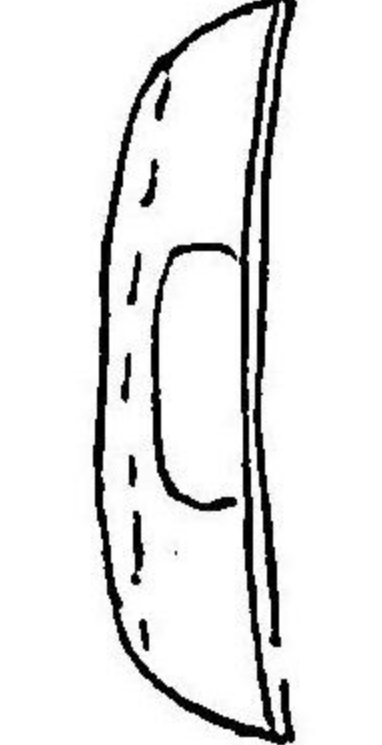
同 袴腰形 小キ方



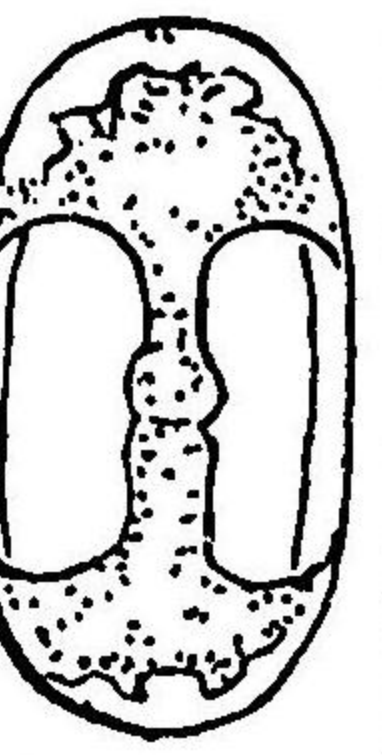
同



ナツメ形 長キ方



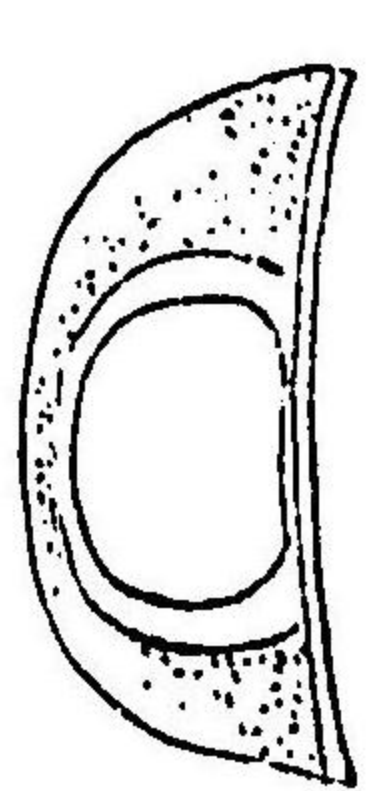
同



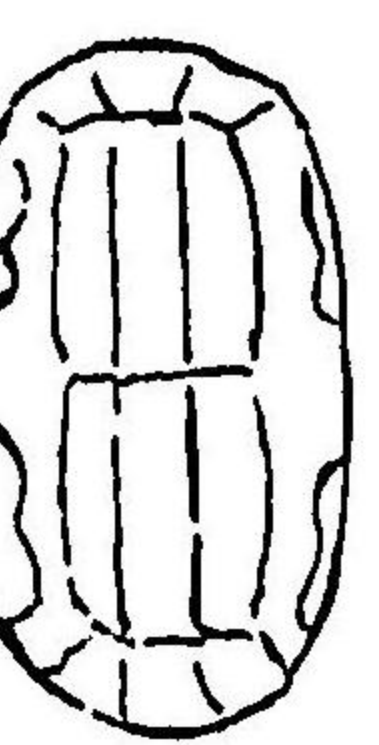
行合浪形 銅地銀吹掛



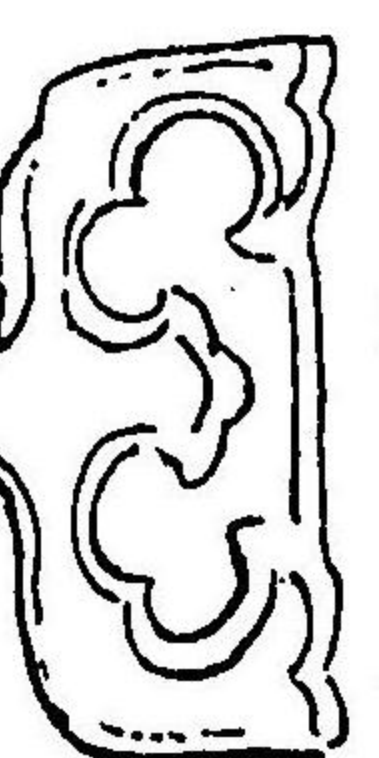
同



鼻クリ形 四分一



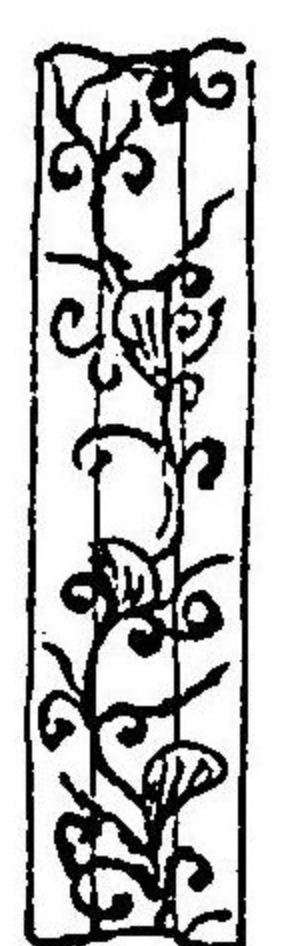
半太刀頭 烏銅



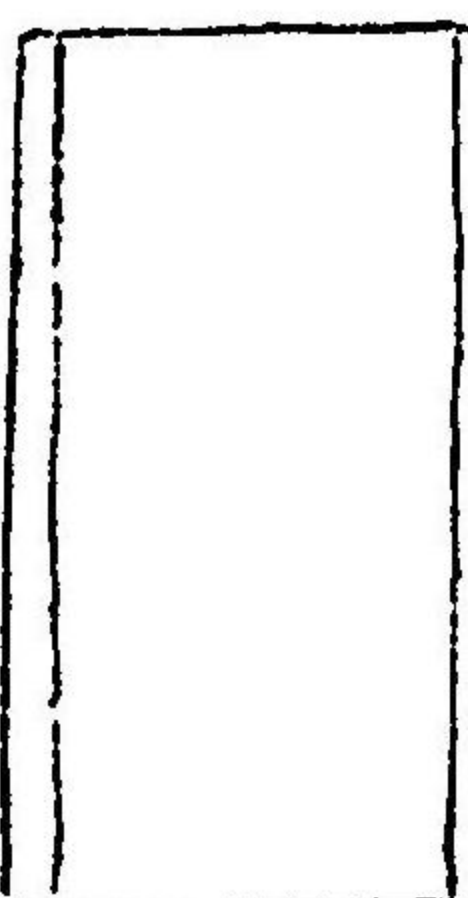
同 玉縁銀ニテ入



異体深頭



桶形 極廣ク深キ方  
 眞鍮赤銅象眼但葉銀



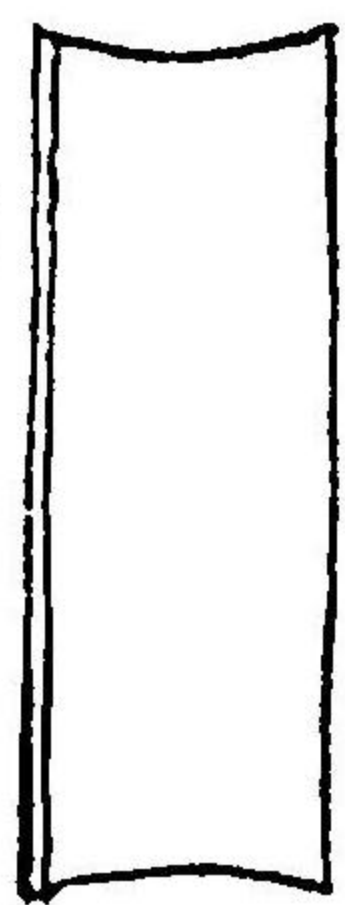
半太刀縁 最深キ方

銅筋赤銅ニテ入

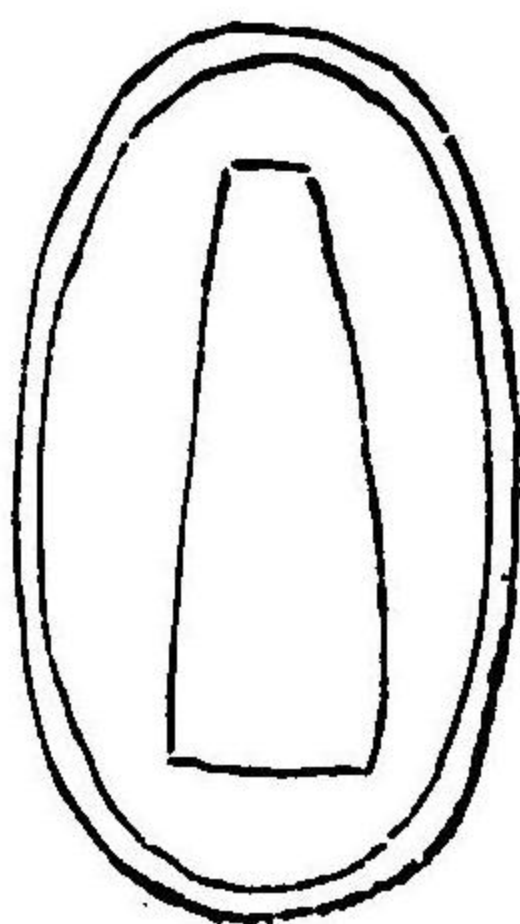
眞銀ナリ小キ方



戸樋形  
上下縁ノモノモアリ

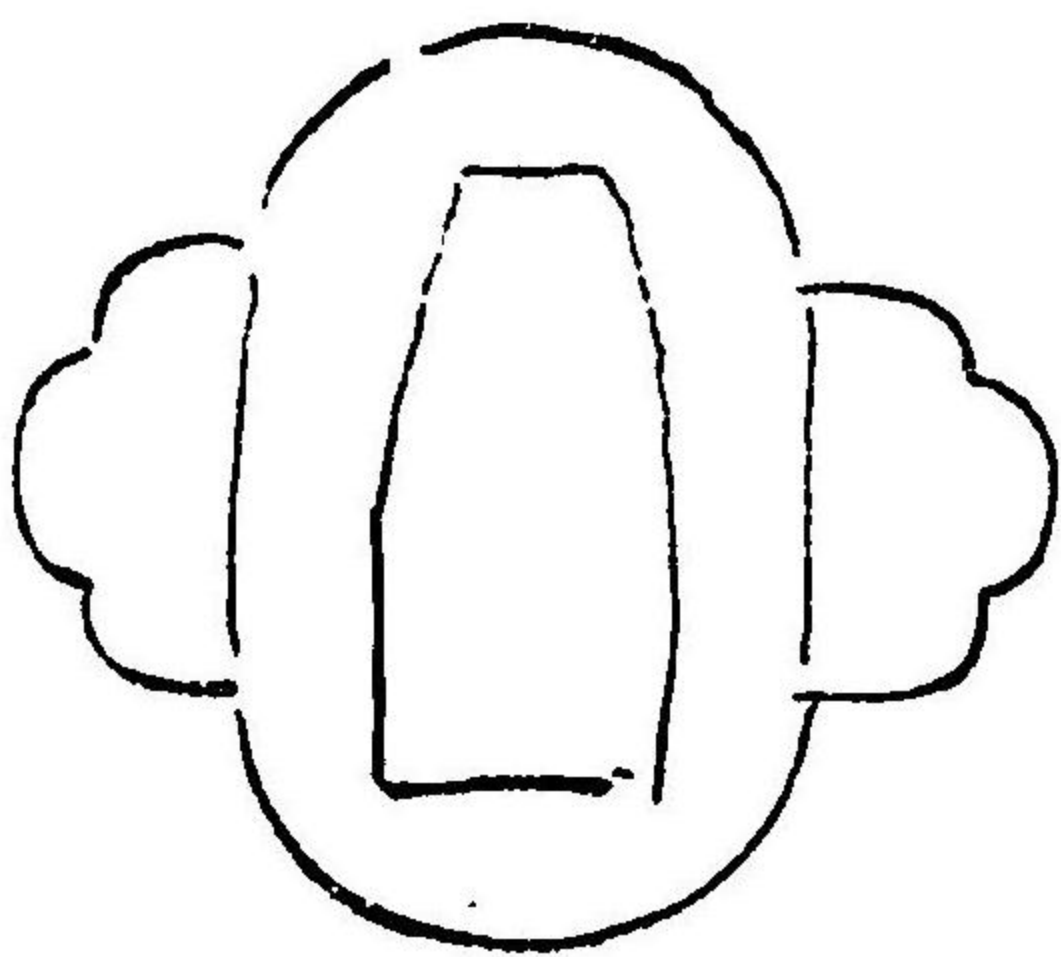


例



洲濱櫃

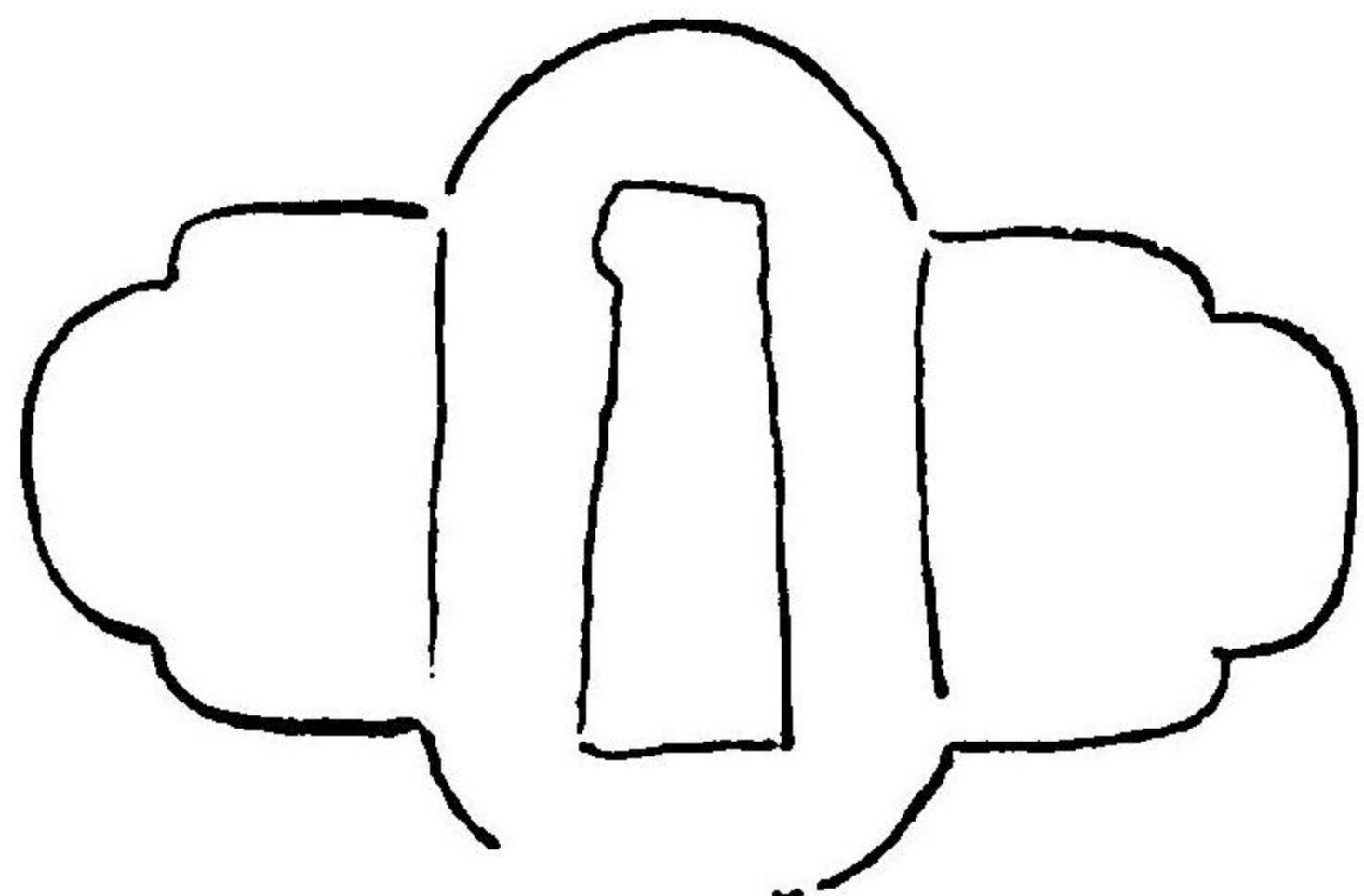
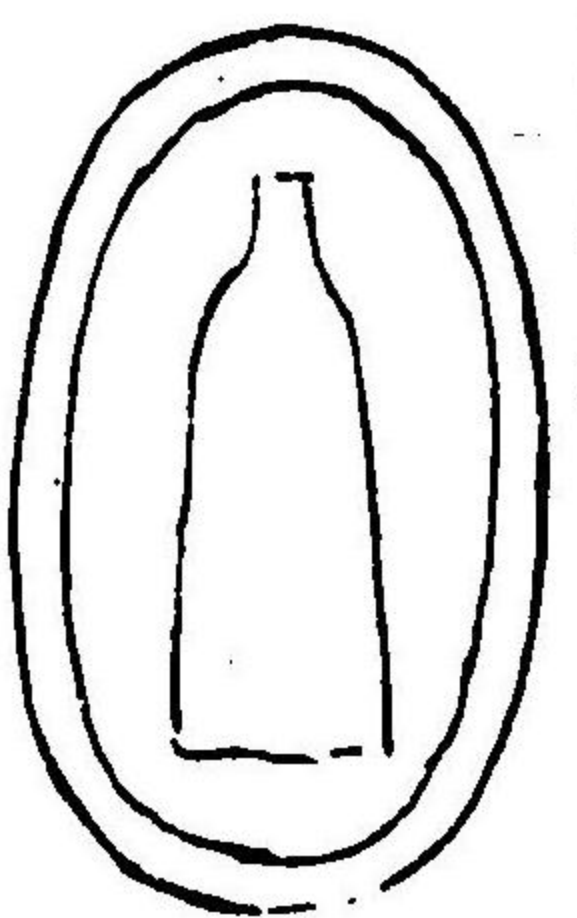
此式西垣ニモアリ但シ  
肩及脚ニ見處アルヘシ



蟻腰形  
銅渦時雨共ニ形最深キ  
モアリ



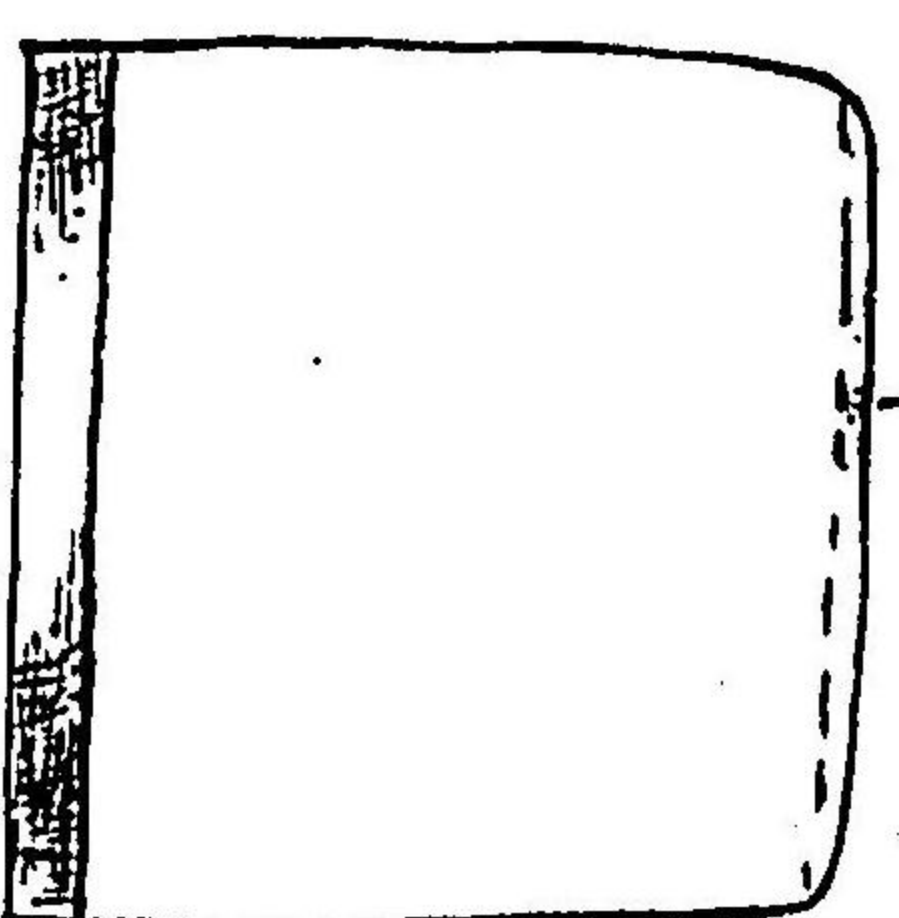
縁金厚キ式



此式ハ専ラ大  
透モノ、内ニ  
付ス壁ヘハ扇  
地紙ノ如キモ  
ノ、内部ニ設  
クナリ

袋籠

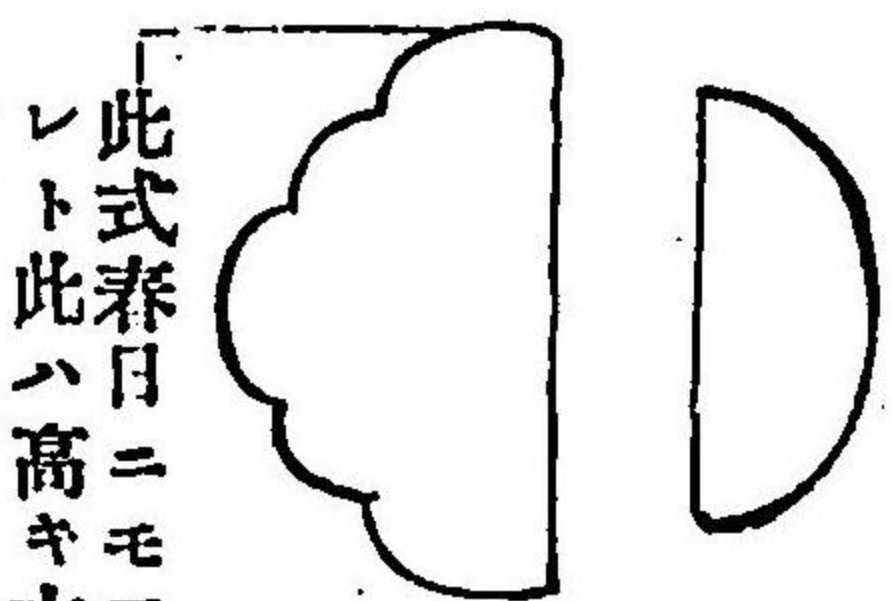
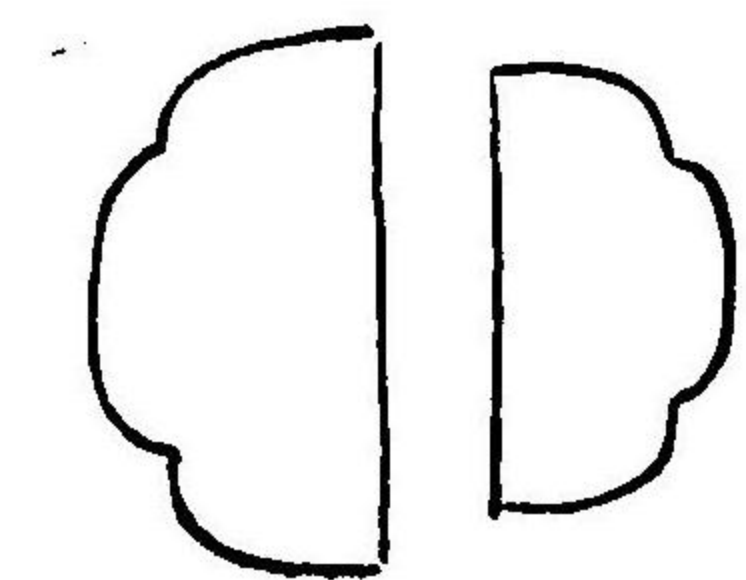
肉置キ角丸ノ方



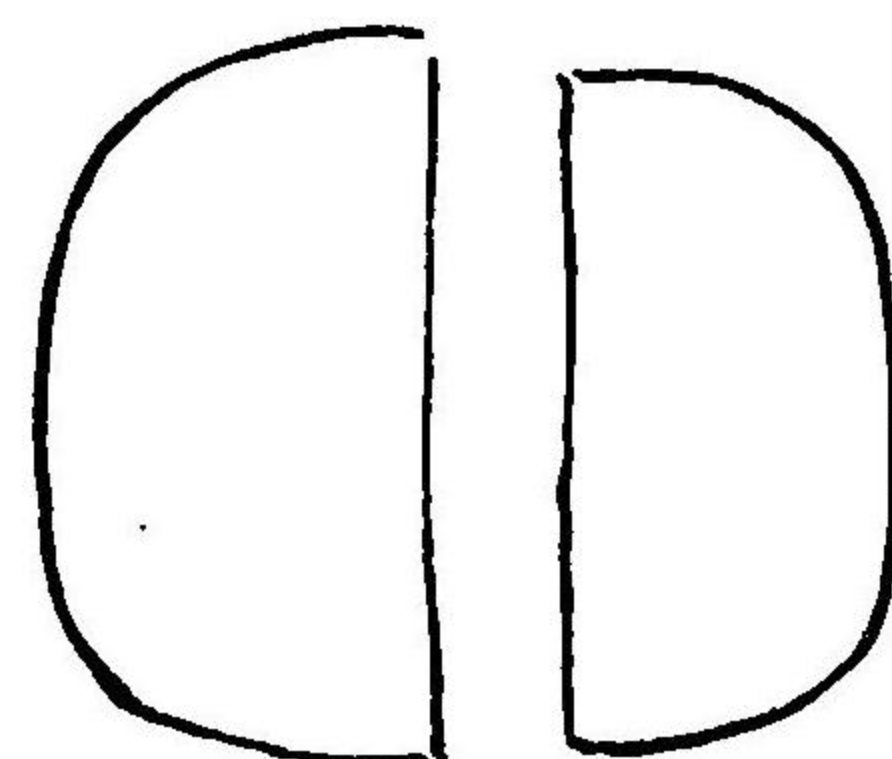
玉縁金布目象眼



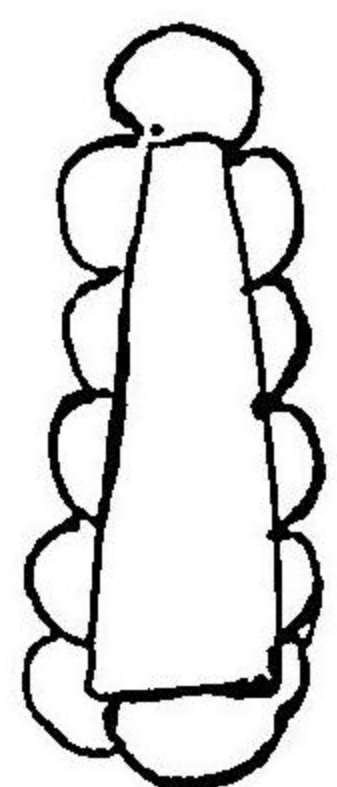
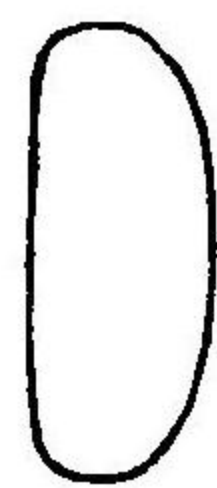
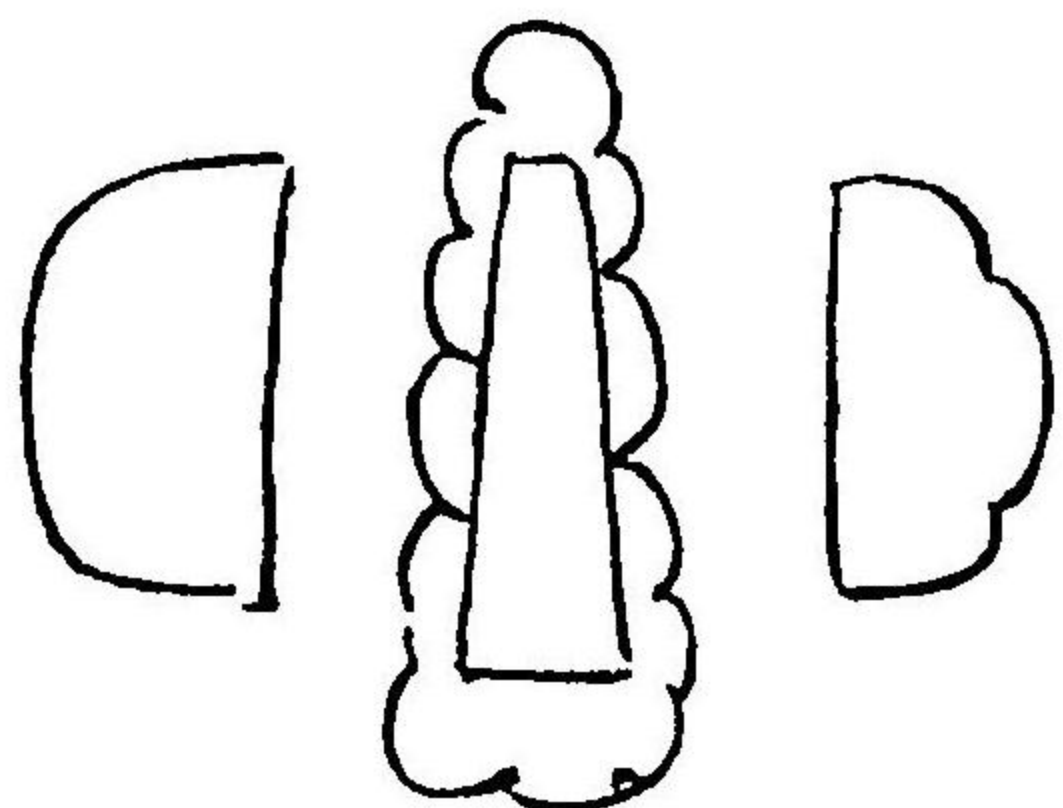
以下左右同式ノモノ  
畧シテ片櫃ヲ示ス



此式春日ニモア  
レト此ハ高キ方  
ナリ



此式専ラ大鋸ニ於テ見ル  
但シ片櫃モノ



如此刻印ヲ打ツモアリ從前ハ此ヲ彦三ニ限ル如ク云ヘ  
トモソハ妄ナリ春日及西垣ニモマ、有之又他國作ニハ  
少ナシトセス余カ藏品中此印アル彦三ハ十中三四ニ過  
キス又此印ヲ付シタルモノニ多ク偽物ヲ認ムルコトア  
リ吟味セサルヘカラス

以上諸式専ら初代を摹す二代以下亦此に出テす略す

太鼓縁は肥後諸家皆あれど春日には稀此作には絶て見ず馬針小柄筭  
類亦見へす鐔の圖下に示すへし

寛永三年十一月九日死年齢詳ならず

二代目少三郎

合力米貳拾石

此作總て初代に據るこいへとも大に劣る依て略す

三代目彦三實ハ芳賀某ノ三男

以下連綿當代彦三に至り八代目となる此間作の記すへきものなし代によりては總て無作とも云ふ

初代は流石に武門程ありて作物總て氣高く見ゆ勘四郎及甚五の如き名手皆此門より出つ其將に將たるの技倆知るに足るへし肥後諸家春日初西垣八代共に初代以下三代目迄上手と稱す獨平田は初代一人に止り二代以下名絶ゆ(初代には香はしき武談あれと此に要なきに付略す)

○西垣家

初代勘四郎吉弘

丹波國內外宮の神官某の子なり(鑿工譜略には土州の産とあれど誤りなり)平田彦三の門人となり三齋公に仕へ肥後下國因て貳拾人扶持を給ひ八代に住す

此作鐔縁頭等諸作殆あらざるか最縁頭に工にして世勘四郎縁の稱あり(今存在の作縁多く割合に頭少しゆるるに縁の稱あるにや其頭は通例長ナツメ形にて時好に合はず故に捨たるもあるへし縁の式も他家よりは長目なり後世は直して用ゆるなり)

地鐵は概ね其師彦三に近きこいへとも稍サツクリとする心ありま、これに反し鏡面の如きも見ゆ

据物象眼彫透の諸法いつれも見事なり殊に勝れたるは縁の作なり又七こいへとも一步を譲るものありこれ等は重に精密の作に在る如し鐔の形は大かた丸き下張りに作る眞丸及アナリ形、木瓜等は稀其エフコ、異風巴扇透等は掟ものこす又エフコ、異風巴、こにも多くは唐草を入

る(象眼金色稍下の方銀は稀なり)其法は平田にもあらず春日とは又大に異なる第一張金は稍肉フクレ勝手にて且浮き出てたるこゝろあり又葉先并に蔓におゐて見所あるべし

透鰐亦工にて式は種々あり桐、松、梅、菊、等多く見るまゝ、又七の壯年作に髣髴たるもあり然に細に見れば第一其櫃の式又耳の法異れり(耳櫃肉置多くは尖り勝手なり)

眞鍮鑢には名作見ゆ(銅は未見す)ホリ上、ケシ込、据物、地透物、あらざるなし其田毎の月の作最有名なり全圖下に出す

縁の圖には東家、蘆雁、蓬舟、干網、蛇籠、初月、梅、櫻、(吹寄、綱川、等松、糸卷、蛛絲、又中心、舌名刀の銘を摹したるもの西垣名代の一なり)等枚舉に違あらず蟹、人物、多くは据物、龍、投、桐、の如きは重に精作におゐて見る枯木はまゝ、鰐にあるも縁頭にはいまた見す又枯木は布目にて入り枝幹も針なし作中拙なる如し

家藏中投桐兩三品あり中に眞に絶品と稱すべき精作あり特に圖を掲ぐ左の如し

厚焼金布目殆据物ノ如シ ○ハ脱ヲホス

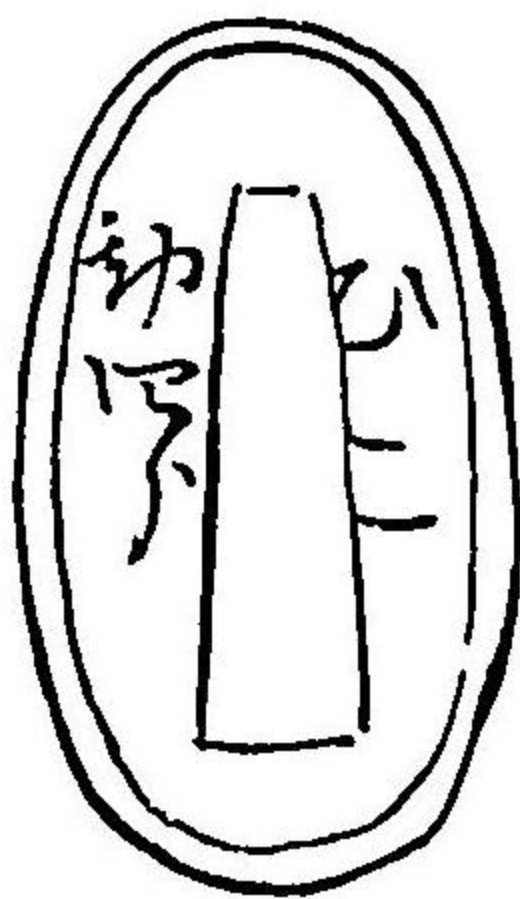


西垣普通精作ト稱スルモノニモ象眼上ノ毛ホリ一重ニテ(葉ノミニ重毛ホリハアリ)葉ノ横シベ大抵二段ニ止リ三段ナルハ未タ見ス其花心ニ至テ二重ニ入ル如キハ最稀ナルヘシ此作比類ナキ精工トナス所以ナリ

又家藏中左の在銘縁あり亦絶てなくして獨これあるものこなす

鐵生ノマ、

但天上ハ銅ナリ



此圖ハ松ニ帆船ナリ  
松眞鍮帆銅共ニ据物

此作に彫上ものにも亦名代の作あり一種の浪にて俗に草の浪といふ他家に絶てなし又此作にも甚稀なり左の如し

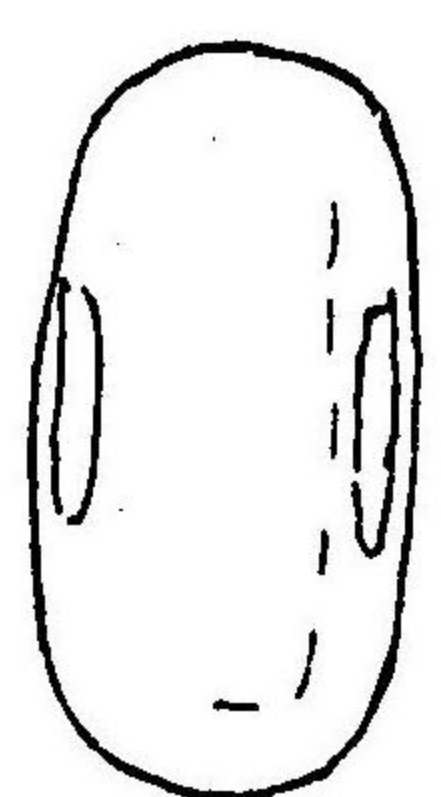
肉置最高ク且丸キ方 地四分一



此彫アル縁ハ多クハトヒ式タリ

此外最有名なる引舟の圖の縁ありといふ其圖柄は人物舟等金銀赤銅四分一種々のいろゑなりと極念入の作なるべし

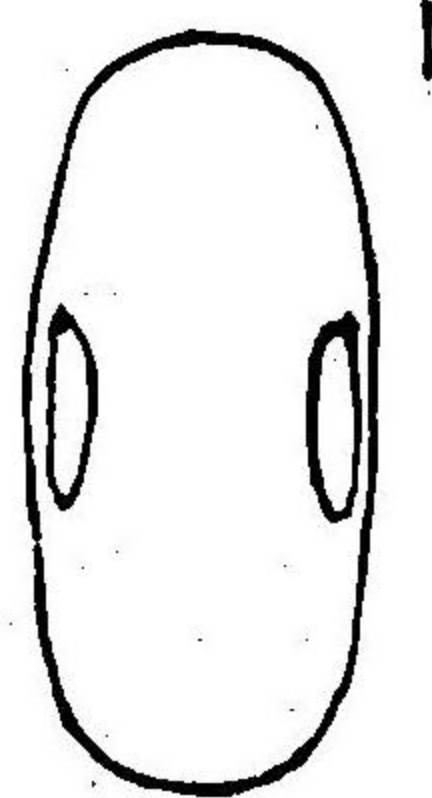
縁頭鑑其他小道具の諸式を擧ぐへし頭にはナツメ形縁は大鼓形は通例とす戸樋形及壺形等は専ら赤銅四分一を以造り象眼は大抵ケシ込にして美なり若壺形に彫上又は据物又は鐵を以造りたる作あれば必ず精作ならん(銅及眞鍮地にもケシ込ホリ上共にあれども其縁の式は大鼓形の外いまた見す又其頭の式中袴腰縁の式中蟻腰は西垣代々見す諸式凡左の如し



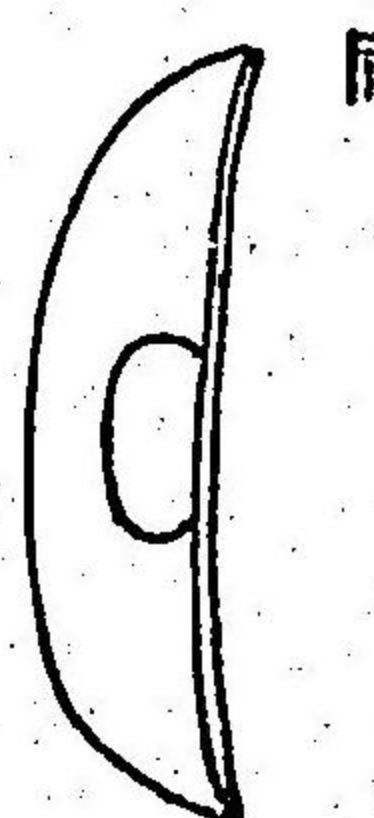
通例ナツメ形



同 稍角肉ノ方

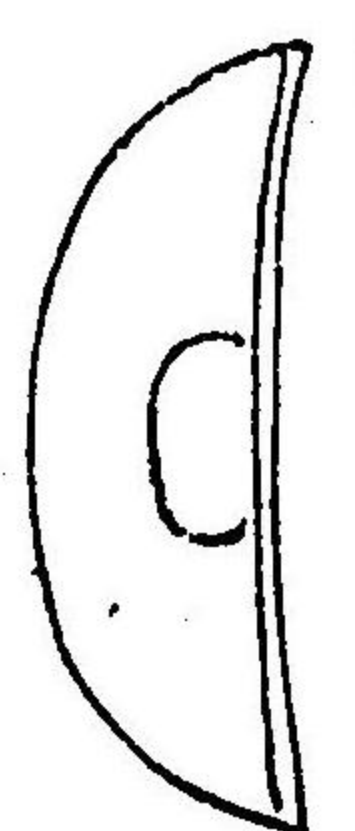


同

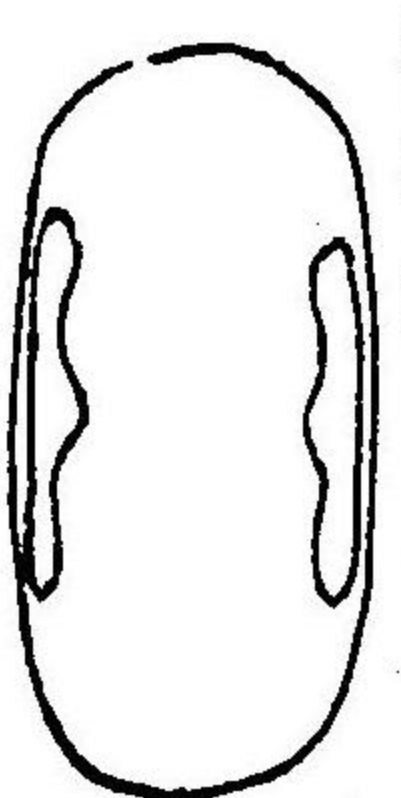


同

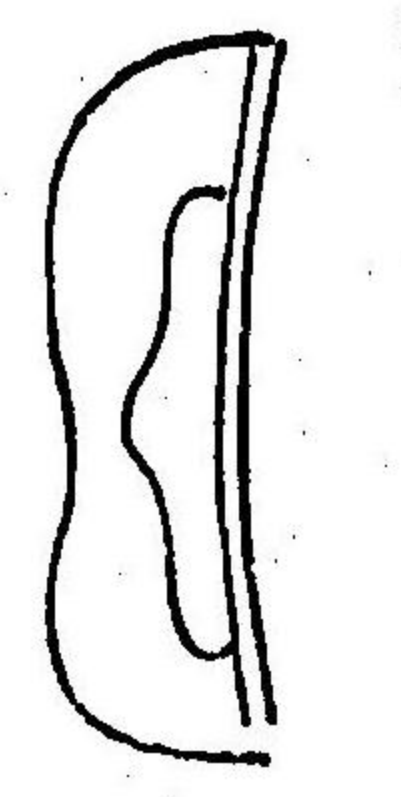
深丸形 糸穴洲濱式モアリ 同



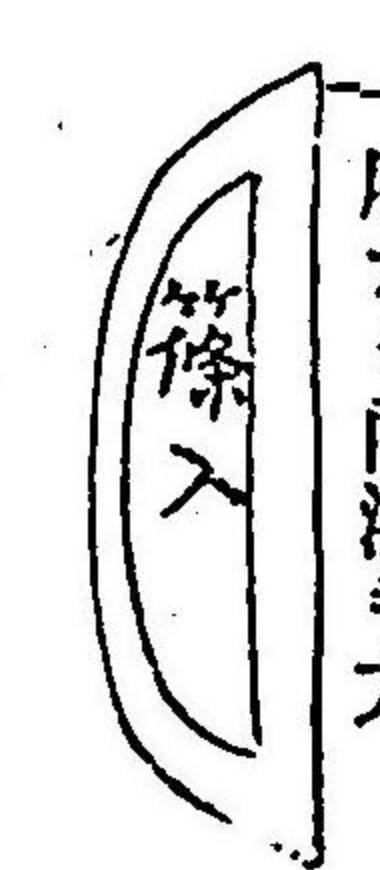
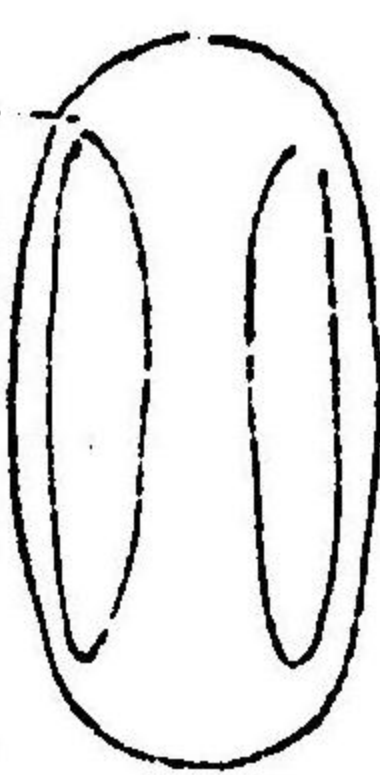
猫脊形



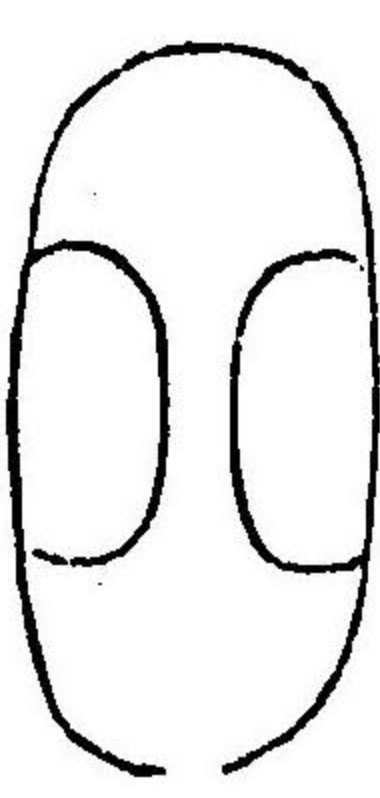
同



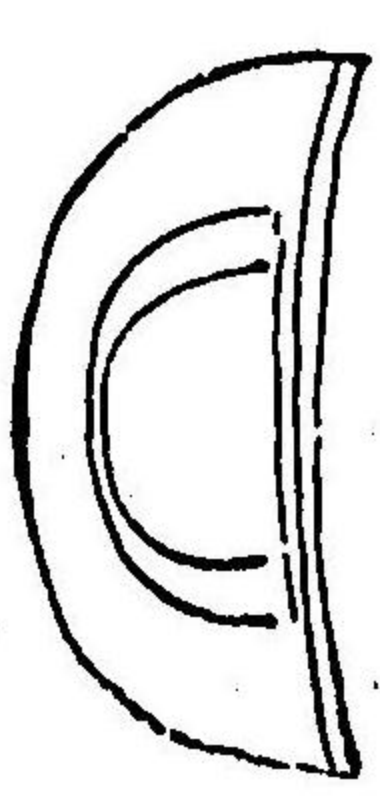
此式一定ノ名稱ナシ



同 庭ナシ内淺キ方



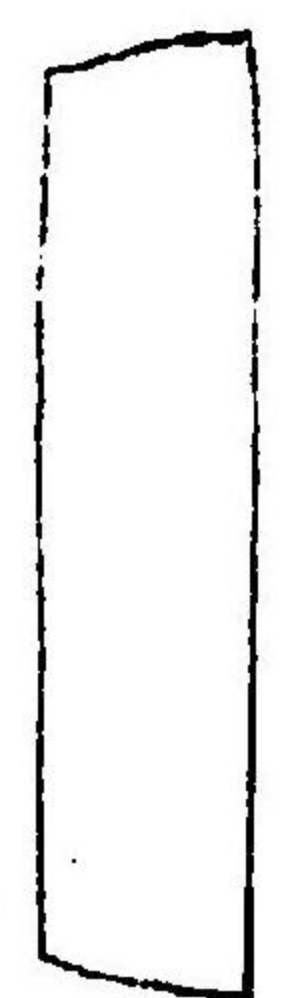
鼻操形



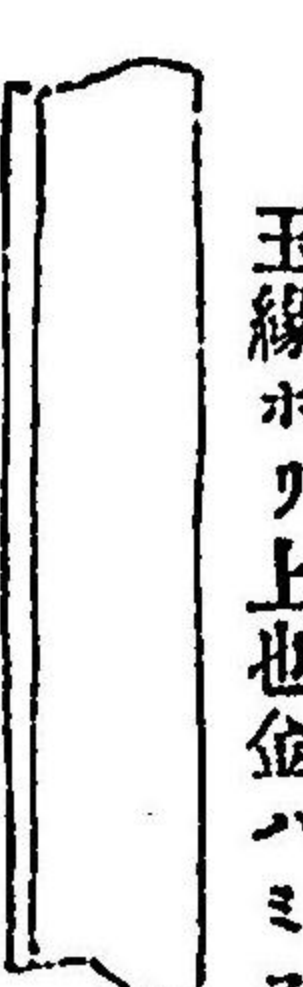
肉置丸ク稍尖ル方

此式ハ四分一又ハ眞鍮ノ外見ス又ホリハ浪ノホリ上ニ限ル如シ

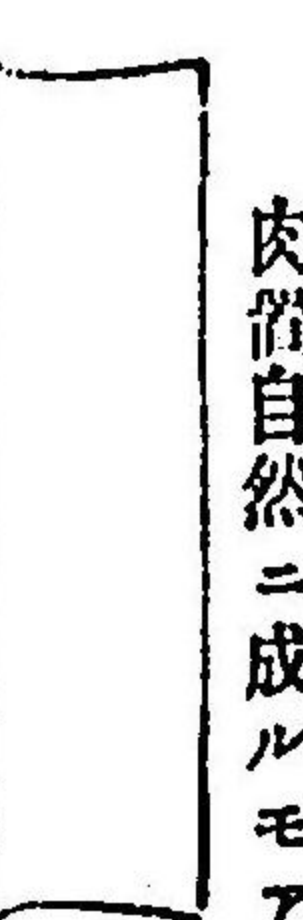
通例太鼓形縁 玉縁ナシ



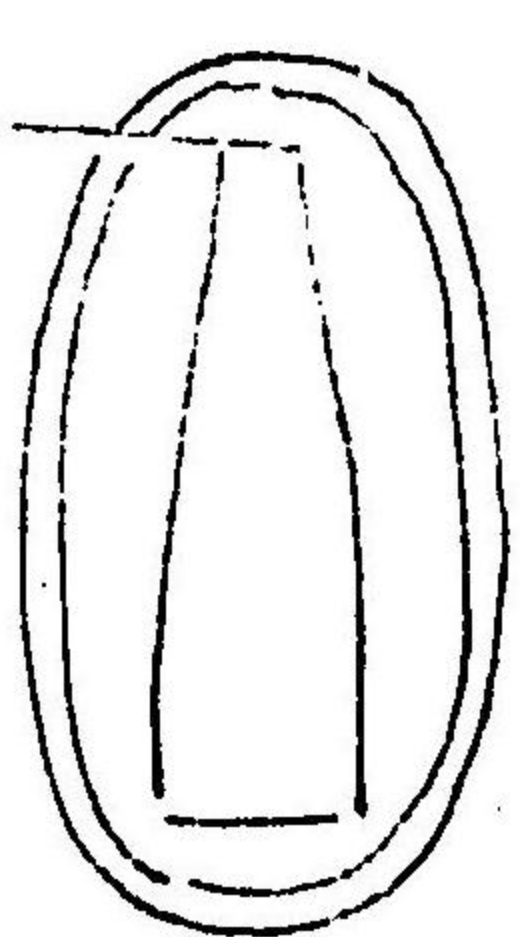
壺口形 玉縁ホリ上也金ハミス



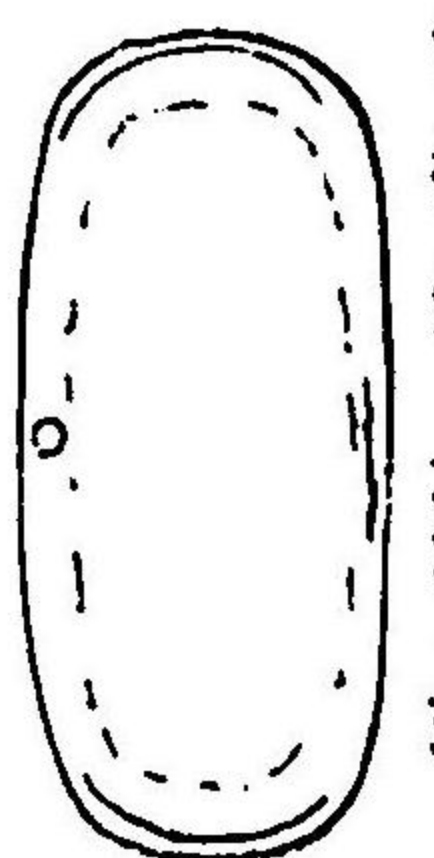
戸樋形 肉置自然ニ成ルモアリ



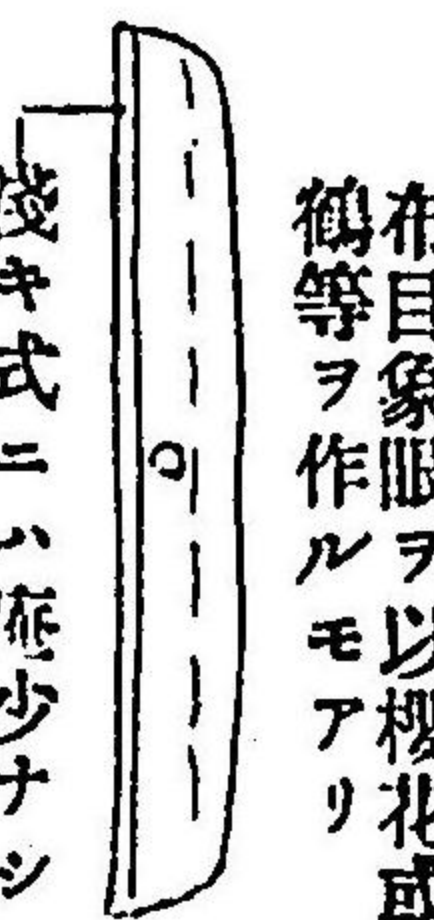
通例縁



泥摺縮 最淺キ式



同



浅キ式ニハ麻少ナシ

天上金ヲ縁ニテ受ク但蠟着ニアラスシメ付ケタルナリ

ワカシツキ但  
白銀モノニハ  
蠟吹ナリトハ  
勿論ナリ且縁  
金ト天上金ト  
平ニナル

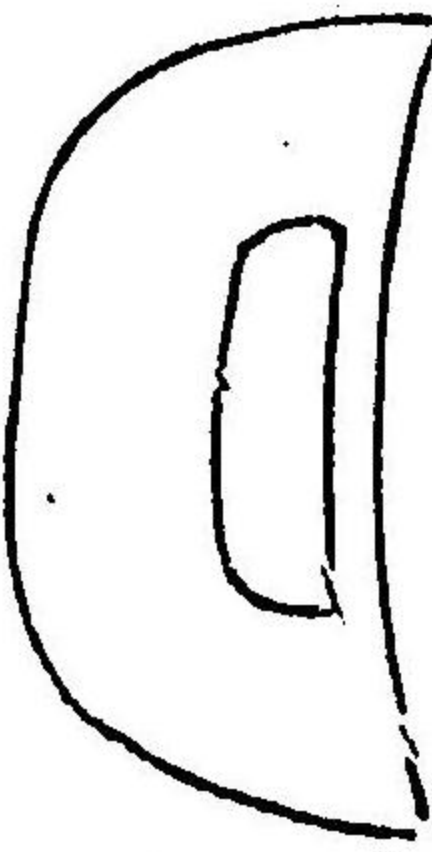
布目象眼ヲ以櫻花或ハ  
鶴等ヲ作ルモアリ

泥摺式 稍深キ式更ニ深キモアリ



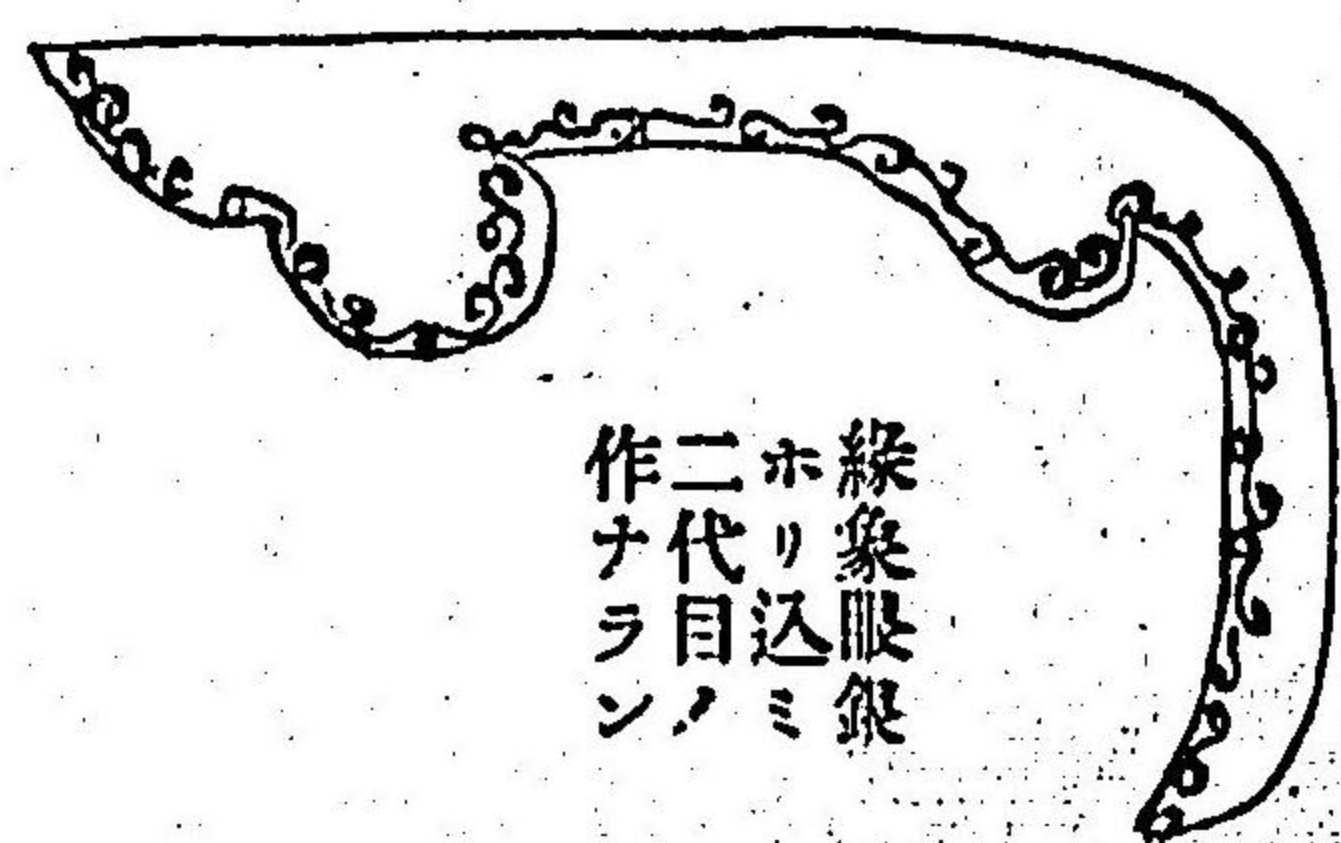
「ホリ上ケモノ、中裏ヨリ打出  
シノ如ク見ユルモアリ又稀ニ  
ハ据物モアルトソ

栗形



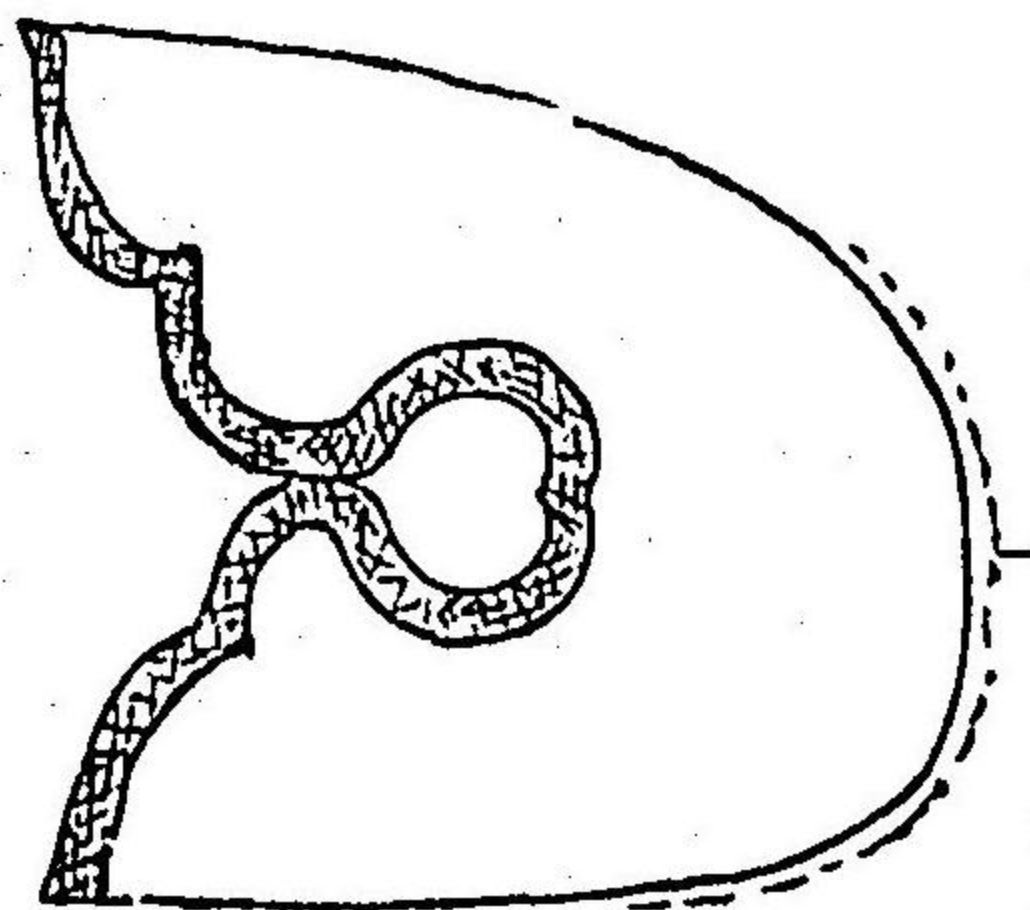
白銀モノニマ  
ハ見ル但多ク  
ハ浪ノホリア

半鍬形



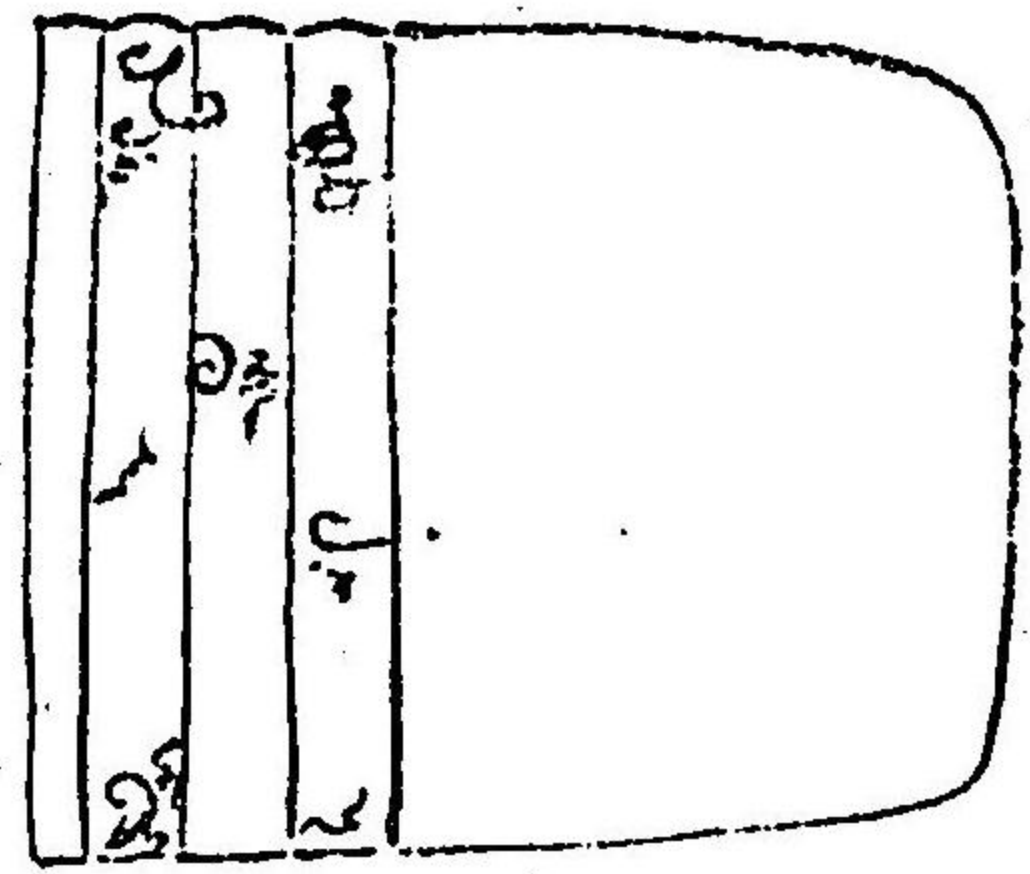
緑象眼銀  
ホリ込ミ  
二代目ノ  
作ナラン

鍬形式 薄ク尖ル方



緑銀布目

袋箱式

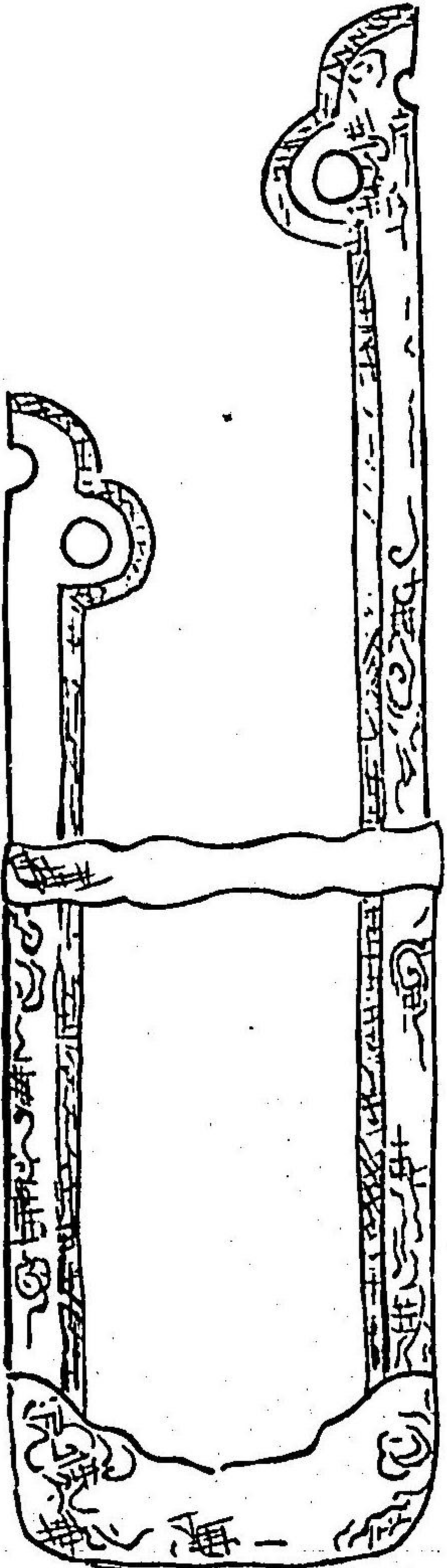
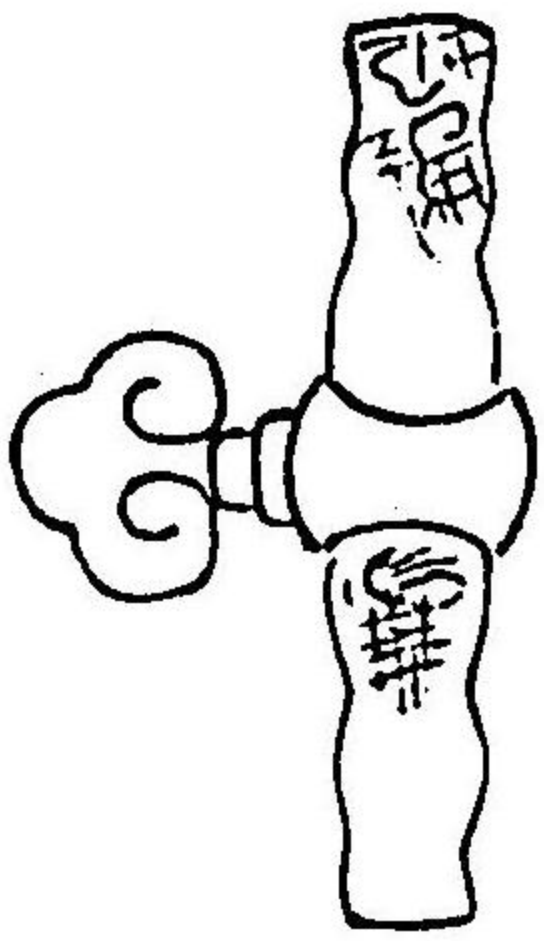
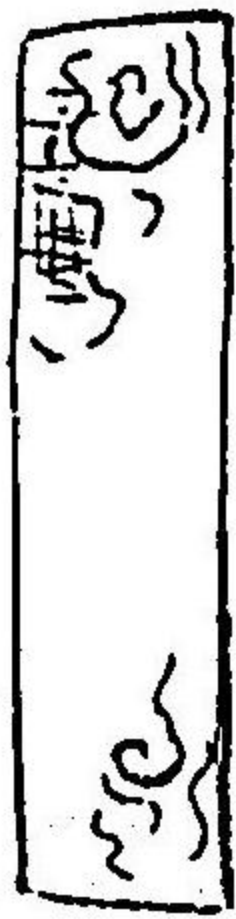
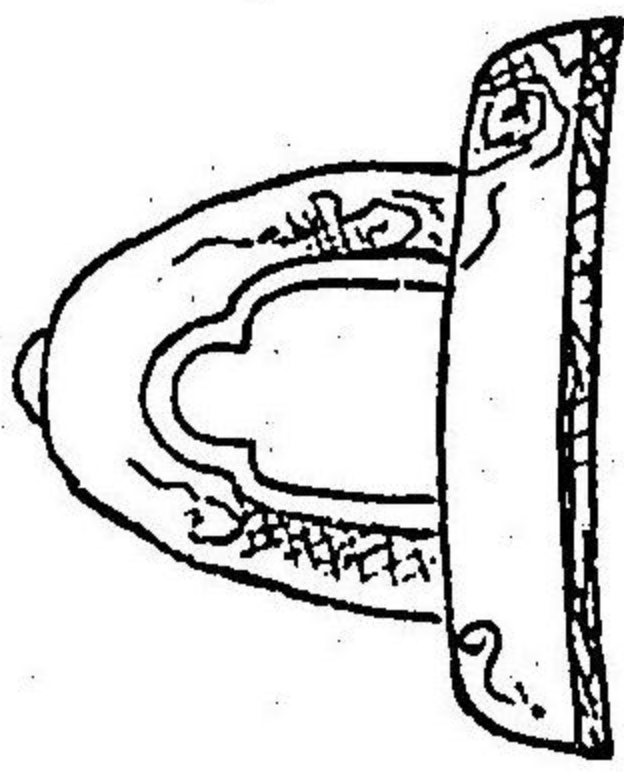


象眼金張金  
ヲ以入ル

三星金具 鐵六所揃物



雲形上金銀布目  
玉縁金布目



初代作 赤銅ミカキ地 舟金据物カヒ銅ホリ込蘆金ケシ込岸ホリ上

ウラ無地但ミカキ

(此對作馬針柄アリ今散失ミヘスト云)

二代目作 鐵 蒲鉾形薄作ノ方 蟹四分一据物水毛ホリ草金ホリ込



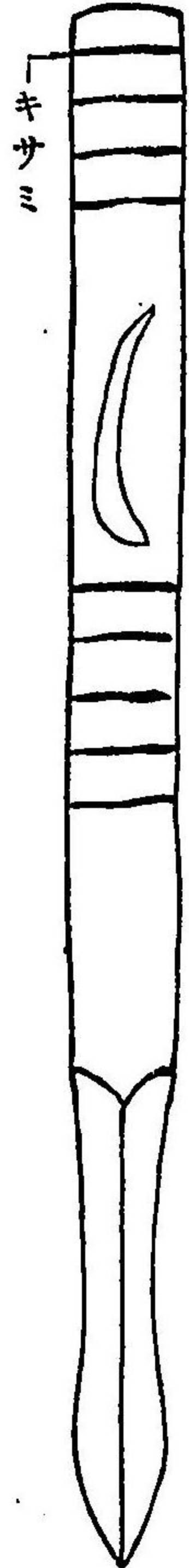
ウラ無地

初代 鐵 角肉厚作ノ方 雲毛ホリ銀布目



ウラ無地

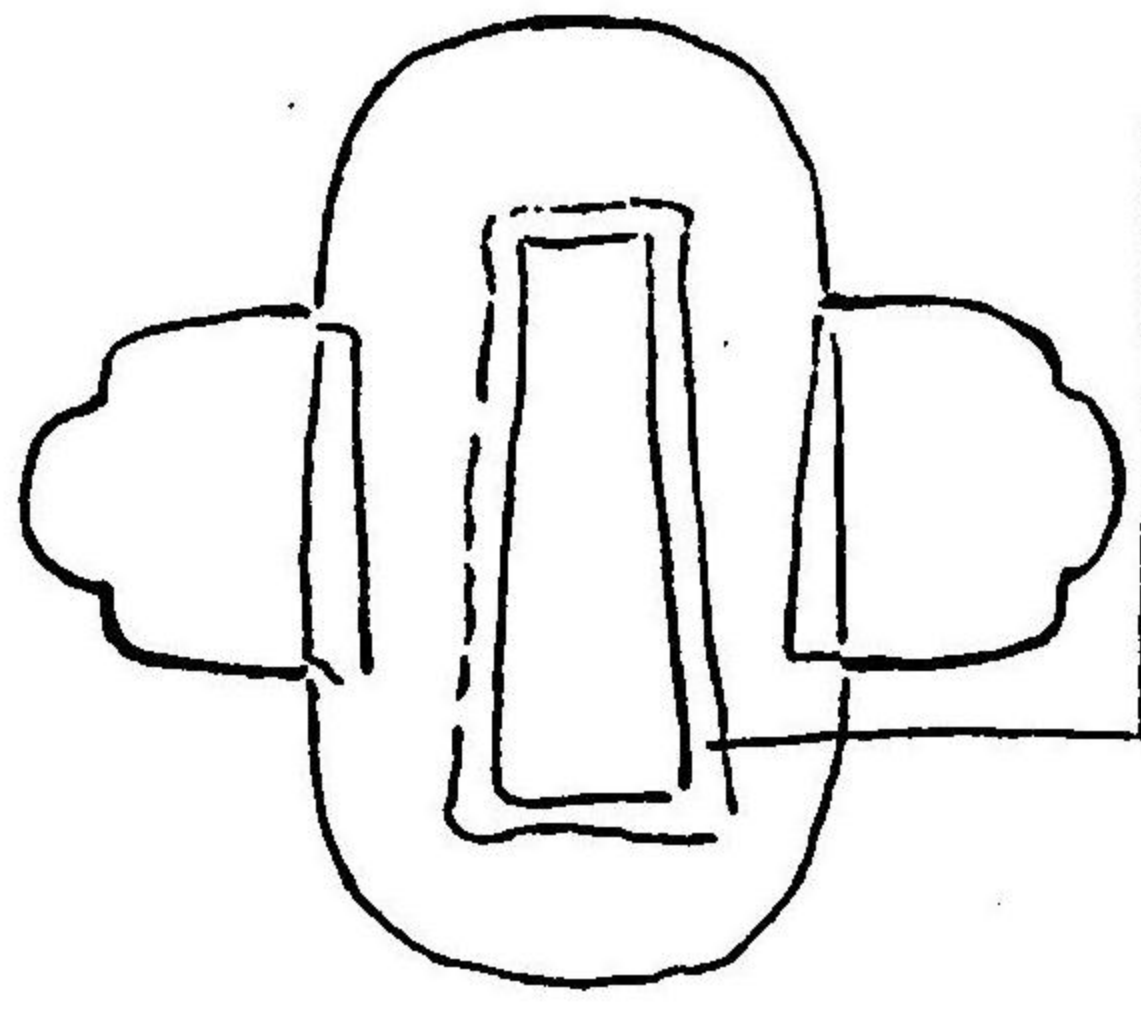
二代 鐵 肉置蒲鉾薄キ方 月眞鍮据物



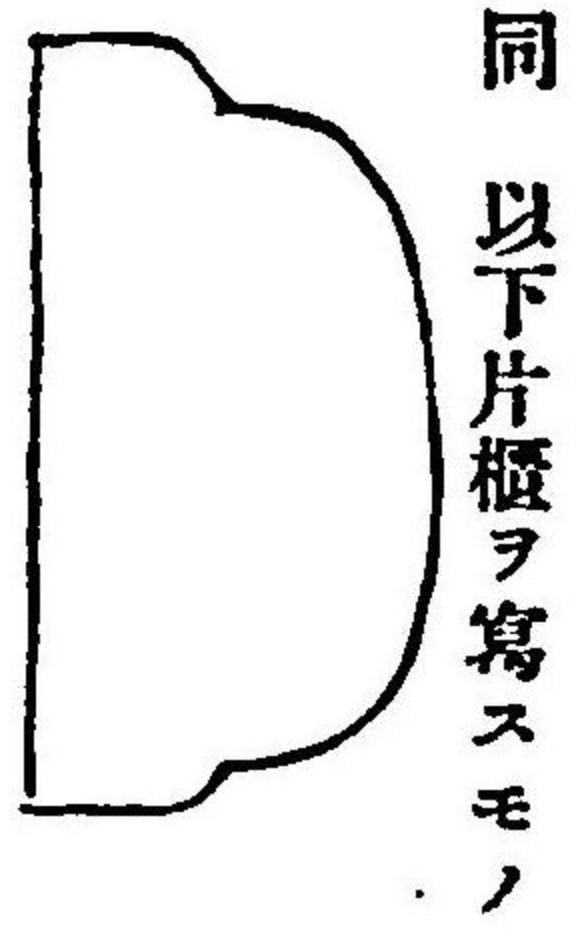
ウラ無地

キサミ

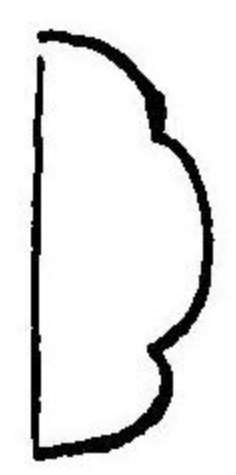
二代目作には後藤傳三ツ所揃ものもありと現に其家筋に程乘形巴三  
 所もの雛形存すといふ  
 鐔の櫃並に切羽台の式通例左圖の如し  
 初代



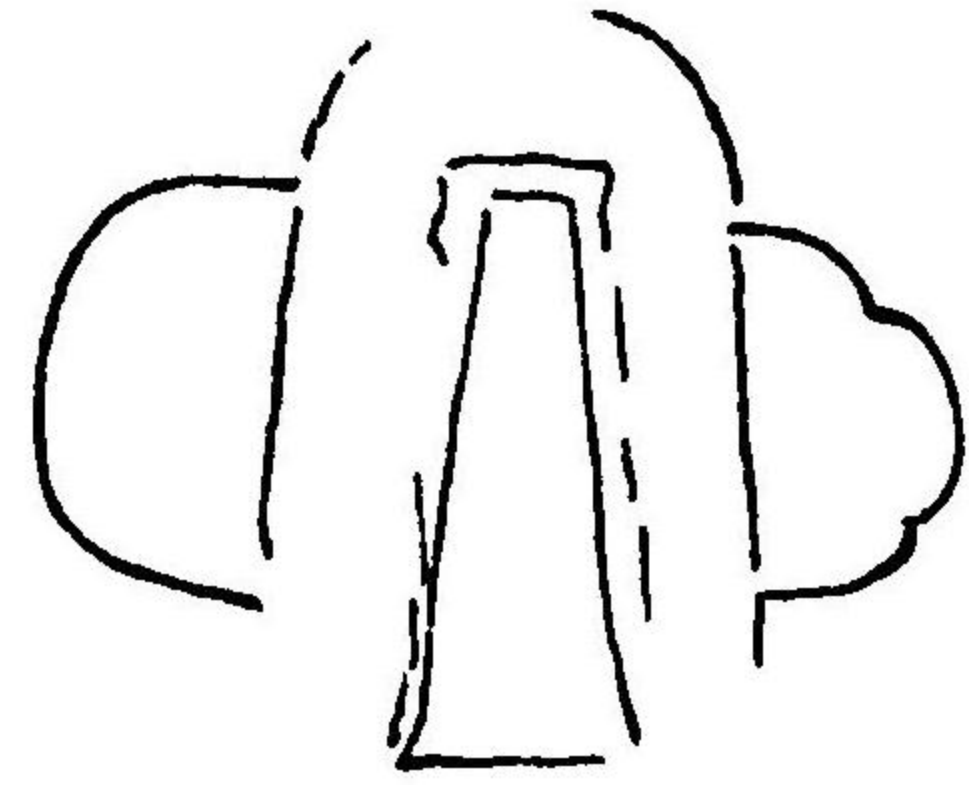
「タカネ穴際少シクスクモアリ」



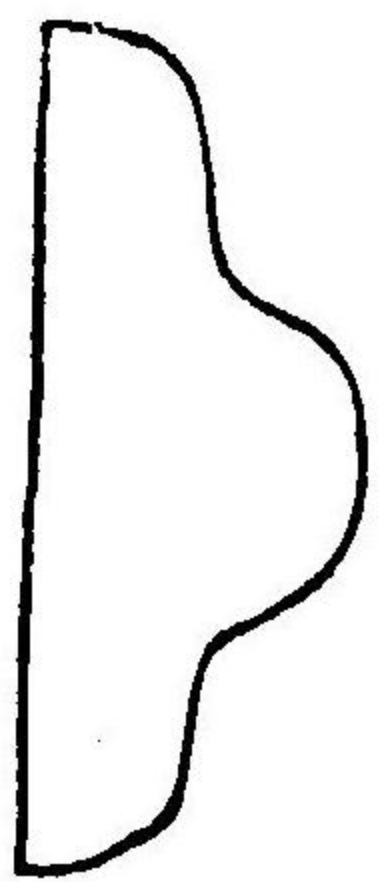
同 以下片櫃ヲ寫スモノ



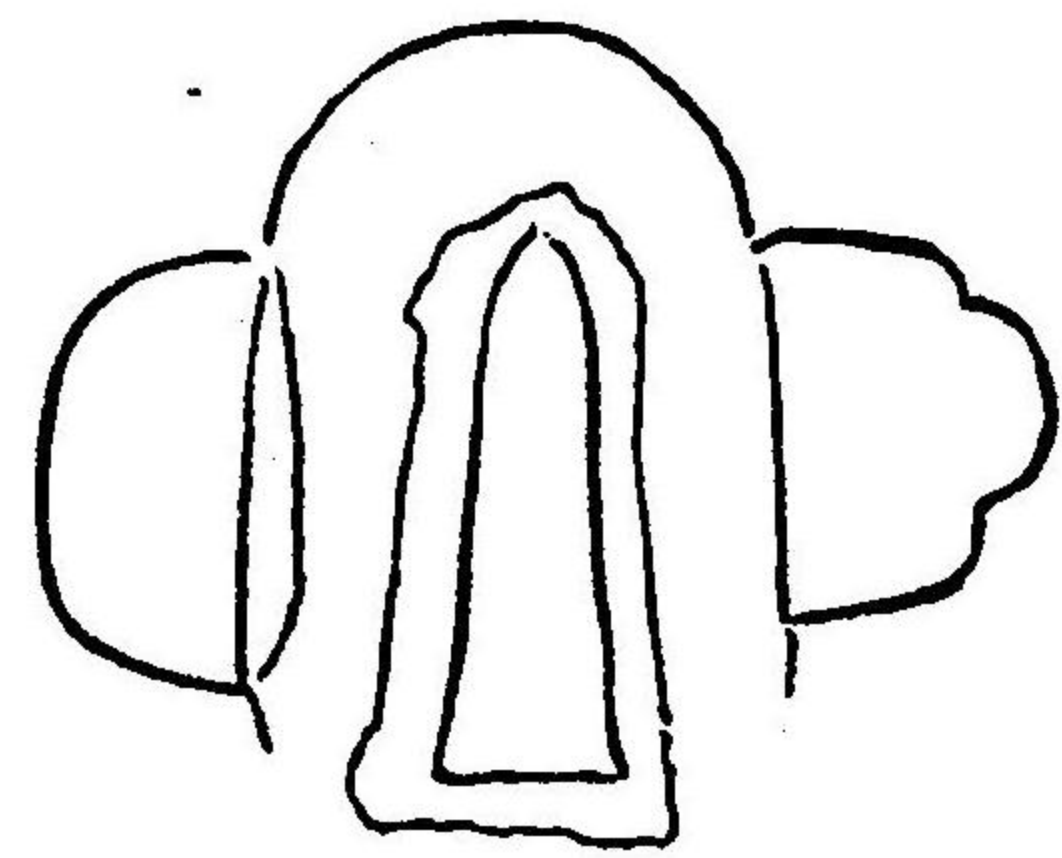
同



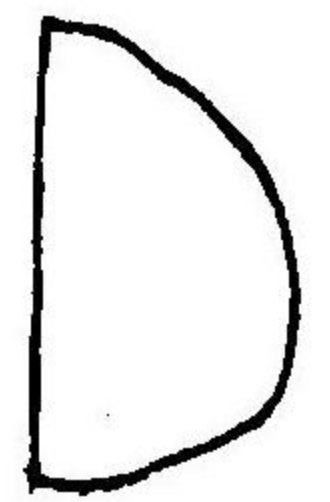
同



同

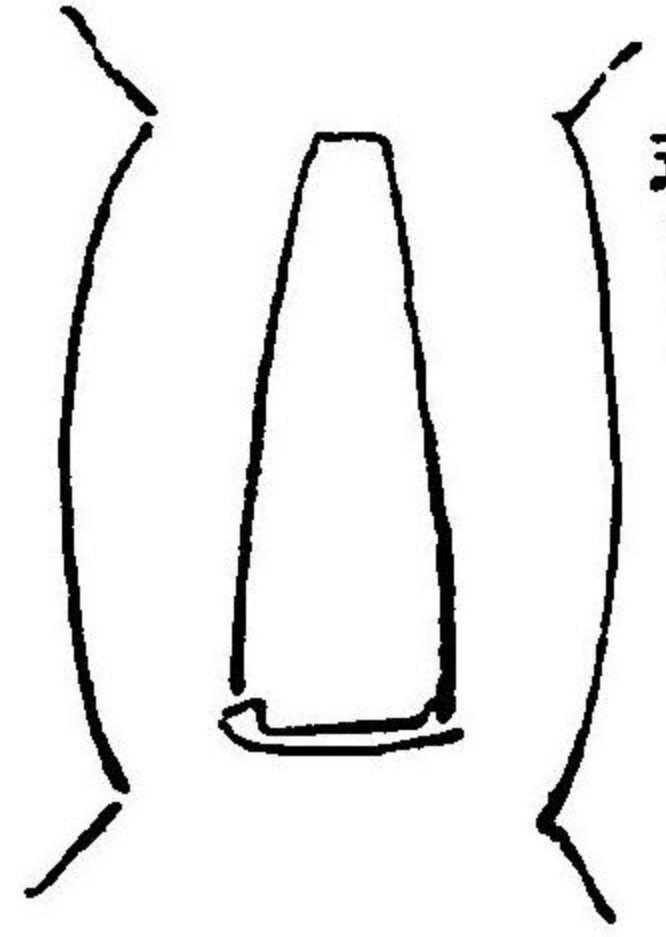


同

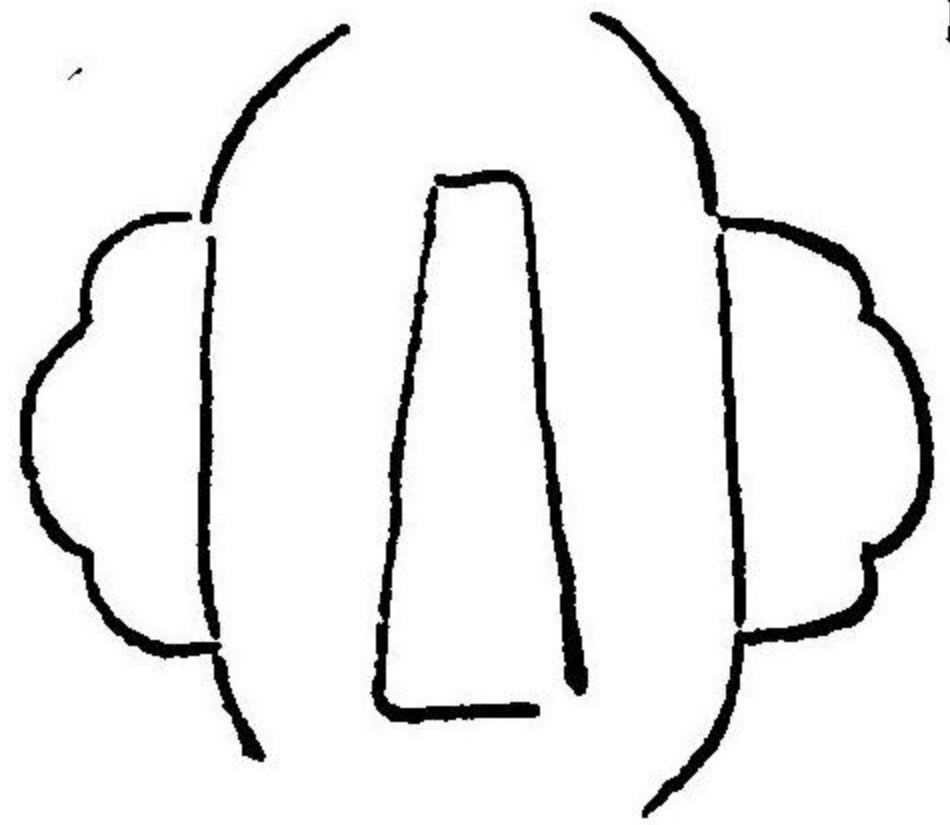


同

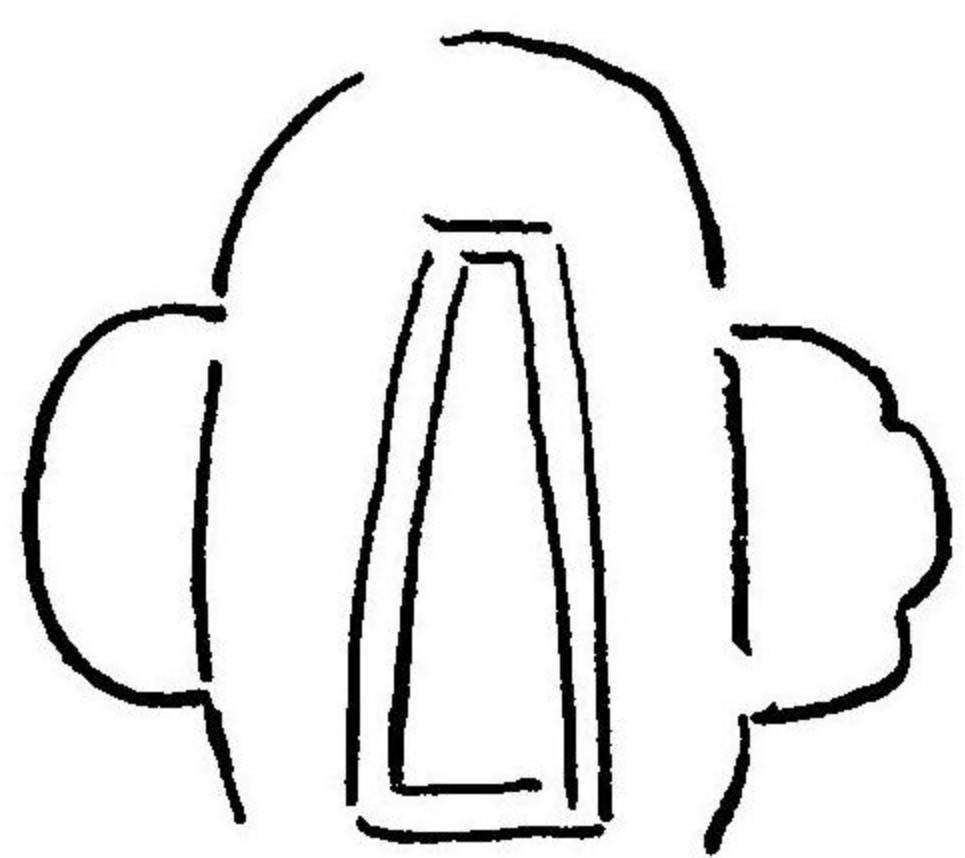
同



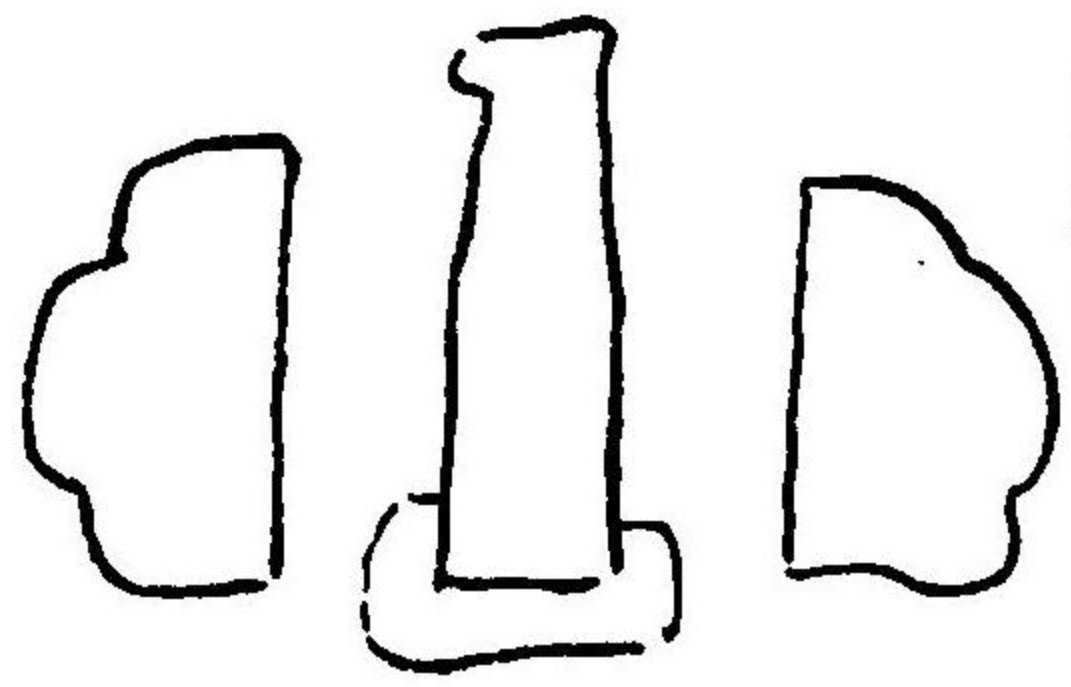
同 扇透ノ台二代以下ニモ此式アリ



同



同

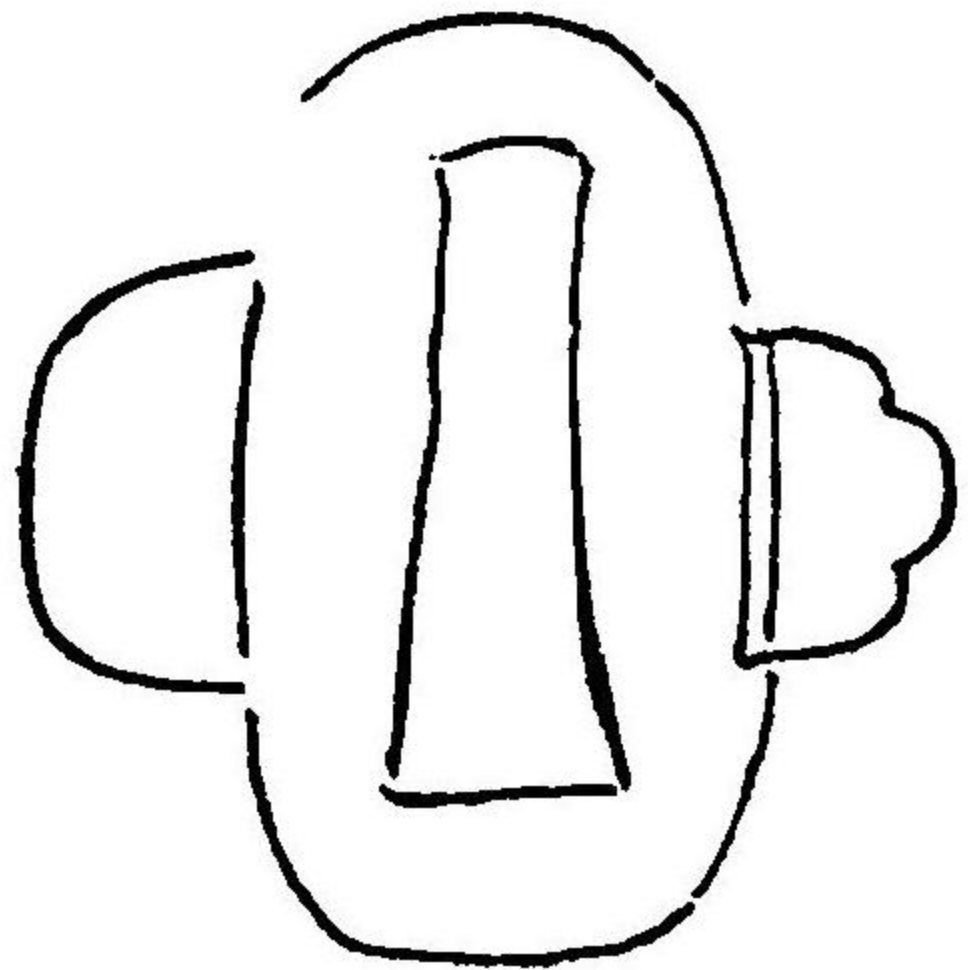


二代目 巴ノ櫃但シ異体尙一層異ルモアリ

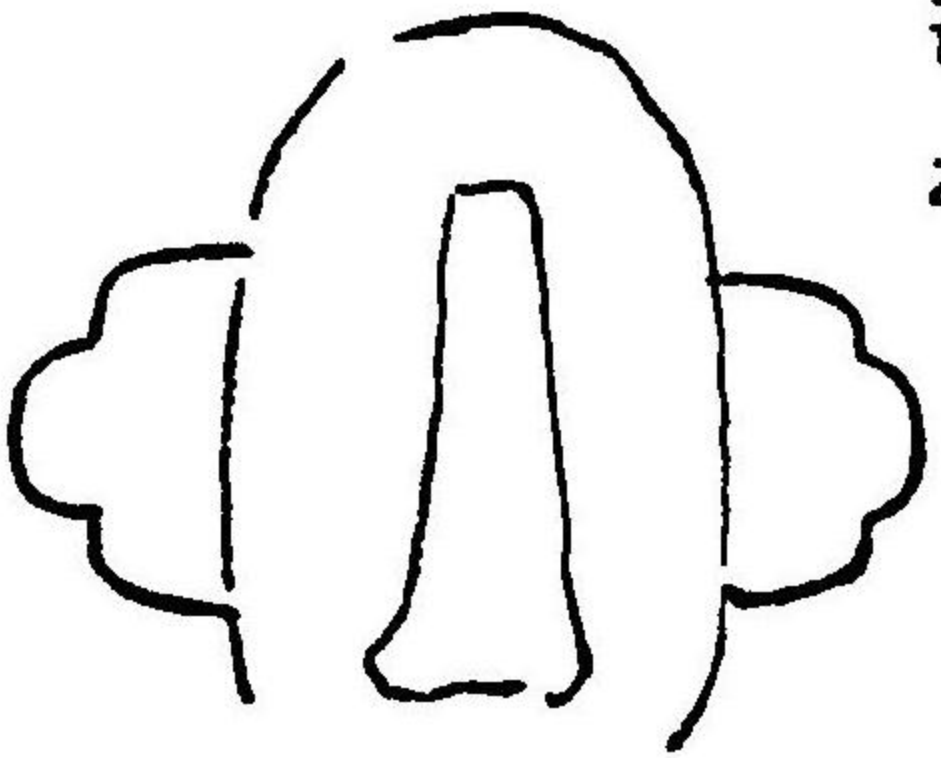
同



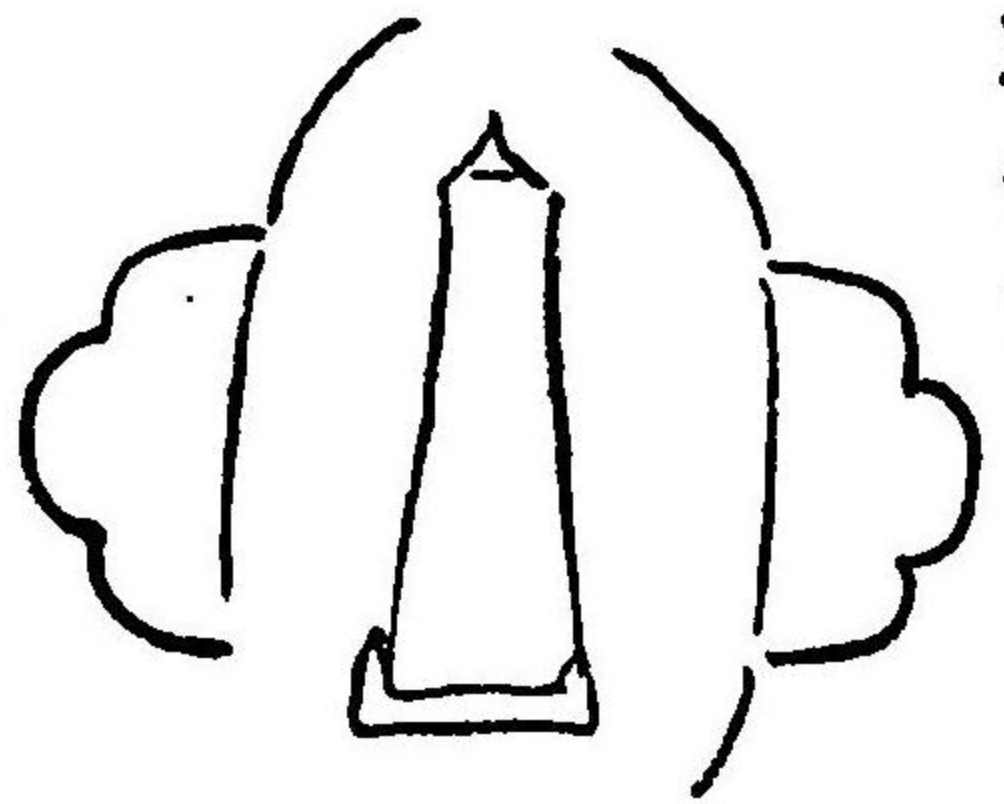
同



勅平



三代目



概ね斯の如しといへども二代の初代に三代の二代に似たるはあり二代以下は概して美なるかたなれど趣乏し末は先代に依るのみ  
在銘は初代には絶て見す西垣勘四郎作又肥州住勘四郎作と切るは皆二代なるべし勘平は在銘多し西垣勘平作又は勘平作と切る晩年には年齢を切りたるも見ゆ三代目は在銘まれなり某氏藏に前名を即西垣仁藏作と切たるものあり珍らし

慶長十八年生元祿六年死行年八十一

二代目勘四郎吉當又永久前名茂作

父の職を継ぎ諸作多し後に後藤顯乘の門に入り傳書を得る鐔及縁頭等總上手にて二代たるに愧ぢず作行を概評すれば美なる方にて初代より密なり其唐草象眼殊に勝れて見事なり春日初代に髣髴たる二重唐草あるは此作とす透物据物象眼もの種々あれど初代の雅味なし布目ものは三代とは分けかたくあれど初代とは判然たり其吹寄櫻の如

き花稍大にて心の毛彫に見所あり

寛永十六年生享祿二年死行年七十九歳

二男勘平別居

此作行概して堅く見え品格隨て下る其透鐔の如きも肉置圭角ありて毛ホリものもさかく荒々しく覺ふ又兄の如き妙なし但し枯木象眼はよく初代に似たり  
諸作二代に次くへし但縁頭等の作は分ちかたし  
生死年月詳ならず

三代目勘四郎吉教前名仁藏

此作初代及二代の如く多く見るこごなし其作名は二代に繼ぐをかし次第下りなり一般の作行は美なるかたなり  
八代三代目甚吾は此門に入るといふ當時に於て重せらる亦知るへし  
延寶八年生享保十三年死行年四十九

四代目勘四郎吉敬實は野田某二男

此作いまた見すといへども更に下るへし後故あり浪人となるといふ  
享保八年生安永九年死年五十八歳

五代目勘左衛門正久

江戸金工熊谷義久の門に入る(熊谷作に肥後式多きはこの故なり)

後次細工人となり三人扶持給ふ

明和七年生文政二年死行年五十

六代目四郎作良久後義久

職祿前に同し

江戸熊谷の門に入る

寛政三年生嘉永三年死六十歳

七代目勘左衛門義正實は池田某二男

職祿前に同し

文政三年生明治十二年死年五十九

八代目即當代四郎作實は六代目長男

初代より連綿八代の間にて代々作あらざるなし盛なりと謂ふへし  
然に二代目己に後藤傳を兼ね又五代六代相繼て江戸作者の門に遊ふ  
こゝにおゐて家傳三變するものゝ如し其勘平の作たこへ品格至らさ  
るも却て其自家正脈を維持するものこ云ふも可ならんか

### ○志水家

初代仁兵衛一幸實は平田彦三甥

細川三齋公入國の際平田彦三と同しく隨行八代に住す彦三亡後實子  
少三郎は藩命に依り熊本に移り髡養子三郎兵衛なるもの判屋職とな  
り仁兵衛白銀細工の養子相續し五人扶持給ふ

明智日向守家老志水丹左衛門に由緒あるを以て志水と改む

生年月詳ならず延寶三年五月死



二代目甚五郎永久久は次の誤りならんか或は後久を次に改名し其記入脱落せしにや  
十五歳の時重扇の鐔を作り藩公に献す(三代目も例に依る)  
家督の節三人扶持給ふ

元和六年生寶永七年正月死行年九十一歳

三代目甚五郎永義

貳人扶持給ふ

三代目西垣勘四郎の門に入る

以上の記は四代目甚五より其筋へ差出したる先祖付の寫に依る

元祿四年生安永六年死年八十七歳

四代目甚五實名詳ならず

扶持前に同じ

延寶三年生文政六年死年七十八歳

五代目茂永以下俗稱詳ならず代々甚五と稱せしや

六代目永典

七代目永泰

八代目即當代永利

以上志水の歴代たり然に肥後金工中甚五に至て時代其他に疑の容るへきもの頗多し第一系圖書粗略にして殆考へかたきもの少なしとせず今左に試みいふへし

初代は前の如く仁兵衛なり甚五の稱見へす又元來平田彦三甥にて其亡後細工養子の相續をなすにあれども此事平田の系圖かきに見へすのみならず少三郎は彦三嫡子にて其相續人たる事は該系圖に明らかなり(少三郎作もあり)されは仁兵衛よしや一旦養子名義あるも出て志水を名乗(分家にもせよ)たる譯にて平田相續人といひかたきに似たり又八代初代は仁兵衛と稱す然に其實名の一幸と共に曾て在銘を見ざるのみならず聞しもなし二代三代は共に甚五郎と稱すこれも世に有

名なる在銘ものはいつれも甚五にて郎はなしそは郎を略せしもの  
や疑ふへし

初代已に甚五にあらず仁兵衛なるときは初代甚五と稱すへからず然  
とも現に八代甚五と切りたる作に永次在銘のものに比して作行時代  
ごもに上るへきものある如し且久しく傳へいふ永次は二代目なりと  
（先祖付中永久と名乗甚五郎の代を指す）然は仁兵衛亦或は初甚五郎と  
稱し其記入漏にや

三代目は三代目甚吾と銘す（八代にて代を切るは此外見す）又甚五の五  
を必ず吾に作り郎はなし（一説に三代は其正統の子にあらず當時の名  
工を以て八代松井氏細川侯一族の撰拔に依り三代目の銘を許可せし  
といふ）

甚五郎の郎を略せしは前説に假定するも三代は二代と異り吾の字に  
切り稱呼こそ同じきも全く異字なり古きは字体に頓着せずこの説も

あれと工人の銘振は彼輩に取り大切の事たり其常に異字を用ゆるは  
受けかたし作者若し文盲なるときは猶更守るへき筈ならん

愈初代の名は仁兵衛なるときは従前八代仁兵衛と志水一幸とか又  
は八代初代とか呼ぶへき筈なりそれを久しく初代甚五と呼び來りし  
はごにかく誤りに歸すごせは今迄初代甚五と呼ぶ作を繰り上げ仁兵  
衛作と改ためて呼び而して従前同作となす作（實際在銘にて二代より  
上る如き作）を一代繰り下げざるを得ざる結果ごならん

甚五代々かくの如く疑ふへきもの多しごいへごも今不完全なから鑑  
定上便利をも計り仁兵衛を單に八代初代と呼び寶永に死せし甚五郎  
を二代目と安永甚五郎を三代目との如く文政以下順序に説くへし  
初代作行總て古雅なり鐔の式は多くはアナリ形木瓜等にて環耳スキ  
下ケに作るものもあり概ね厚造のかたなり且肌物勝ちなれば一見甚  
美ごはいひかたきも却趣あり

据物布目象眼共に著名にして其天龍、鯉等は据物ホリ共にあり人物、蟹、其外動物類は専ら据物に作る例なり牛は彫上にて名代たり雁、糸卷、菊は重に眞鍮張金なり布目は金銀いづれもあり就中布目銀すりは象眼は妙とす

又地鐵に焼手クサラシと唱ふ法あり最得意の如し案するに其師彦三傳來ならん但彦三に比して深く入るかた故に一層強く見ゆ時雨の彫亦著名なり亦平田法より變化せしものか疎なる所尤妙縁頭にも据物象眼共にあり龍、雲、蟹の類又稀には桐紋等もあり龍は凡三種あり鏝には諸種あれと縁頭には布目にて入り瘦長きかたなりタカチハ毛彫とす蟹、桐等西垣作行と別にて一見或は拙の如き所即雅致の所か

又眞鍮張金を以唐草菊等も作る其金ホリ込は稀作たり

二代目鏝の作は工あり殊に勝れたるは古意あり初代に迫るへしといへとも概してタカチハ毛彫目共初代より稍小さき方にてかつ美なり此所實

は初代に遠く及はず(鏝式多く薄作なり)然共白銀ものには驚くへき精工あり或家の藏赤銅鏝金繩目覆輪取に作り全面精細なる毛彫を以唐草を造る非常の作たり一見或は埋忠作かと疑ふ計なり又銅四分一等にも精密なる彫込象眼なきにあらず(過半唐草据物中龍、蟹等は大に初代に近きもあれと牛はタカチハ稍過る如し即工に過きると評すへきかゝかし八代甚五の作と稱すは大かた此作に係る如く初代は勿論三代目の作も此作ほと多く見へずその縁頭及小道具の作は殊にしかり

三代目の作は地鐵初代二代よりはうるはしくやき手くさらしの類は稀ならん中にミカキ地にして春日の如き美觀もあり

鏝の式略二代に依る初代よりは大に薄し二代よりは稍厚きかたなり然共其牛、菊、透物等の作は所謂家の掟ものにて代々左迄差なかるへしといへとも其差實は重に此等の作に見る

三代目の据物はいまた見す蓋稀なるへし布目はもごより見るも先代より遙に下り弱く見ゆ西垣の門に入るごあれば八代名物の布目も此代にて下落せし如し

又此作には常に出来不出来ある如し然に偽物多きを以見ればごにかく一代の名人ごはやされごは疑なし(偽作は瓢巴、スキ下菊の類なり)四代目も次て上手ごの聞へはあれごいか、にや慥成作ごてはいまた見す其五代以下には作ごいふ程のものなきごそ

更に補ひいふへし八代鐔にも透ありごかし最少なし(鑿工譜略なごには透多く梅木桐其外にもありご見ゆれご甚しき誤りならん若あるも八橋或はタスキ透の類に過ぎさるへし又譜略に甚五は何頃なるや當八代になるごあり八代ごは地名のやつしろなりそれを家の代ごころへかく記載したるもおかし)

眞鍮張金象眼銀布目象眼共特に八代の名代ものたりゆるに偽物にも

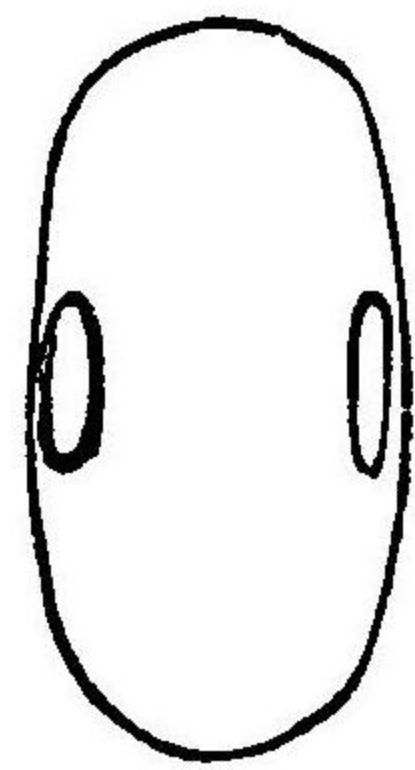
多くはこれを寫す又張金は他家には金銀共にあれご八代には銀も稀況や金はなし獨家藏梅花鐔に見るのみ矢張眞鍮の法の如く入る眞に絶類なりご神吉樂壽も常に賞せり圖下に出す

縁頭は初代以下甚獲かたし其式は頭は重に大丸袴腰縁等は太鼓たり丸形は西垣に比すれば肉強くかつ大にして深きかたなり袴腰は春日式より稍角肉にして高く武張る太鼓は却て他家より概して深くあるは常なれご却又厚からず(一種天上金を受く所極めて厚作のもの見ゆ)又白銀ものもあり其精密ある作には金小縁ある作も見ゆ多くは二代目以下の作なるへし切羽臺并櫃(初代には無櫃もの見ゆ)概ね代々同じ但代下るに随ひ肉置におゐて著しく劣る

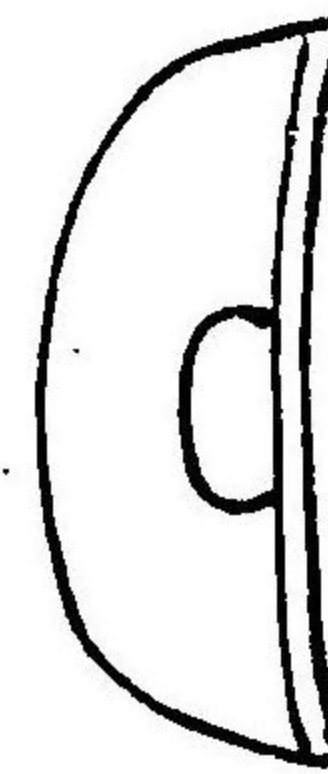
小柄筭馬針の如きは絶へて見ず鑑も至て稀なり家藏中長鑑及筭類似の一具あり共に二代作なるへし他具ご共に下に圖を挿む

傳へ聞細川家舊制中小性は金瘡醫を兼ねござ果して然は其斧に類  
 似の一具は即膏藥ヘラに造りしものにや猶考ふべし

丸形 深キ方



同 稍淺キモアリ  
且淺キハ稍尖ルコト



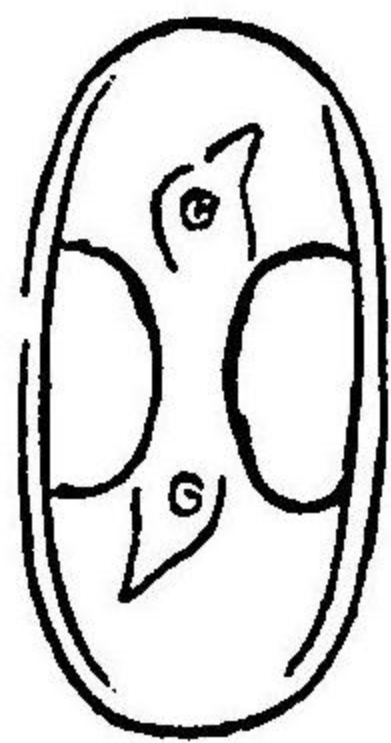
袴腰形 角肉ノ方



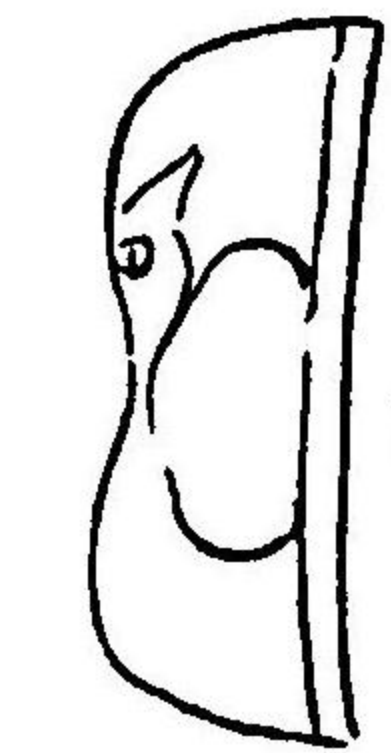
同 丸肉モアリ



猫脊形 銅



同 ホリ上低シ



異体浪形 正鐵



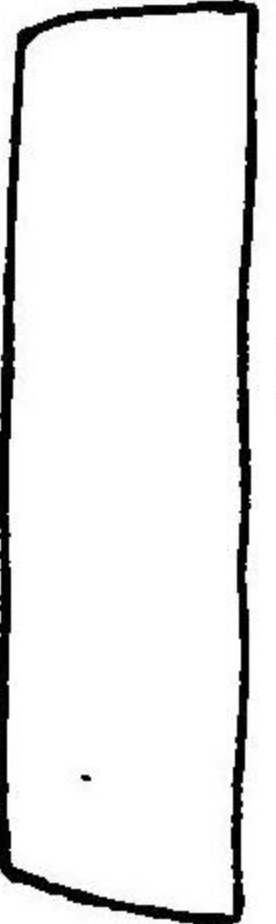
同 肉置最強シ



太鼓形 淺キ式



同 深キ式



種形 眞鍮張金象眼但掟物 此式最稀也

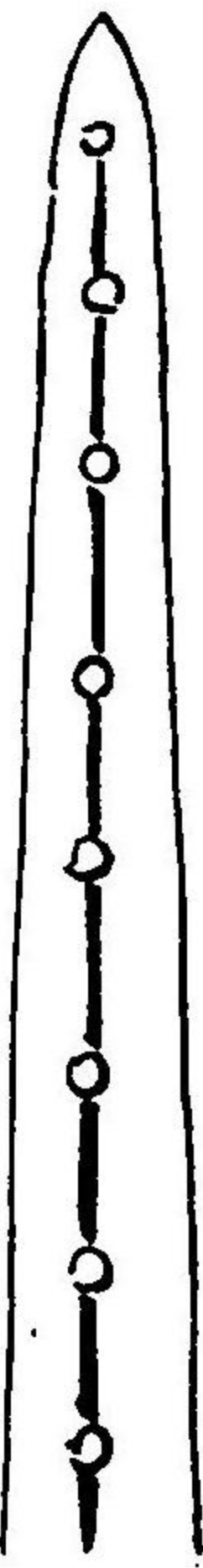


戸種形但自然 最厚キ方

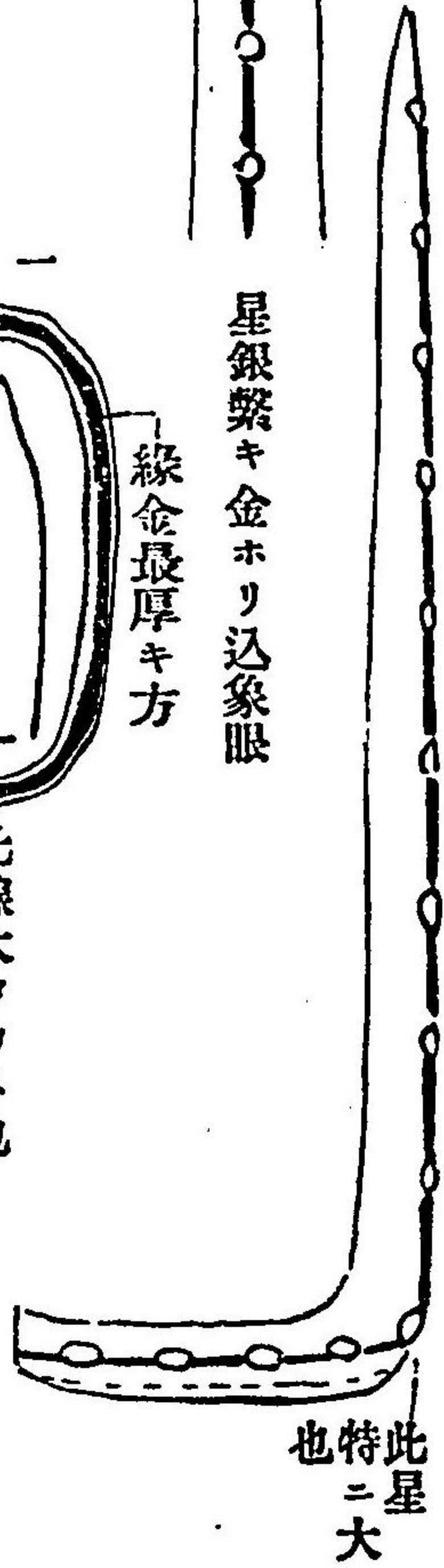


因ニ云中心線ハ西垣勘四郎ノ得意タリ春日其他絶テ無シ此作  
 實ニ稀ナルモノトス其勘四郎ハ銘鑑ヲ摸シ往々眞ニ迫ル此ハ  
 拘ハラサル如キ所却妙ナリ

異体長銘 鐵  
地作最厚ク且強シ

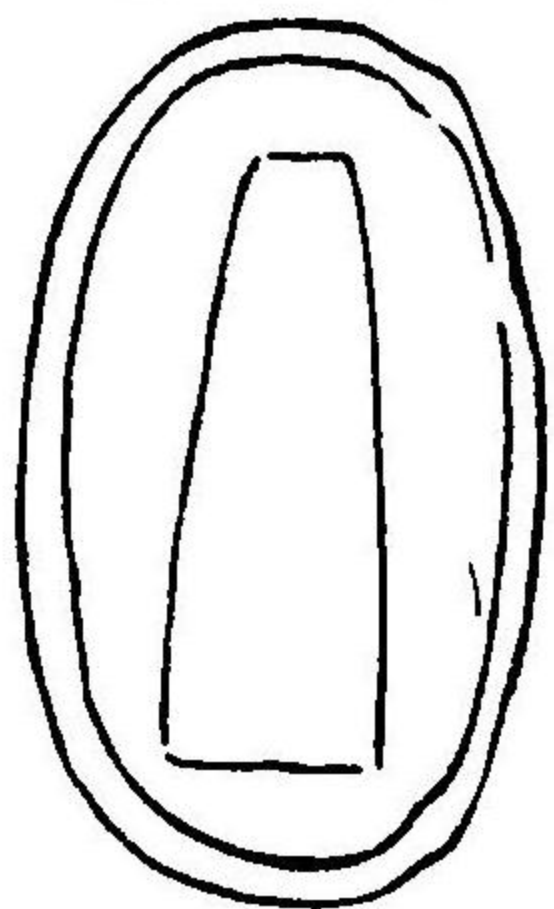


星銀繁キ金ホリ込象眼



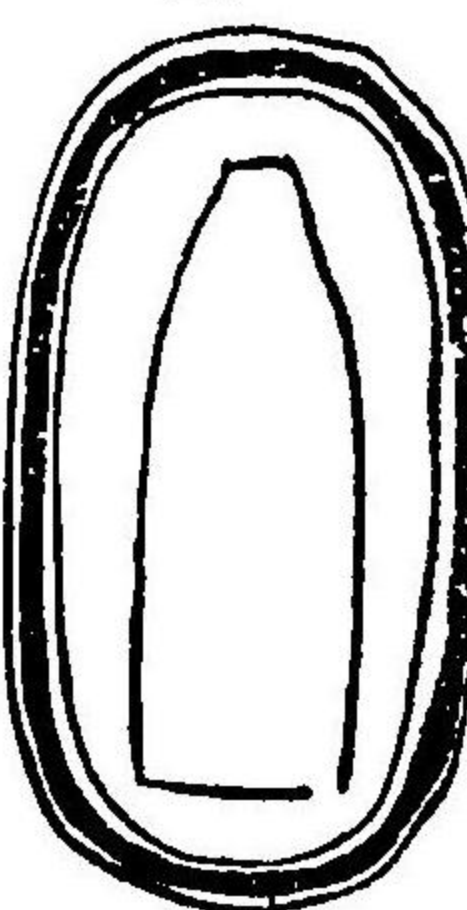
此星  
特大  
也

通例形



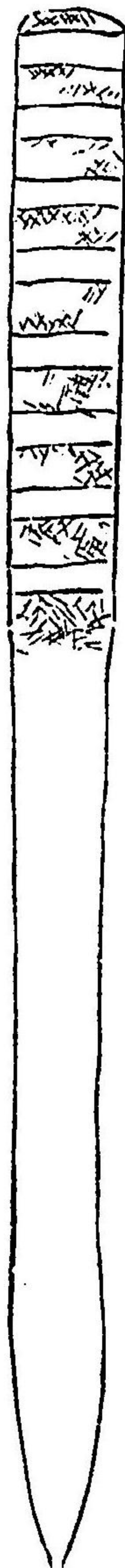
ワカシ  
ツキ

種一



此線大タカネ也  
但シ天上金ヲ受ケ  
シメタルナリ

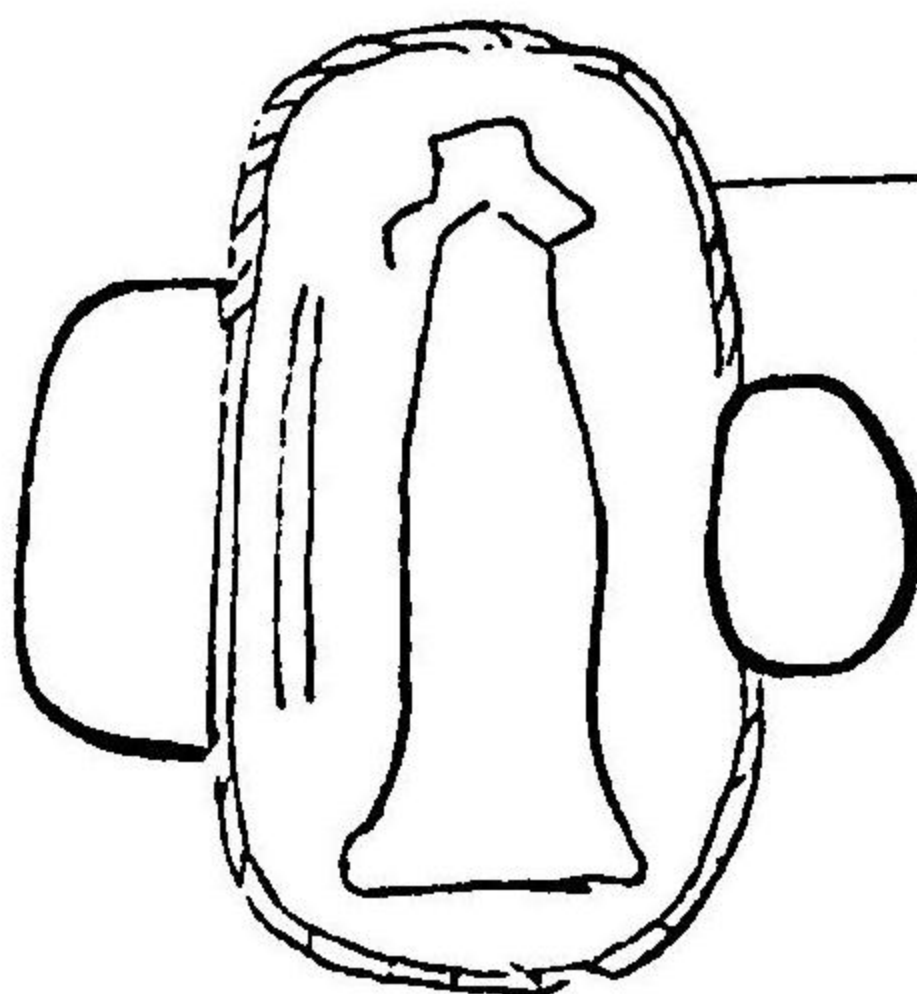
斧ノ類 鐵



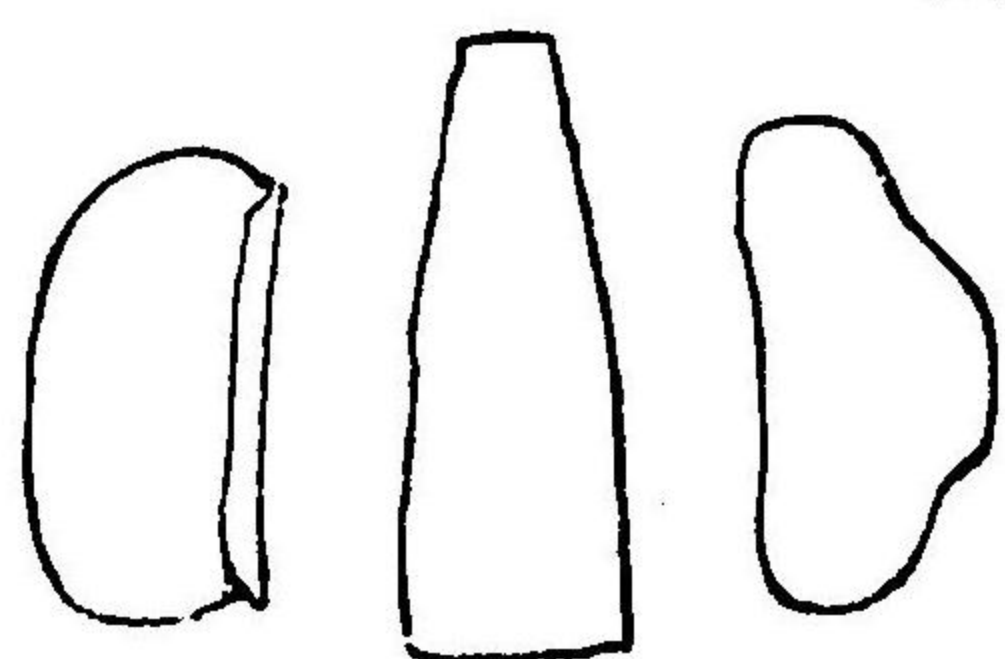
象眼ナキ所地ニテ凹トナル

初代

眞鍮ホリ込

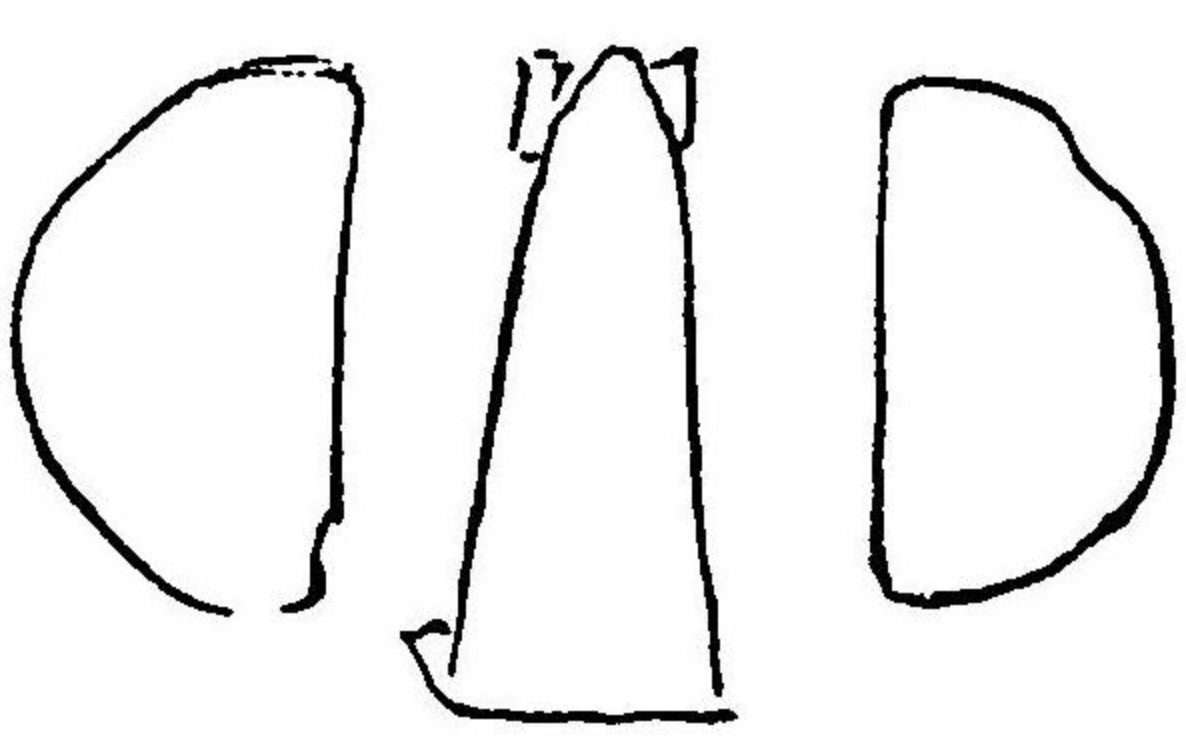


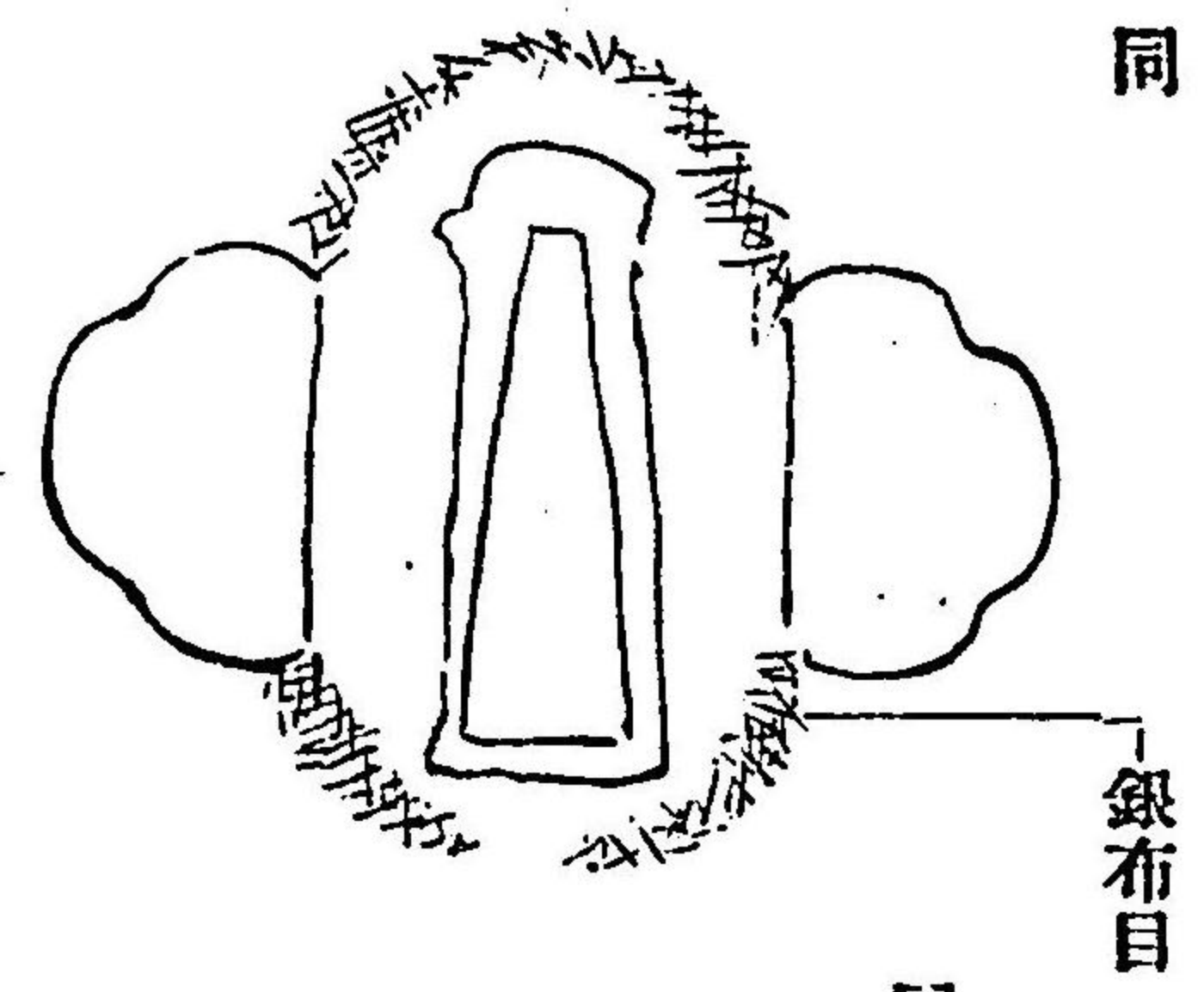
同



ウラ無地

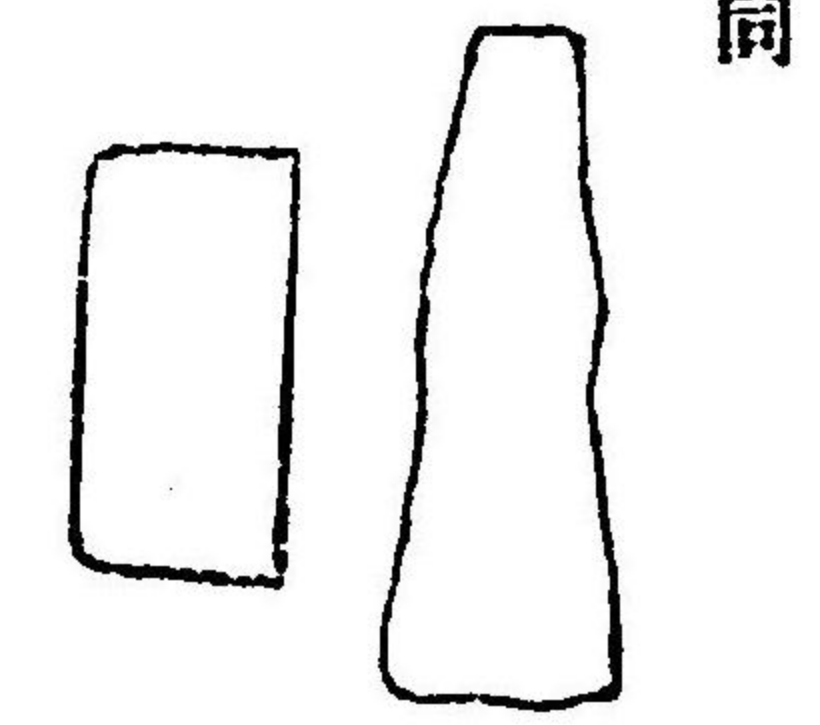
同





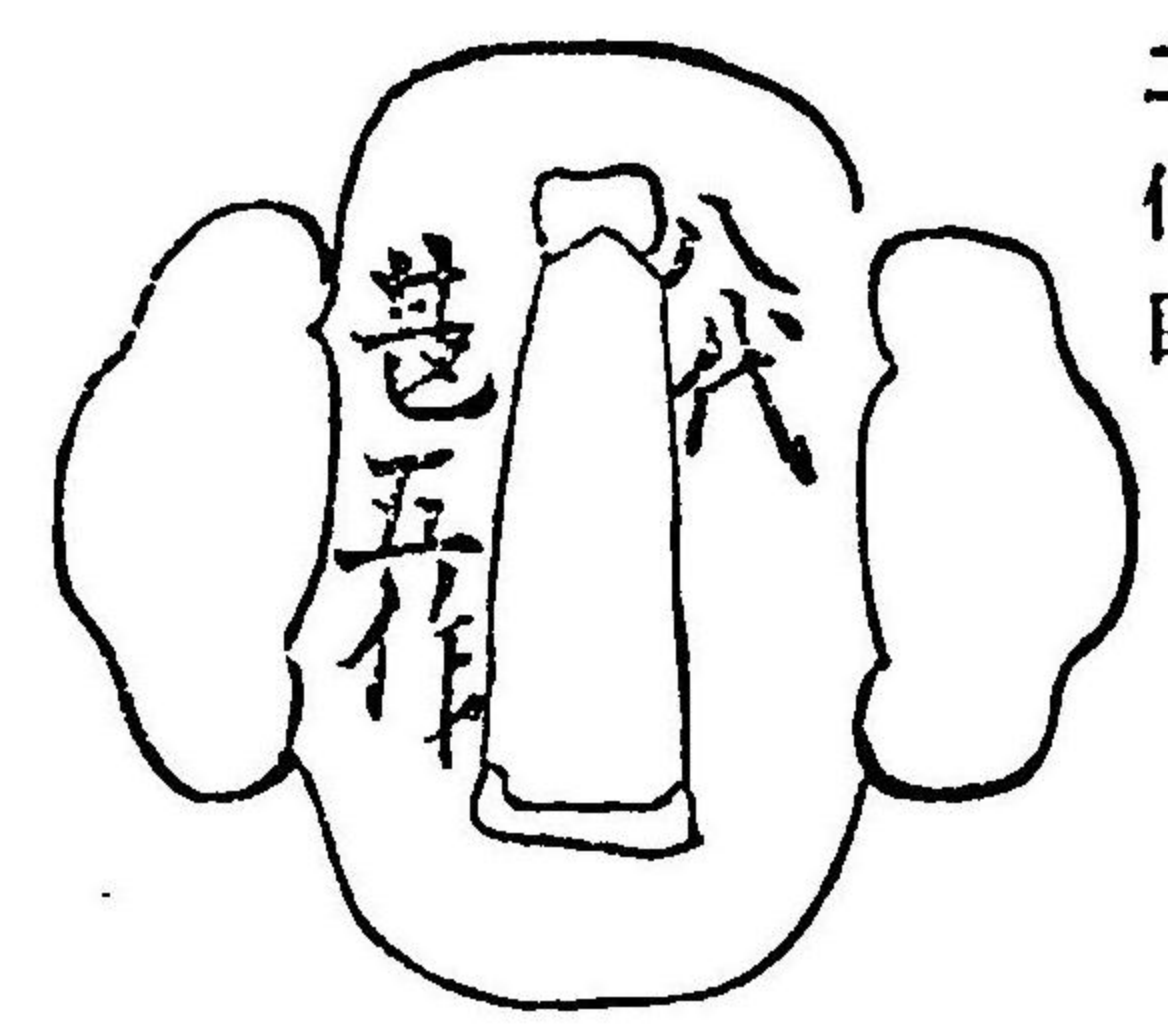
同

銀布目

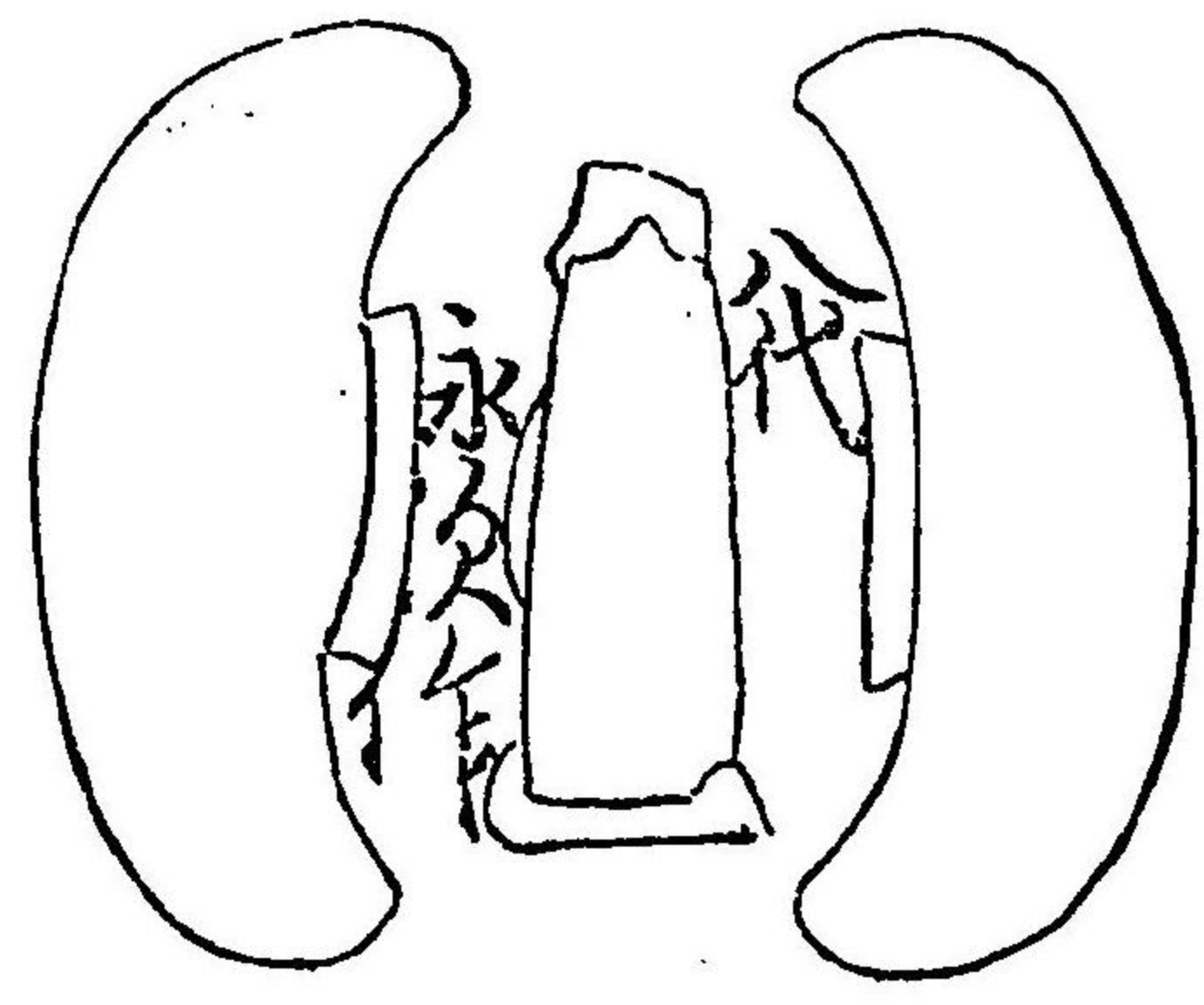


同

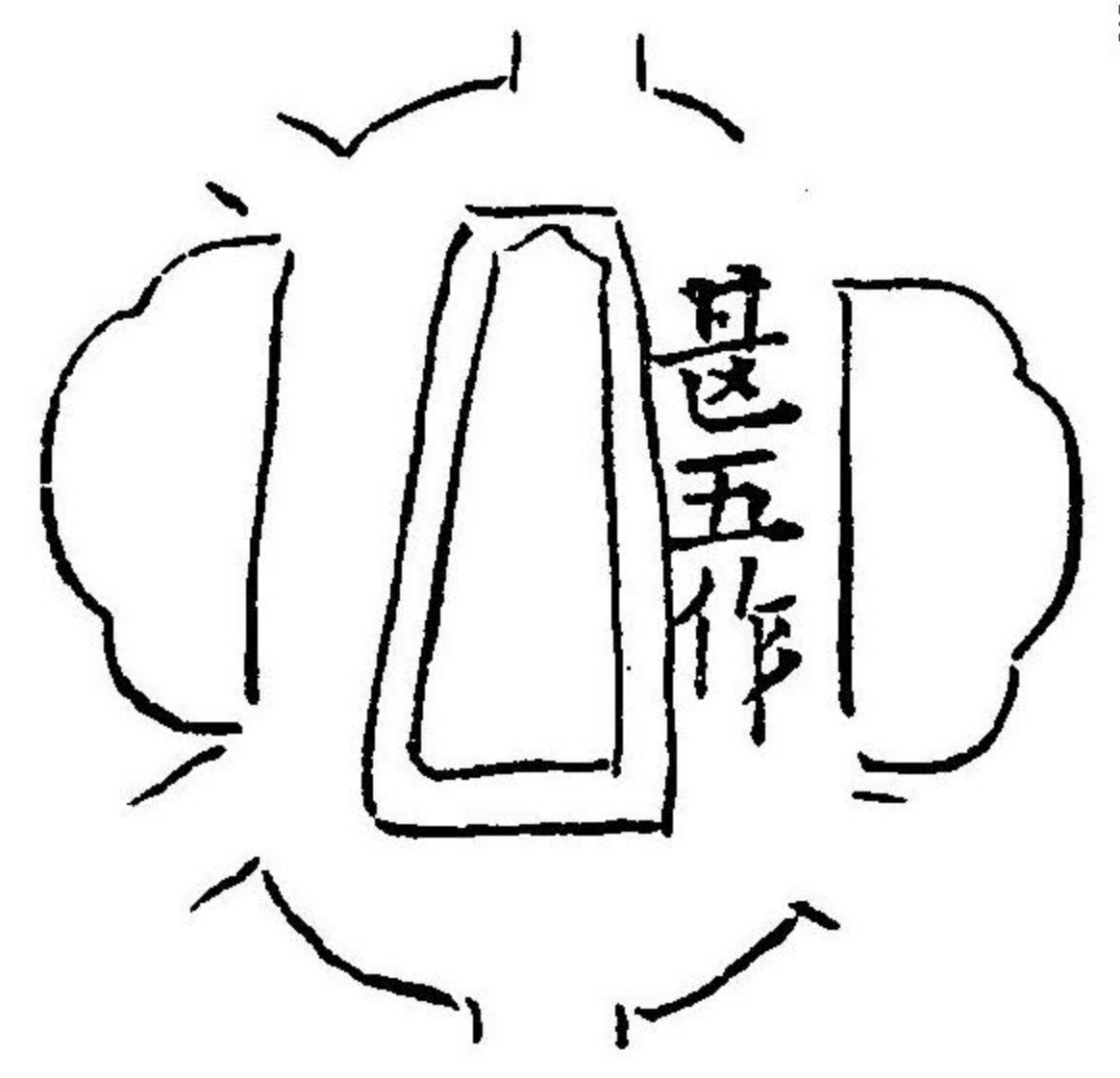
二代目



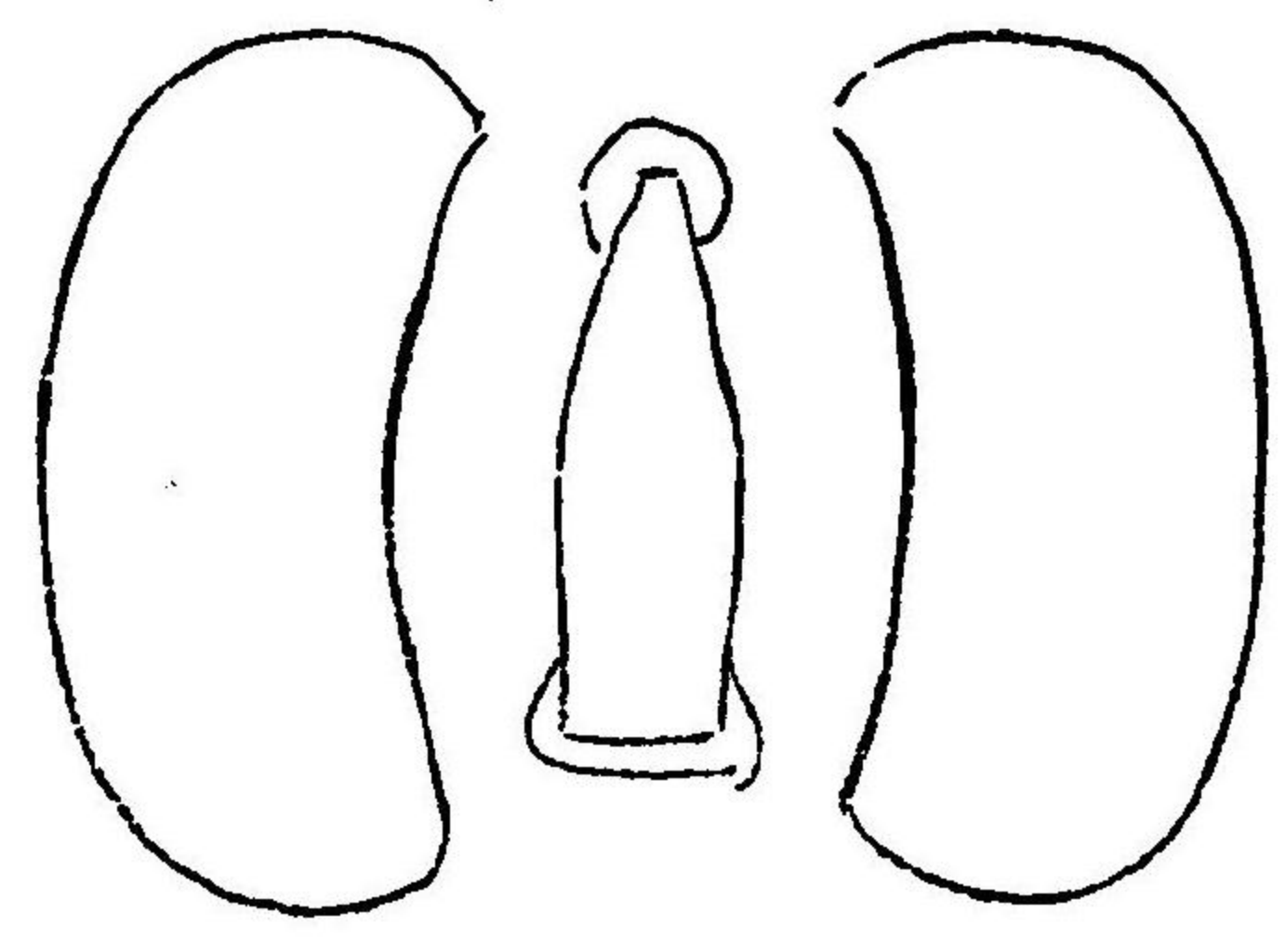
同



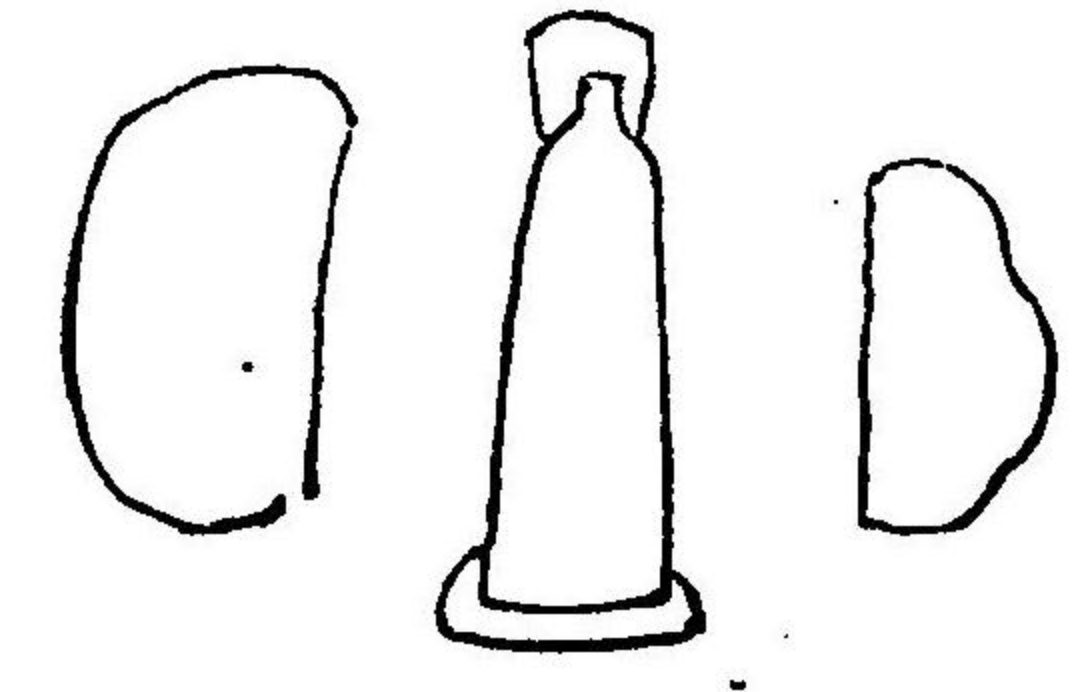
同



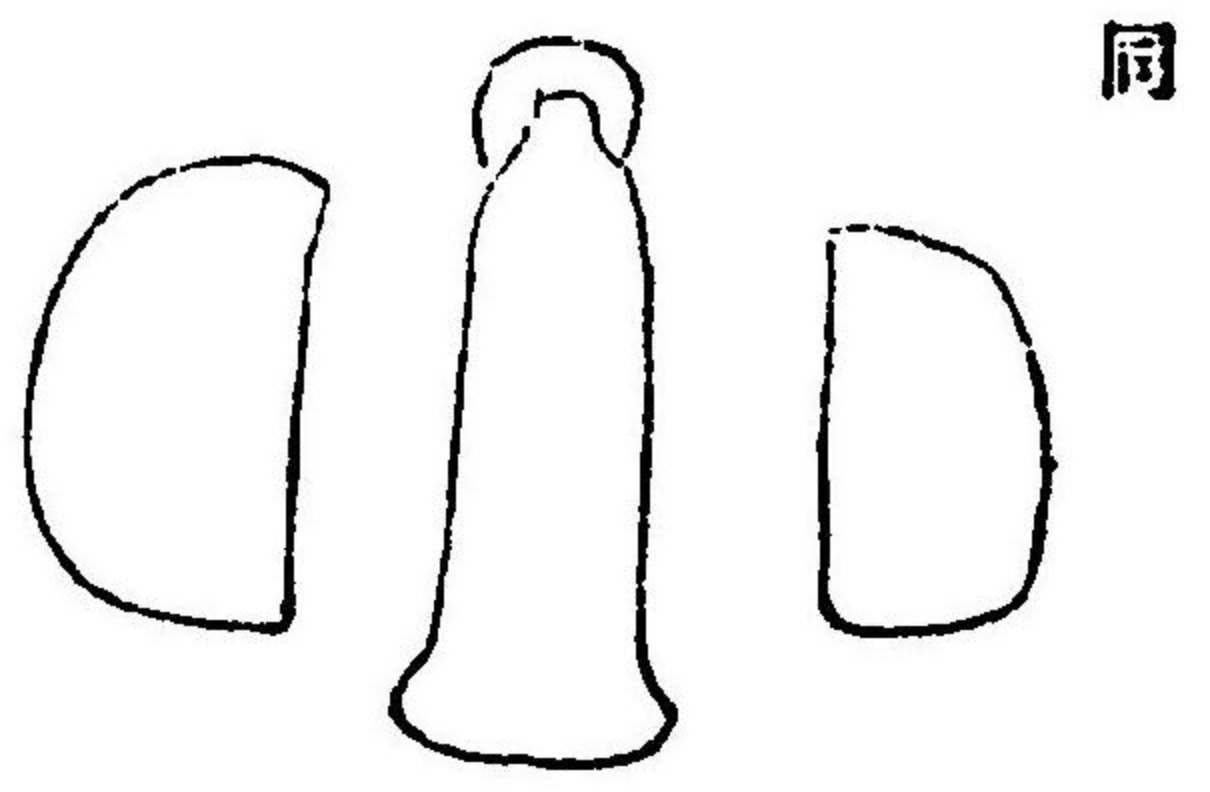
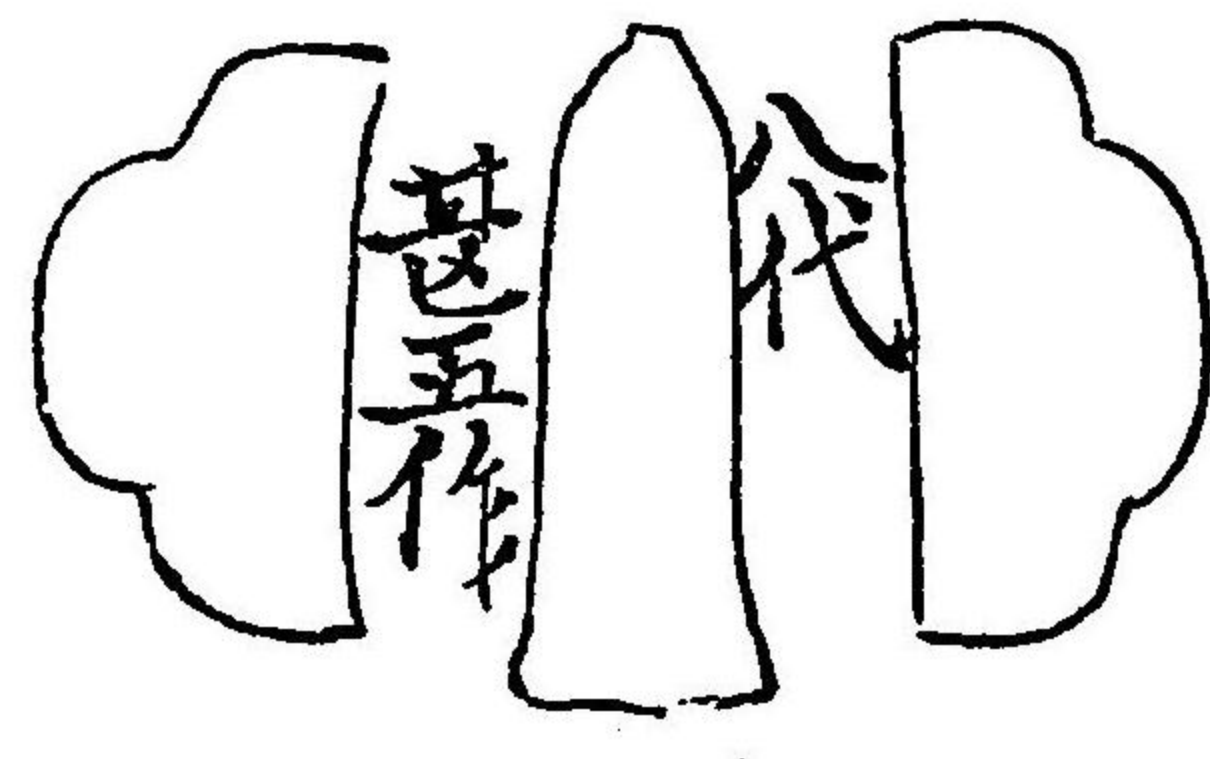
同



同



同



同



三代目



年齢ヲ切タルハ此外見ス

二代三代も在銘もの多し二代目は左に八代右に甚五作と切るは通例の如し或は八代と左に永次と右に切る又甚の字に凡四種あり即甚甚甚等なり又五の字五に造るは常にして稀には五と三畫に略すもあり三代目の五は吾に造るは最前説きしが代と名と左右に分ち切り八代とは通例切ることなし右に出したる圖は殊に念入の作即異例を示すのみ又三代目の銘振吾の字に見所あり吾の口の畫第一と第二及第三稍離る如し

別に八代紀永と銘する鍔あり此作名曾見聞せしとなし勿論志水家譜中に見へずといへども作行を以推せば二代目に近し或は紀は志水の本姓にしてそれと永次の永とを取りかく切りしにや(圖下の圖部に出す)

○神吉家

初代甚左衛門

細川忠利公のとき次細工人となる

此作見す其家筋にも傳へずこそ

二代以下數代間總て詳ならず

壽平正忠

此代を神吉の祖父と呼ぶ蓋樂壽より溯のぼり稱すなり

藩公の命を以鑢師の祖林家(春日)一式相傳すといふ

作行總て春日に法より藤八作に髣髴たり其實大に下るべし

地鐵も春日傳ゆる第一とまりよく只惜むらくは鐵色稍赤味を帯ひて  
品格至らず

鍔の切羽臺等作り掛亦春日に似たり但肉置に至て稍ボツタリとする  
こゝろあり其中心穴の刻印春日三代に似て非なり

専ら透物を作り又象眼ものもあり其カツラ菱の如きは見事なり但し  
其法春日より得るも稍大形なり枯木象眼は品格最劣る如し諸作上々  
に至らすといへども當時正統の作人たるを以隨而其名著るといふ

明和三年生文政三年死行年五十五

壽平深信

此代を神吉の父と呼理由前代に同じ

作行總て父に似たりしかし力及ばず鑢重に透しを作り在銘もの多し  
肉置象眼ごもに總家法株守に過ぎず他の奇なし略す

寛政十年生嘉永四年死年五十六

甚左衛門正康前名壽平次樂壽と號す

父祖の跡を襲ぎ次細工人となる

此作地鐵極めて精且美にして毎作形状より象眼法及透鑲、鑲、鑲、等一として精妙ならざるなく誠に最上の作たり其父祖は勿論肥後古今作中林又七を除く外皆三舎を避くべし

鐔縁頭鑑小柄馬針等皆あり其象眼又は彫種々ある中に就き最著明なるは二重唐草并枯木及諸透際に入れたる極細の金縁等也嘗舊藩老某氏のために造りたる金具一式あり地鐵なり金象眼を以桐紋及二重唐草を造る其法全面殆餘す所なし此作の如きは眞に又七に迫るもの、如し此の具は近頃宮内省江内獻になる由家藏にも鐵金具あり右の精作の如くならざるも亦逸品とす彼の有名なる枯木彫込象眼たり嘗樂壽見て余に告げ云ふ此は壯年の時の作に係れりと抑枯木象眼は唐艸に比して却雅致あるかたゆゑに往々高尚家の好みに入る又此象眼は

肥後金工皆作る然れども其絶品と稱すへきは前に又七あり後に樂壽あるのみ又七の枯木は凡三種あり長短と一種珊瑚の枝振のこきこなり樂壽は只二種にて長短とす枝幹も又七とは自つから異なる處あり

又枯木に彫込と布目と二法あり但し又七樂壽を除きて多かた布目にて入る例とす若彫込のものあれば概して拙劣取るに足らす元來樂壽の作ハタカホ底弘に入りてありゆゑに第一金色の光輝あるは云ふ迄なく強くして容易に抜ける害なし其金と手間とを惜まざる作なれば品能く價あるは勿論たり他家の作は此點に於て最及ひかたし誠に工作は徒に形状の如何のみならず其用意の關係大と云ふへし樂壽の勝れたる所以亦此に在る如し

此作鐔及縁頭等の地鐵に一種のハダものを見る其狀雲の如く又或は蕨の盾の如く或は芋根の如し蓋し此法矢張又七より化來のものなら



ん妙趣他人の夢たも見る能はさる所とす然れども偽作は重に此法を  
摹すもおかし蓋益其偽作の及はさるを見るへし

鐵色着法亦春日傳に依り猶多年の研究を加へ光澤餘りあり抑色着の  
事は作者の重んずる點にして其出來不出來は數百年後にも關係すへ  
しといふたごへは同肥後作者同色着法を以てするもま、別人の作に  
出る如き感ありて往々鑒定家の異議を生せしむることありと樂壽は  
常に此に注意を加へ毎作例に必ず數十日間を色着に費やしたるこそ  
然るに其法大に秘し當代にも傳へずして没す此に於て春日傳來名代  
の該法全く絶ゆ惜むへし

余曩に熊本に在り餘暇を以て金工鑒定上の初歩を樂壽に受く今此編  
の企は實に樂壽の賜なり樂壽口を開けは又七く云ふ其作行を説  
く深切にして人をして金工門弟の如き感あらしめたり又謙遜にして  
先輩諸家の作を見毎に力及はずと歎す實は樂壽の力或は諸家の右に

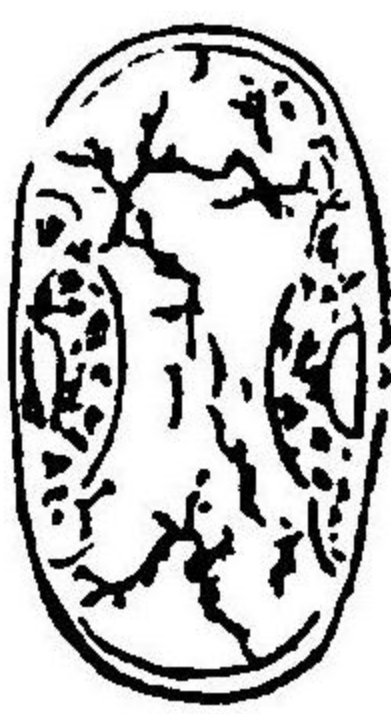
在るも左たらざるべし窃に謂諸家の如き樂壽と年を同じくせざるは  
幸にして樂壽の不幸ならん余は樂壽を稱して又七後一人となす決し  
て過稱にあらずと信ぜり

或時作行精粗の論あり樂壽云春日代々人の賞する所なり然共眞に精  
工たるは又七一人のみ今試に其摹造をなさんなたごへば紋透にして  
又七には凡一ヶ年を要すべし其二代三代共に一ヶ月にして足れり云  
々樂壽出て初て又七の精の精たるを彰はずもの樂壽前身是又七か  
熊本坪井には細工人多し所謂坪井細工大かた樂壽前後の出なり樂壽  
作桐唐草枯木の類偽作多く出づ其出來よきは眞ごなし通ふるもあり  
ごぞ或人鐵金具(二重唐草)を余に示す且誇り云神吉の精作なりごしか  
し余は幸にあさむかれさりき後樂壽に告げしに樂壽大に笑ひいふ様  
それ二重唐草は最鄭重の作たり一生涯多作すべき限りにあらず恐ら  
く春日初代といへども然らん余の如きは僅に二三作あるのみと蓋其

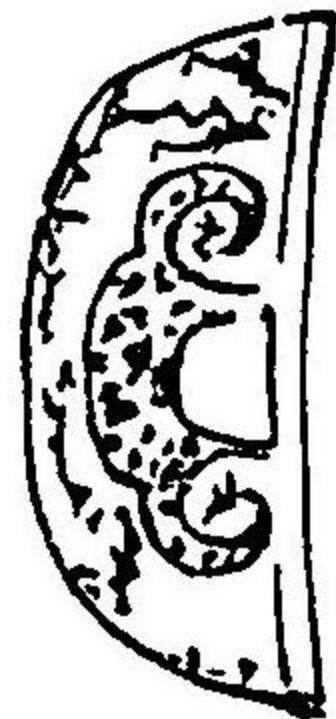
難想ふべし此時樂壽金工を廢しおれは生涯云々の言ある所以なり  
 縁頭の式丸形、深丸、鼻クリ、太鼓、樋、壺口、形鑑は泥摺、芝引、袋、諸式皆あり概  
 ね春日の式により或は變化し來るもあり

今藏品中に就き其非常の作に係るものをあぐれば左の如し

燒金ホリ込象眼



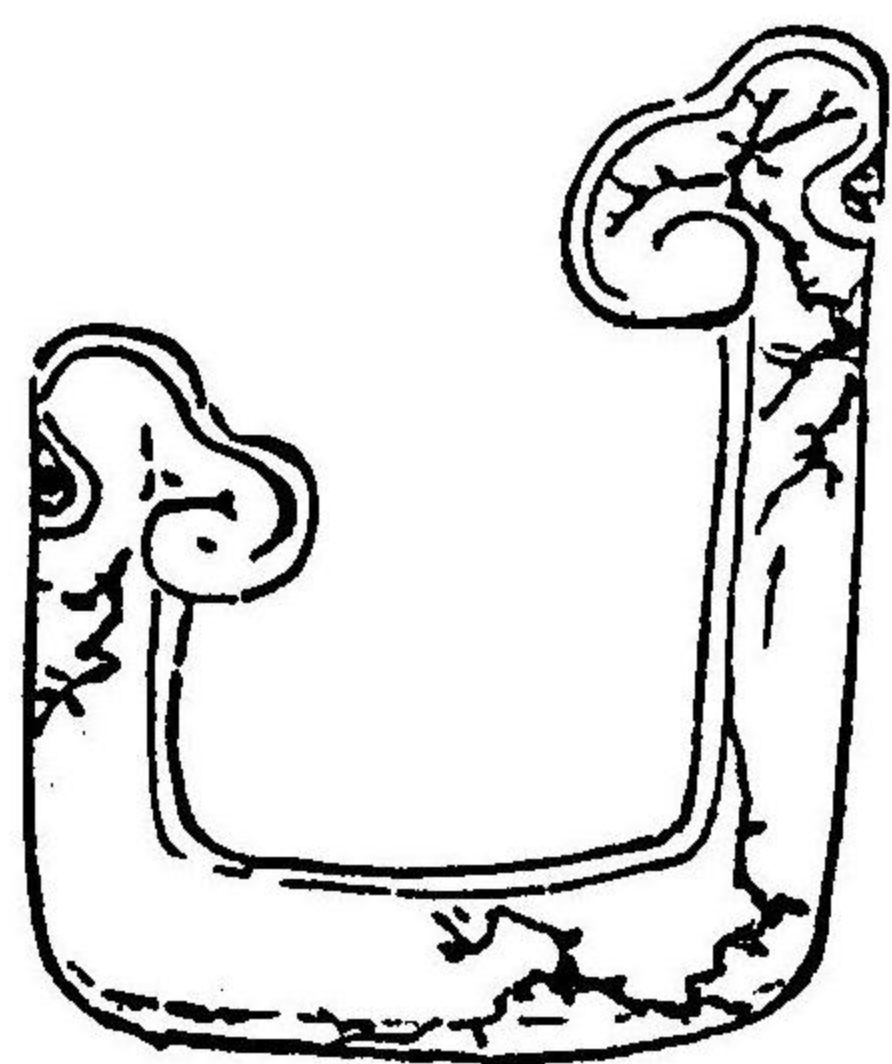
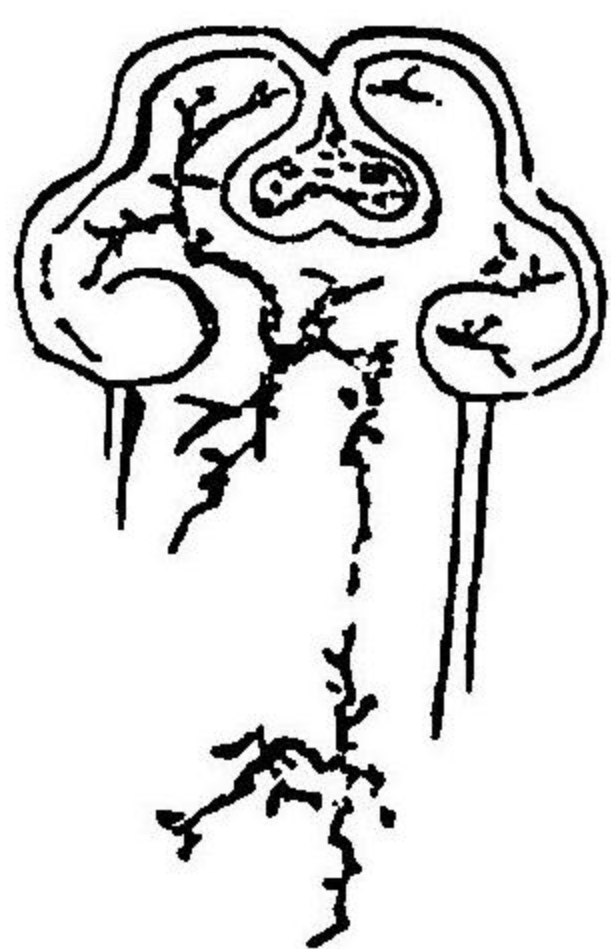
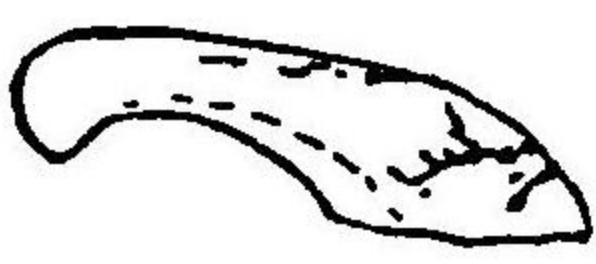
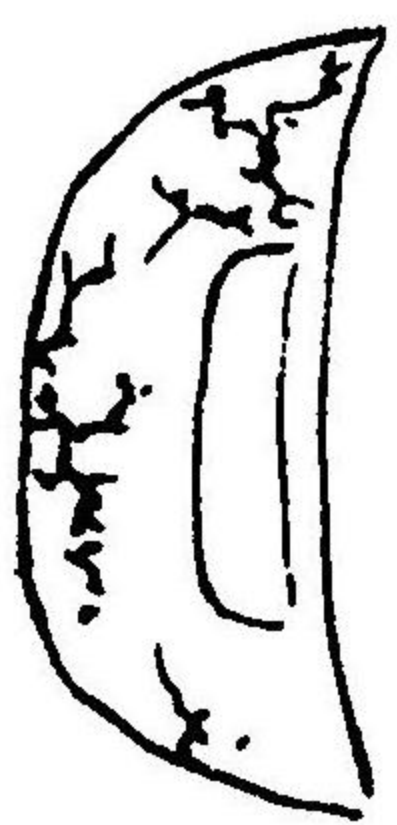
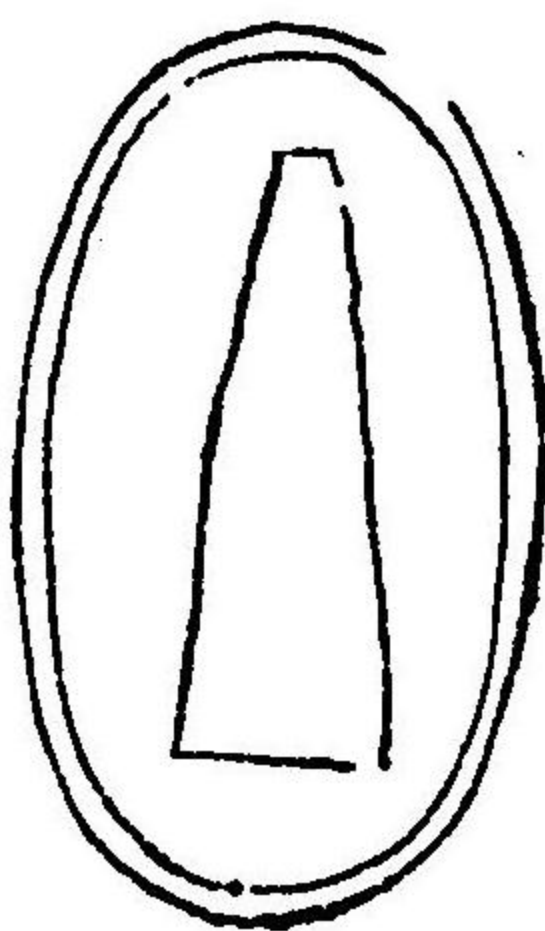
此肉スキ下ケ金砂子象眼



砂子

玉縁ホリ肉アリ但シ無地

天上縁金ハ平



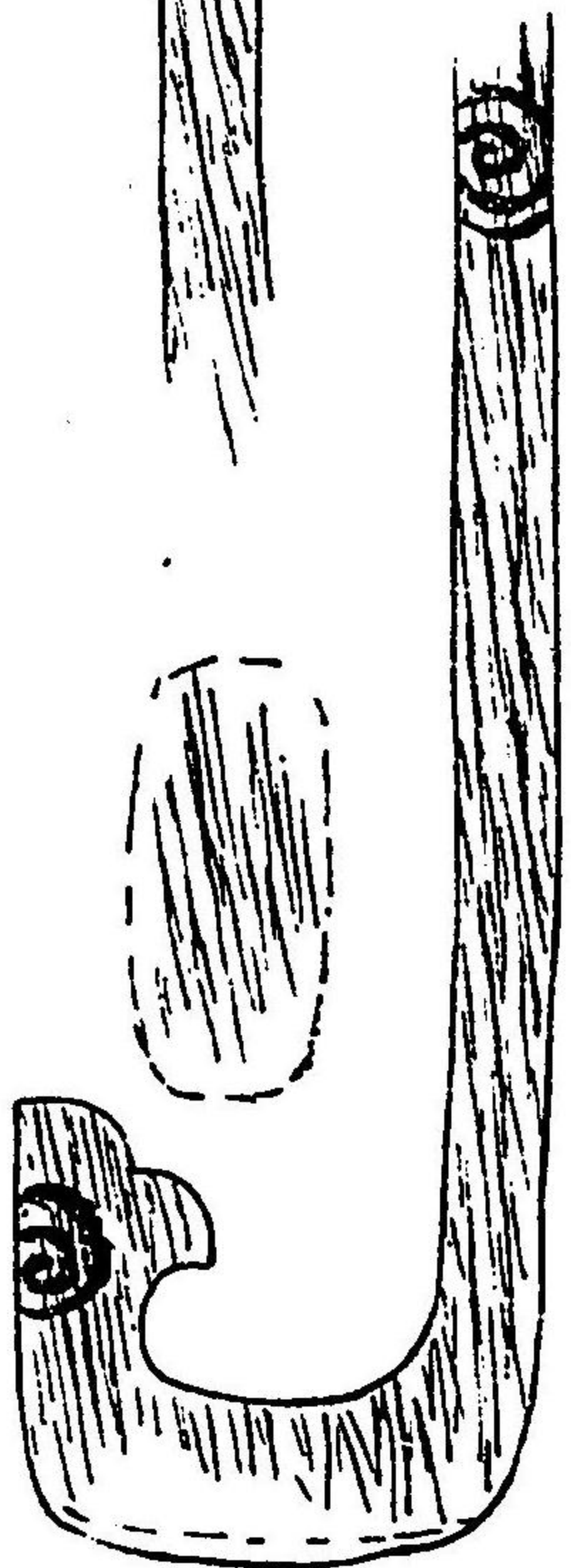
泥摺形(御家刀用)



「月形自然ニナル

渦ホリ  
但タカネ丸レ

長鑑鍔形 眞鍮

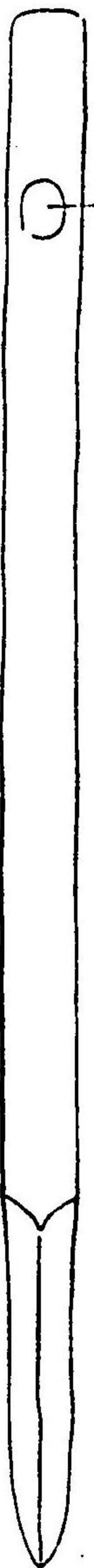


馬針は殊に勝れて見ゆ第一諸家にくらべて形よく勢亦あり(嘗自から  
 改良を加へたるならん定其説もあるべきに聞洩らせしは遺憾なり)然  
 に正作は甚乏しく世間神吉くこはやすもの大抵皆坪井出來なり正  
 作の一本及其式を示す左の如し  
 平肉形 牡丹金ホリ上厚布目据物ノ如シ唐草金張金



ウラ無地

蒲鉾形



「龜ホリ上金或ハ雲又ハ渦ノ類布目象眼唐草又ハ雲等毛ホリ

ウラ無地或ハ銀布目スリハキ又雲毛ホリ表ノ如ク入ルモノアリ

初の式は殊に稀にて後の式は通例たり但し偽作は後の式に多し偽作は第一針先鍛鈍ふく正眞は極めて鋭なりこれも見所の一なりとす  
鐔櫃の式并切羽臺は大かた春日式に依るこれを略す  
又金工鑿定も肥後第一と稱す又其刀劍拵方に至ては殊に深く奥儀に達し従前は藩公の指領初一家中高尙ある造りには大抵其指圖を受け又刀劔も甚好み自から鑑識尋常に超ゆとぞ  
樂壽性質極て温厚品行固り方正色白く身高し齡古稀に近くして五十年前後の人を見る如し平生神佛を信仰し嘗祈願ありて若干年間肉食を禁ぜり然共敢てこれを人に告げず又人家たまくと之を供せば辭せずして食ふ蓋其厚意を空しくするを恐るゆえなり而して心に誓ふ所あり則一食に對するに幾日間の禁限を延べ以て償ふこれがため一生禁を解く能はずと其謹嚴かくの如し人皆服すといふ  
文政十四年生明治十七年八月三十日死行年六十八

當代忠八實は深信二男

此作透鐔は略實父の意ありといへとも總て作劣る  
子某作なしと云ふ

### ○遠山又七

遠山鐔と稱するもの頼家頼次の兩銘あり父子か兄弟か詳ならず  
頼家在銘の作行地鍔あまり甚堅く見ゆもの多し蓋し一種の作にて多くはヤスリ地又山吉鐔の小透しに似たるもあり耳は常に薄作りにて打返し多しまゝ透鐔も見ゆれと疎にして遠見の松の類に過ぎさるへし

頼次亦堅作りの方なりとあかし此作には象眼及据物を見る

遠山又七の名久しく著はるといへとも頼家頼次共に鐔の外作見へす  
此作時代分明ならず式云春日初代より下らさるへしと一説に清正公の抱こも云ふ又地鐵堅き故に其作幾分若く見ゆるもあるへし

○谷傳次

此作名あれど正眞の作存するは稀なりと嘗一鐔を見る銀布目を以銀杏葉を打違に造る一種の作行とす又嘗て同銀布目雲の縁を獲る其式長且大作行前の鐔に畧似たり

右作行に據り概評するときは勘四郎にあらず寧ろ彦三の法に近きか如し或は其門より出るもの品は西垣三代よりも猶下るへし

○三角幸次 正養ころの字詳かならず假に幸に作る

此作は最特種なり重に白銀もの以て精密なる彫を作る目貫及縁頭共多し鐔は却て稀なり其鐵ものは余いまた見す

目貫の作は肥後多くの金工中絶てなくして獨此作に多く見ゆ其裏に△の形を付す案するに此印は即三角なるへし

又好て烏銅を用ゆ其魚族を造るもの十中八九に居ること蓋し平生得意にありしならん就中その鯰は諸家と大に異り瘦長のかた且鰭尾

髭等精密に彫る鯉亦同じ

縁頭は銅眞鍮等にて重に彫上又据物なり地は通例石目稀には魚々子地もあり(布目象眼ものは見ず)地は總て厚作りのかたなり肥後諸家と作行別なれば知らざるものは他方の作と疑ふもあるへし一説に性癖あり一生他行をなさず然にいまだ曾見ざるものも能く作り人をして驚かしめたりとぞ蓋奇人あり

此作亦時代詳ならず一説に三齋公の時八代に住すといふ其銘に七十と見ゆるもあれば長壽の如し左に作例を示す

目貫 赤銅

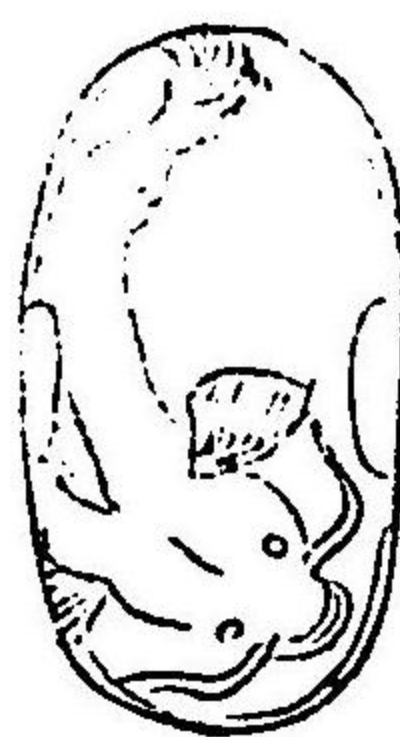


釘(大ノ分) 及カヒ金イロエ

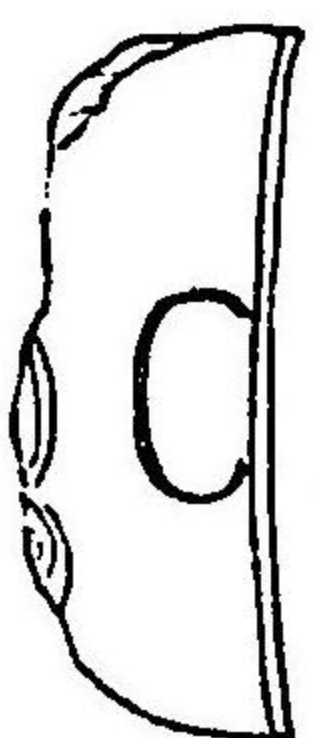


同ウラ 厚キ方 左右同シ略シテ一ヲ圖ス

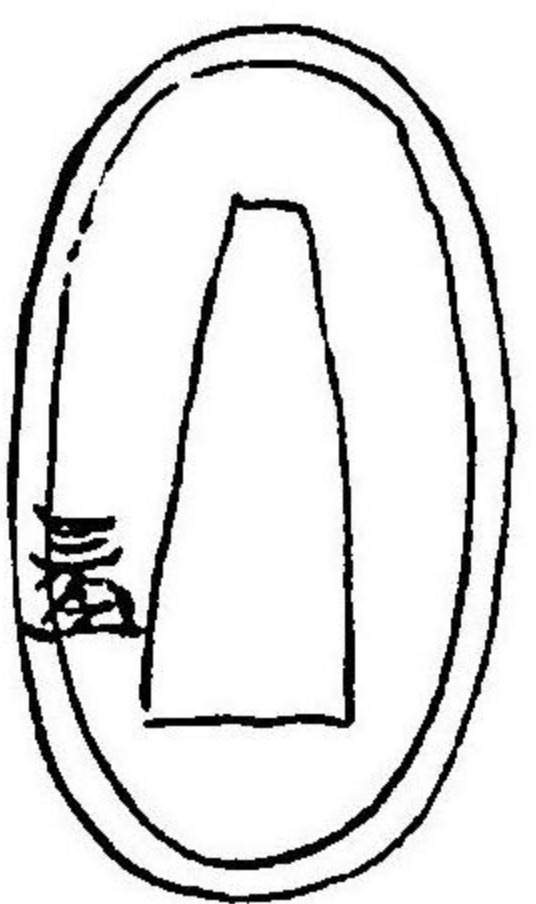
銅 ホリ上 地ナ、コ



縁細クホリ上



ウケ少キ方



此印三角ナラン

家藏中其老後の作殊に精作なる赤銅鍔あり非常の出来と認めれば全圖を下の圖の部に出す

○萬日坊 春日村萬日山の住僧

鍔の作あり地鐵は略春日に類す或は又七の前作りとも疑ふべきものも見る遠見の松又霞透等なり皆厚肉のかた上品にはあらず又小道具類の作は絶て見ず

一説に寺又七の近隣にて常に其工場へ來り時としては戯に造りし事ありとも傳ふ又一説には又七の甥也とこにかく僧家の一時戯作なり奇といふべし此外總て詳ならず

○諏訪家

初代 彦之丞 正乘 慶長寛文の間

二代 忠左衛門 正次 寛永寶永の間

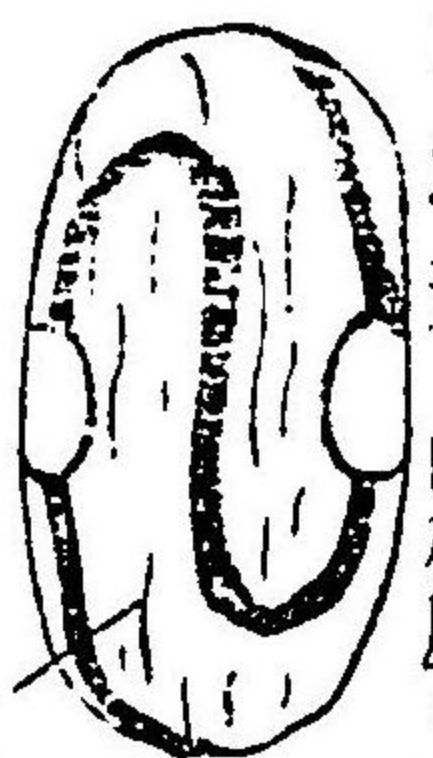
三代 忠左衛門 正道 延寶寛保の間

四代 彌治 平正之 元祿寶曆の間

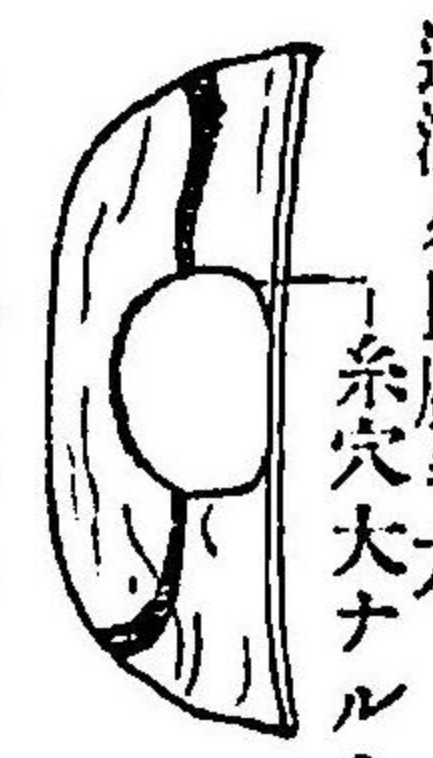
以上代々作の有無詳ならず

五代 目幾 平正足

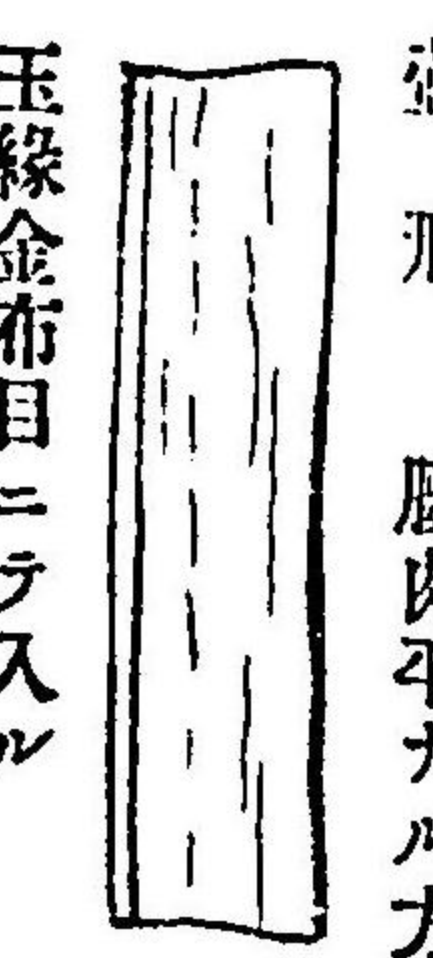
此作地鐵細やかにして麗はしく一代の上手と稱す縁頭は西垣式よりは肉置強きかた也象眼ものは布目にて櫻花又は唐草の類を作るホリ込据物はいまだ見ず其唐草の仕掛は大かた燒青両金共入れ交ぜに用ゆ形状勘四郎に似たるもあれど其實葉先蔓先におゐて自から異ることかく延び勝手にて且西垣に比せば稍密なるかた也枯木は多くは枝長く垂れ弱く見ゆ鐵太刀金具も稀にありこれも肉多く形亦大なる方象眼は矢張唐草の類也諸作西垣三代と甲乙なかるべし但鍔は稀也通例縁頭の式一具を示す左の如し



山道形 巾箱廣キ方



道深ク且廣キ方 糸穴大ナル方



壺形 腰肉平ナル方



天上金共也但シ蠟吹

此象眼吹寄櫻但シ陰陽ニシテ陰ノ方大形ナリ(陰陽大小ニ作ルハ彦三ト此作トニ見ルノミ)

享保十七年生享和三年十一月死行年七十九  
 六代目を國吉といひ七代目を大作といふ各作ありといへど傳へる程  
 のものごては聞かす八代目即當代に至る

○谷清兵衛

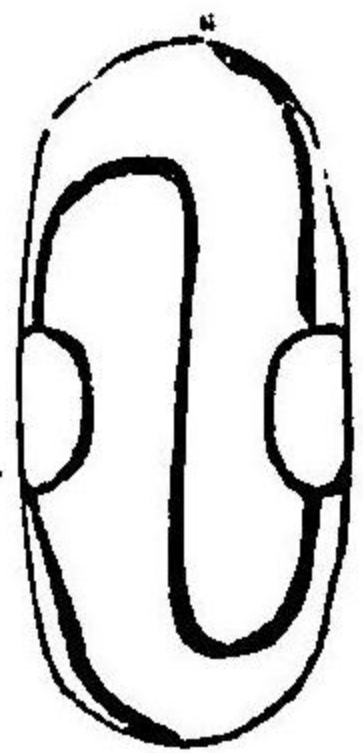
此作行美にして地鐵亦美なり近世の上手とす重に縁頭の類を造り鐔  
 は少なきかたなり

象眼は吹寄櫻、カツヲ繋ぎ、唐草、又まゝ、天龍も見ゆホリ上ものもあり其  
 浪等は見事なり唐草の狀幾平より密なるかたにて吹寄櫻は花至て小  
 にして幾平の反對なり龍は瘦長きかたカツヲ菱は藤八に似て稍小形  
 又紋散は象眼甚美あり圖下に出す

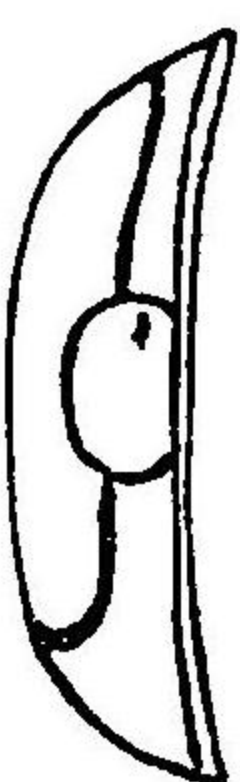
總て象眼の金色は上其いろゑ分及ホリ込又据物の諸作はいまた見ず  
 鑒定家例に幾平か清兵衛かと同位に稱す(實は時代の差もあり幾平の  
 次に位すべし)左に作例を示す

山道形

狭クシテ稍尖ル方道  
 細ク淺シ地堆キ方



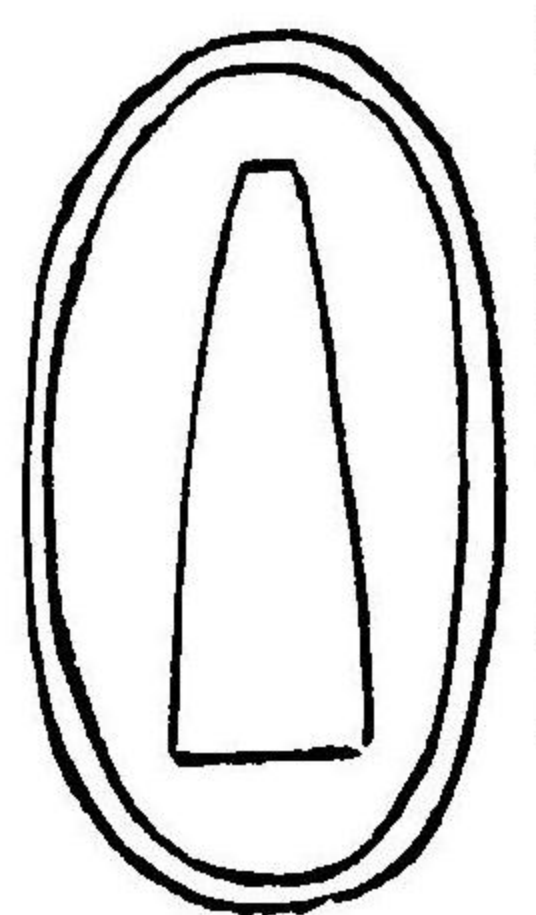
同



盛形 受強キ方

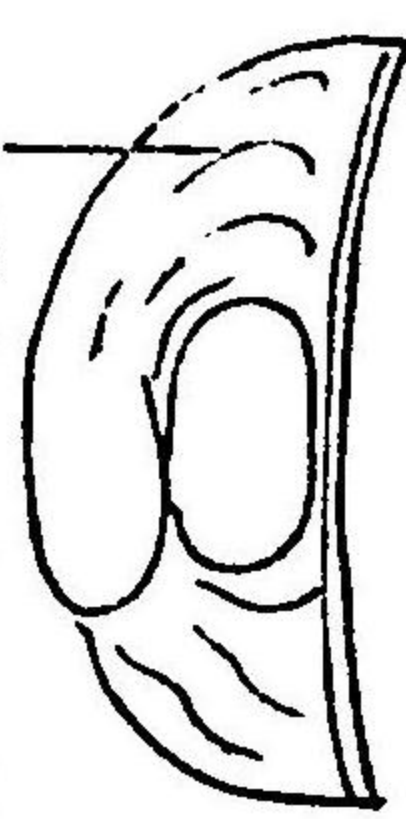


天上金共ニシテ平也



浪形一種

案スルニ此式甚五ヨリ  
 出ツ



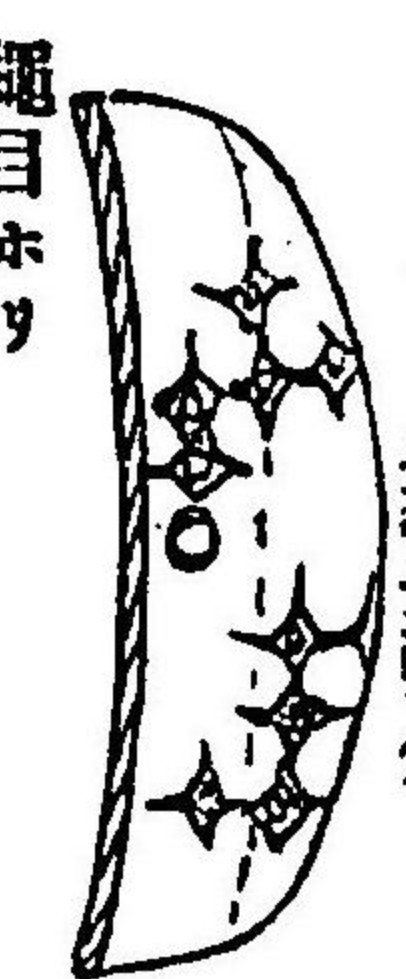
宗方ヨリ  
 見ル



彫上



鳩胸鎧  
 カツヲ菱(金張金)



毛ホリニアラス肉  
 置ヲ示スモノナリ

天保十四年死七十餘歳といふ此他詳ならず

二代目も清兵衛と稱し二男四郎兵衛と共に作ありとぞ(世間に在る清  
 兵衛作細切羽類甚見事なりもごより初代作もあるべし又二代二男共  
 にもあらんしかし鐔等は其作あるも恐らく彼の坪井の類なるべし

○中根平八郎

舊藩士にて餘暇の作あり専ら正阿彌寫を作る御家刀用信長透及唐人笠の類其銀ホリ込象眼の如きは最工にて中には眞に迫る又泥摺鑑の作は其式好く妙なりたゞ惜むらくは一生摸造を事とし自家の作てはなし御家刀用泥摺鑑は其式甚やかましく第一月形肉置等を以作者工拙を判すべし此作研究至れりといふ然ども猶神吉甚左衛門作には及びがたし彼は自然になる如く此は苦辛の處露る其差概ねかくの如し

肥後刀拵方に高熱にして神吉に亞ぎ名あり近年歿すといふ

### ○坪井諸工

吉田 徳治 坂本 彌市 坂梨五郎兵衛 宮崎 官藏  
宮永子之吉 野田仁一郎 桂 十作 田邊 保平等は屈指なり

諸工彫象眼各々得意ある如し徳治は摸造ものをよくし其甚五寫の如

きは最工あり仁一郎は専ら毛彫もの著名なり保平は晩年悟る所ありて大に面目を改め所謂坪井細工の臭氣を脱するに至る此他は一々評しがたし略す

小堀惣五郎亦坪井に住す此作専門は鉋切羽、シト、ノ類にして所謂白銀師あり作行最上に位す又鐔其他小道具の地造亦工あり但し鐵ものは一切作らず

因に云目今肥後刀拵をなさんに欠くへからざる工人四名あり鉋師小堀惣五郎鉋師前田巳太八塗師森田謹三郎柄卷師守永熊廠とす各絶技たり

凡肥後古今著名の作者は以上序列する如しといへども外に刀匠に在りては延壽國秀の如き又時の士人の如きも亦鐔縁頭等の作まゝ見ゆ然共甚賞すべき程のものはない但し國秀は刀匠たけにて鍛錬法よく或は木目肌等もあれ共概ね堅きかたなり又士人と單にいへばちと空なれどかの宮本武藏の如き門弟筋と又は時の劍道家の自作かと想

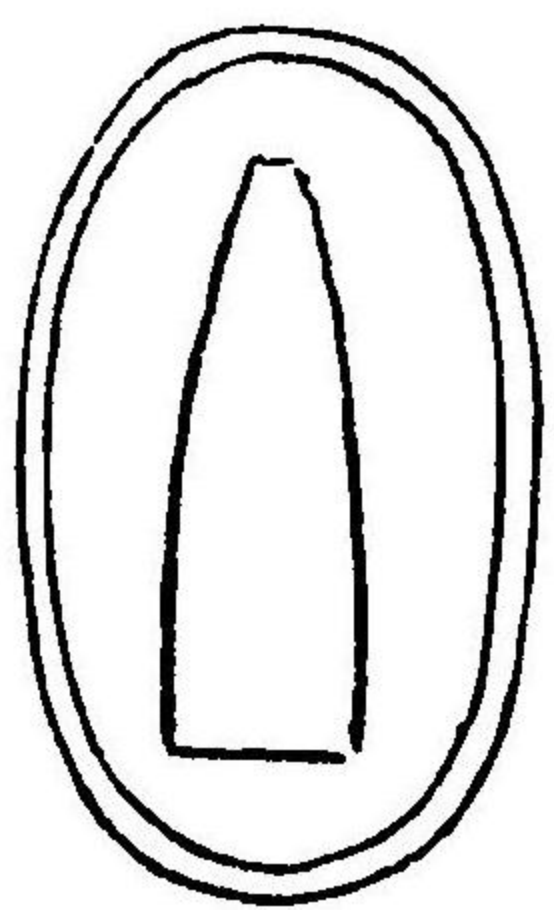
ふものを指す此等の作大かた武張一方にして味さては少なし  
 こゝに似て非といふべき作あり其時代作行にも下らざる縁に在り  
 (鑄いまだ見ず)凡二種を認むべし一は春日に似一は西垣に類す或は神  
 吉の祖父より先代の作かといへど亦信じがたし左れば江戸熊谷源七  
 等の肥後寫しかと見れば第一時代適合せざるのみならず作行に於て  
 亦大に疑ふべし京攝間にも従前肥後寫少からず然共そは近代の事に  
 て古きは聞かずとにかく二種共手際能く西垣二代位より下らざるも  
 の、如し此等の作従前疎漏の鑒定に春日又は西垣作と一口にいふて  
 通りしならんか然に余は旅作と極める外なし今二種圖式左に出し參  
 考に供す

平肉ノ方

花心甚密ナル方



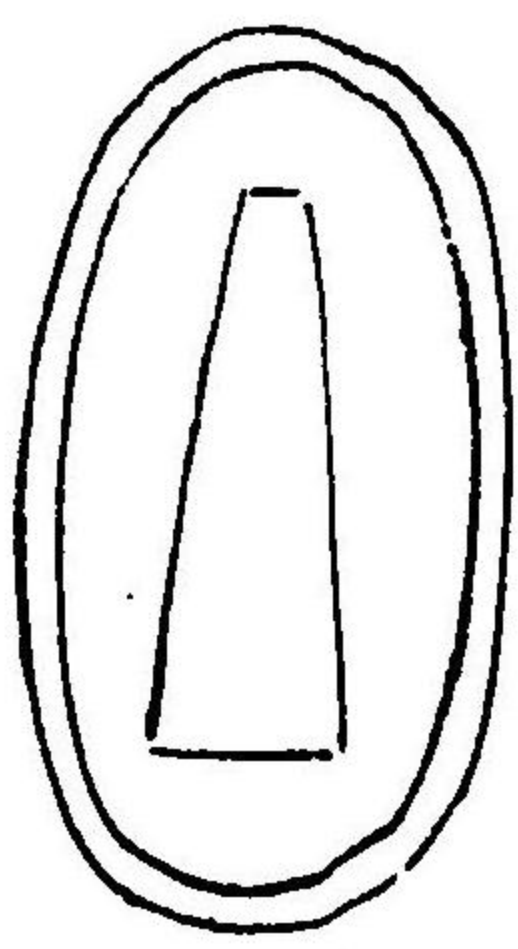
木ホリ上銀スリハキ枝先金花金銀



フカシツキ  
 天上縁金ト平ナリ  
 即春日式ニ似タリ

トビ形

月銀ホリ込繪四分一据物神金ホリ込活ホリ上



フカシツキ  
 縁金天上ヲ受ク即西垣式  
 ニ似タリ

櫻花は肥後諸家皆ありといへども右圖の如き立木に作るものは春日  
 初諸工絶てなし又月龜共に西垣にある例なれど此草ホリ込に作り且  
 金色殊に上等なり是西垣になきところとす地鐵も何分異り二種とも  
 に稍粗なる如し

又別に人物と籬及草とある二縁を見る其作嘗神吉樂壽も見て大に疑  
 ひ戯て勘四郎か七分又七三分又旅の旅といふ事前にも記せしが「たび  
 とは熊本といひ習ひにて總て肥後外をいふ肥後物鑒定上必ず入用の  
 言葉とす」勘四郎など云ひてやみたり

抑金工鑒定は末事ながらかたしといへば可也かたし惟其作行に付二  
 三の掟を見出し時代亦適合すれば直に決すべし餘りいろく考へ



過すときはひこり決する事能はざるのみならず終に弊も生ずべし若  
それ二三の掟を認むればたごひ他作の在銘に在り共鑒定上におゐて  
却銘をば偽ごなして可ありしかれども譬は山水家の畫にもまゝ戲に  
は狂畫なきにあらず錦畫かきにもたまには唐畫を寫したるもあらん  
概して其腕前次第にて他流のものを作ること甚難きものにあらず又  
實は偽にもせよ偽の顯れざる限りは正眞ご同じ價あるは勿論たるべ  
し又確ご掟を見ごめざるもごこやらそれにごいふ事もありごこやら  
ごは元來曖昧の言なれご亦頗味ある如し廣く通ずる言ごすれば鑒定  
上知らざるべからず

掟の事前項已に説きたり所謂掟ごは是非共作に伴ふてあるべき事な  
り研究せざるべからず一口に二重唐草は春日の掟物なご、いへご勘  
四郎にも又近くは神吉にもよくあり下りては坪井細工にも多し猶山  
水圖の文人にも狩野にも又下りて錦畫かきにもある如し掟ごは其法

立の謂にして唐艸の一重や二重ごいふに止るべきにはあらず要する  
に地鏡耳切羽台又穴。タカネ、ヤスリ、槌、据物、象眼、彫、其深淺廣狹布目には  
細大疎密又其物形の布置及地鏡ご關係象眼の金色如何等其作中必ず  
存すへきもの即掟なり偽作には常に相反す若まゝ、似たるあるも所謂  
至らすゆゑに鑒定家の必要は先諸家の掟を暗記すへき也然共また容  
易の談にあらず博く覽て他ご比較上より入ること一方便か  
前人云書畫の鑒定は猶刀劍鑒定の其鯉口三寸離るや忽ち決すへしご  
同しごは名言也金工は書畫刀劍の如くならず高の知れたる掌上ー見  
足るへきも然共鑒定の理屈は同じ事なり久しければ迷ひ生せんゆゑ  
に初に於て二三の掟を得は云々説きたる所以なり

昔田舎に名所舊跡好きの者あり多年机上に名所圖繪の類を讀み暗記  
す然るに曾て門を出ることなし老後初て東海道を過き由井ヶ濱を實  
地に二ヶ所見たりごの奇談あり此事移して鑒定上の戒しめごす抑田

舎人は學はさるにあらず所謂机上の獨學にして實境照查のこゝを欠きたる責をす世間の鑑定書は大抵皆名所圖繪に過ぎず今この編も亦同じこれのみに依頼するときはかの田舎人たるを免かるへからず此に終りに臨み贅記することゑかり

### 肥後金工録終

### 附録

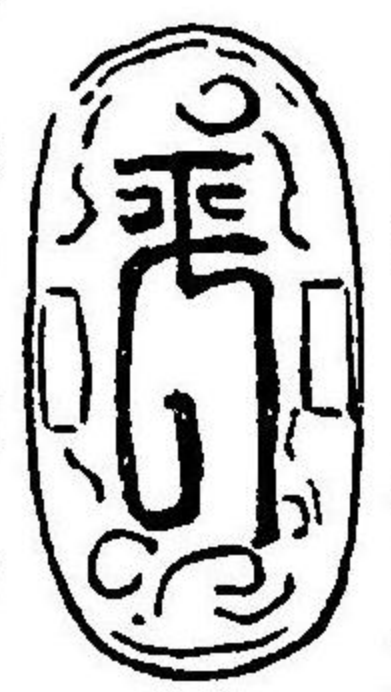
#### ○細川侯三齋忠興

公夙に文武の才を負ひ以て戦國の世に處す其功名籍々たるは世遍ねく知る所たりかゝる名將の器量にも拘はらず嘗て千利休と友とし善く茶事風流をも極められ晩年又金工の事迄及び給ふ其作人獲て珍重す趙璧管ならずといふ

作柄重に鐵物に在り其地しまりよく亦一種の作たり元來武將餘暇の作なればもこより工人と并び評すべき限りにあらずといへども概して春日の美觀はなしむしろ彦三或は古正阿彌に近き如し試に之を畫を借り評すれば宛も逸品におけるが如く他の三品外に在るものか世間公の作して傳へ誇るもの大抵皆偽なり其正眞の作となすもの余た、數品を見るのみ中に就き最敬服すべきものは舊藩老有吉氏の祖先へ公手から玉ふところの鐔とす實に非凡の作行にして極めて雅趣

あり(圖下に出す)余亦幸に一二の正作を得たり其鐵頭の一具は殊に珍重する所なり依て特に圖を挿む

平山道形 異体  
浪毛ホリ低キ方



糸穴角ノ方



片庵

平ノ字ホリ深キ方

稍尖ルコ、ロ

因ニ云平山道頭ハ元三齋公愛刀歌仙作ノモノタリ(刀關兼定ノ作其歌仙ト號スル所以ハ略ス)原物ハ四分一ヲ以テ作リホリ平ノ字(平)ケ様ナリ而シテホリノ浪ハナシ又其作者詳ナラス後世模造刀起ルニ依テ時ノ作者コレヲ寫ス原物ニハ平ノ字ノ下樋目ノ如キ傷所アリ依テコレヲモ寫スナリトニカク肥後有名ノ式ノ一トス

或人公の作にて一鐔を示さる(これも唱ふ所は公より拜領ものと其式引兩形にして焼金青金を以す、きを作る其法布目象眼にて例に正阿彌作に見るものに近く甚信しかたし抑公の作の如きは古正阿彌には

或は似たるもあり全く縁なきものにはあらされ共自つから異なる依て又畫を借りて試に論すへし公は高士の筆俗畫史の筆にあらすされは興來り意會するときは山水花卉手に信せて成ることあり重に水墨法にして着色は稀の方ならんたこへ間々ありても淺縁に止り即銀か又は銅位に過ぎず其据物彫上の精密の作は勿論布目象眼にても構大なる焼青兩金を以いろゑ分けに造る即取も直さず極彩色の如き作は恐らくなき所ならん

形式及樋目、ヤスリ、彫、象眼、諸法共總て拘はらさる處妙とす中に自つから氣高き處を認む是公の正眞なるへし  
鐔并に縁頭類概ね薄造りたり間々革製鐔又塗縁等に於てごこやら作行雅なるものあり或は當時士人の戯作にかゝるものを後好事者公の作と觸れるもあるへきかごにかく多くある筈なし  
又公は甲冑并に刀劍をも作り玉ひ刀銘を千力包永と切り己に有名な

る一口を見たり相傳ふ公は平生手搔包永を慕ひしゆゑかく銘し玉ふ  
こ是恐らく附會ならん聞く所に據れば寛永のころ千力包永といふあ  
り大和手搔の末にて初め土佐國高知金子橋に住し(高知住藤原千力包  
永作と切りたる押形を友人今村長賀の處にて見る)後肥後に移り公の  
相槌をなすと云ふ然るに千力包永は公の事なり公の銘なりと謂ては  
おかし新刀辨疑にも三齋の作と云ふ何の言そやと見ゆ余は刀劍の事  
は未熟ゆゑ委しくは論じかたした、因に記すのみ

公は利休居士と刀劍拵の事研究ありと傳ふ余嘗細川家に乞ひ其大切  
なる遺愛刀信長拵其他種々の拵を見るを得たり各拵柄鞘の形より附  
屬小道具の取合總て妙ならざるはなし一説に拵は茶儀に取り其栗形  
は茶席の爐蛙は(蛙カヘル即サグリ)客裏瓦鐺等は道具又は庭前の樹石  
燈籠に擬せしものこそ其高尙云んかたなし眞に敬服の至なり

永祿六年正月十三日生正保三年十二月三日卒行年八十三

### ○新免武藏

玄信幼名辨助後二天道樂と號す(一説に其宮本と稱せしは母方の姓なりと)

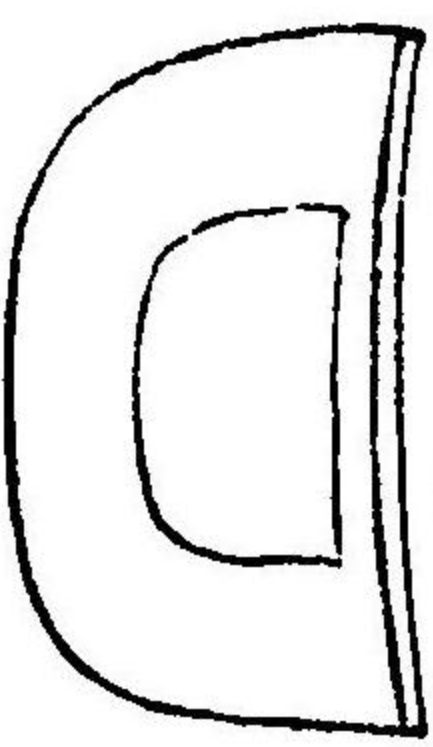
生國播磨赤松圓心の末葉なりといふ寛永十七年の交細川忠利公の召  
に應じ肥後に入る十七人扶持現米三百石玉ふ時に年五十七といふ(其  
劍道の事は世著名の談多く此には略す)

此作至て稀にあり鍔銅に拘はらず鐔縁頭共に一種の作也地鐵固しま  
りて一見刃金の如し故に作行自から堅く見ゆ時代に於けるも若く見  
へ勝なり鐔の形は小形にして一種ナマコ透あり(透際厚く内に向て薄  
くすく)縁頭も總て尋常と異り多くは異体にて鼻操形の類又大丸形は  
最深く縁は樋及戸樋形いづれも深造りのかたなり世偽物多く正眞は  
得がたし元來在肥七八年間にして殊に武門の餘暇の作なれば多くあ  
らう筈なし

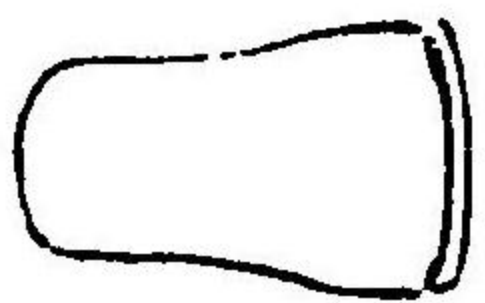
凡肥後作中最珍とすべきは三齋公及此作なりとす固人を以作を傳へ  
るものかの作を以人を傳へることは同年の論にあらず余嘗在肥中渴望

の餘一を得たりそは銅頭にして浪のほり上げたるもの作行彦三甚五  
 兩家とも異り却て三齋公に近きかと思ふ神吉樂壽に質せしにこれこ  
 そ武藏なるべしと歎賞せり又外に鐵縁の一具を得たり浪に沈み月を  
 造る作行亦一種あり武藏にあらざるもごにかく士人の作なるべし其  
 他正物と併せ左に圖を示す

鼻探形銅  
 (此頭遺愛刀ニ掛ルモノ)  
 縁ホリ上稍肉アリ

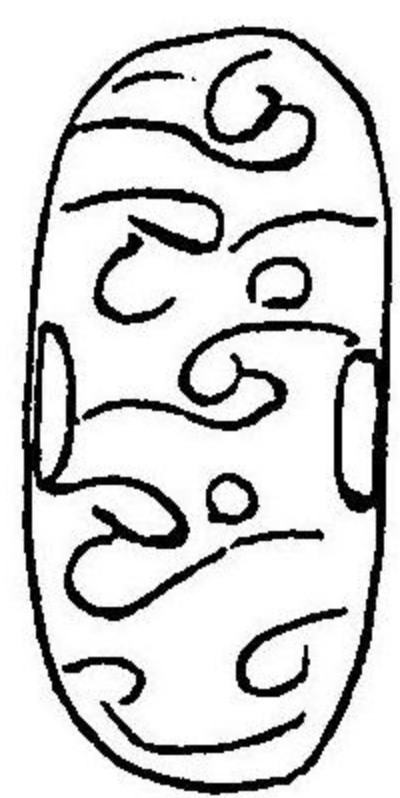


麵形

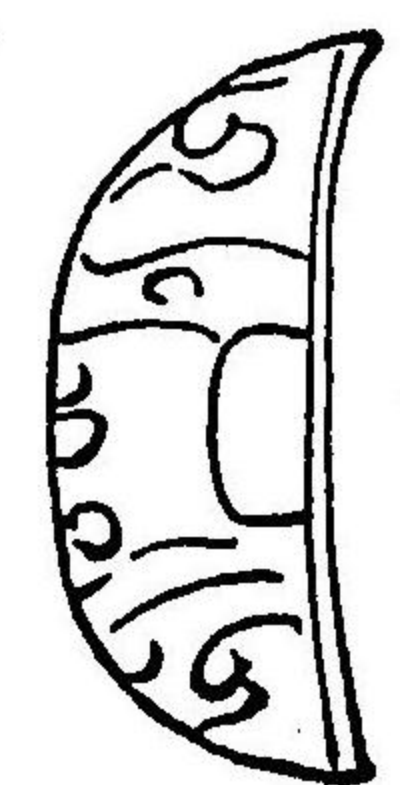


宗方ヨリ  
 見ル

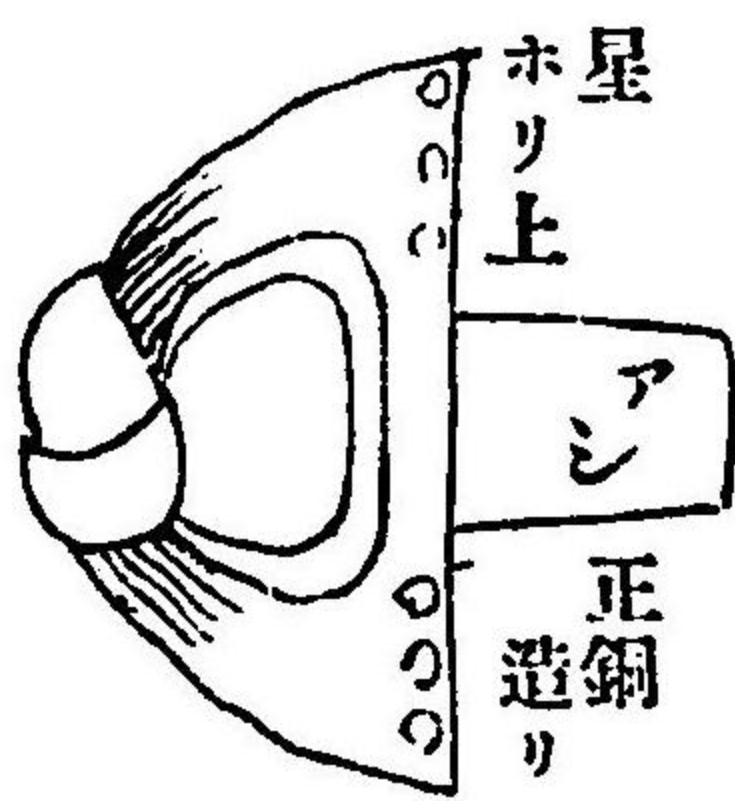
大丸形銅  
 浪ホリ上浪頭大ナル方



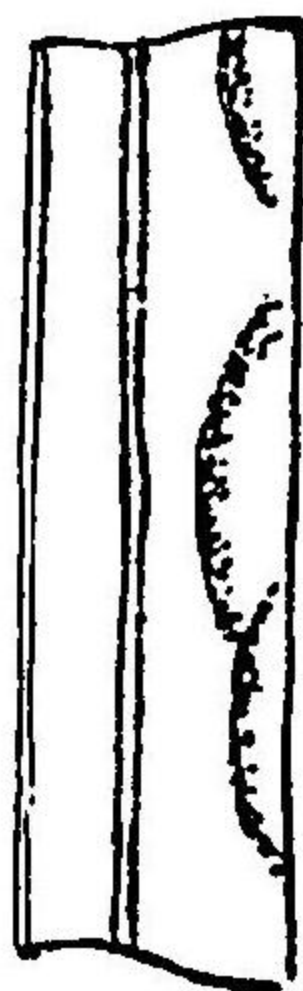
同



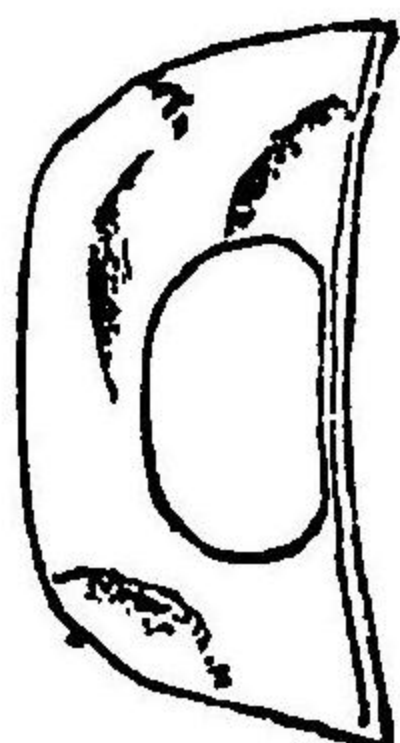
結形 銅流金スリムキ



穂目深ク自然ニ消ニ他家此  
 法見ズ

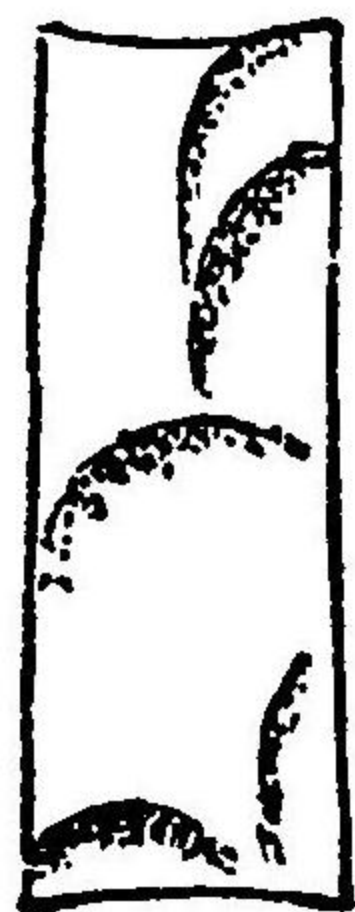


鼻クリ形



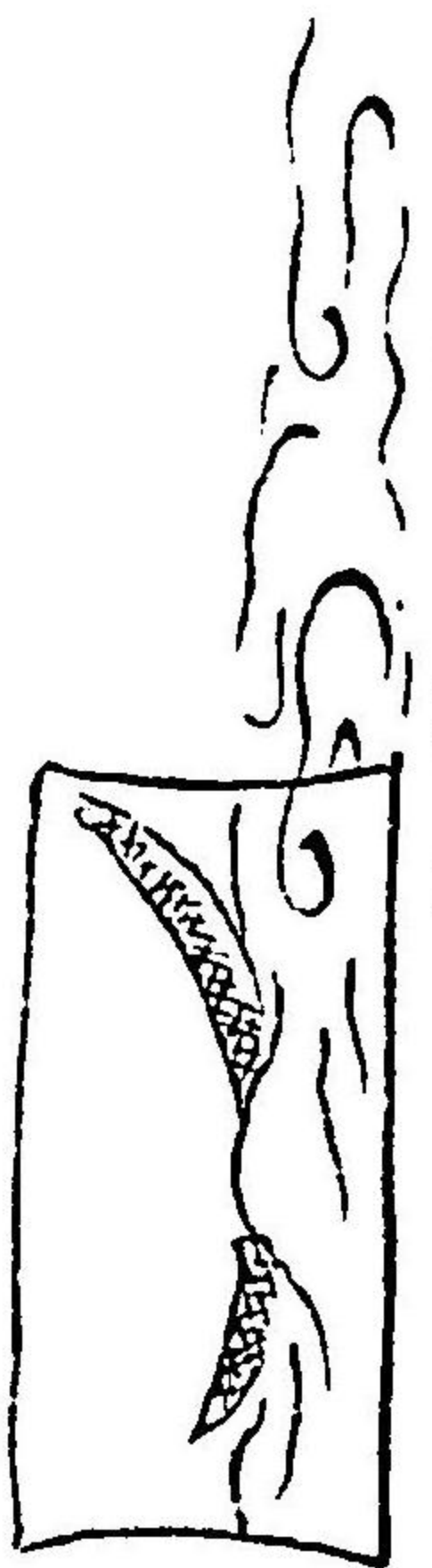
穂目上ニ同シ  
 但シ此少シ小ナル方

トヒ形



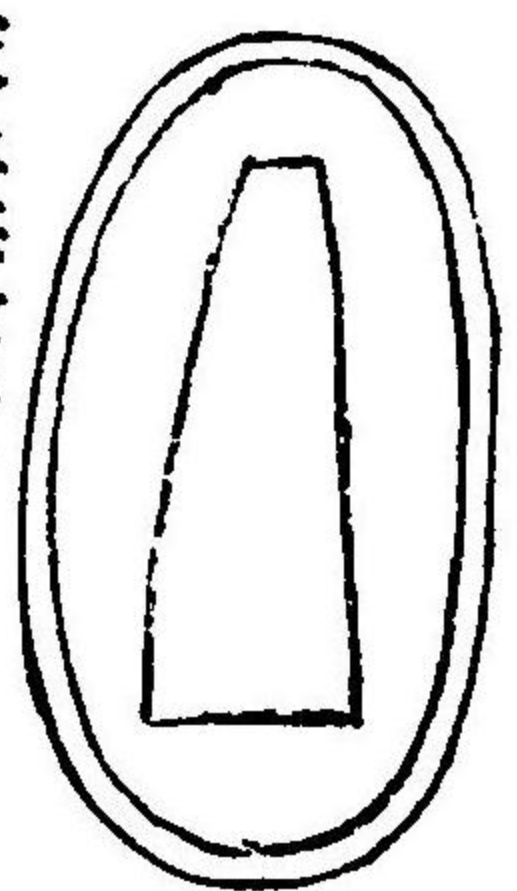
大トヒ形 鐵木目肌

月浪共 ホリ上低キ方



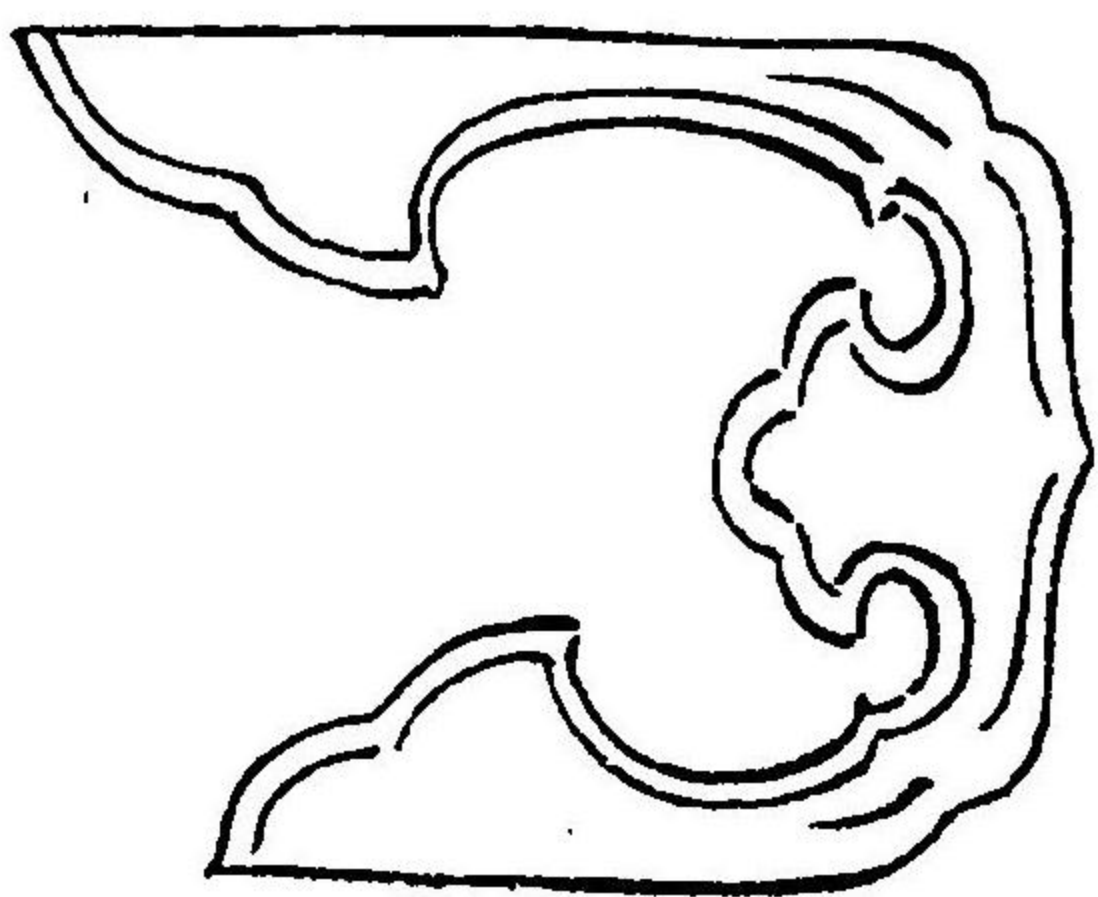
月銀布目疎ナル方

臘ツキ



天上共金平ナリ

鍬形鑄銅

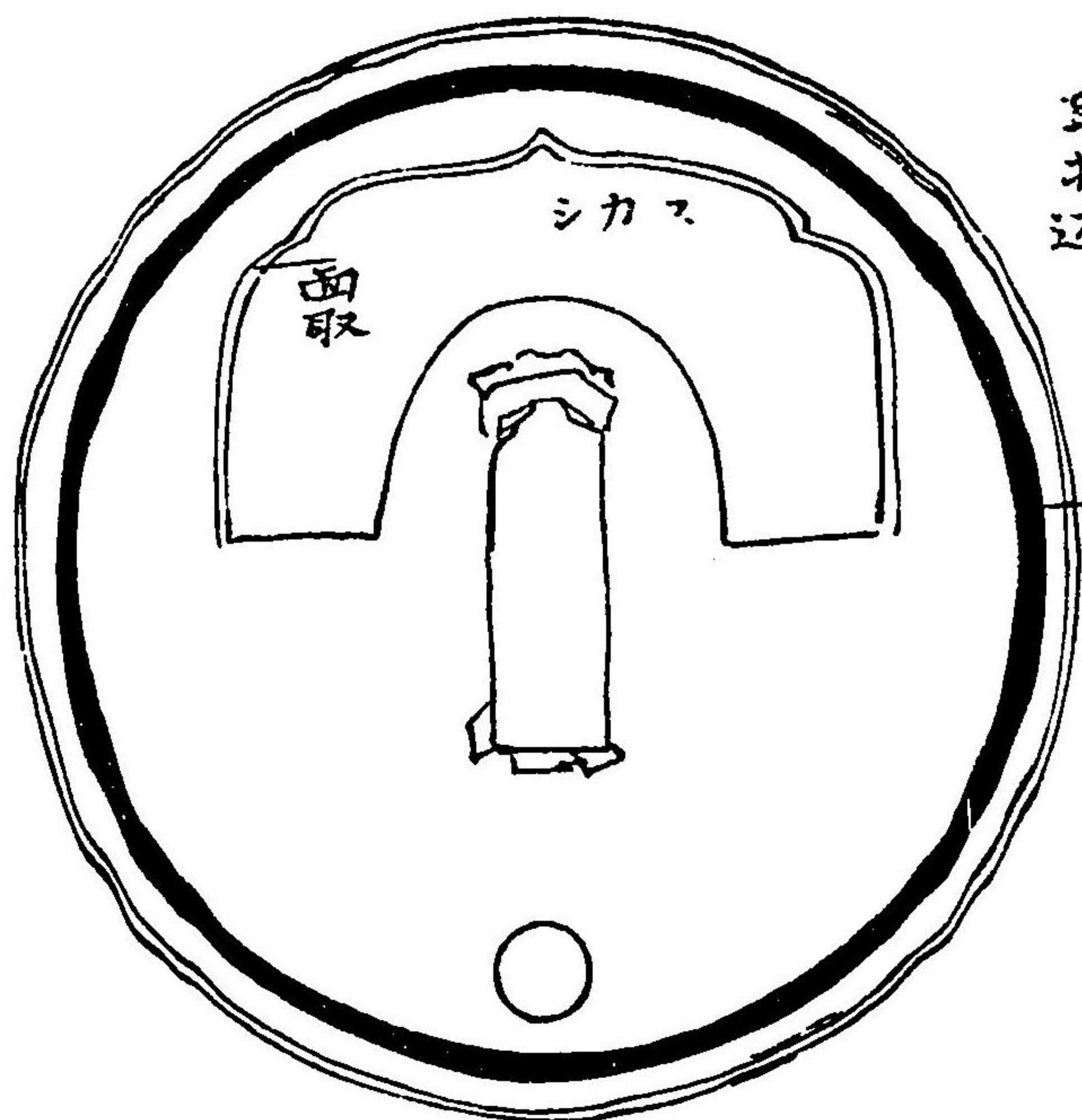


天正十年生正保二年五月十九日死行年六十四一説に六十二歳といふ  
 ○清田石見守

三齋公の備頭たり關ヶ原の役に武功ある士なり三千石を領すといふ  
 此作名ありといへど多く傳はず聞く其家筋に三鐔を藏す共木  
 瓜形にして環耳スハマ櫃に造る他二枚は革キセにて其作行は總てか  
 たく見ゆとぞこれも武夫一時の作左もあるべし  
 生死年月等詳ならず大抵三齋公前後なるべきか

三齋 細川侯作

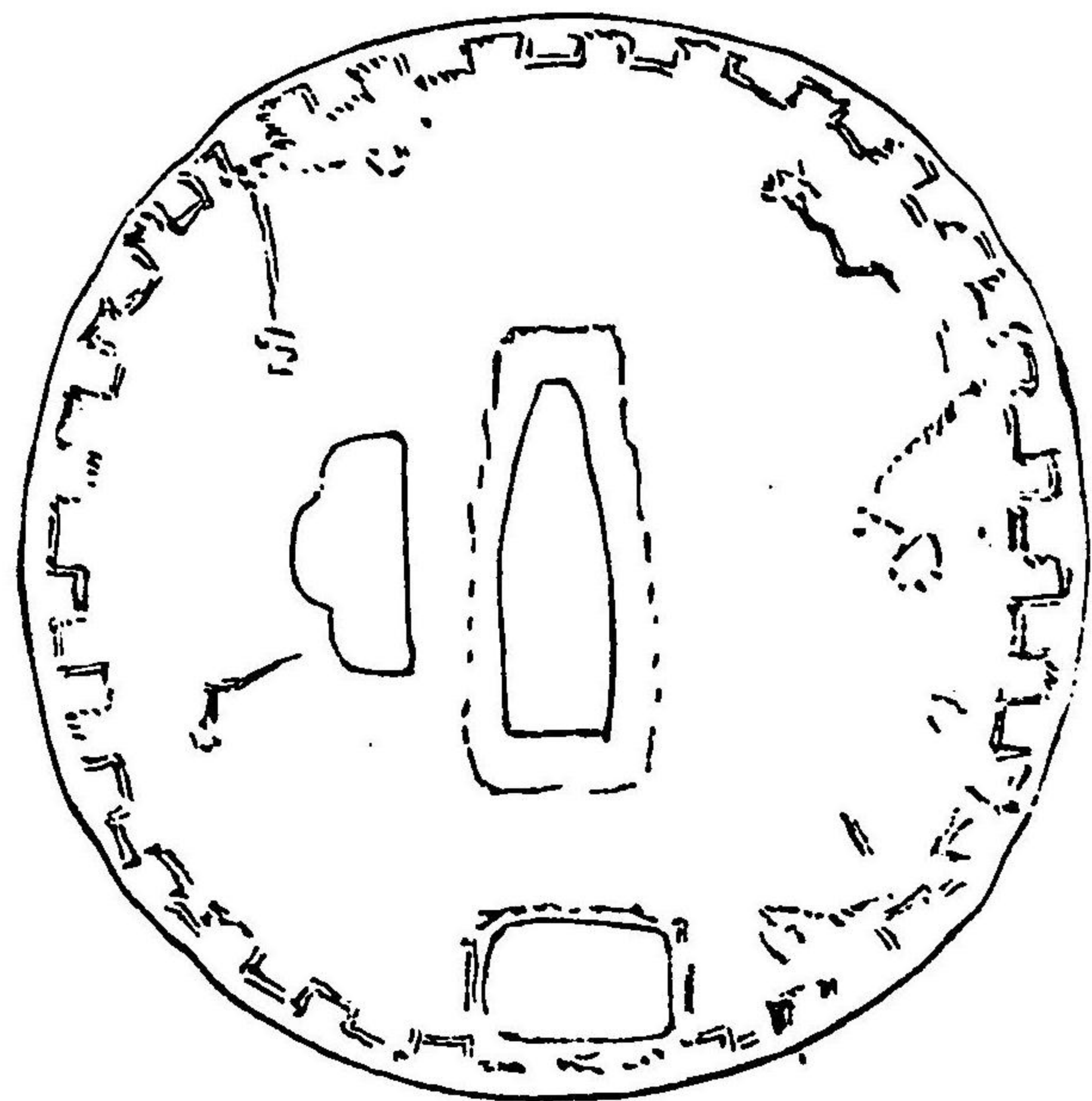
耳弁返



ウラ朱ワルミ漆象眼

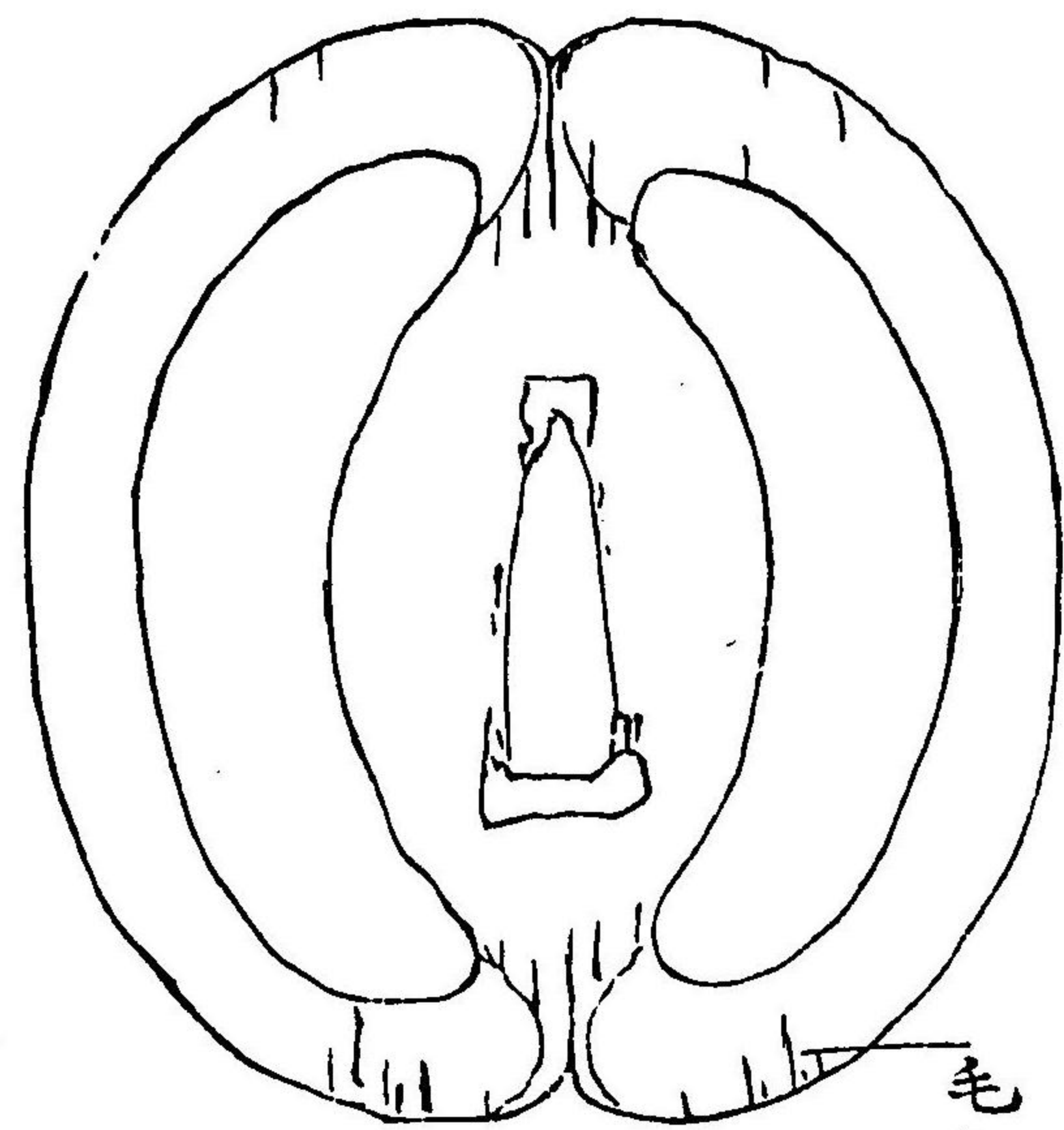
口作

銀象眼但シ縁彫込内布目



ウラ白

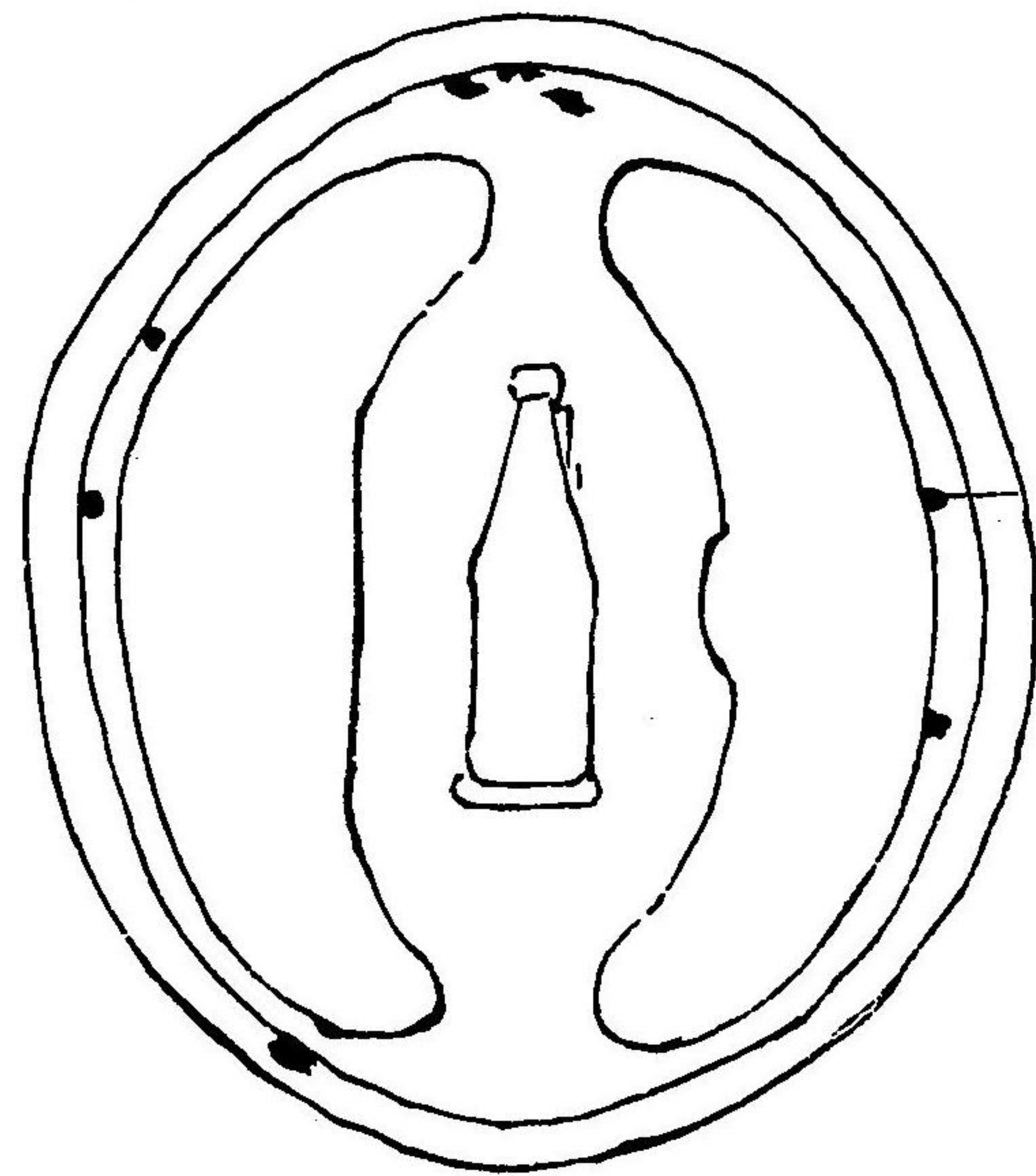
寸



毛ホリ

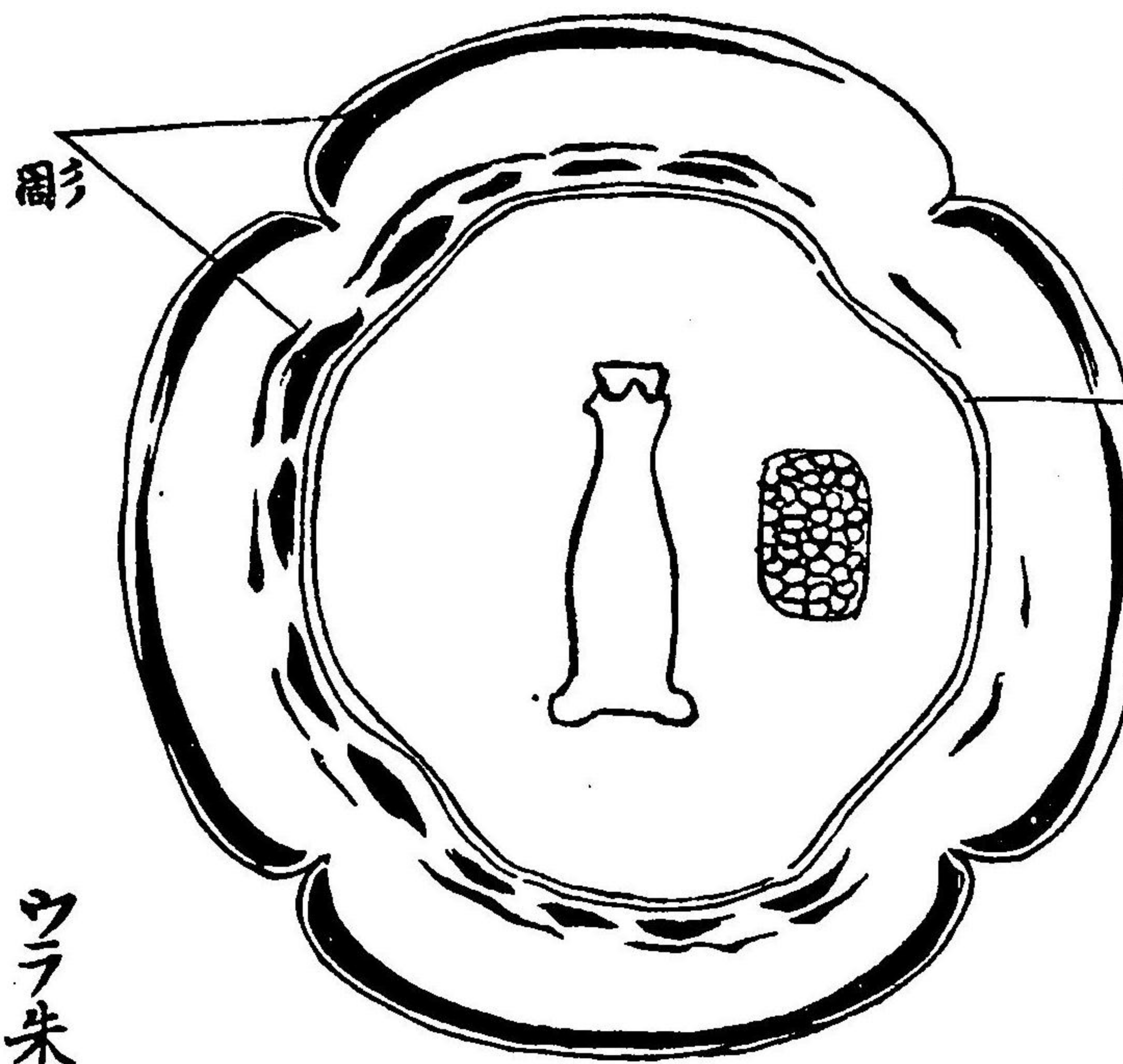
新免武蔵作

厚耳透際表裏ヨリスク



タカネ

口作銅



口作類似  
土皿形

銀ホリ込象眼

ウラ朱ウエと漆但し下地金フセ



口側面ヨリミル

附五

附録終

附圖  
春日初代作  
紋透



金銘

象眼總金

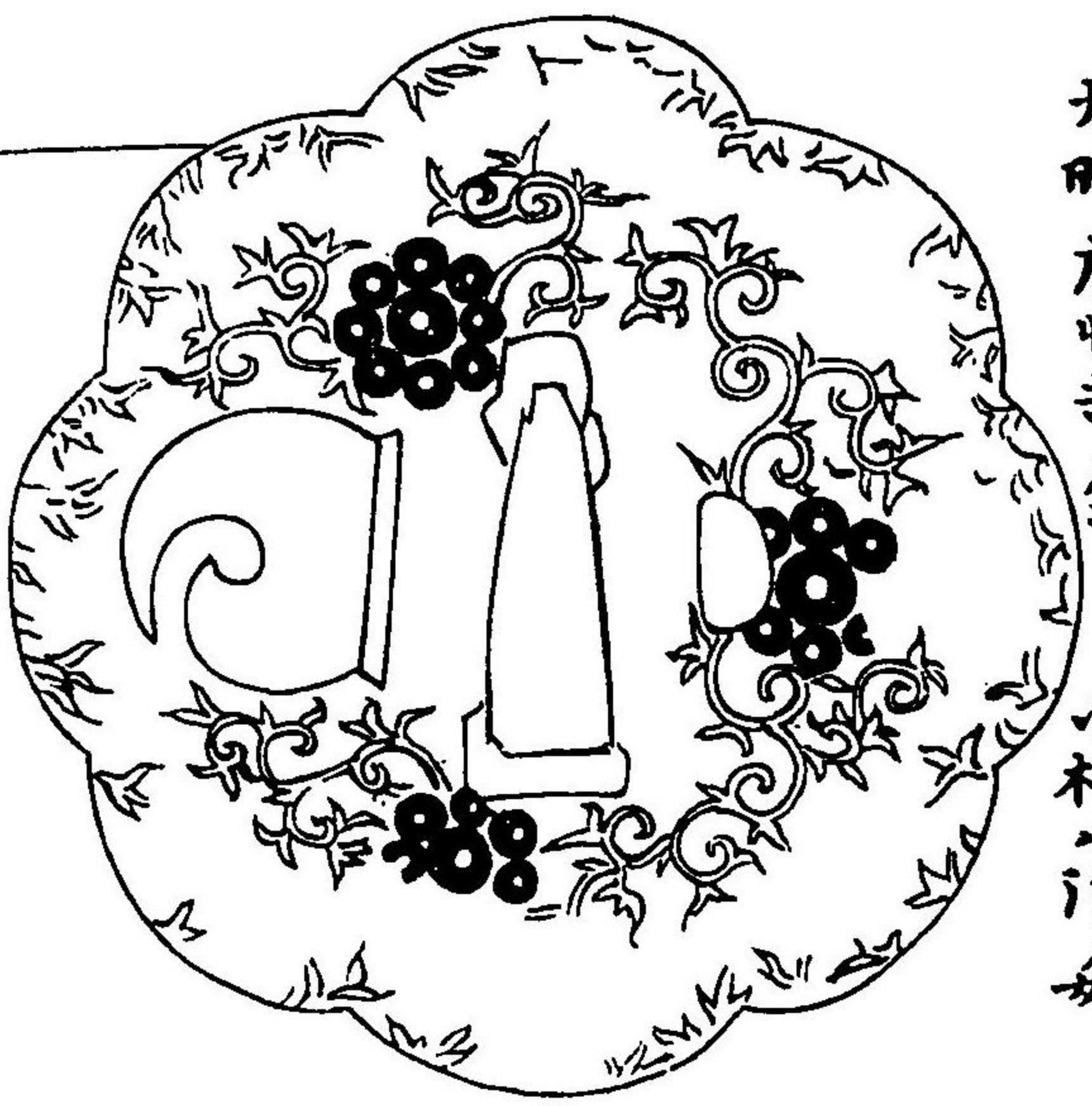
此唐  
草二  
重可

ウラハシ但ニ輪子象眼多ク存ス

口作

九曜唐草共ニ金

小櫃ハ淺如シ



耳唐草

ウラハシ



口作

金象眼但シ地紙ノ版最厚キ布目

骨ハ彫込ニテ入ル

櫻及虫喰共ニ同シ



ウラ扇俯仰ニ櫻三

口作

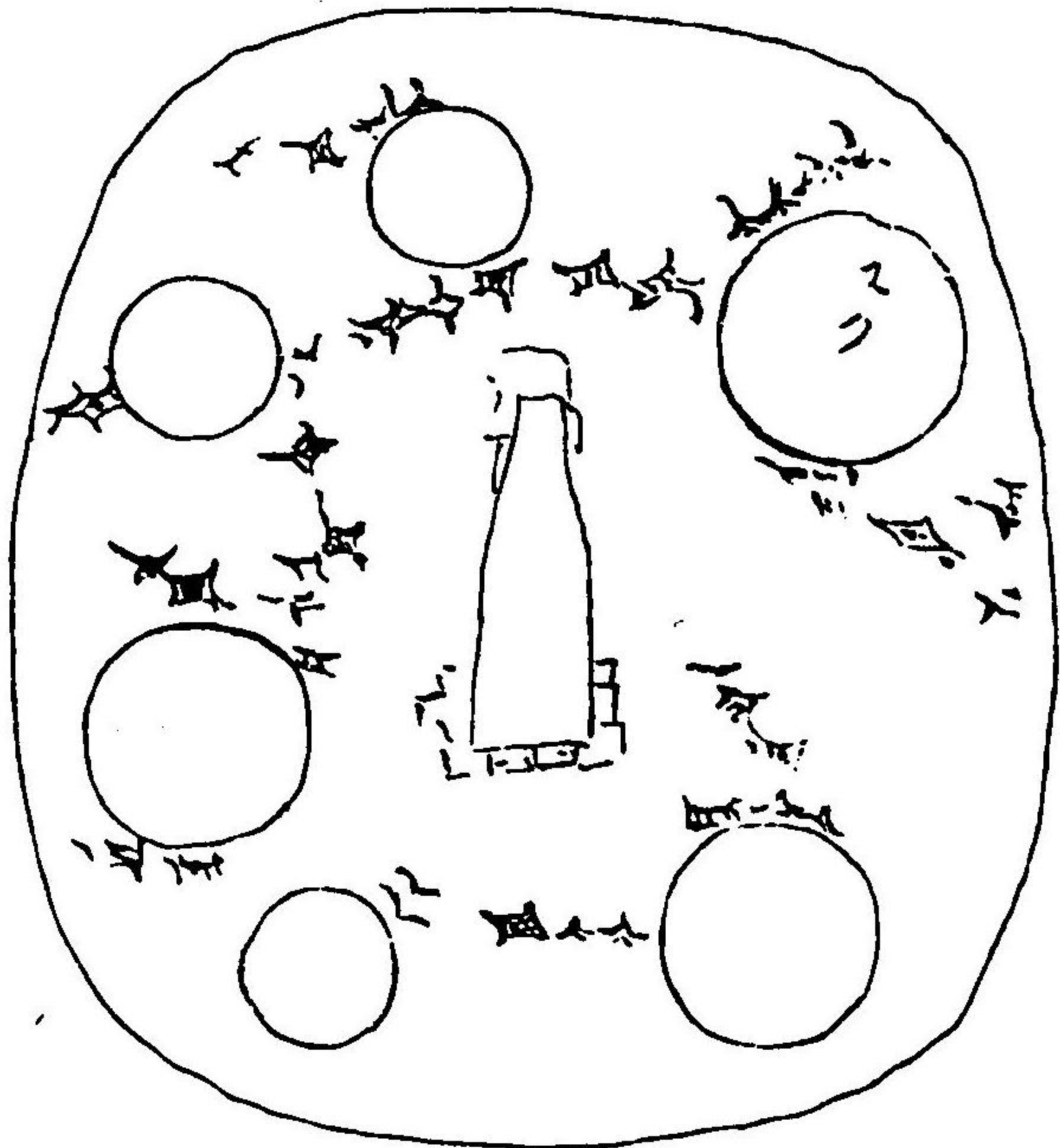
葛菱金張金



ウラ口

口作

葛菱金 庇貫ク

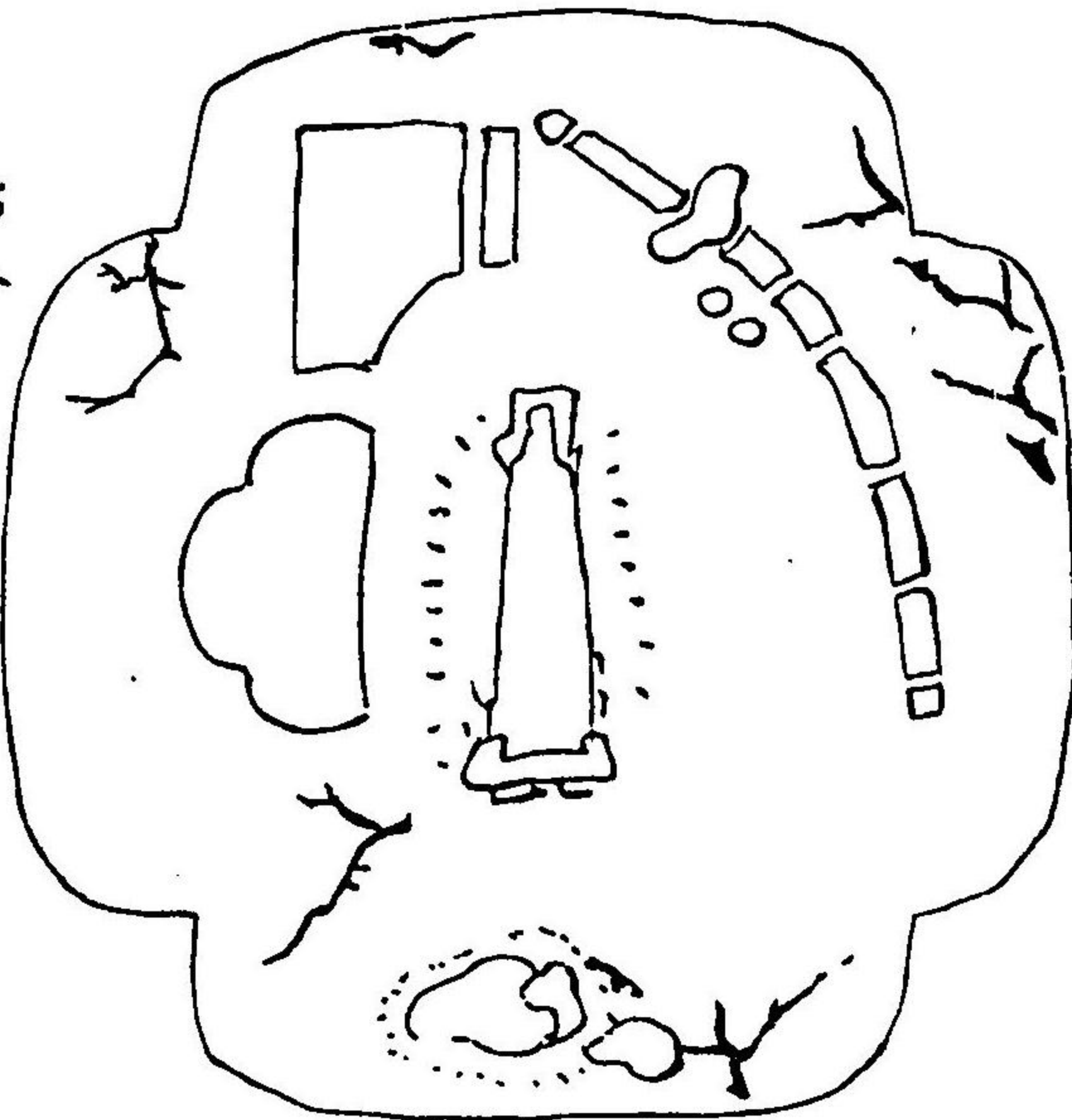


ウラ口

口作

身魚肉

太刀折紙透枯木金ホリ込象眼

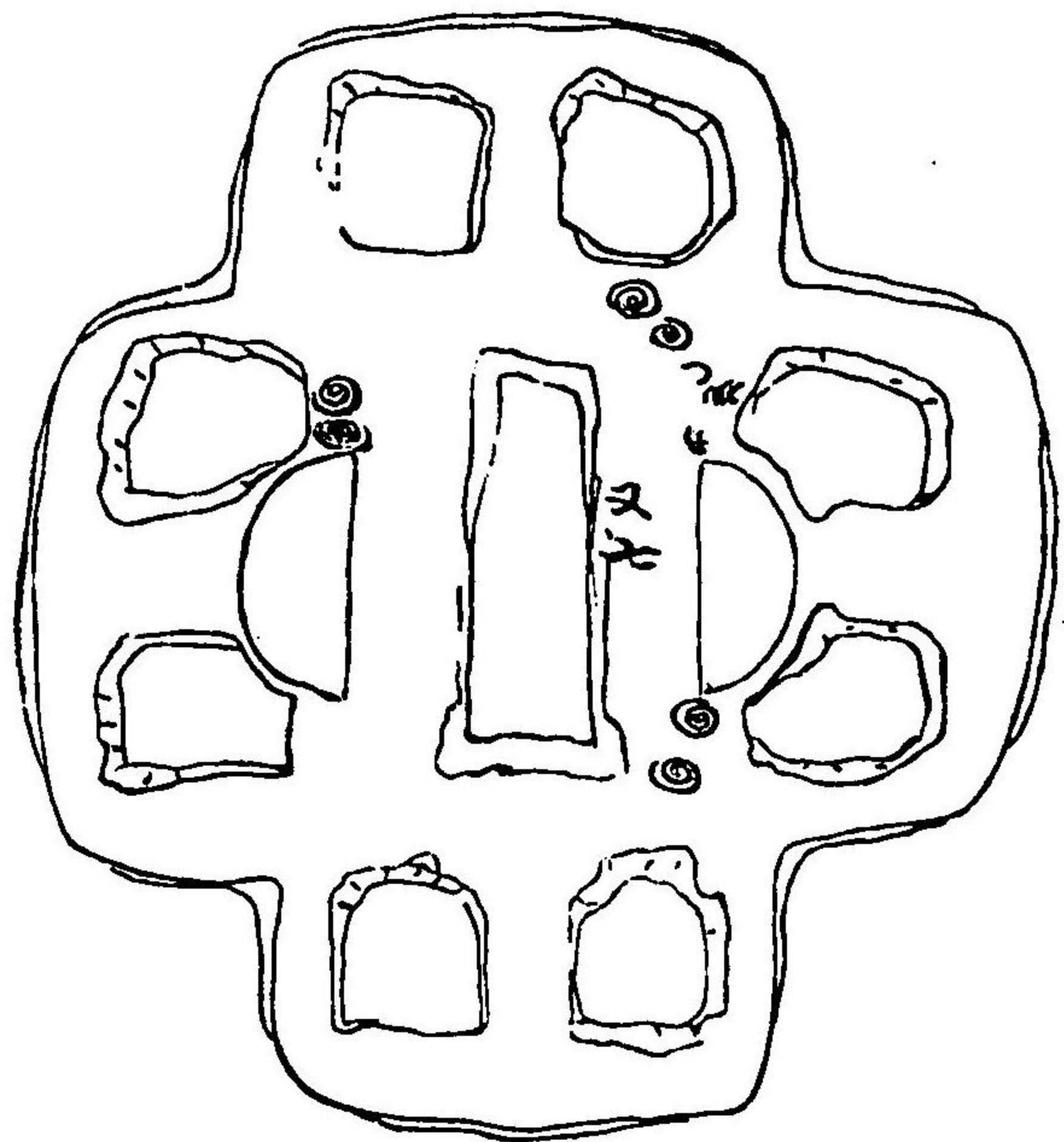


ウラ口

枯木耳ニモアリ

口作 金銘

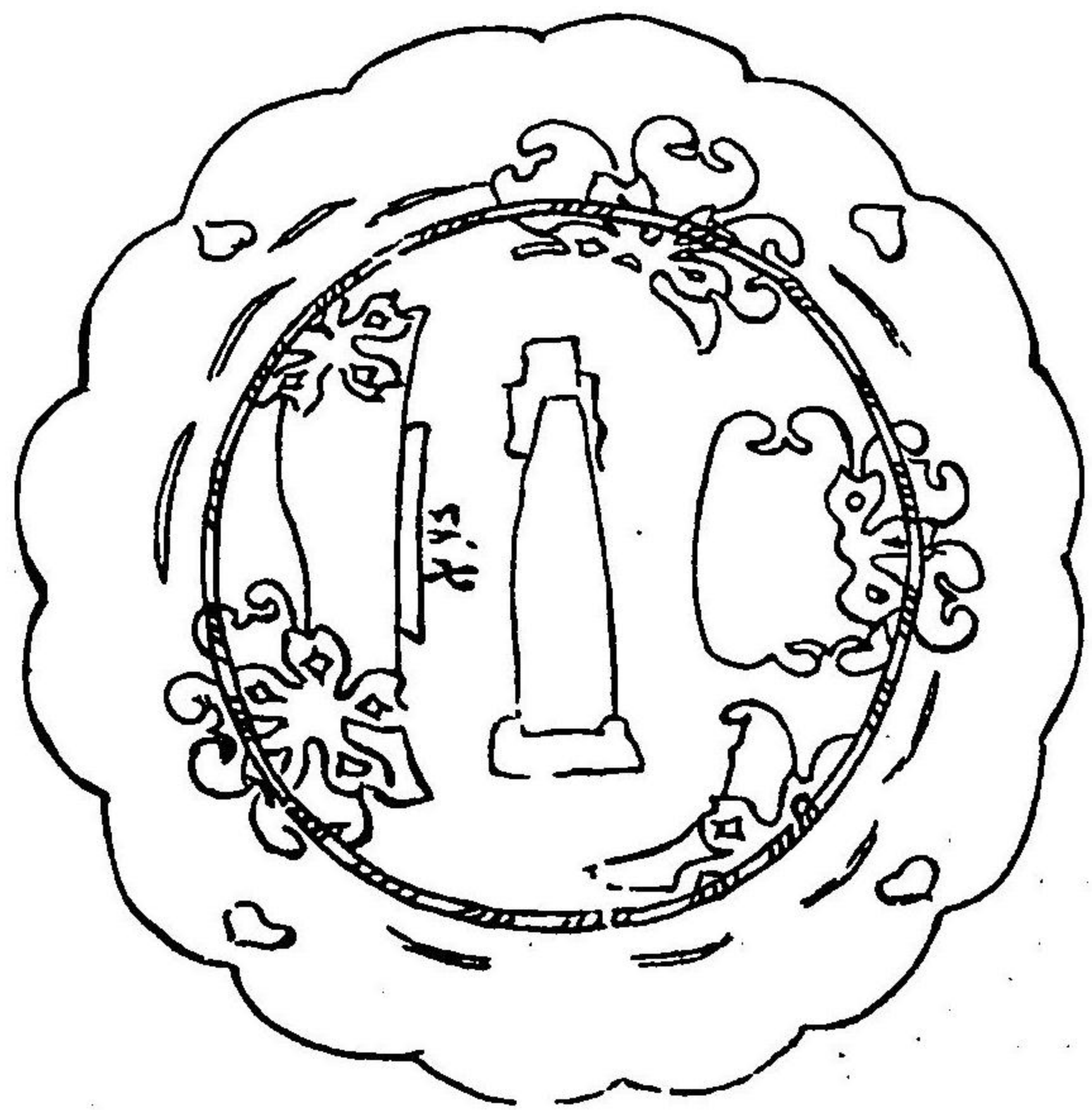
タカネ透 漏金張金



ウラ 漏六 内置補平ナリ

口作

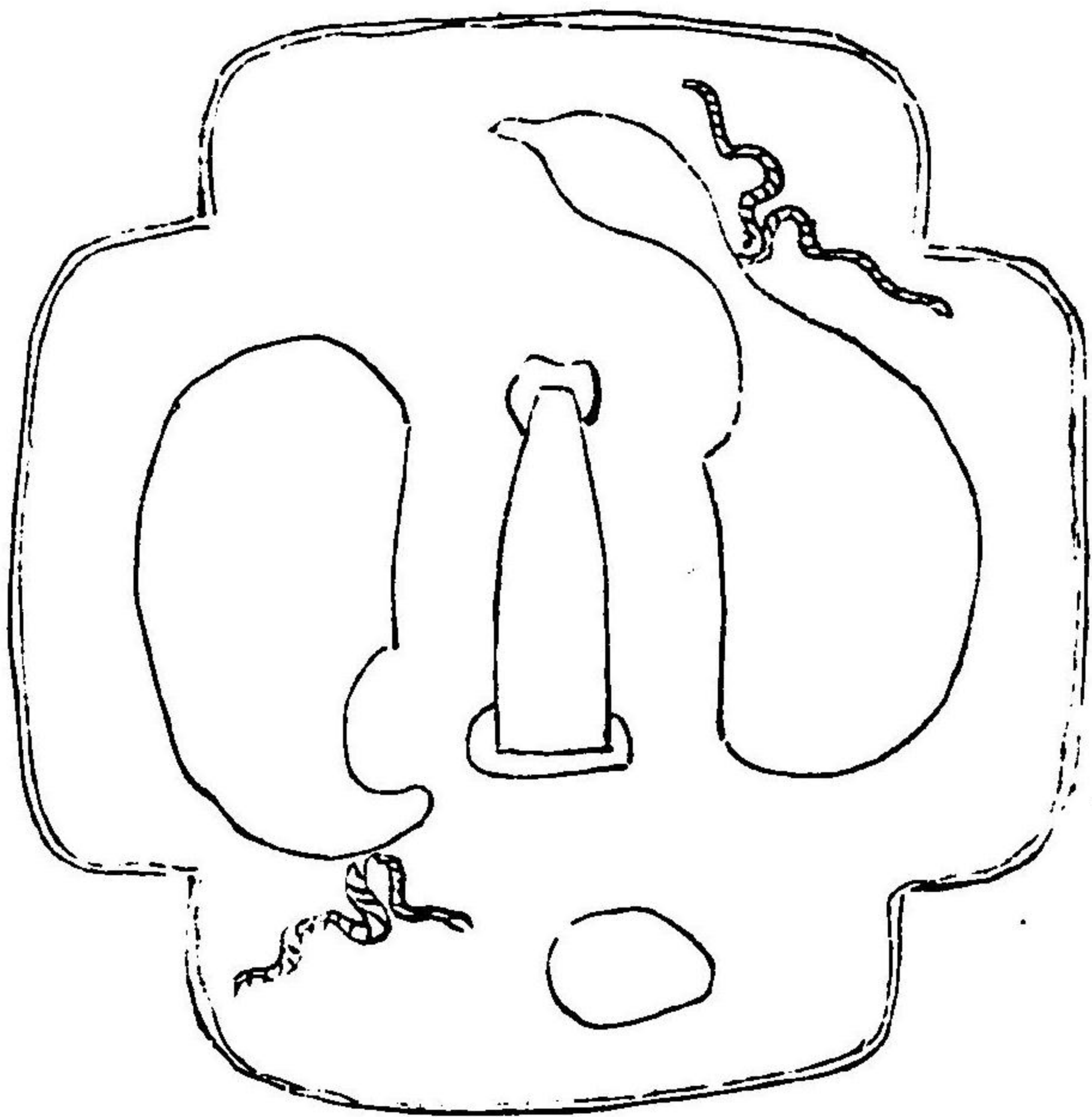
櫻花、外面透霞目シ  
綴繩目金



ウラ 口

口作

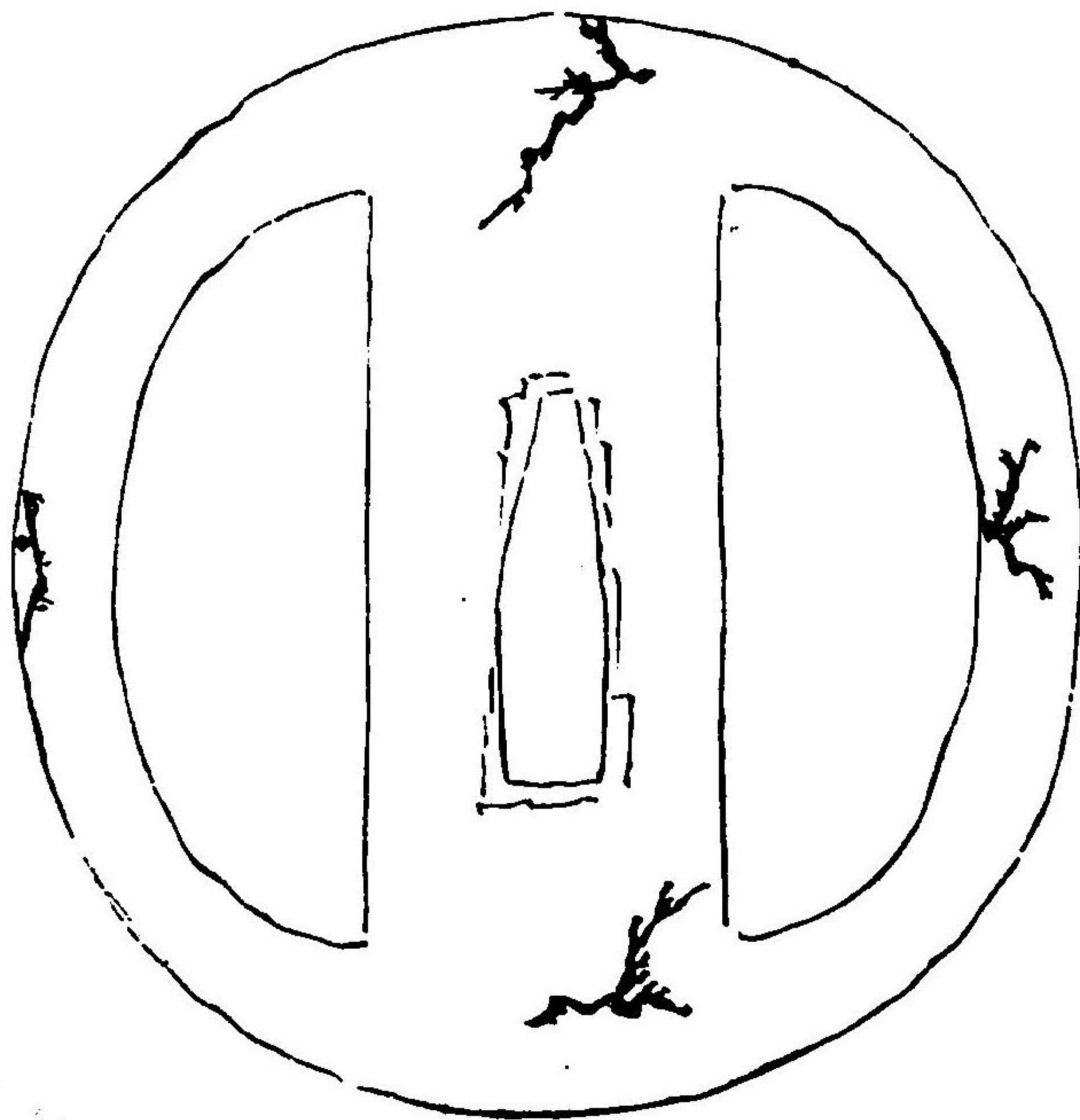
耳方返シ 紐金赤銅ヨリ合セ



ウラ 紐貫ク

口作

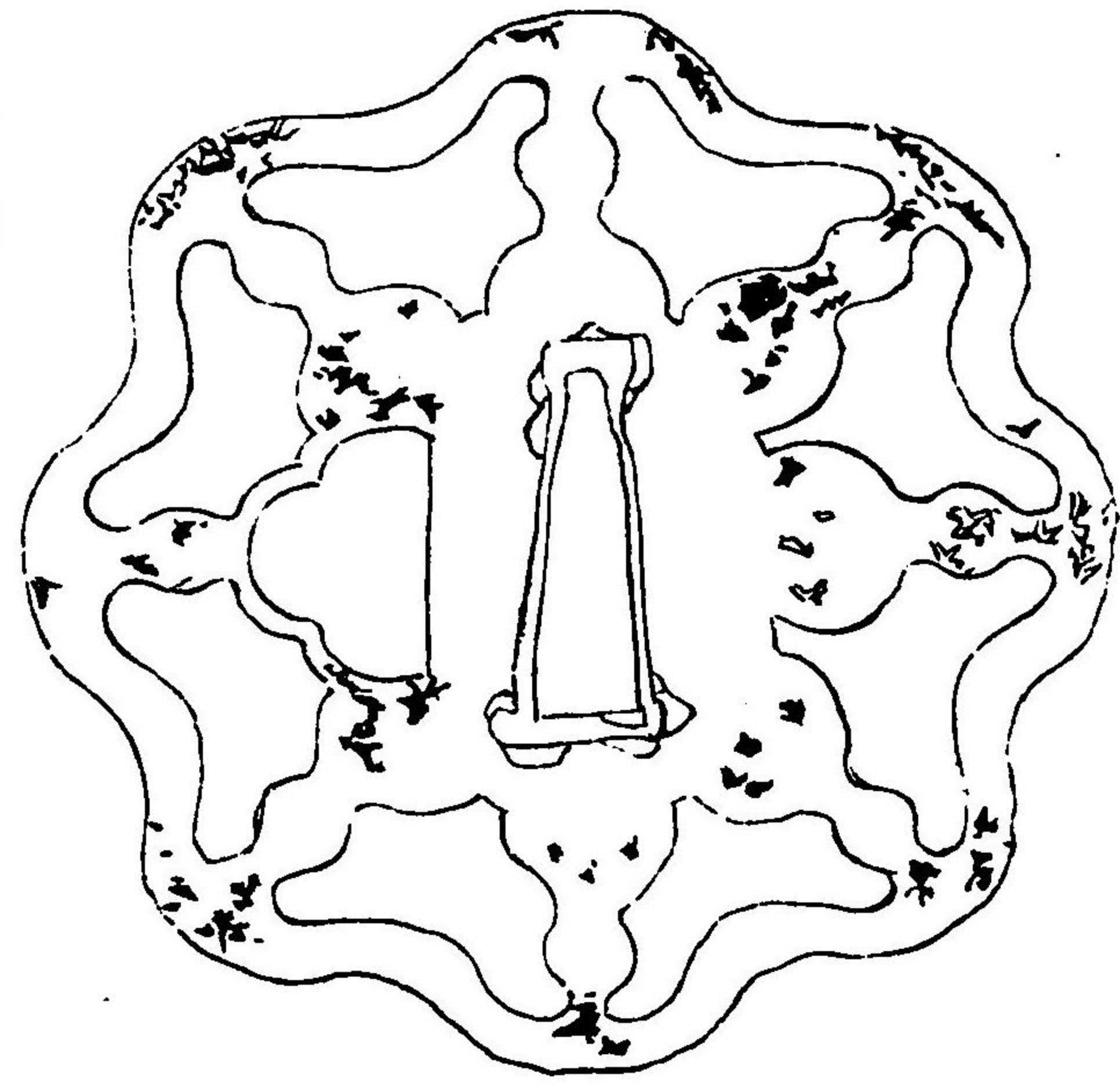
枯木金ホリ込漆味



ウラ 口

口作

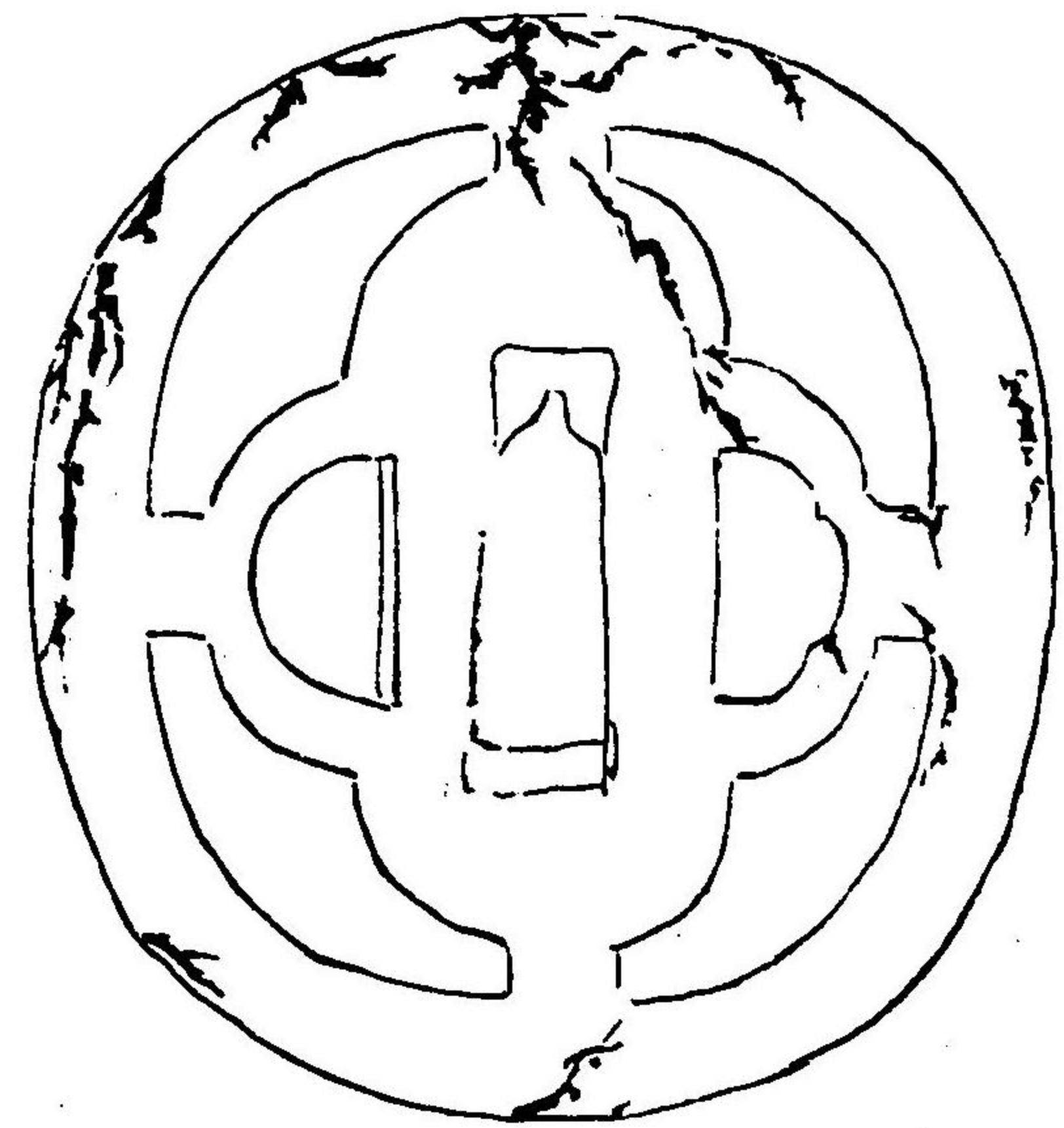
象眼金銀ホリ込 但シウラ銀ナシ



ウラ口

口作

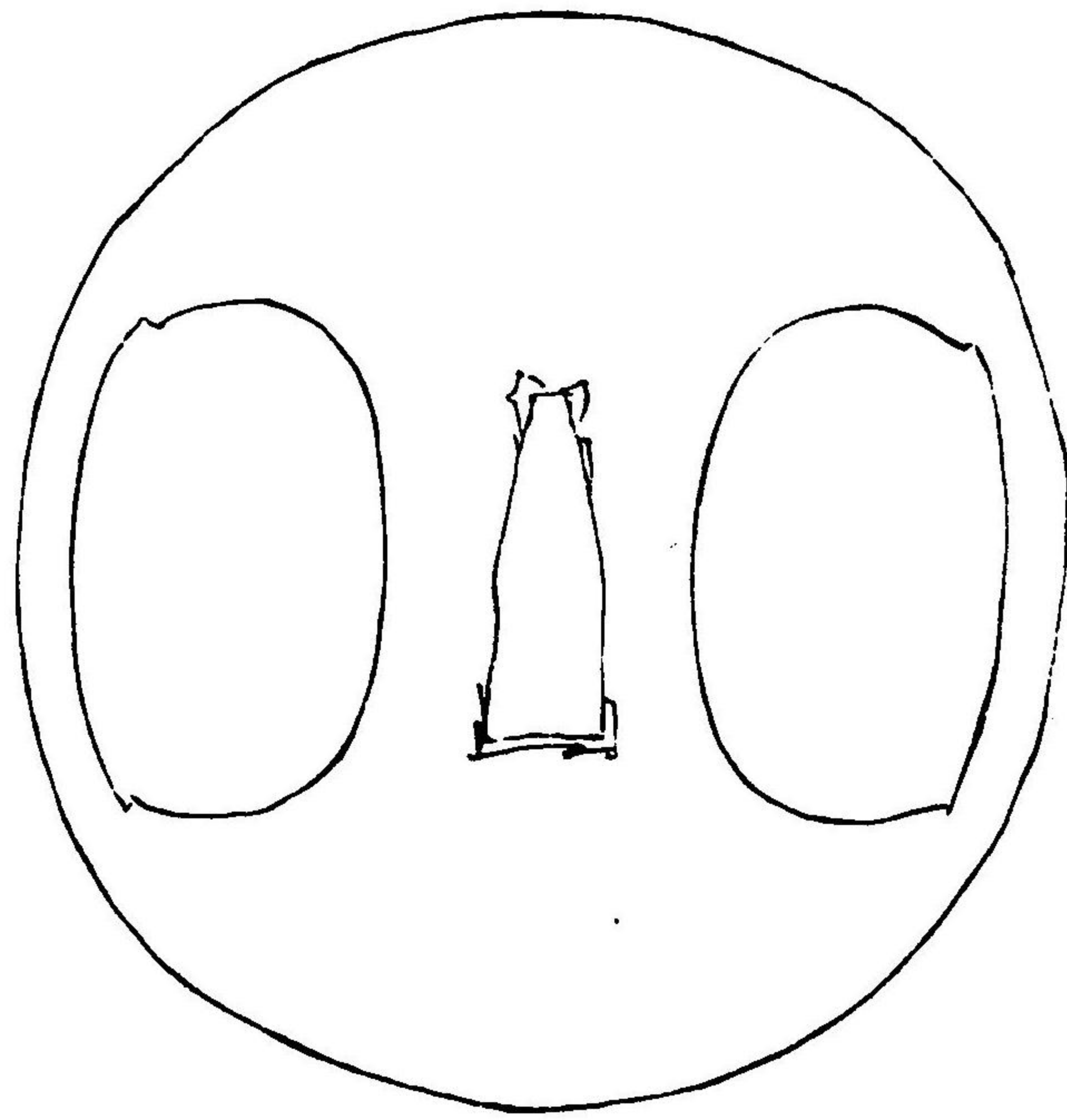
象眼金ホリ込



ウラ口

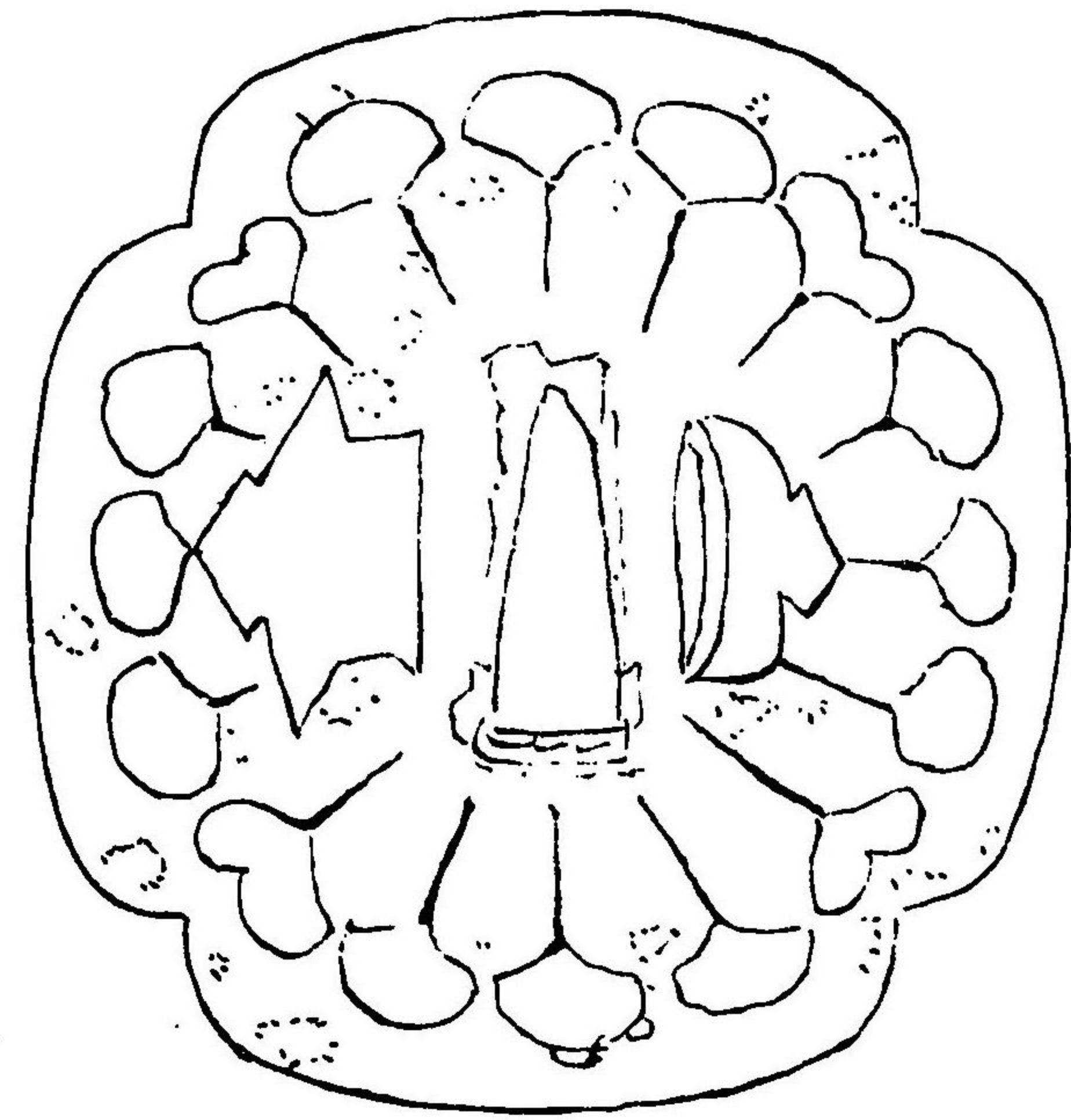
口作

耳丸 地ミカキ

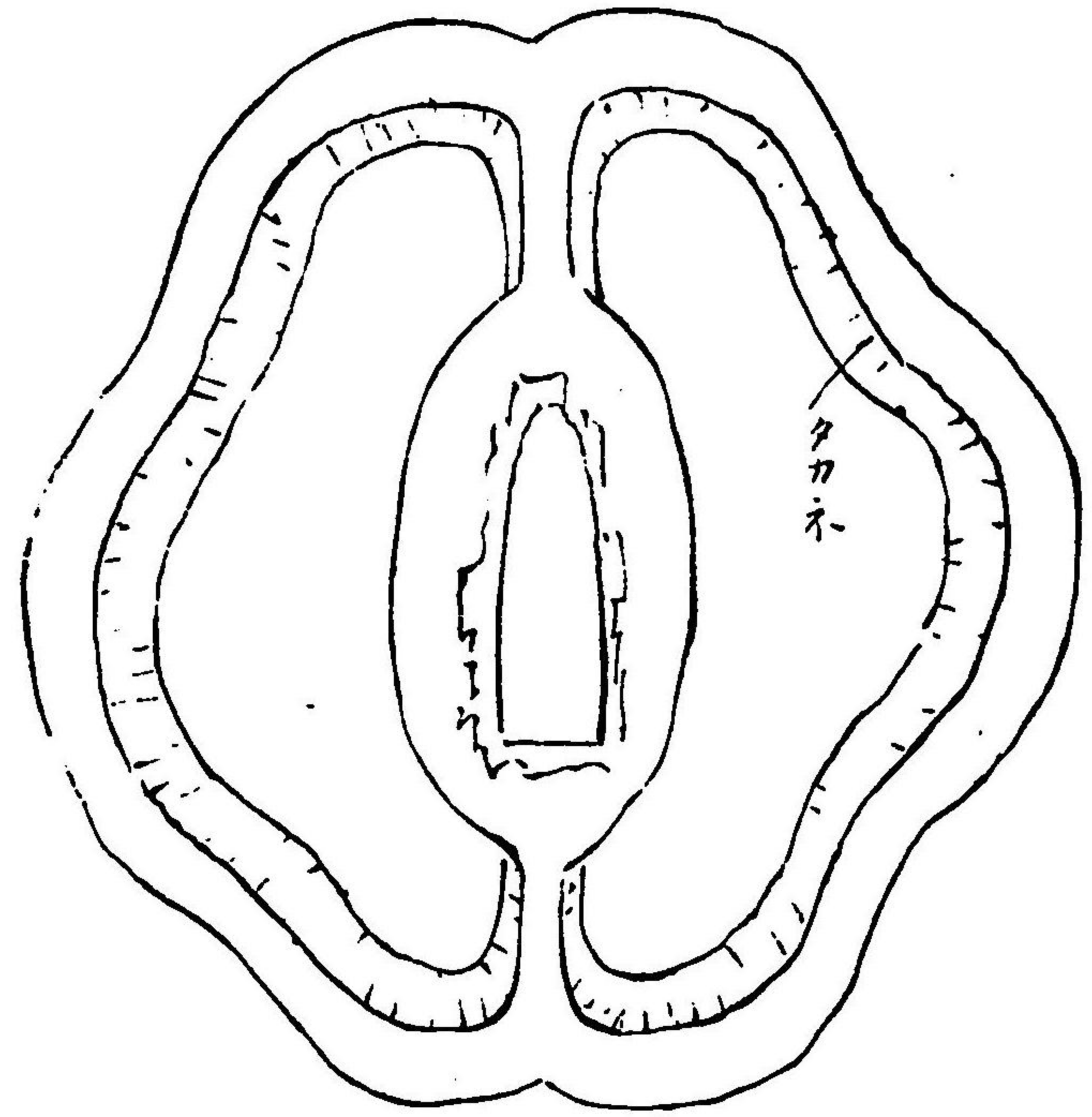


口作

六燒手クワラシ 菊日ノ毛彫稍大寂強シ

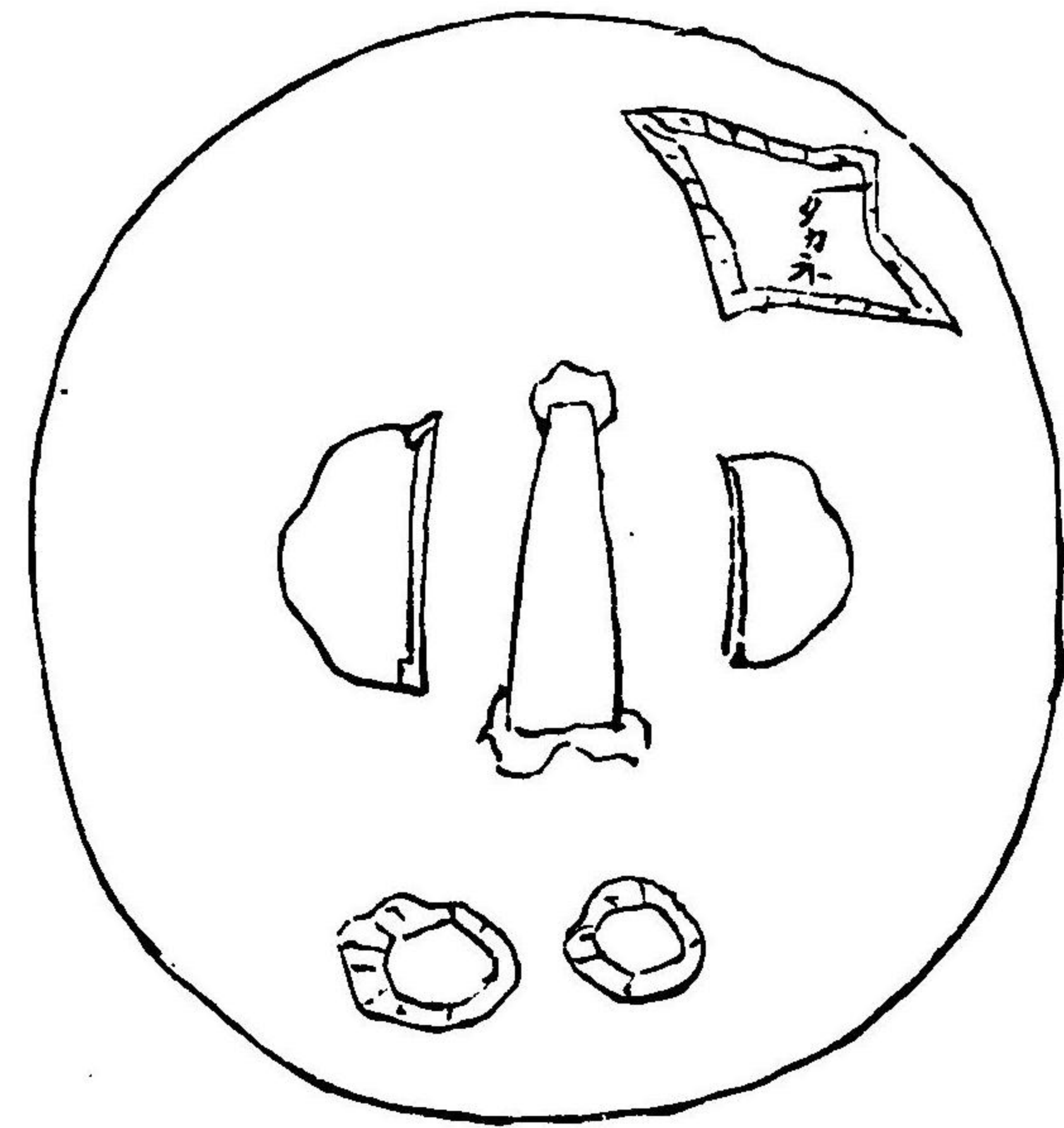


口作

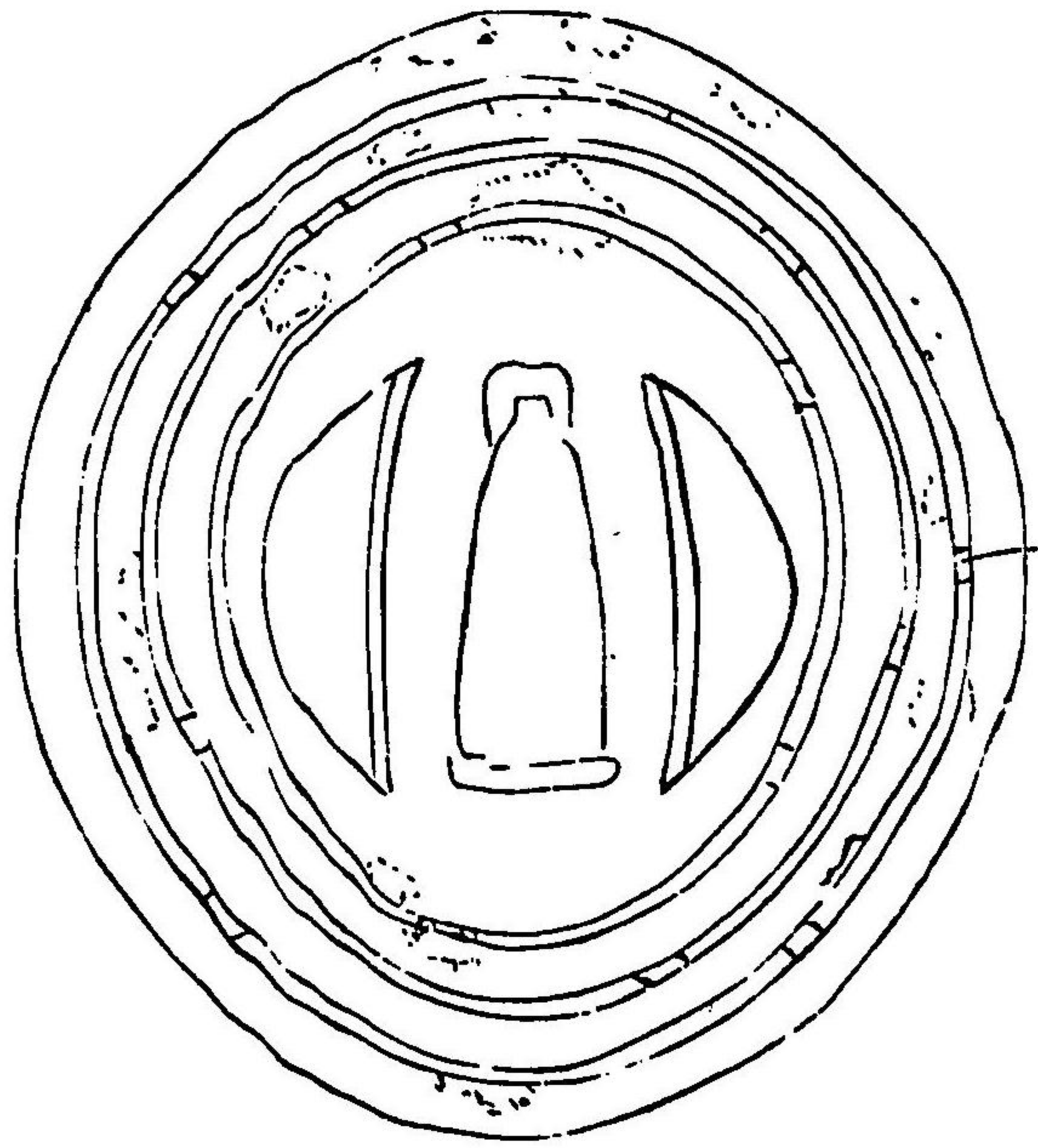


口作

地ミカキ



口作

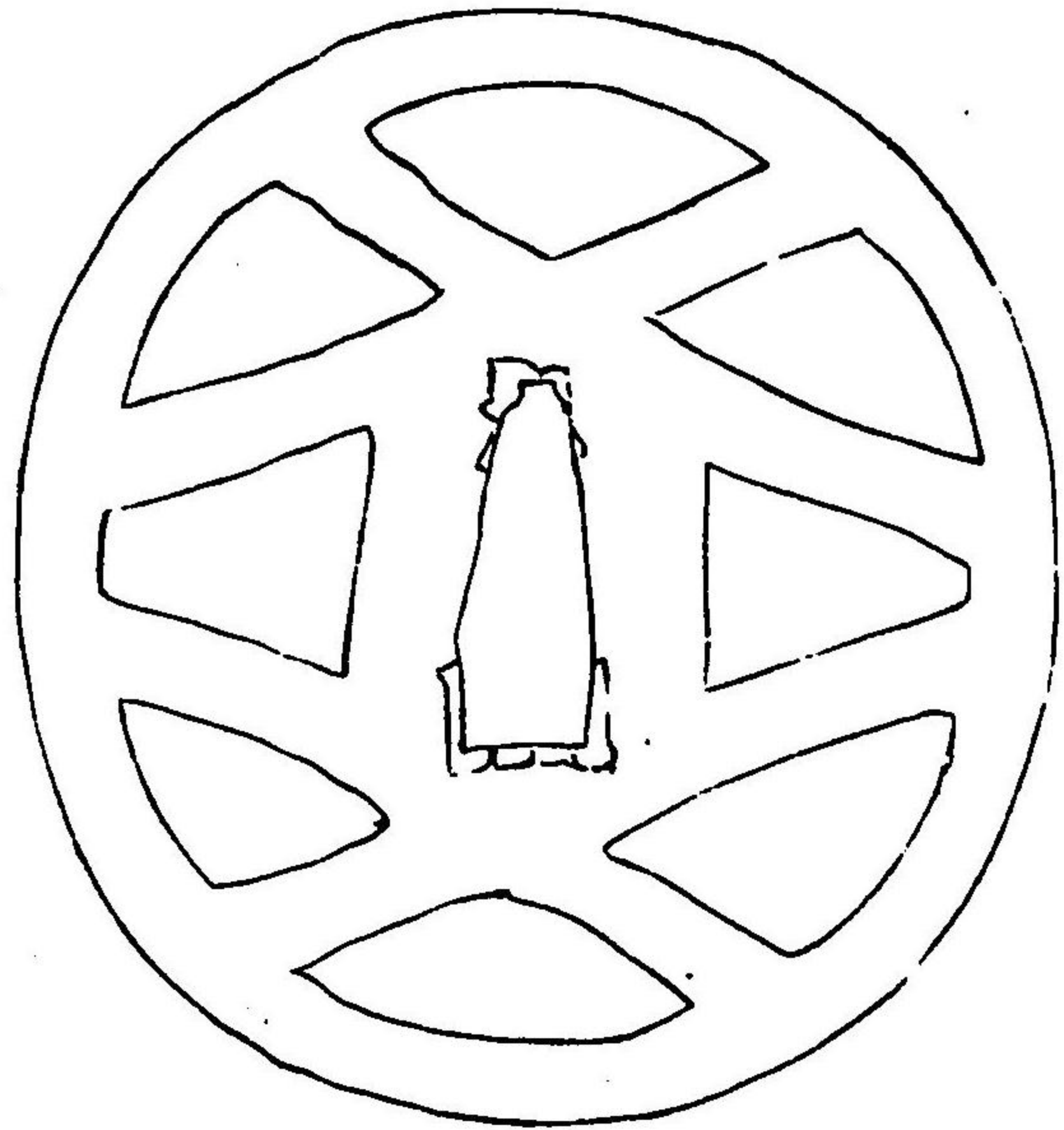


焼手クサラシ

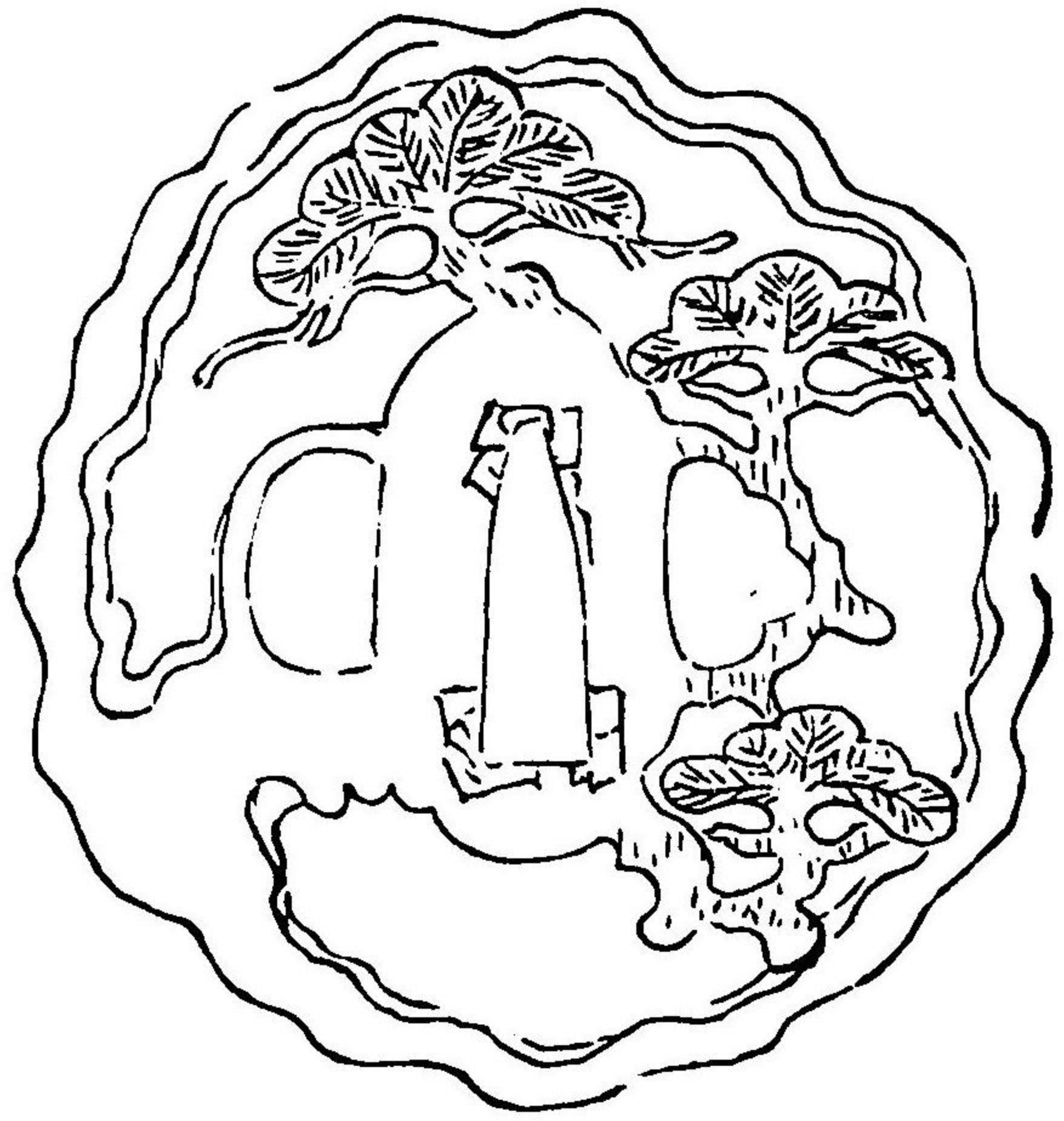
繋ぎ但し地ヨリ低し

口作

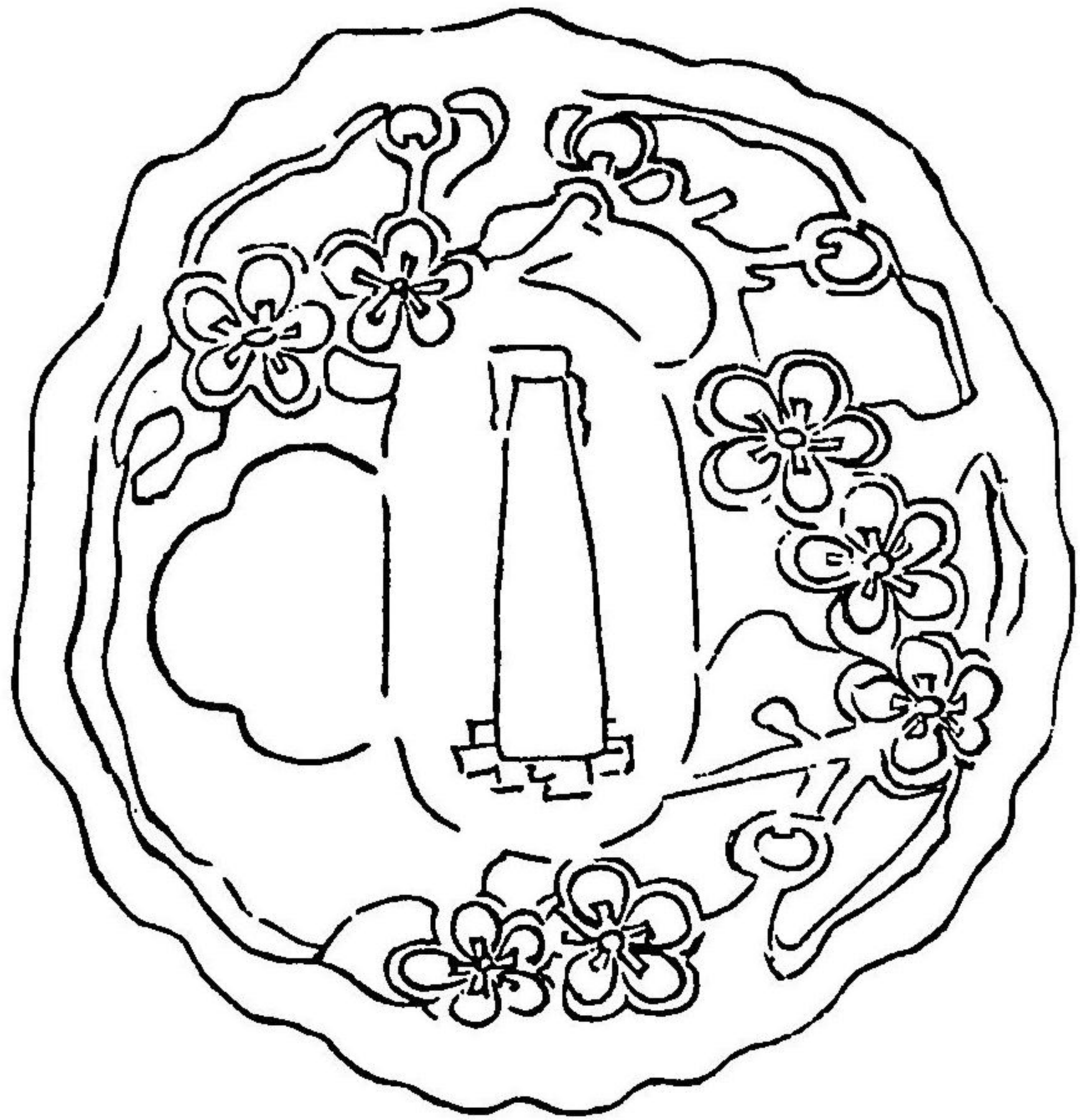
透肉置角ナル方



同作

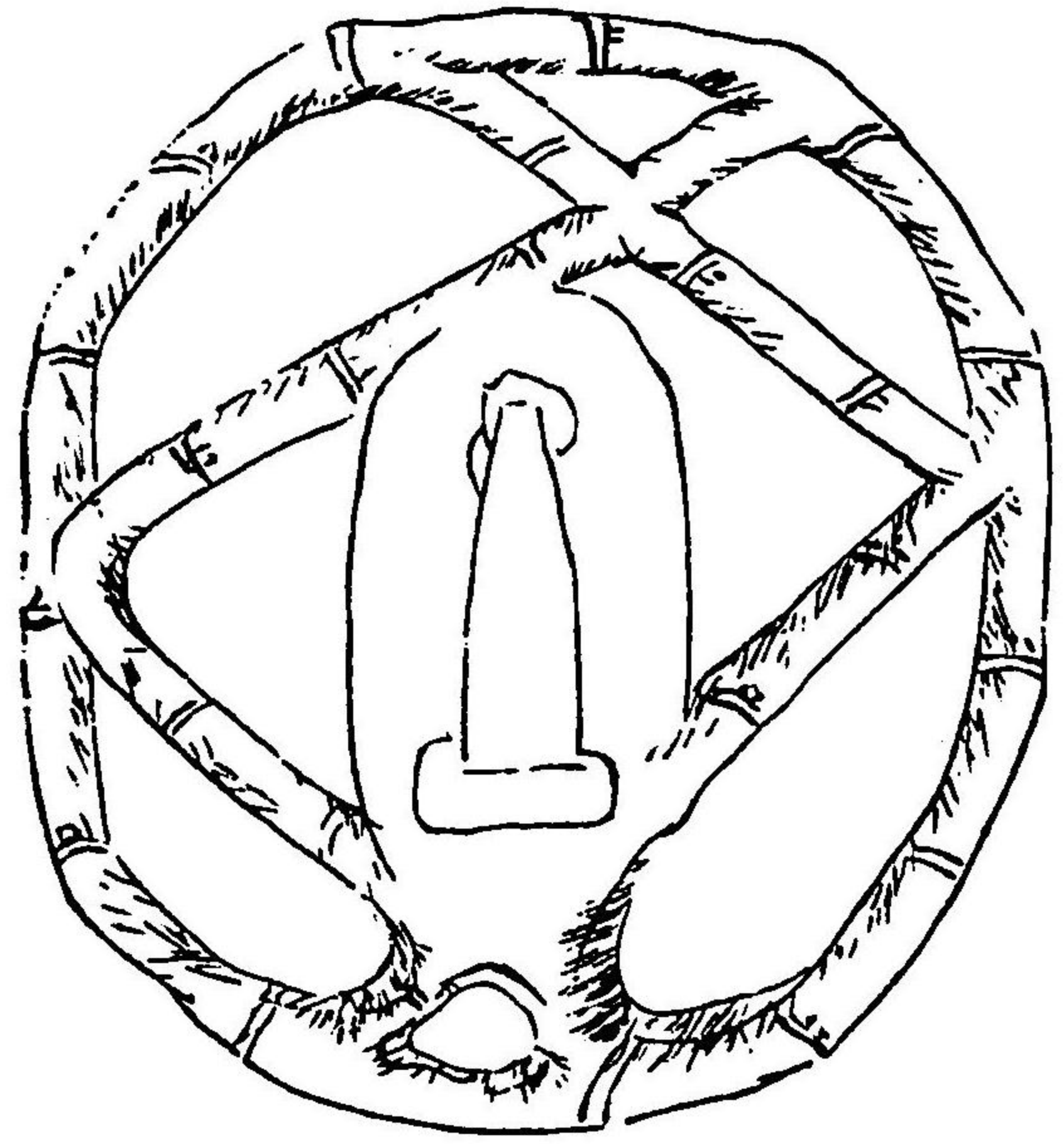


同作



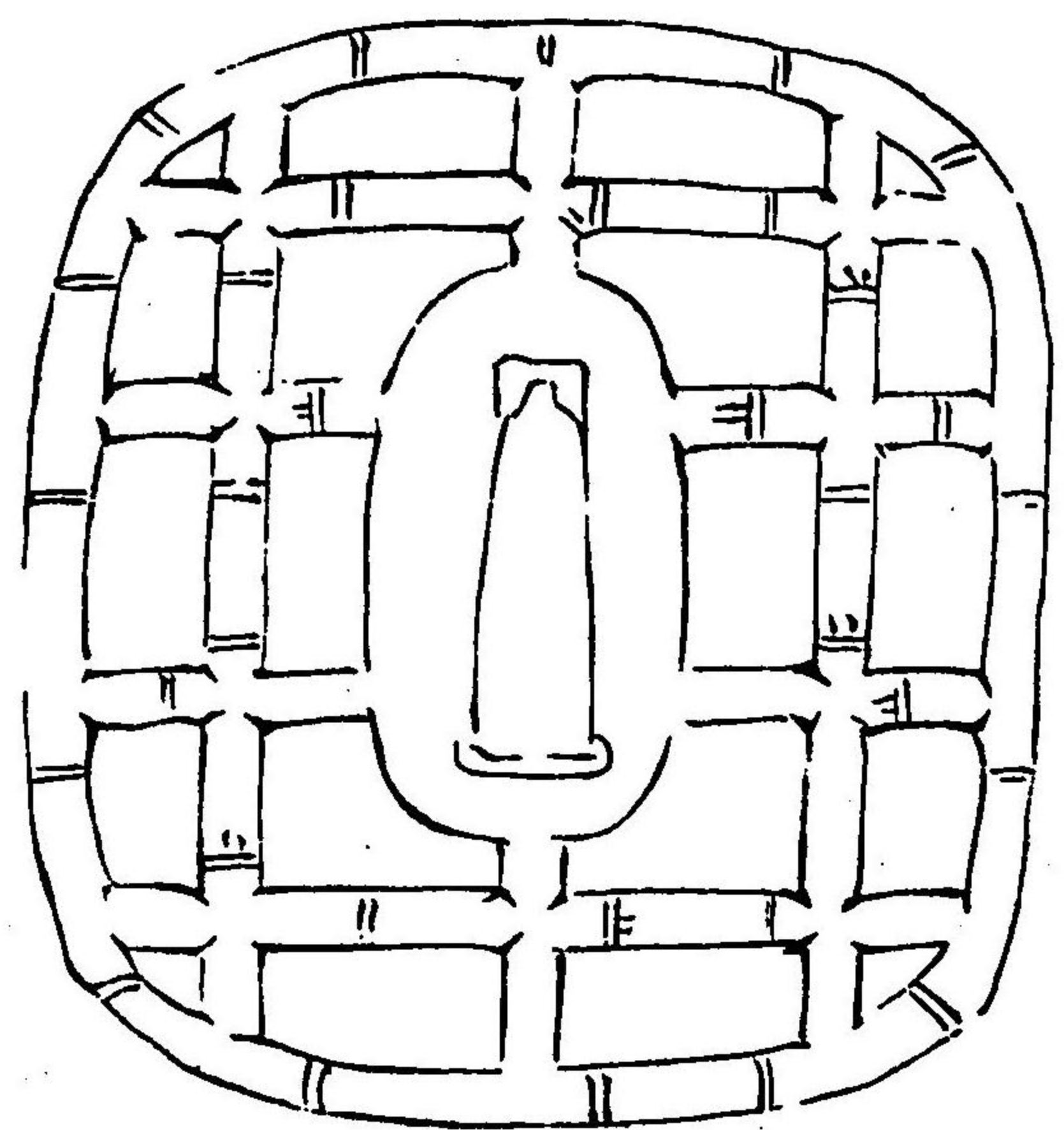
同作

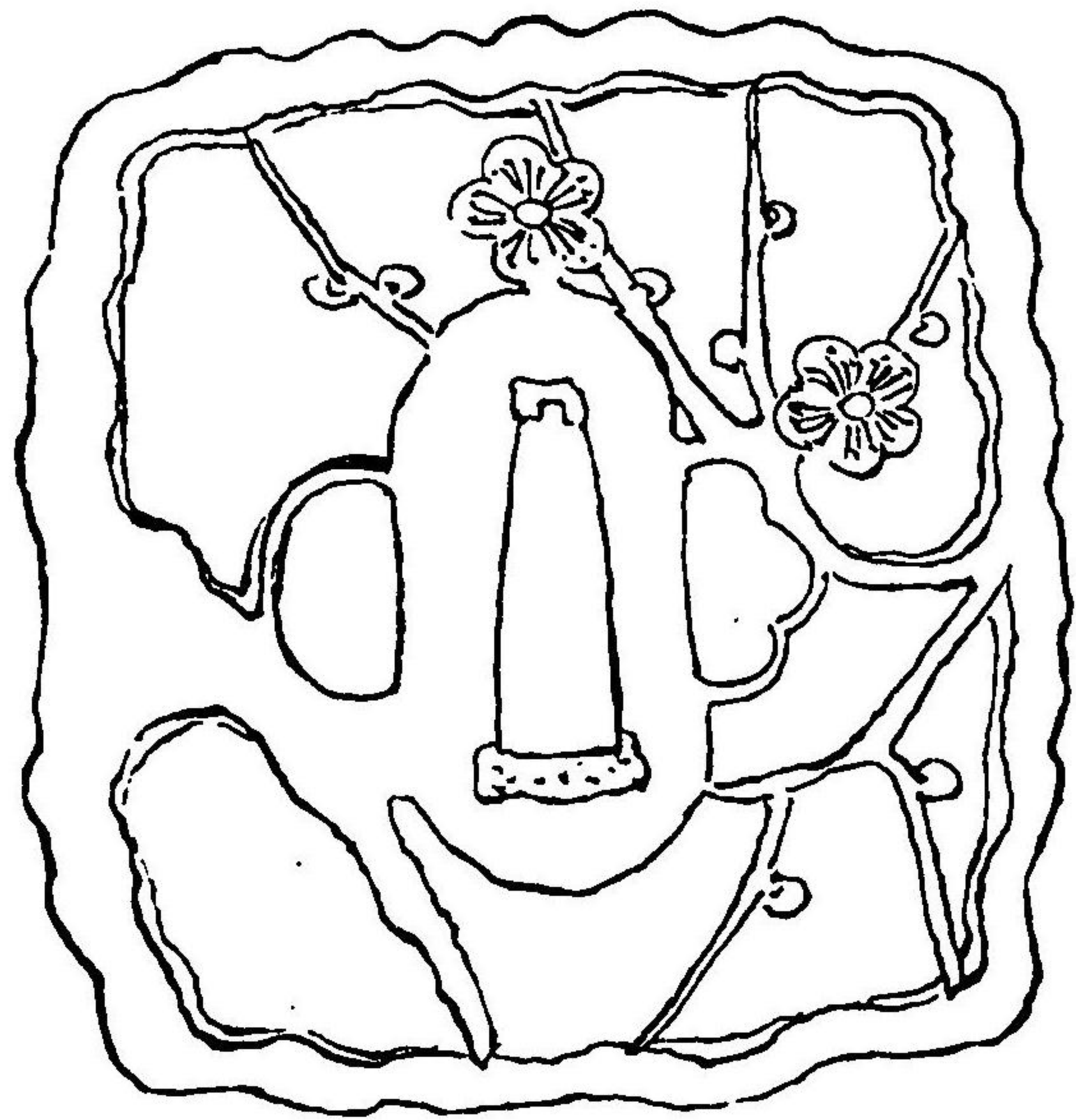
肉置丸半方但切羽台角肉



同作

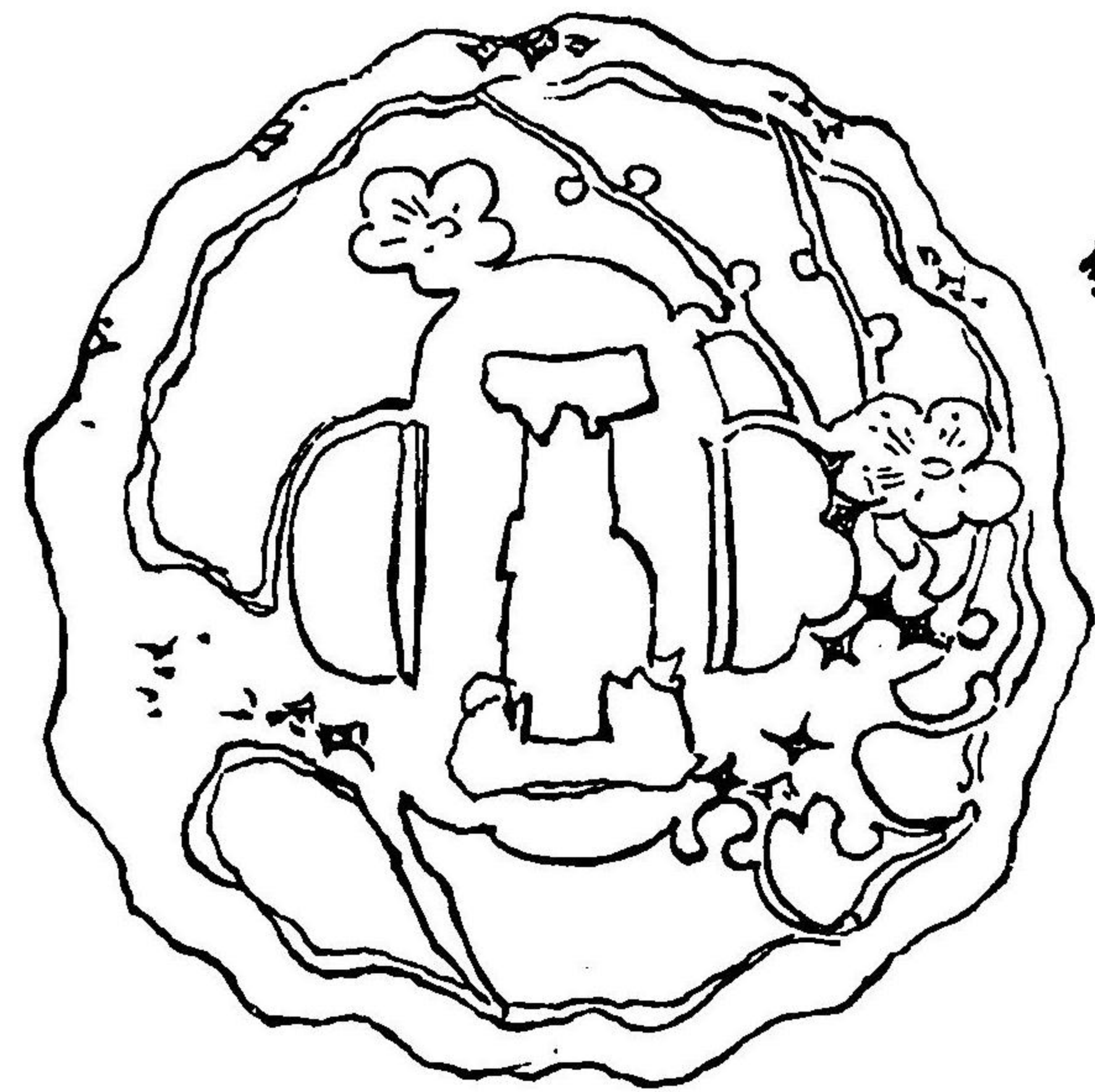
肉置畧上三同シ





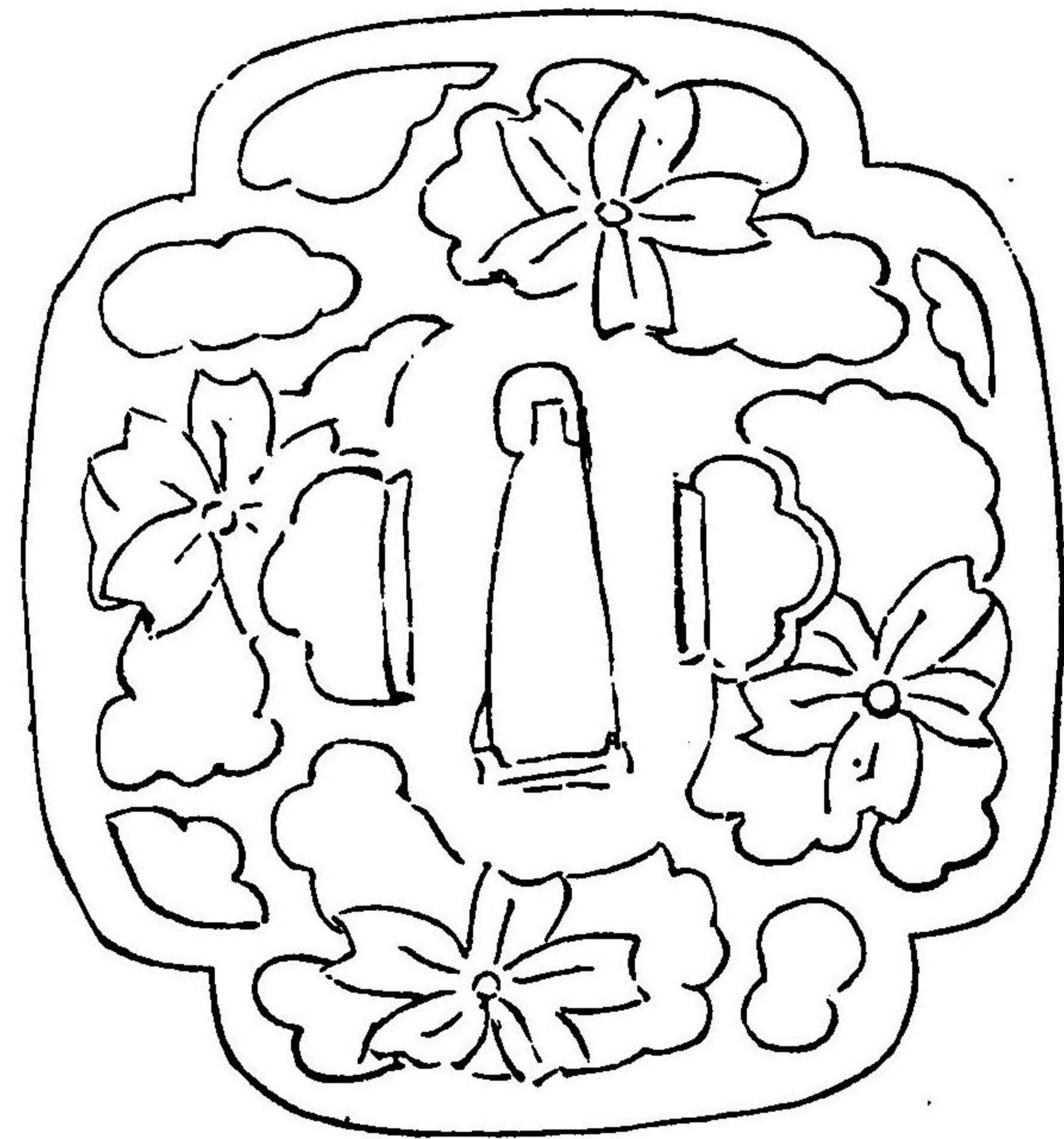
同作

此作類之



同作

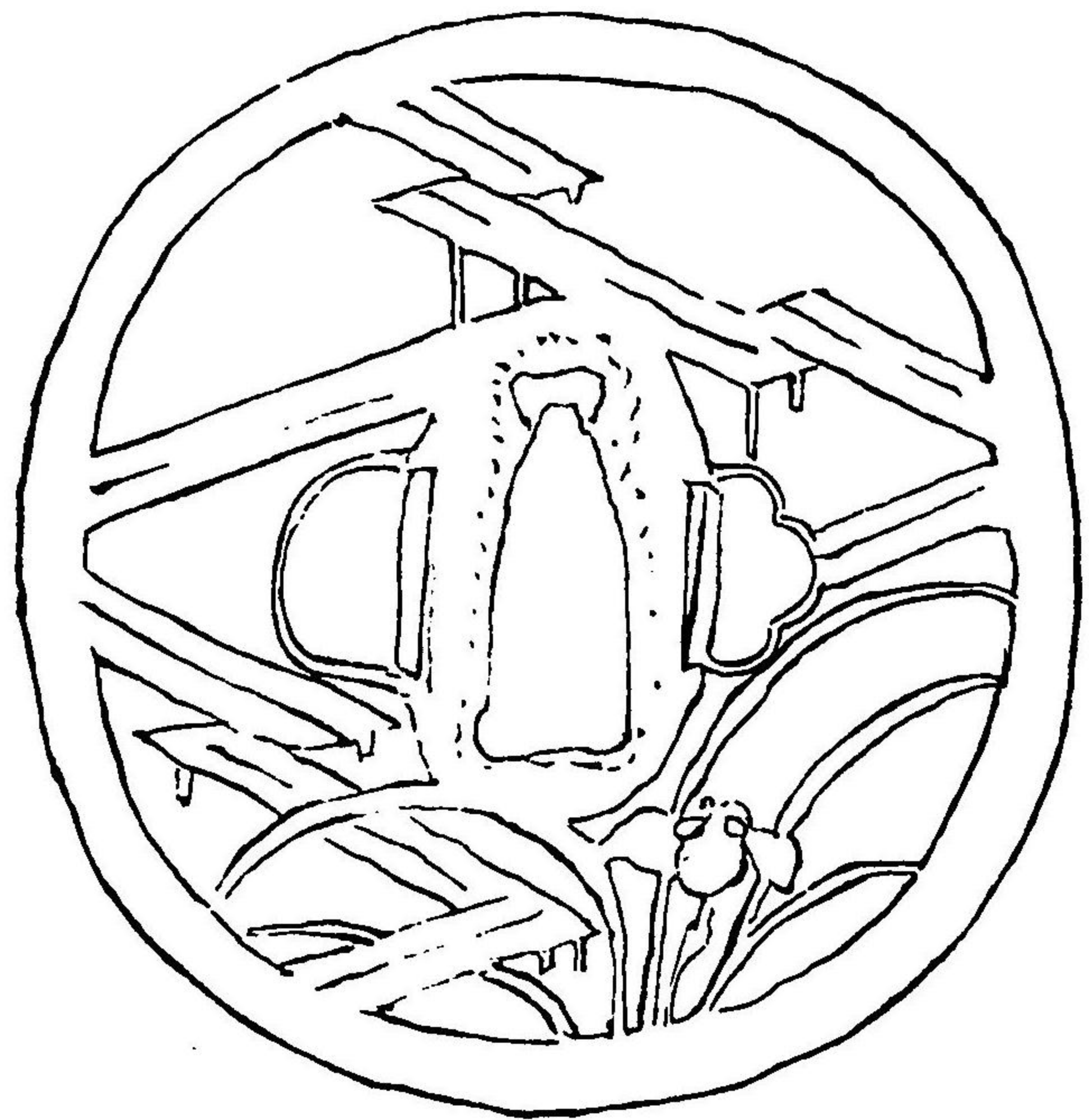
カツラ細キ金



同作



同作



同作  
耳角肉



同作  
身丸肉稍尖

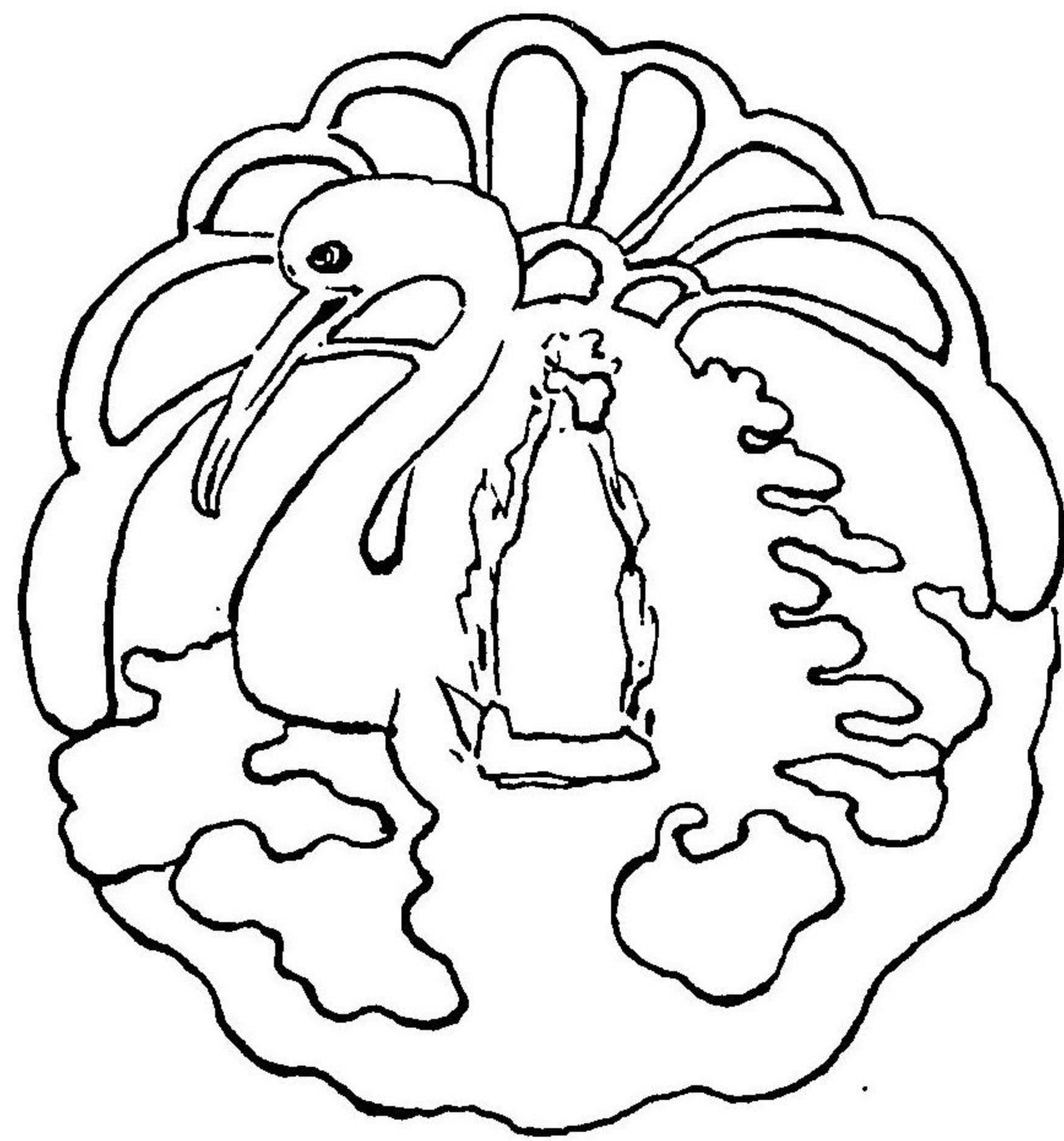
夕力不

同作

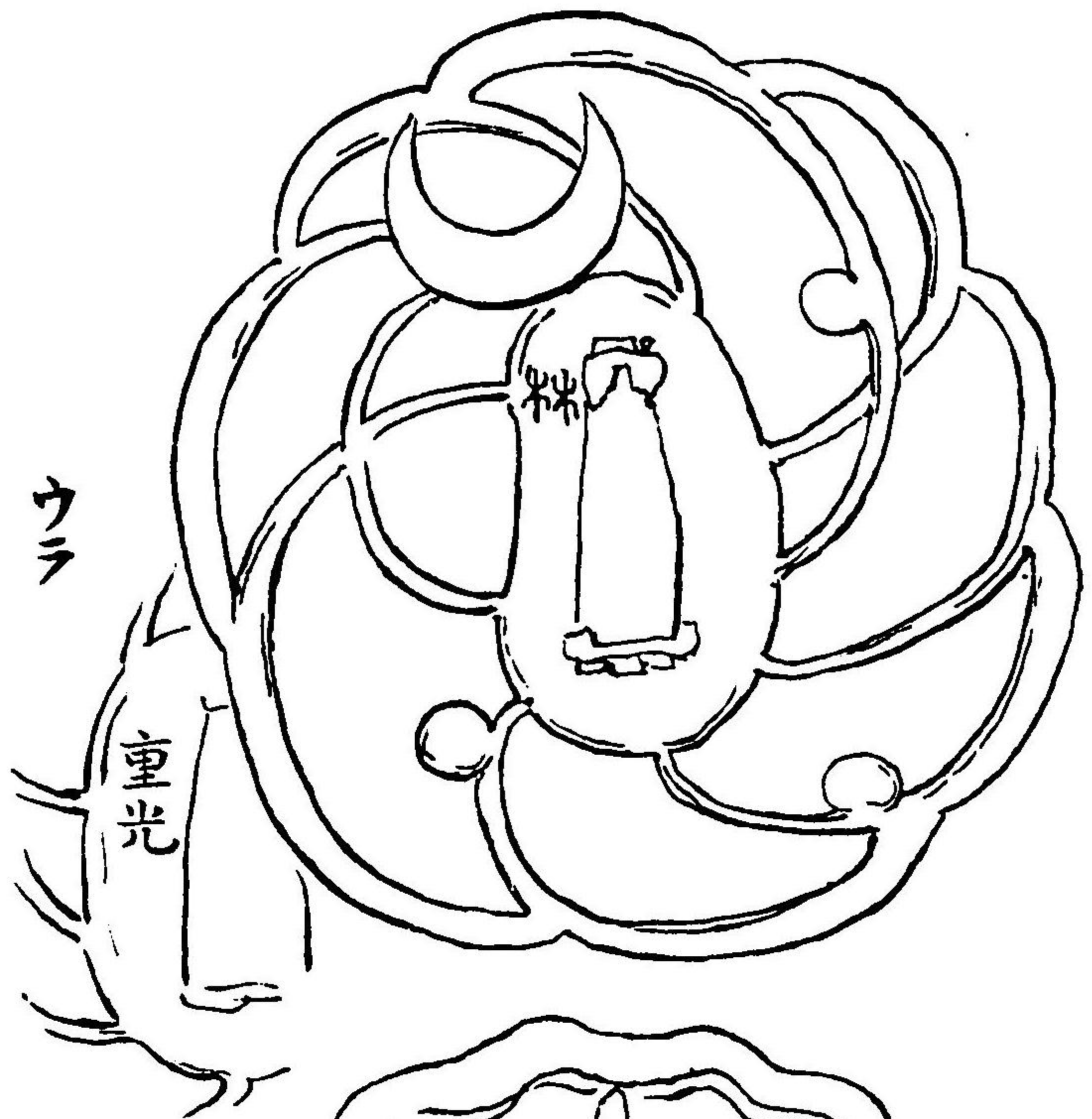


同作

眼真鉤



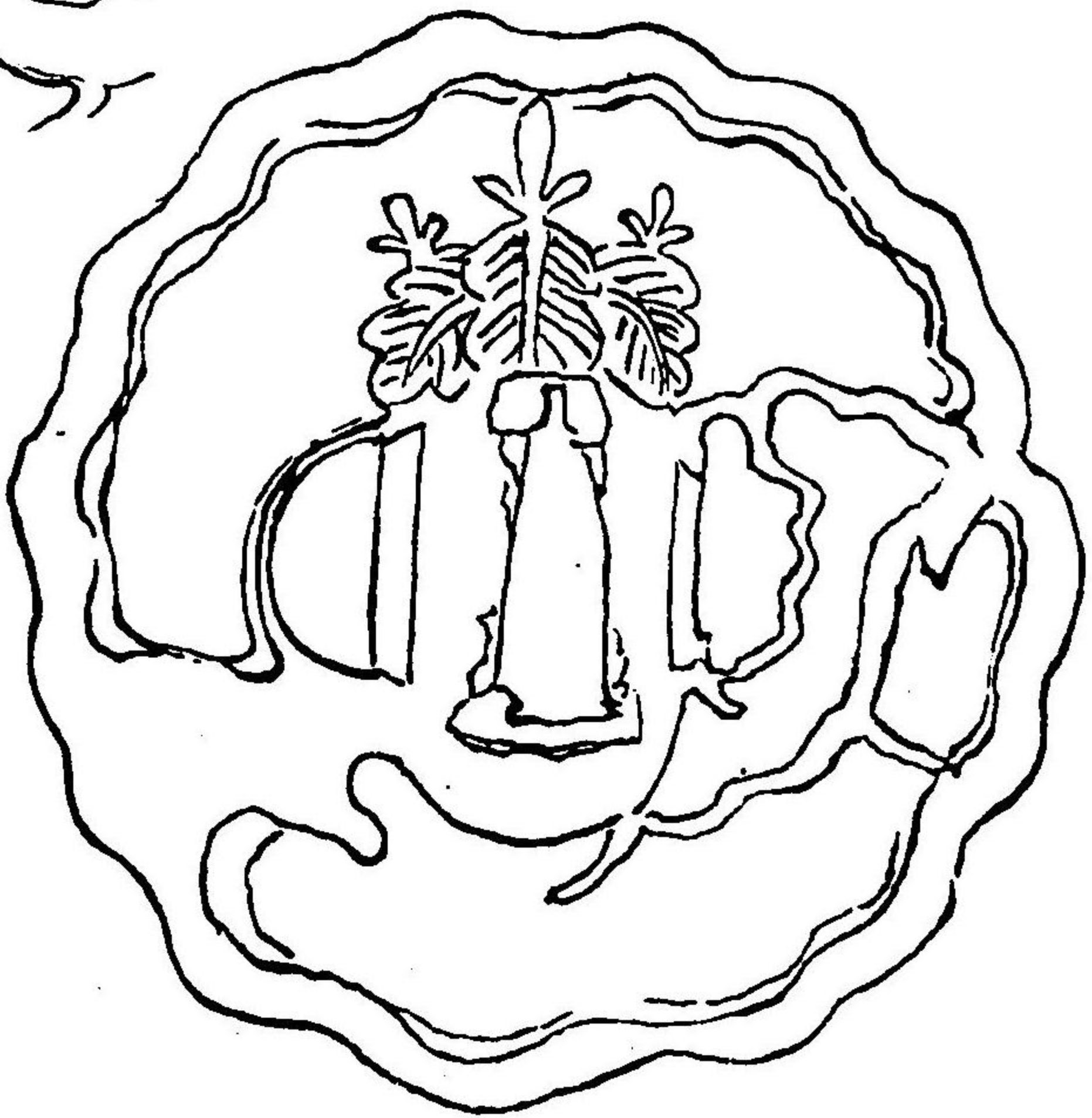
春日二代目作



ウツ

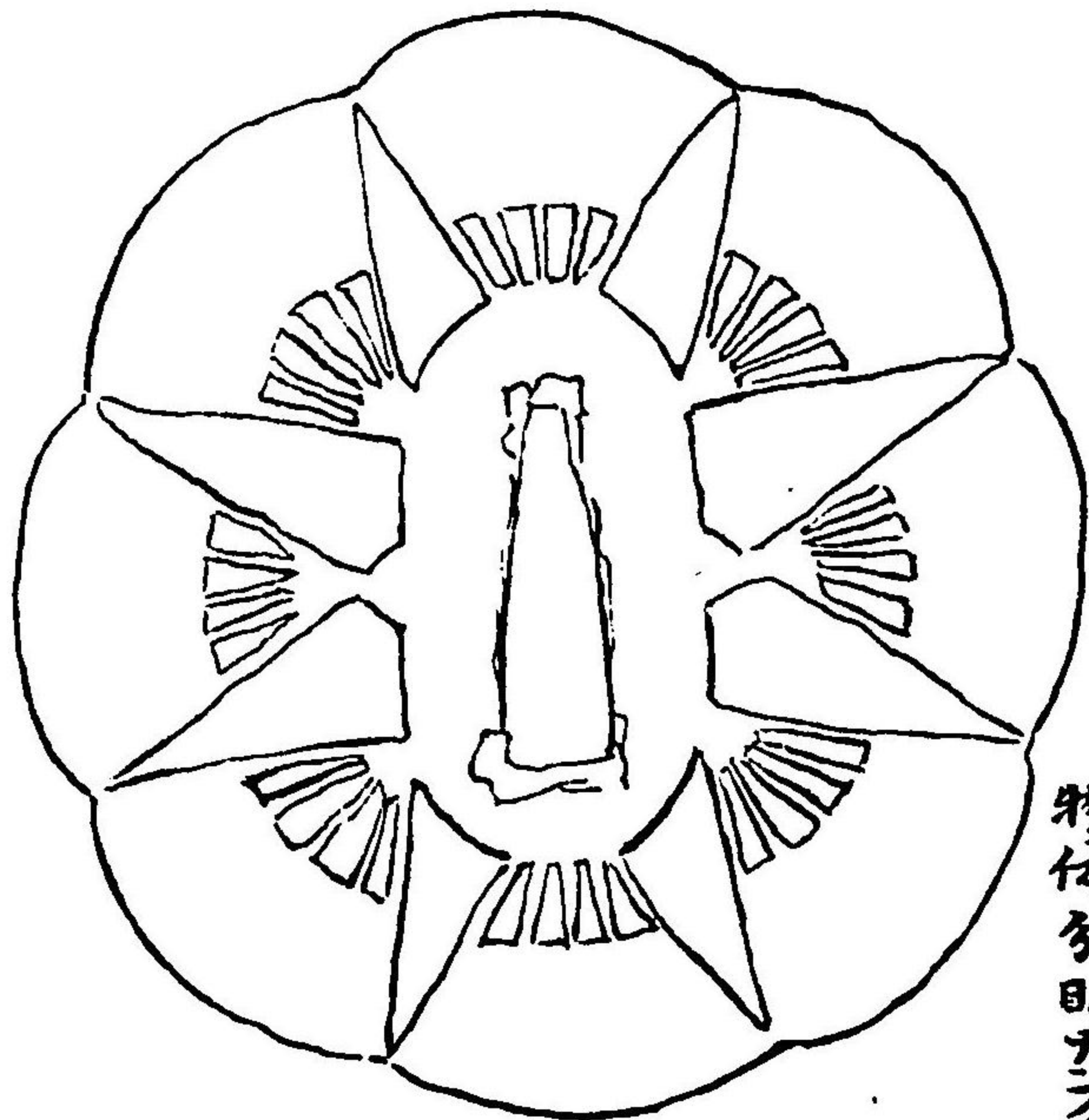
重光

門作



門作

耳稍角 元金家眼アリ今存スモノ  
物体不明ナラス



門作

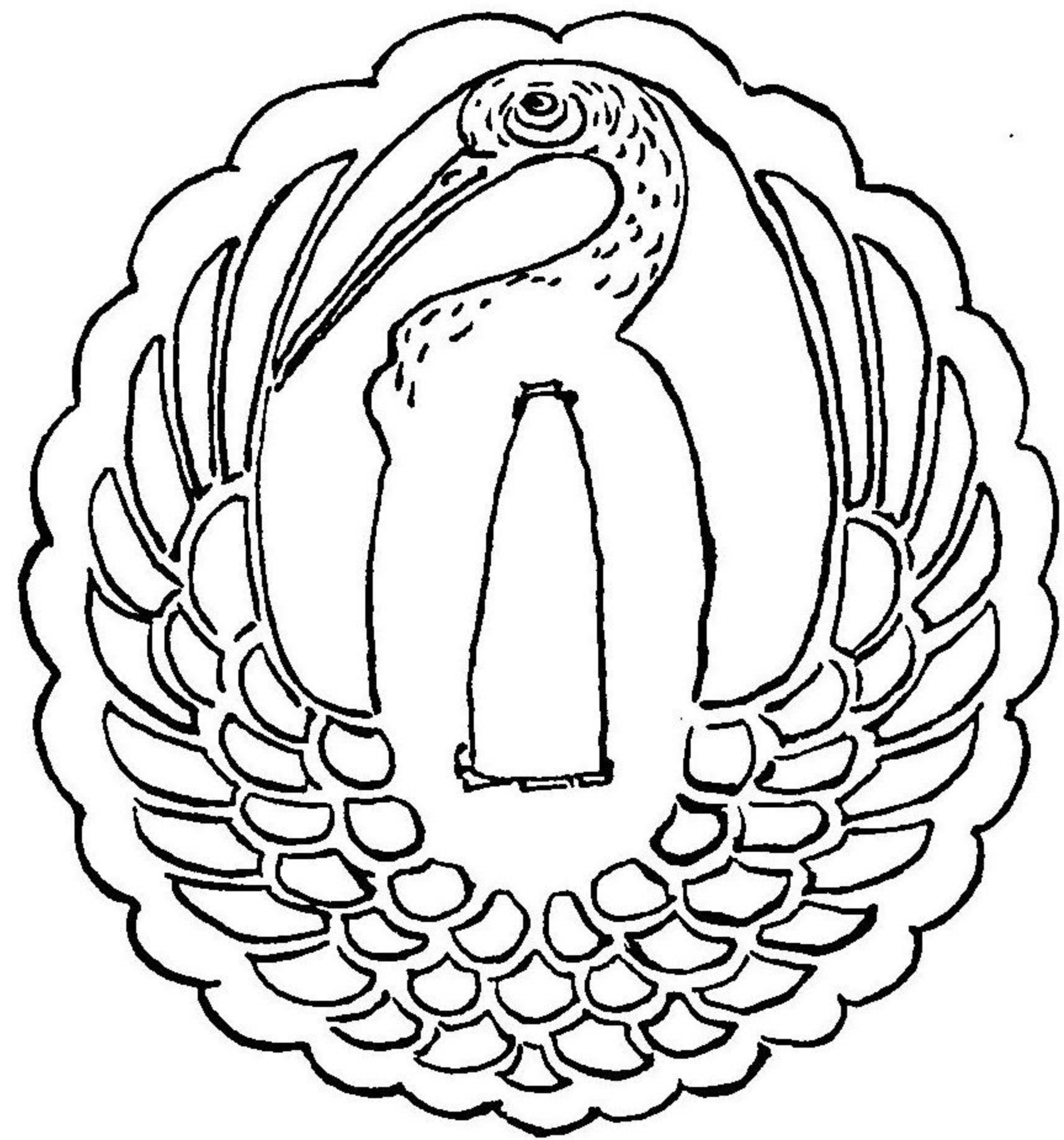


ウツ  
重光

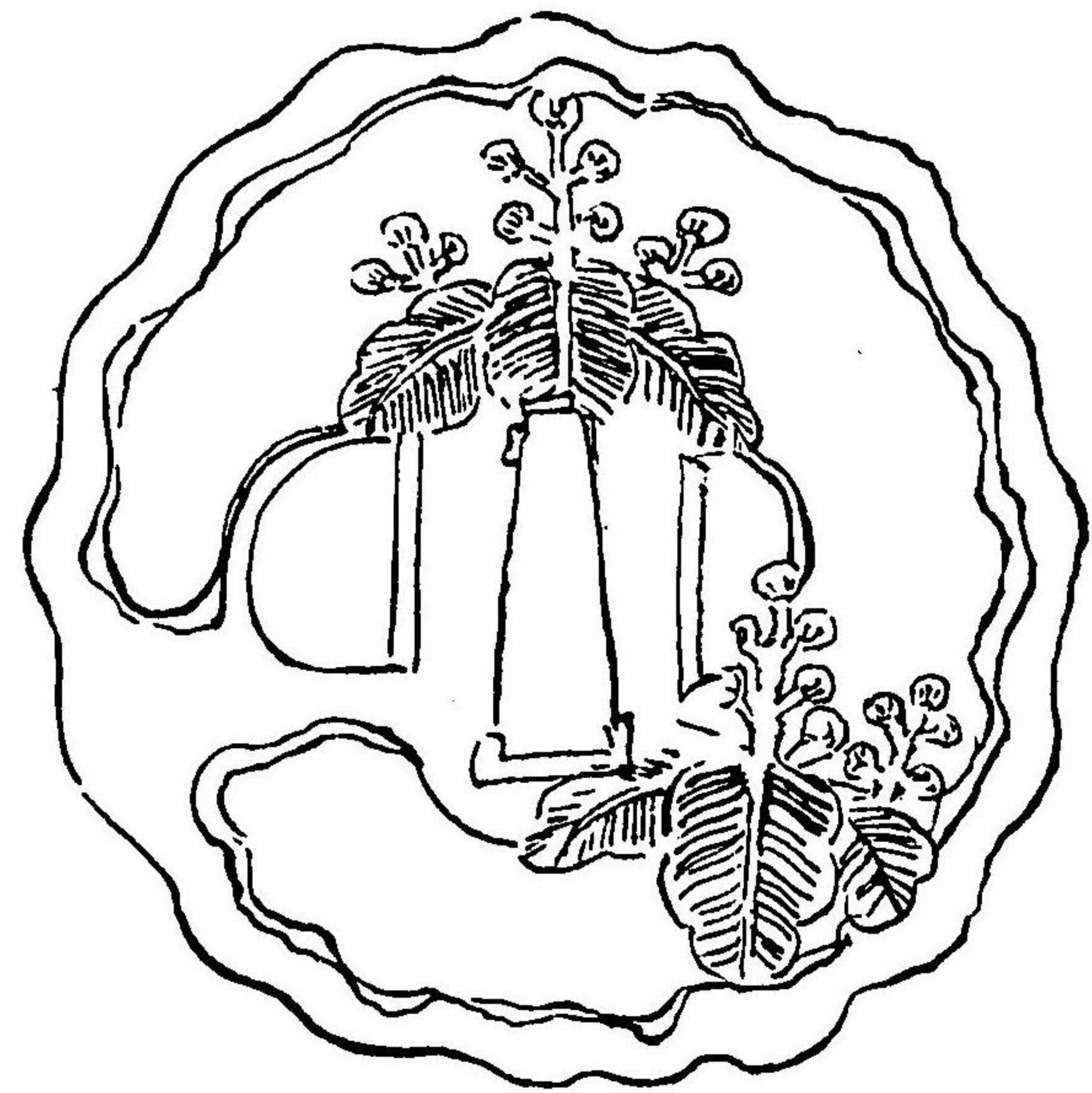


口作

身肉大ニ尖ル

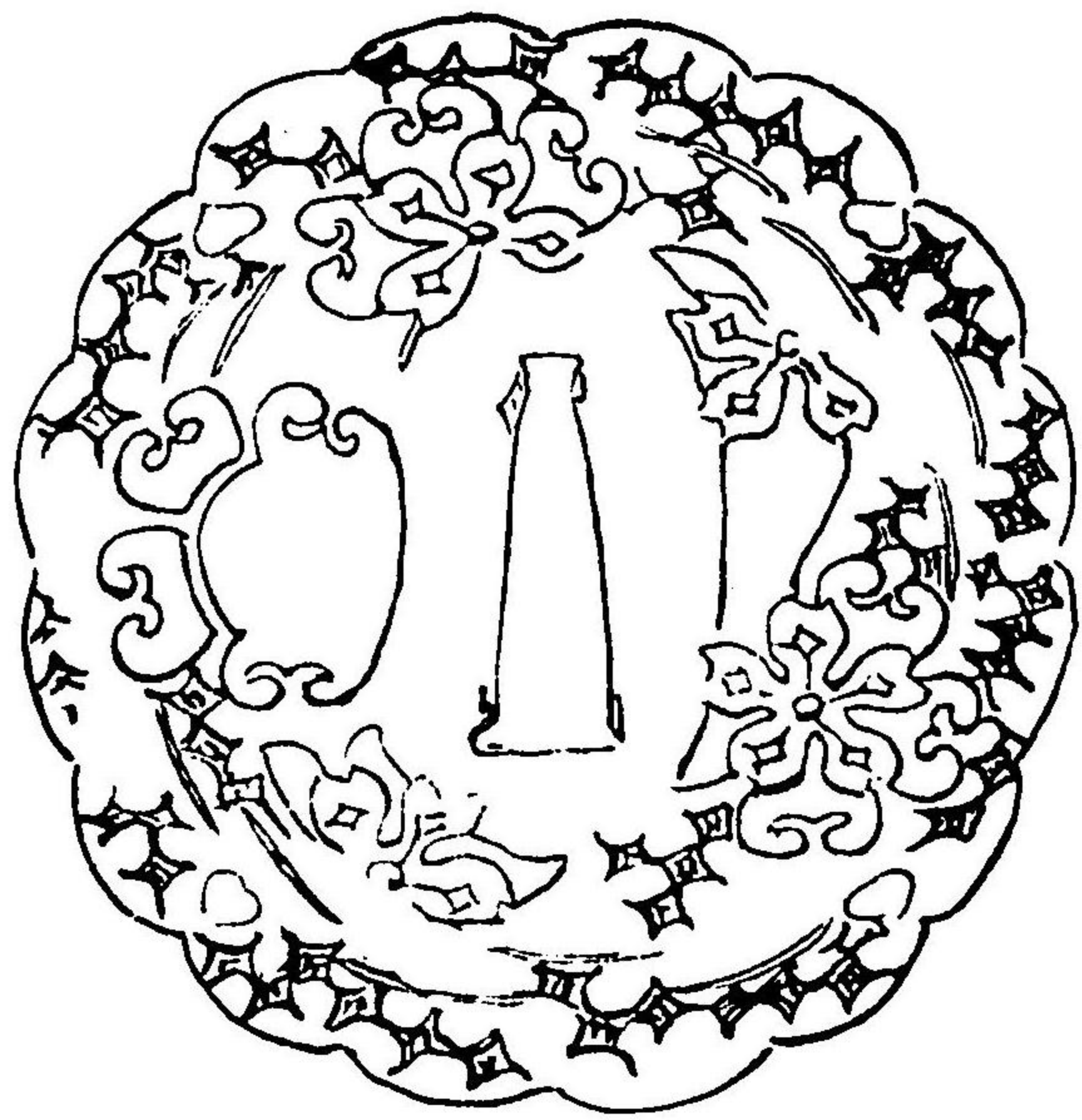


口作



春日三代目作

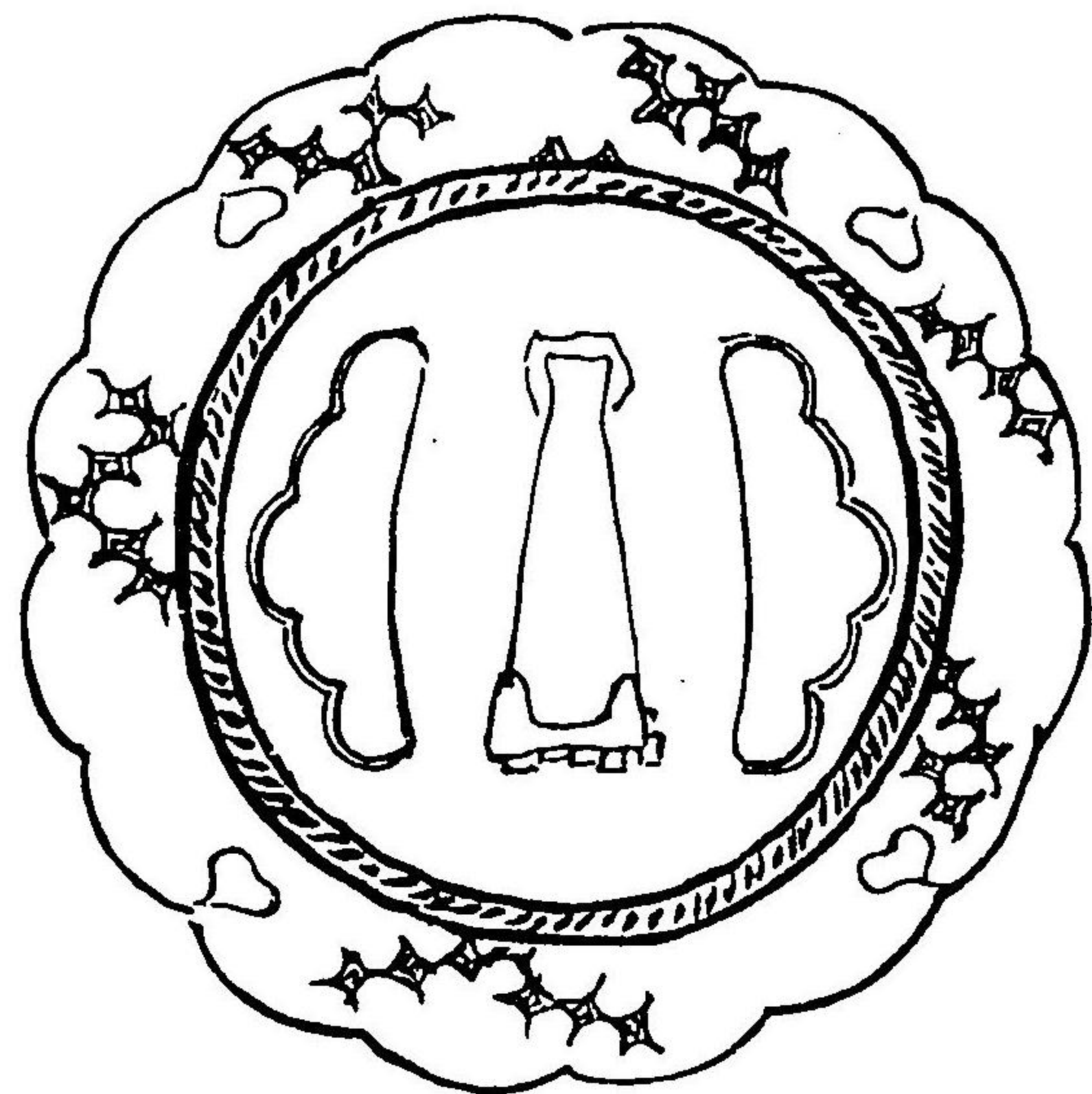
櫻殿共ニ透ニ首菱金



コソト

口作

首菱金繩銀鉤ヨリ合セ  
繩外形深シ



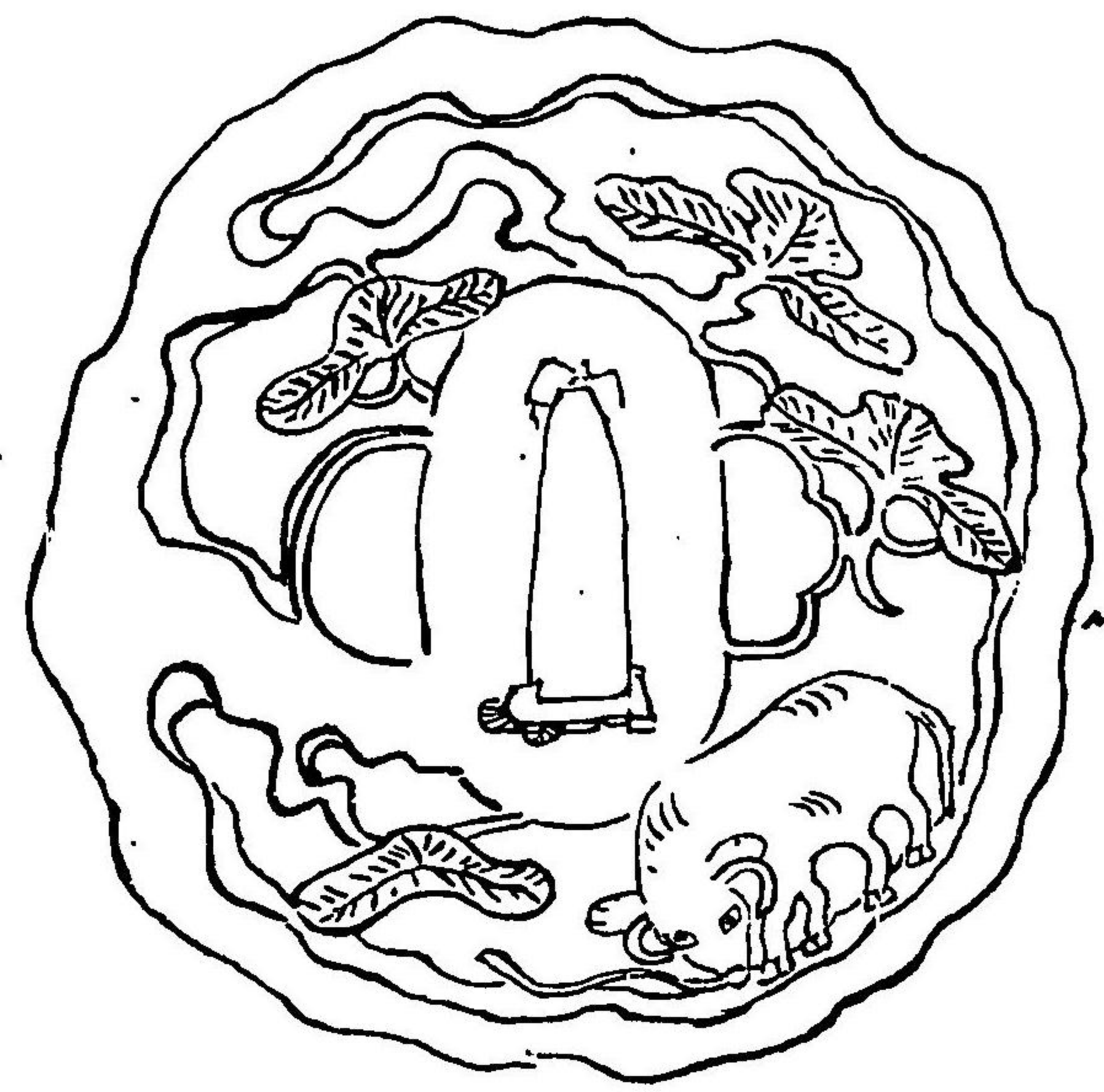
ウラハ

口作



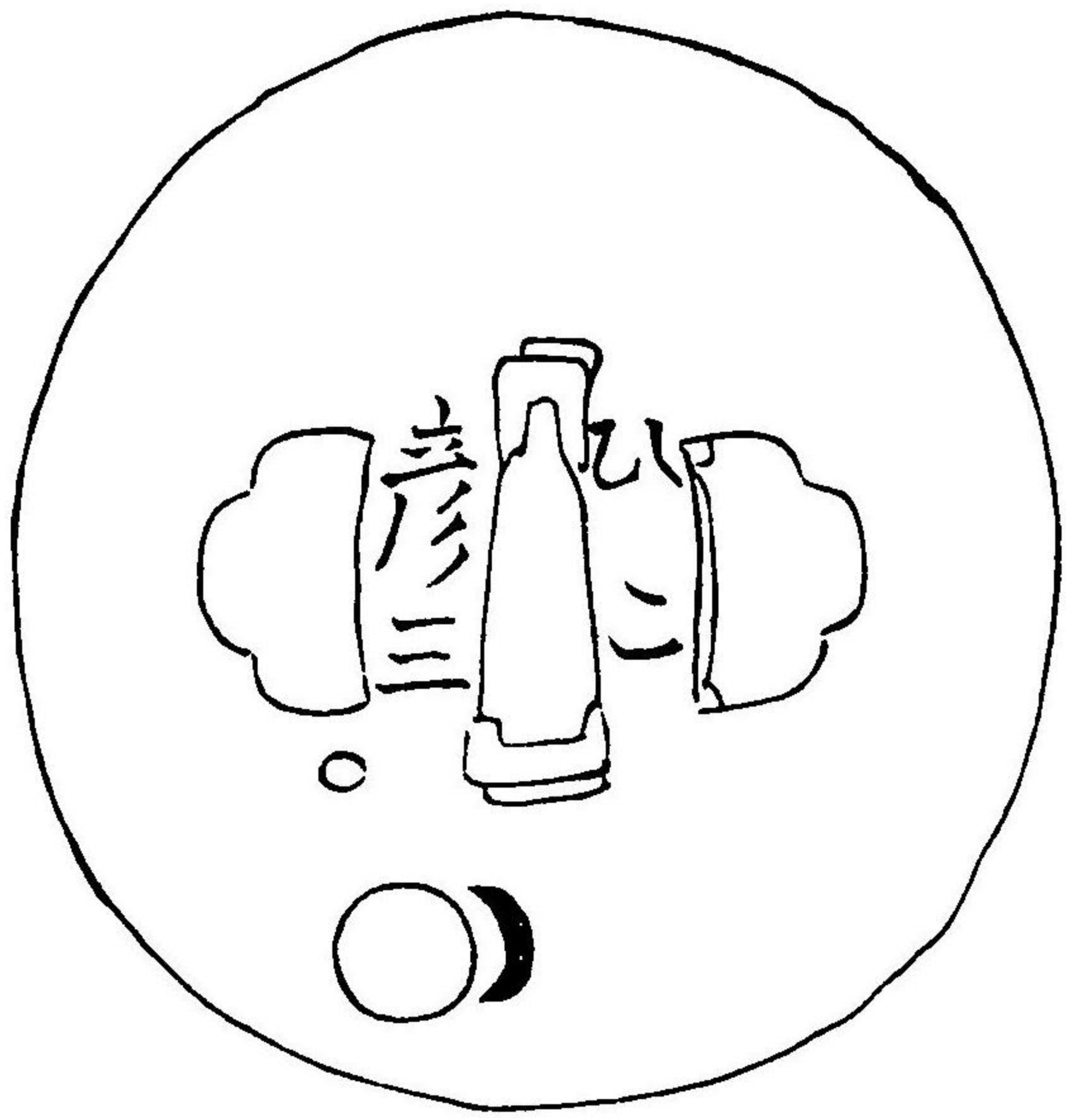
口作

(初代控毛)



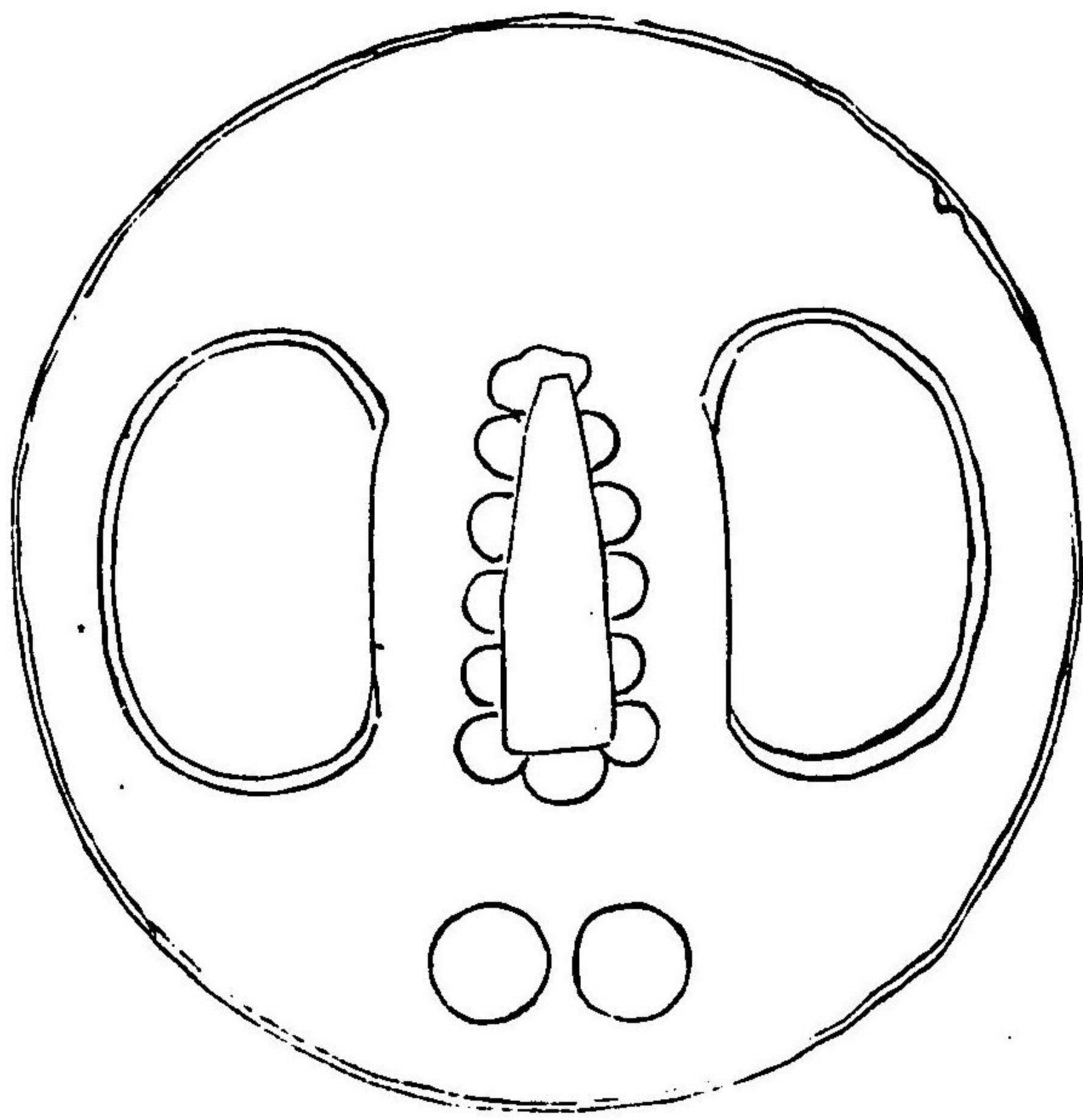
平田初代作

耳薄キ方 三光内日星透月彫



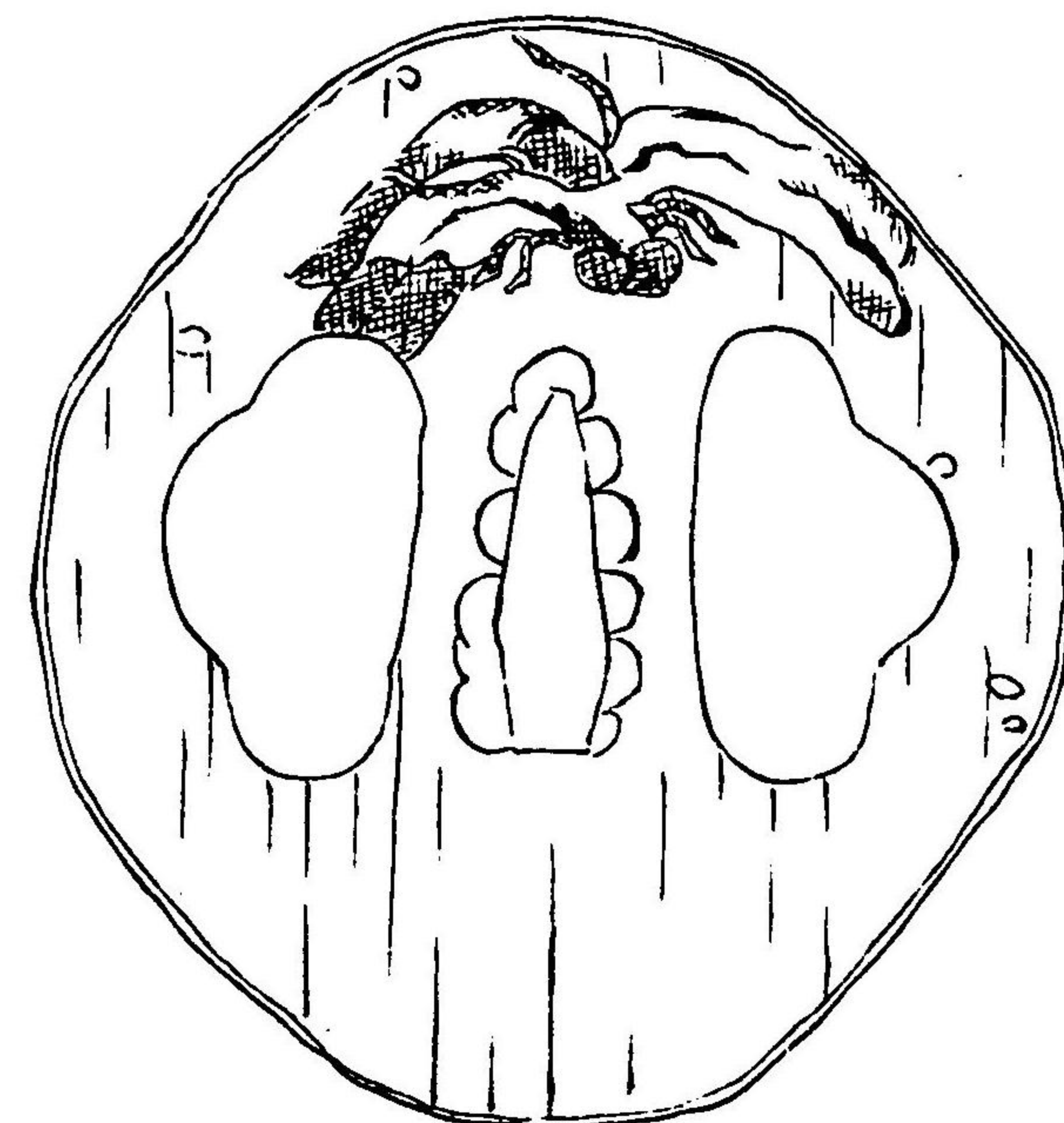
口作 銅

耳及櫃際若キ透ニ地ニカキ



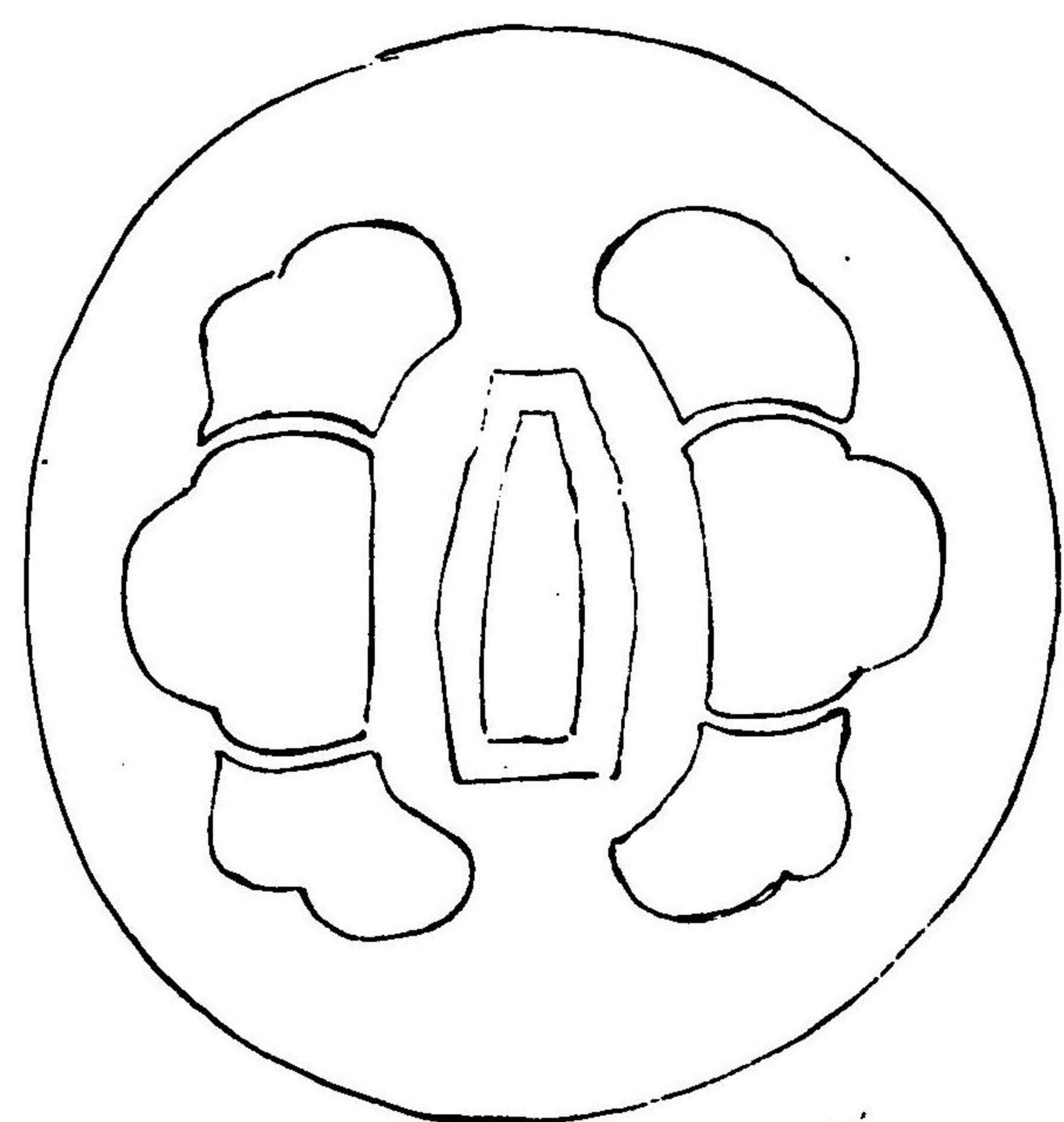
口作 真鍮

彫上銀布目象眼 時雨毛ナリ



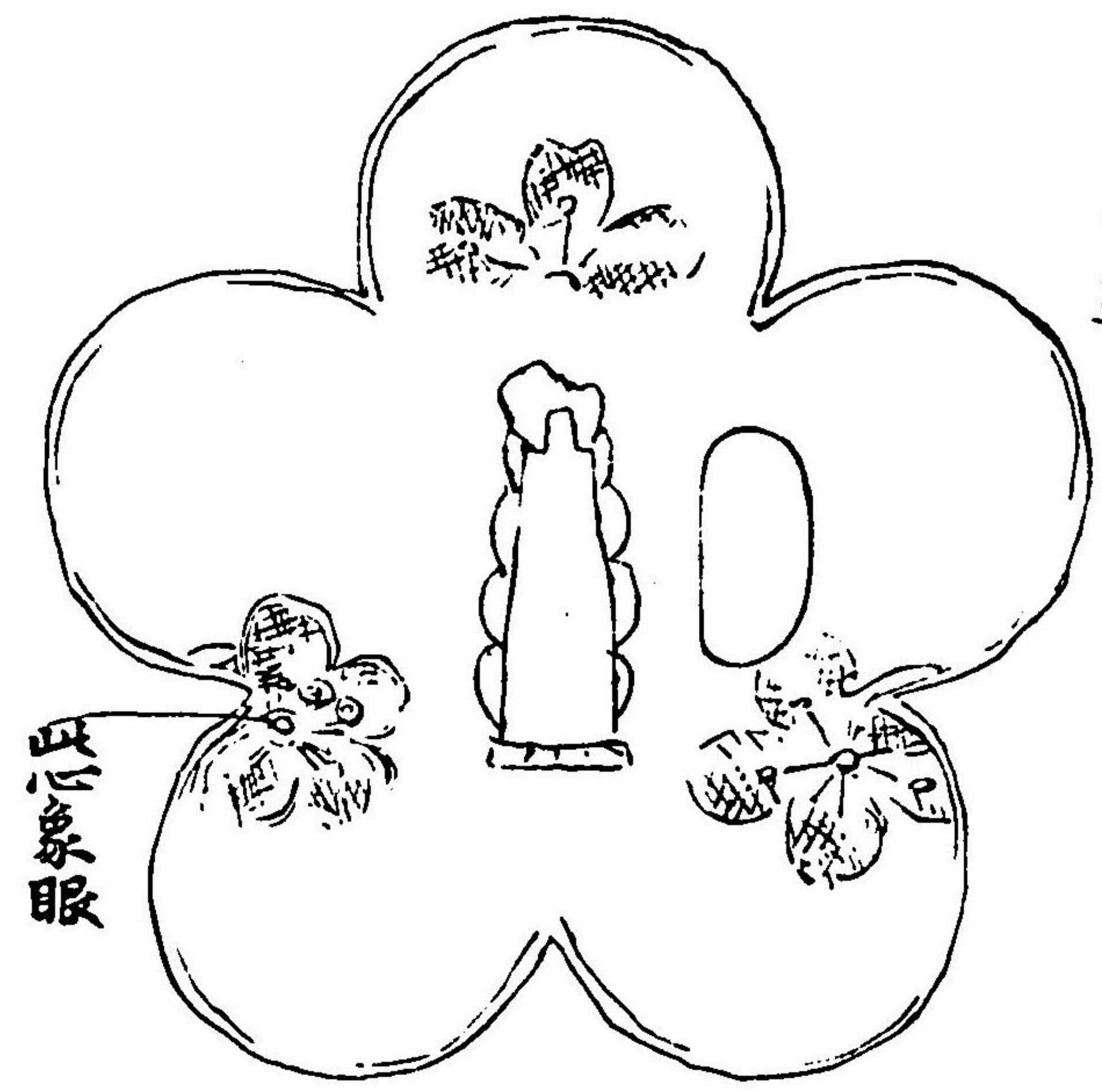
ウラ口 但蜻蛚仰ク

口作



口作

耳打返 金布目象眼

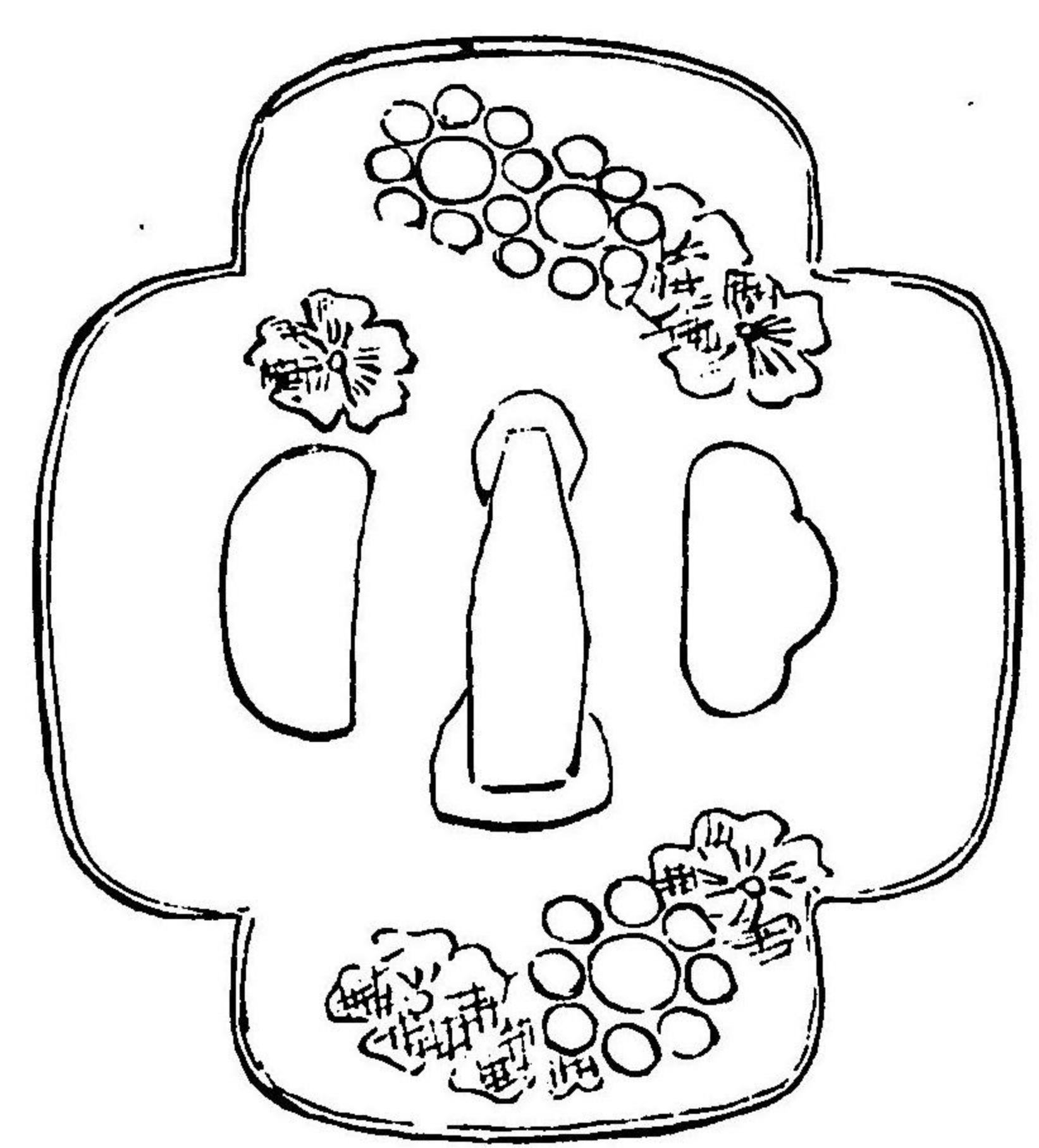


ウラ口

象眼

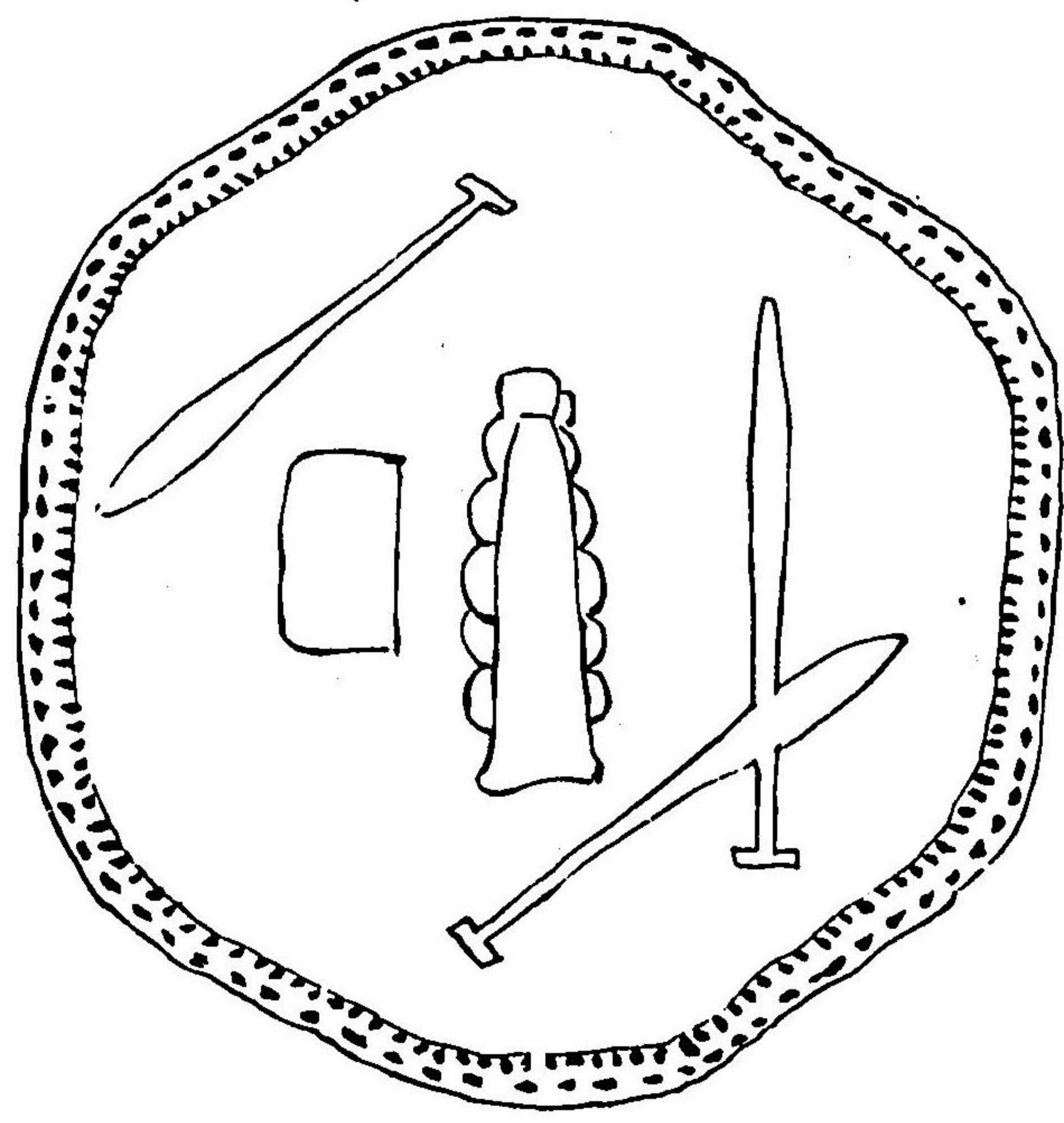
口作

耳打返 九曜透櫻花金銀布目

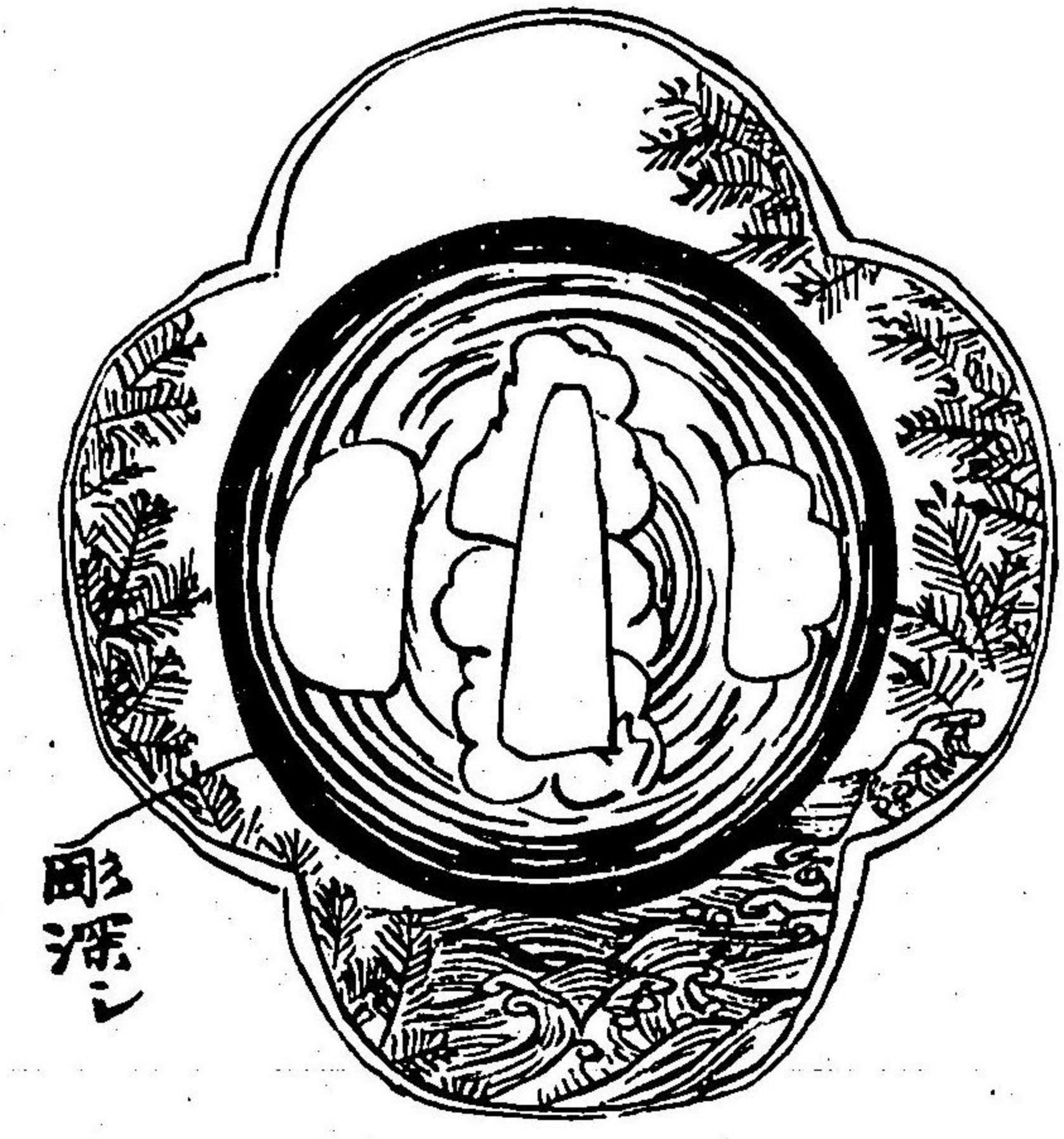


ウラ口

門作 鳥鉤  
カニ透 曲原覆輪真鍮



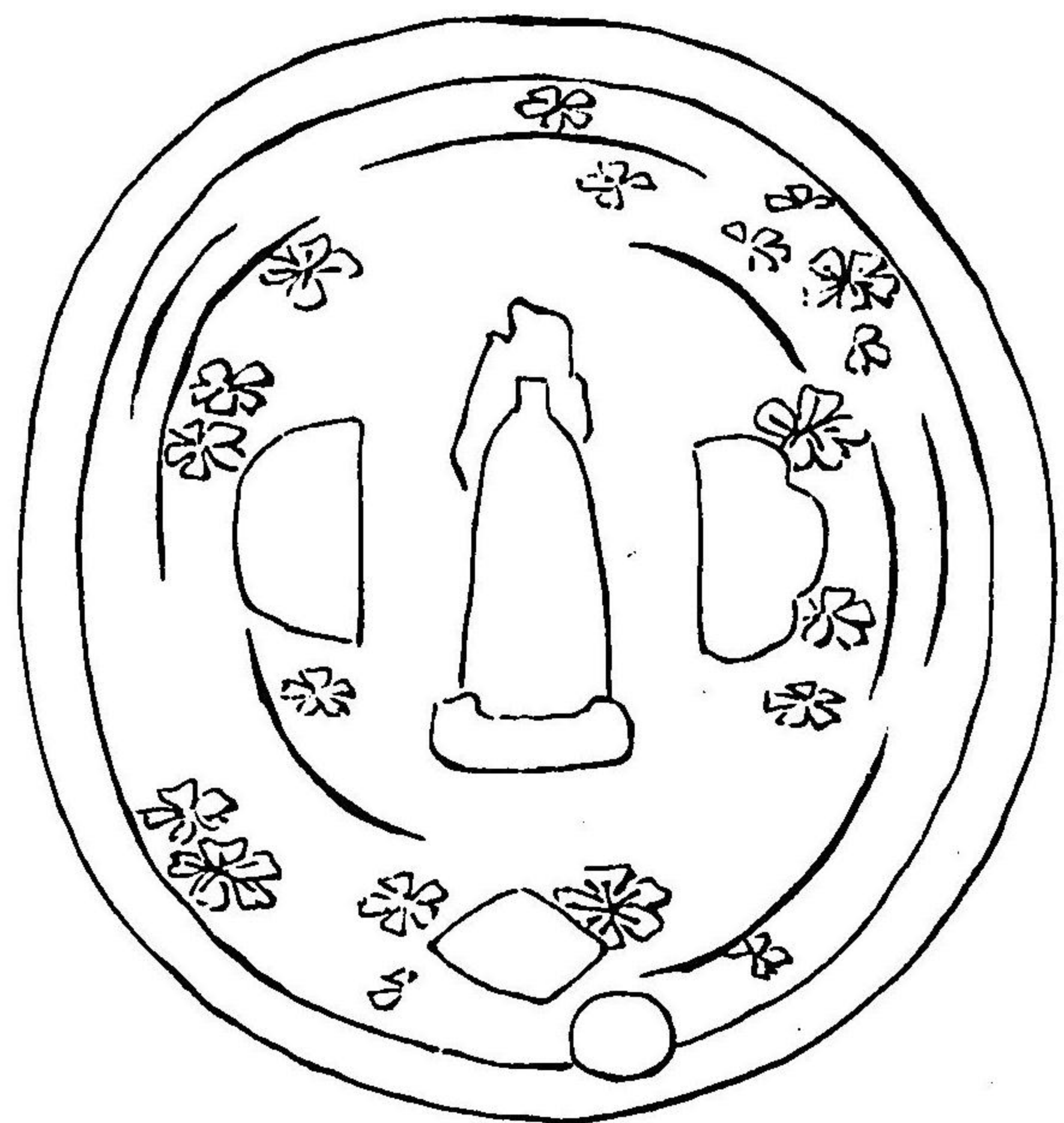
門作 鉤  
浪彫上松金ケシ込象眼



ウラロ

門作

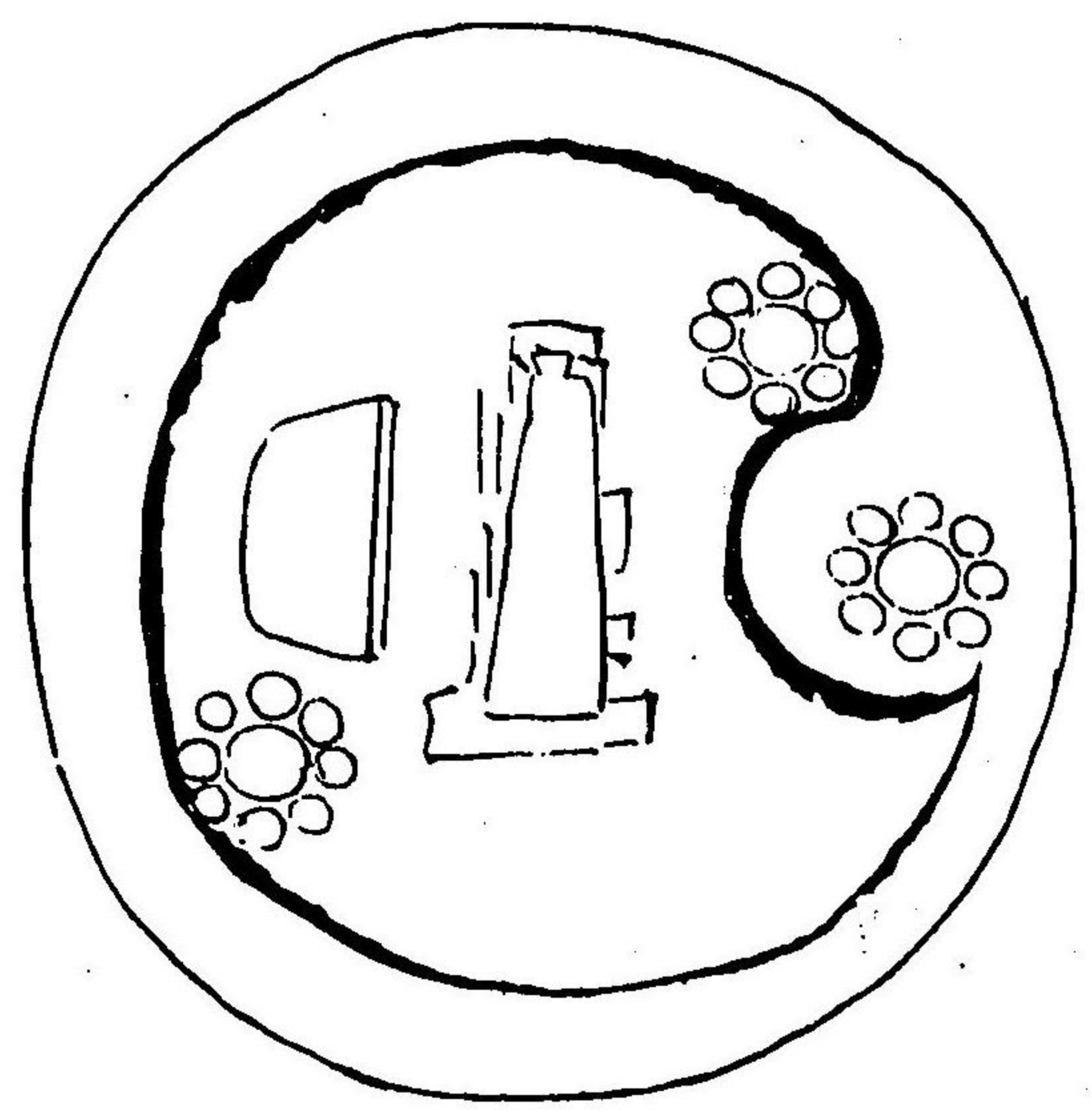
花金布目霞彫 覆輪四分一



ウラ花十三

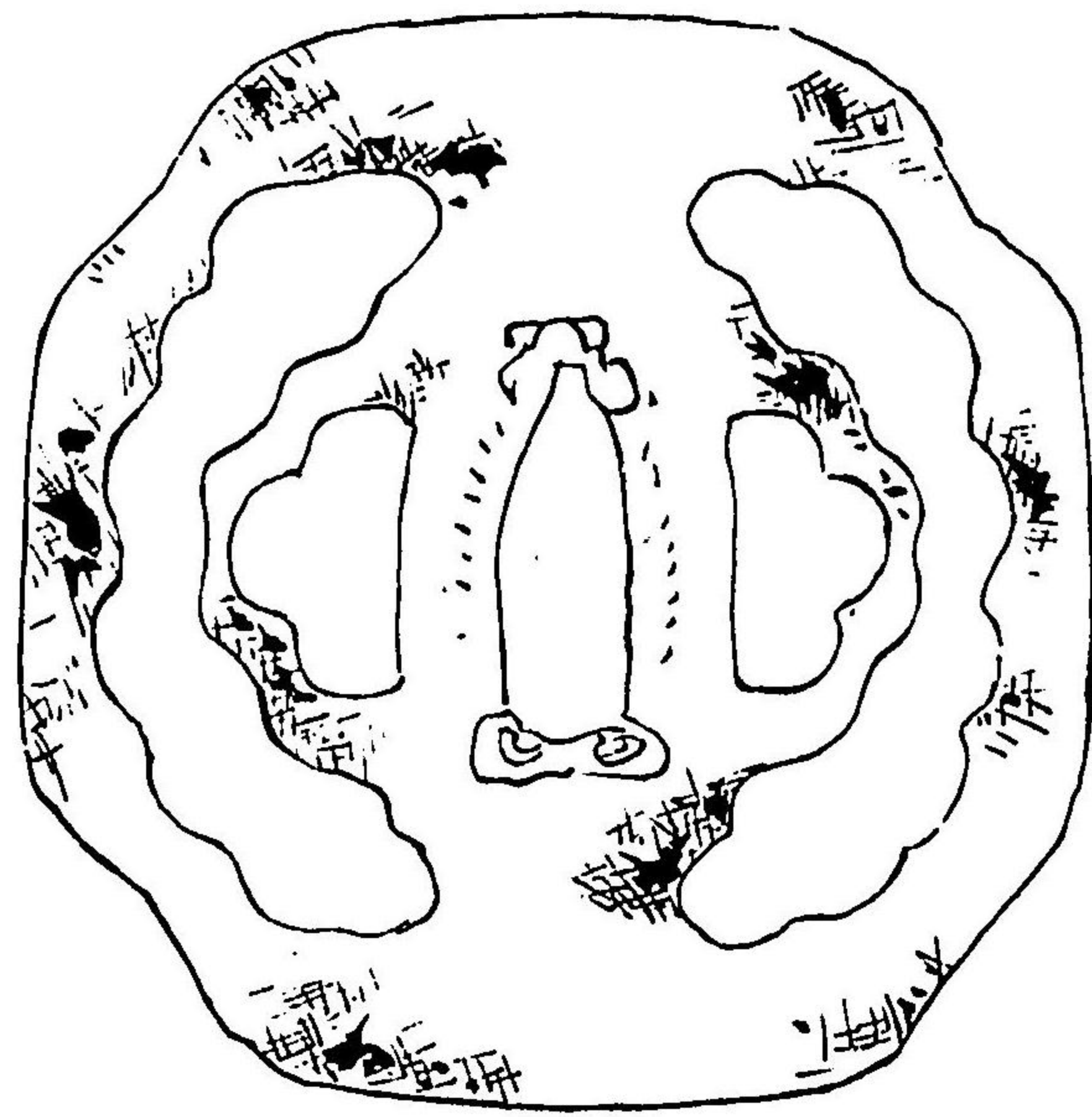
門作

巴彫紋真鍮拵物



ウラロ

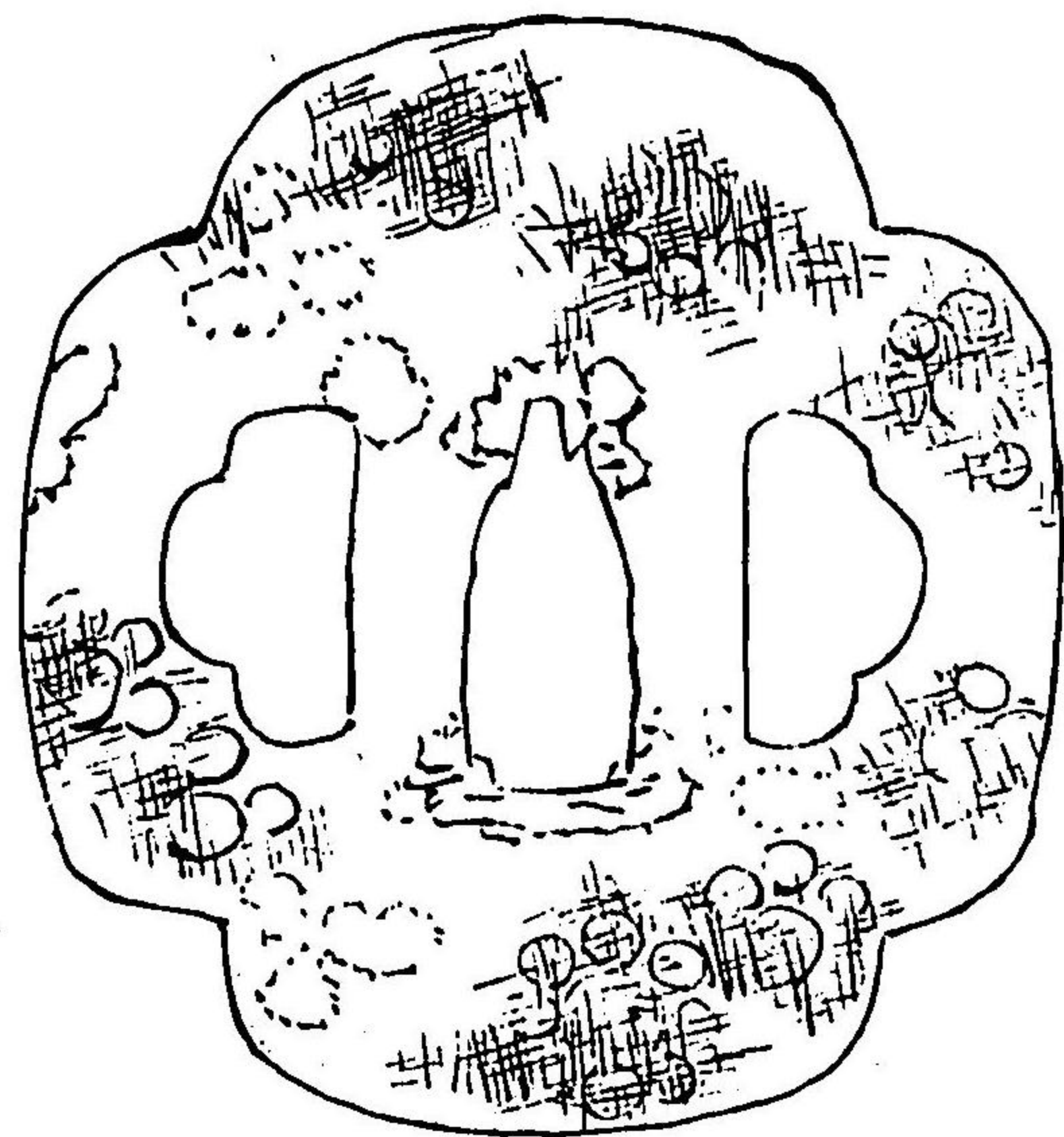
ウラコ



口作

金散紙象眼

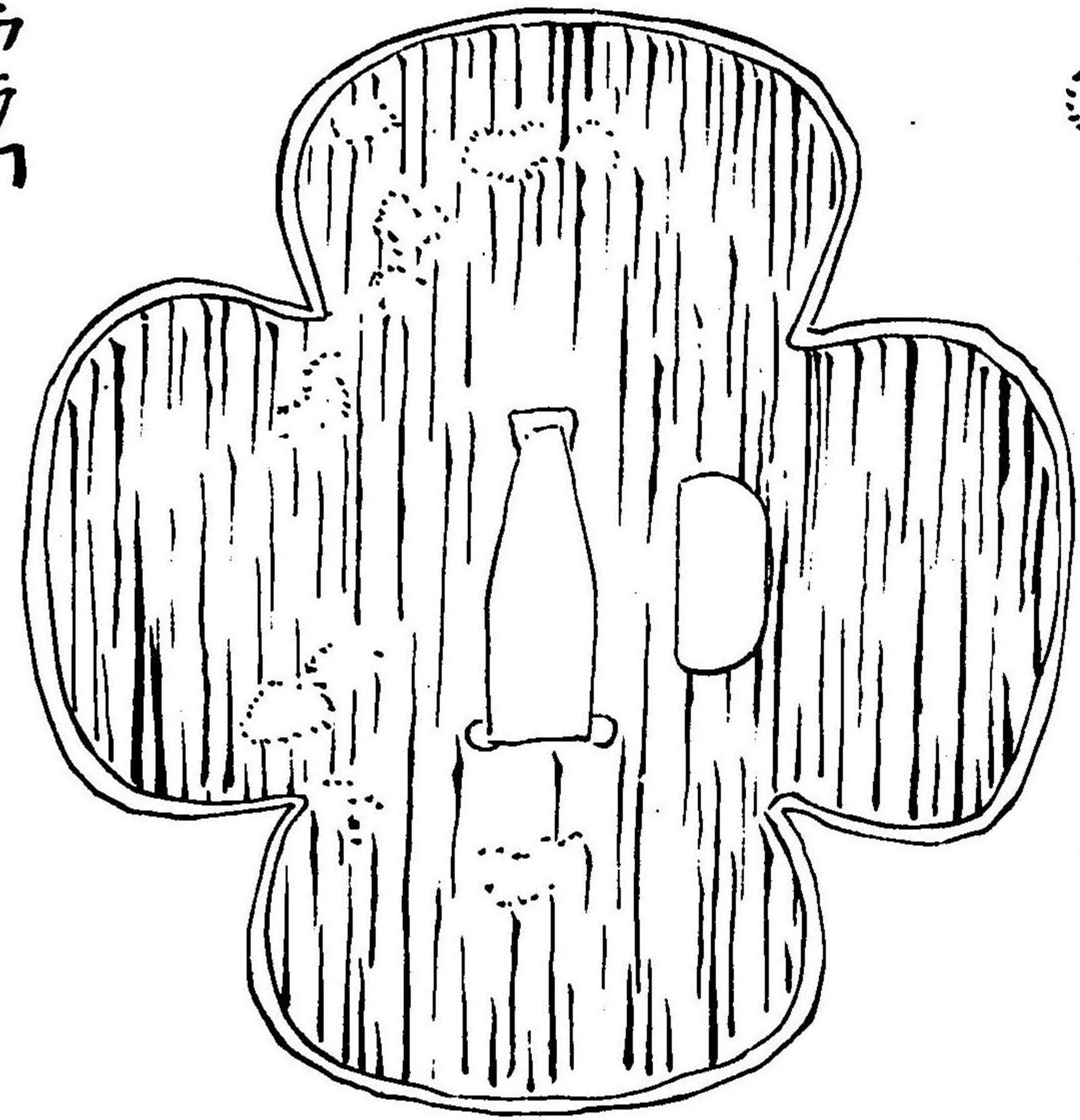
ウラコ



口作

九曜銀布目

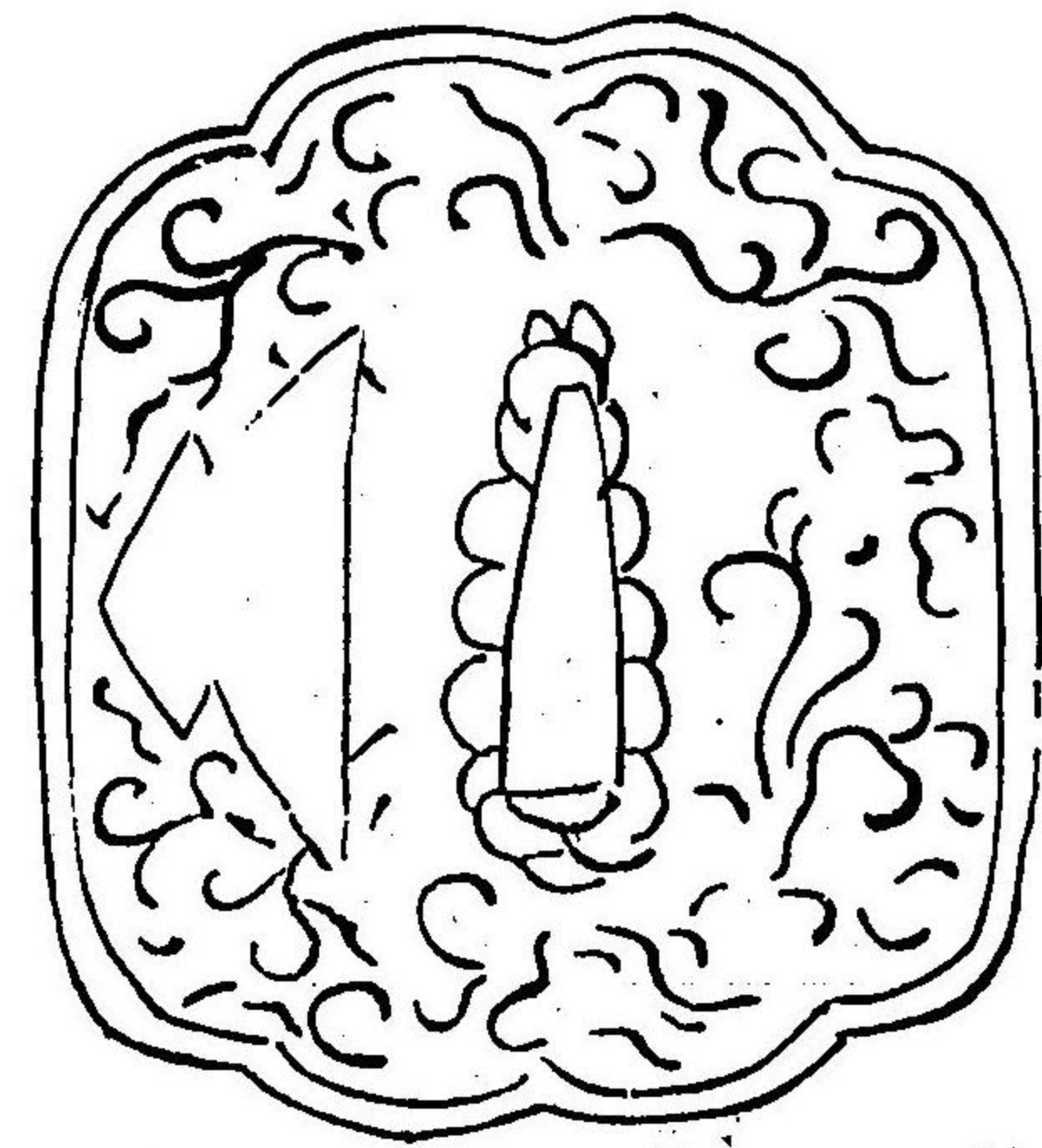
ウラコ



口作

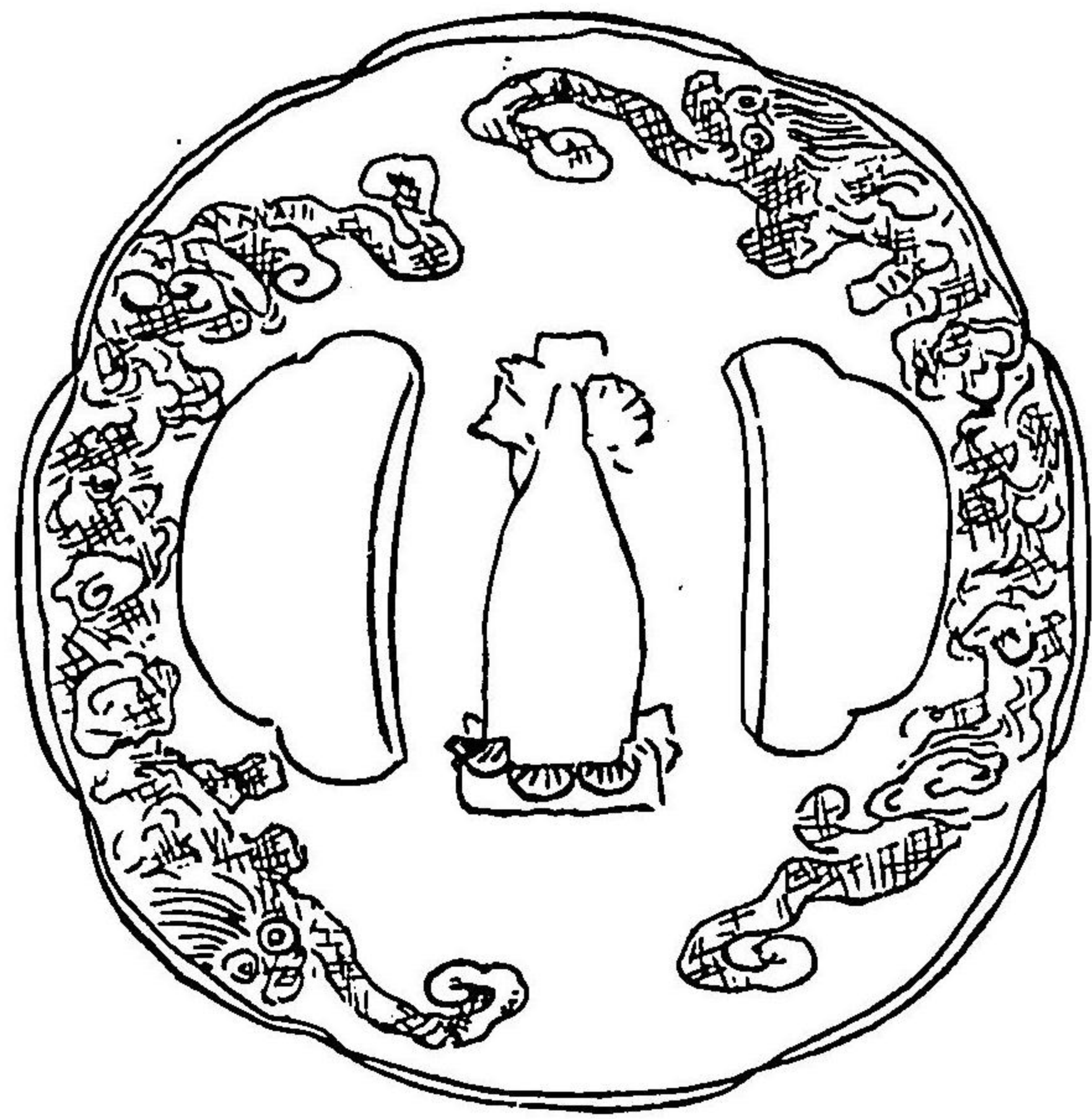
ヤキ手タラシ 時雨彫覆輪赤銅

ウラコ



口作 釘

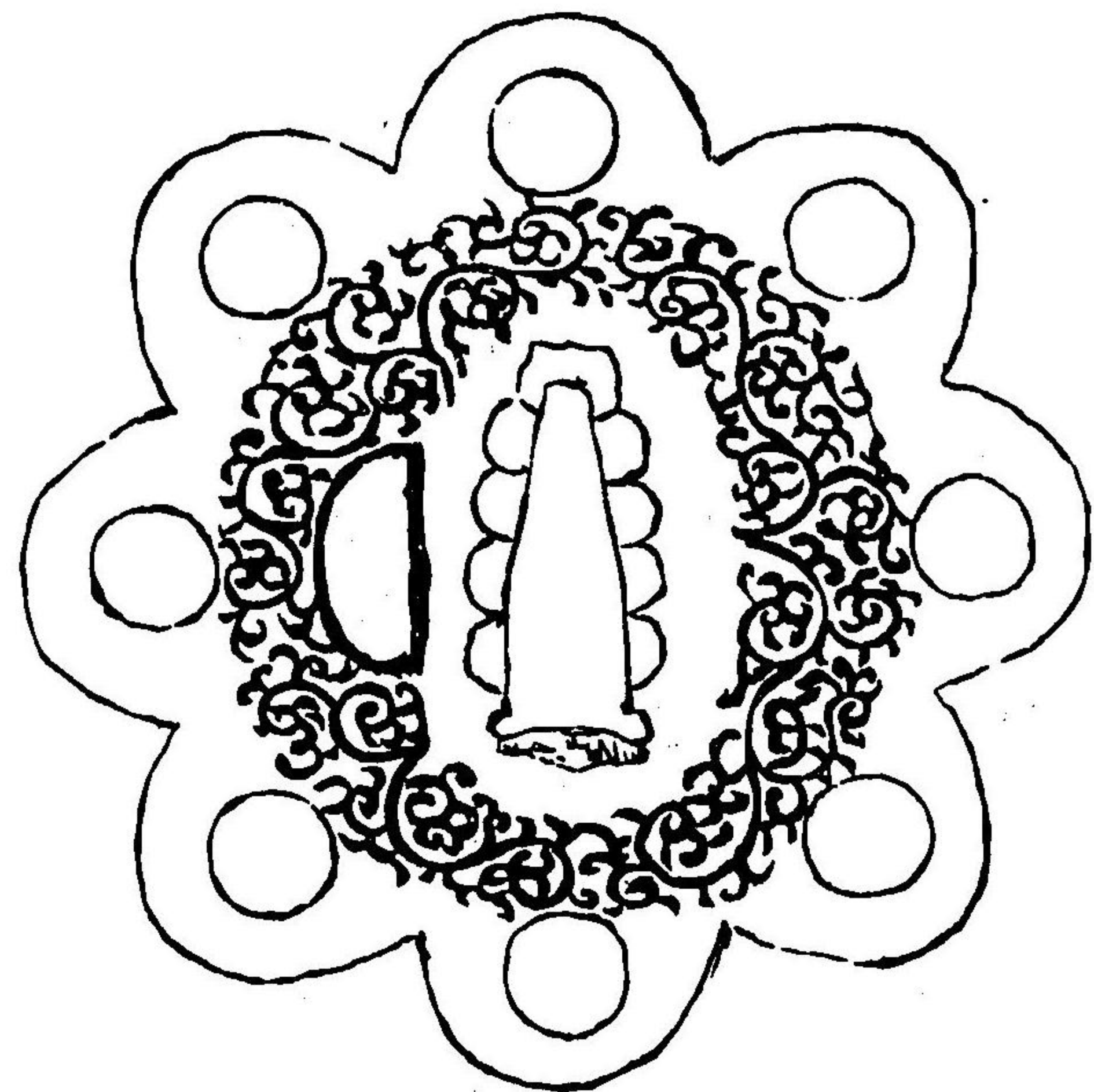
象眼赤銅ホリ込 覆輪赤銅



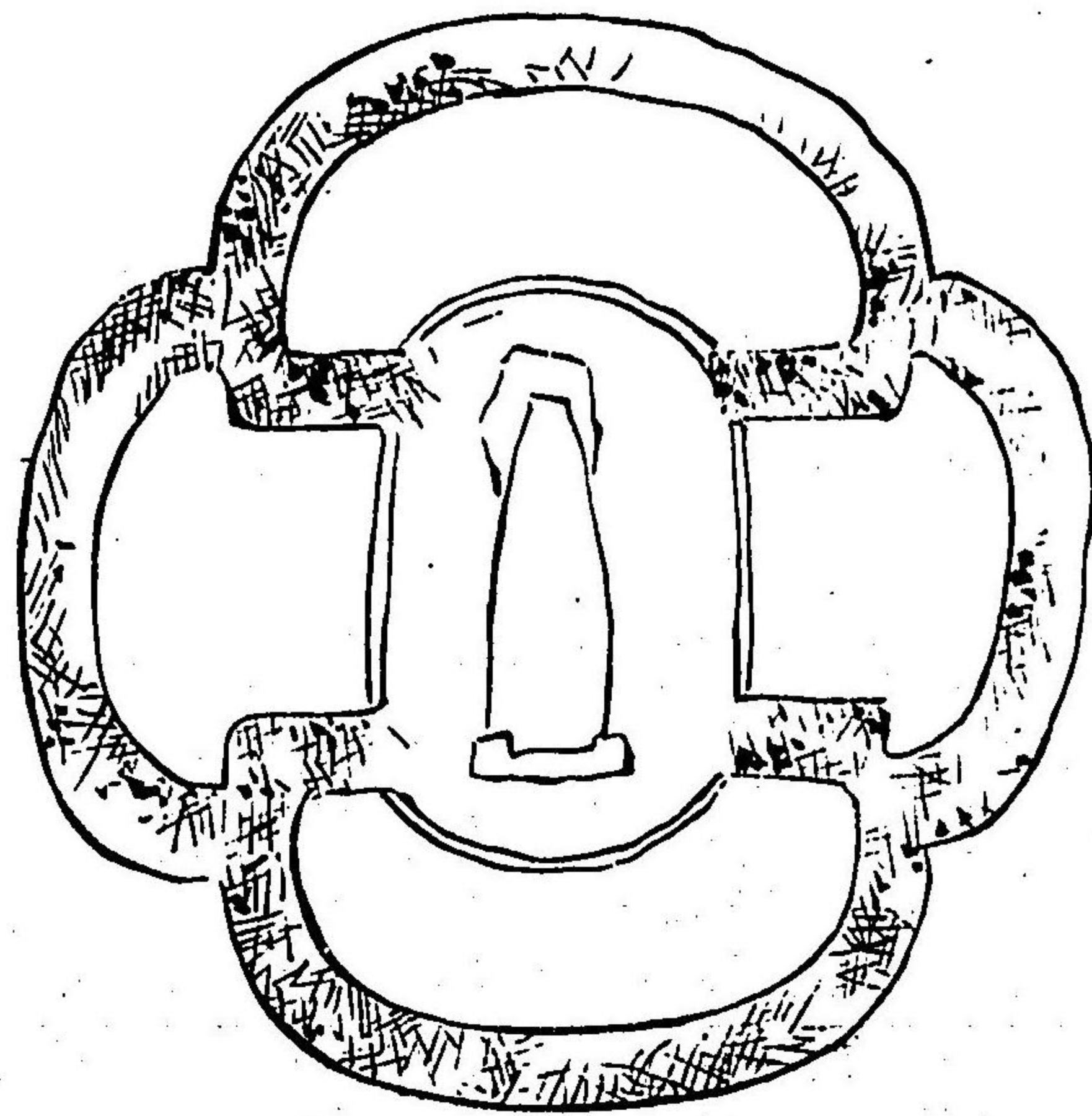
西垣初代作  
眼及鬚共三金全身及雲銀布目



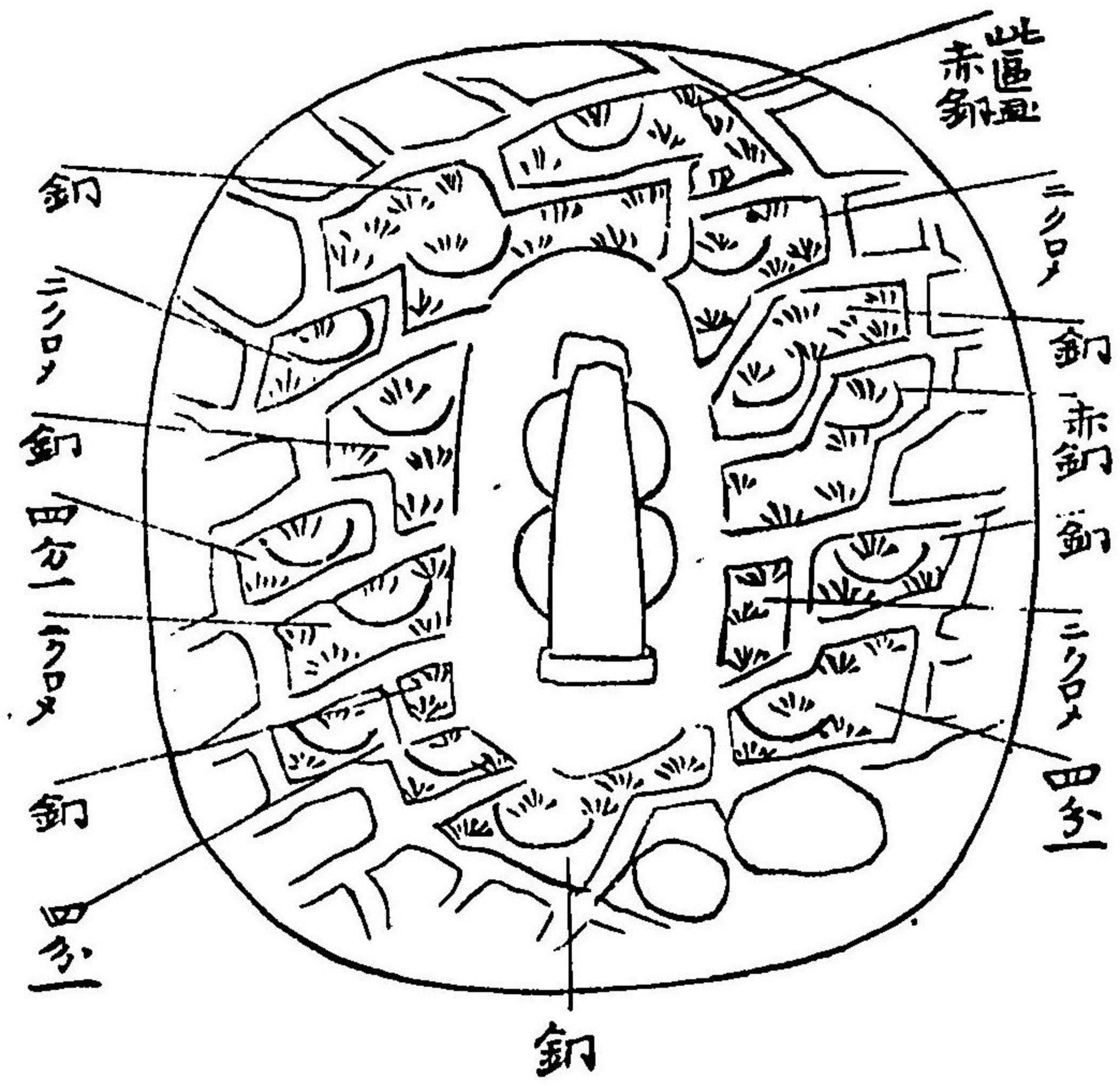
口作裏  
文字彫



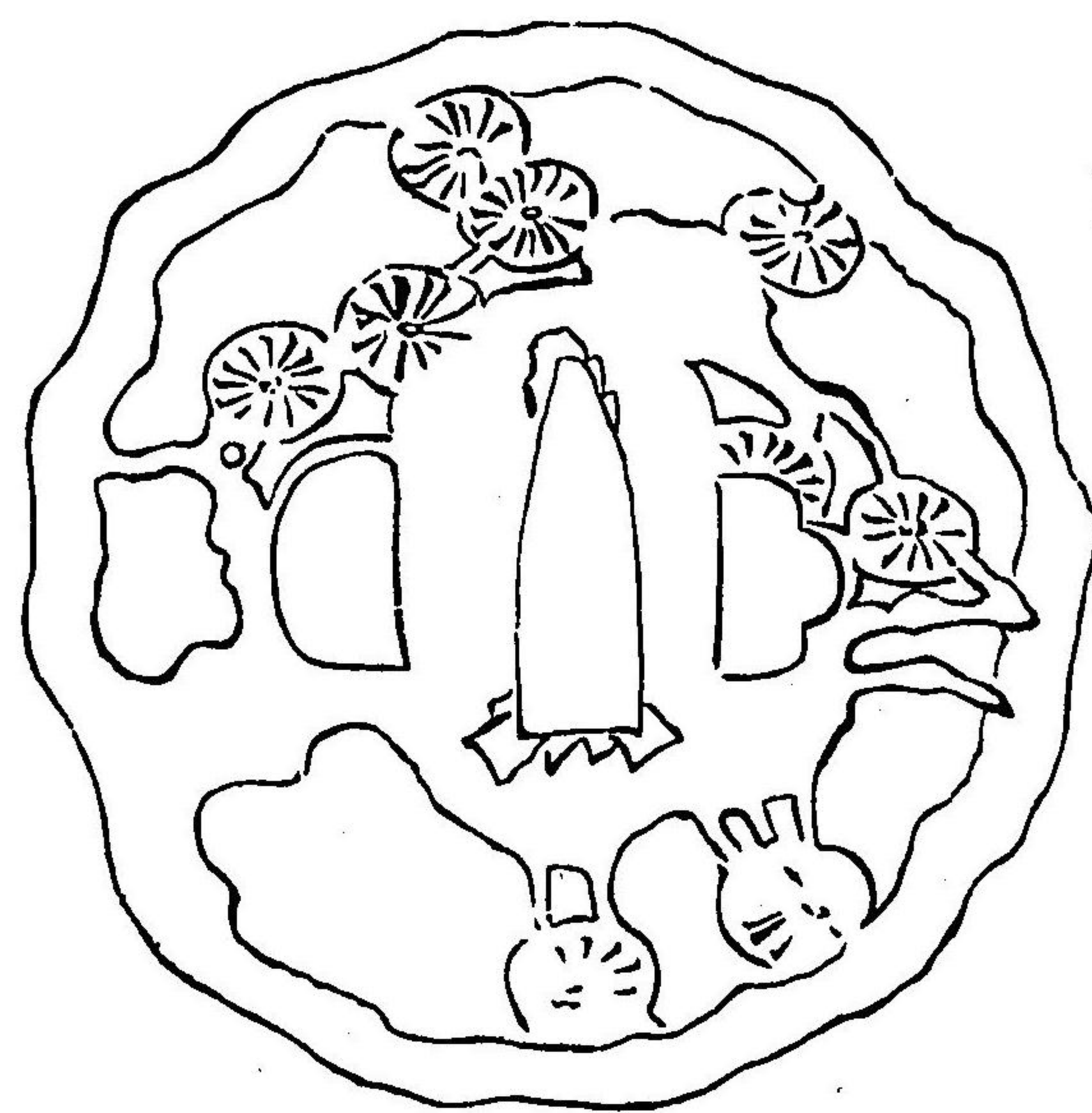
口作  
赤銅  
唐州彫上



口作  
金散紙象眼



門作  
月皆金



門作  
松葉金象眼



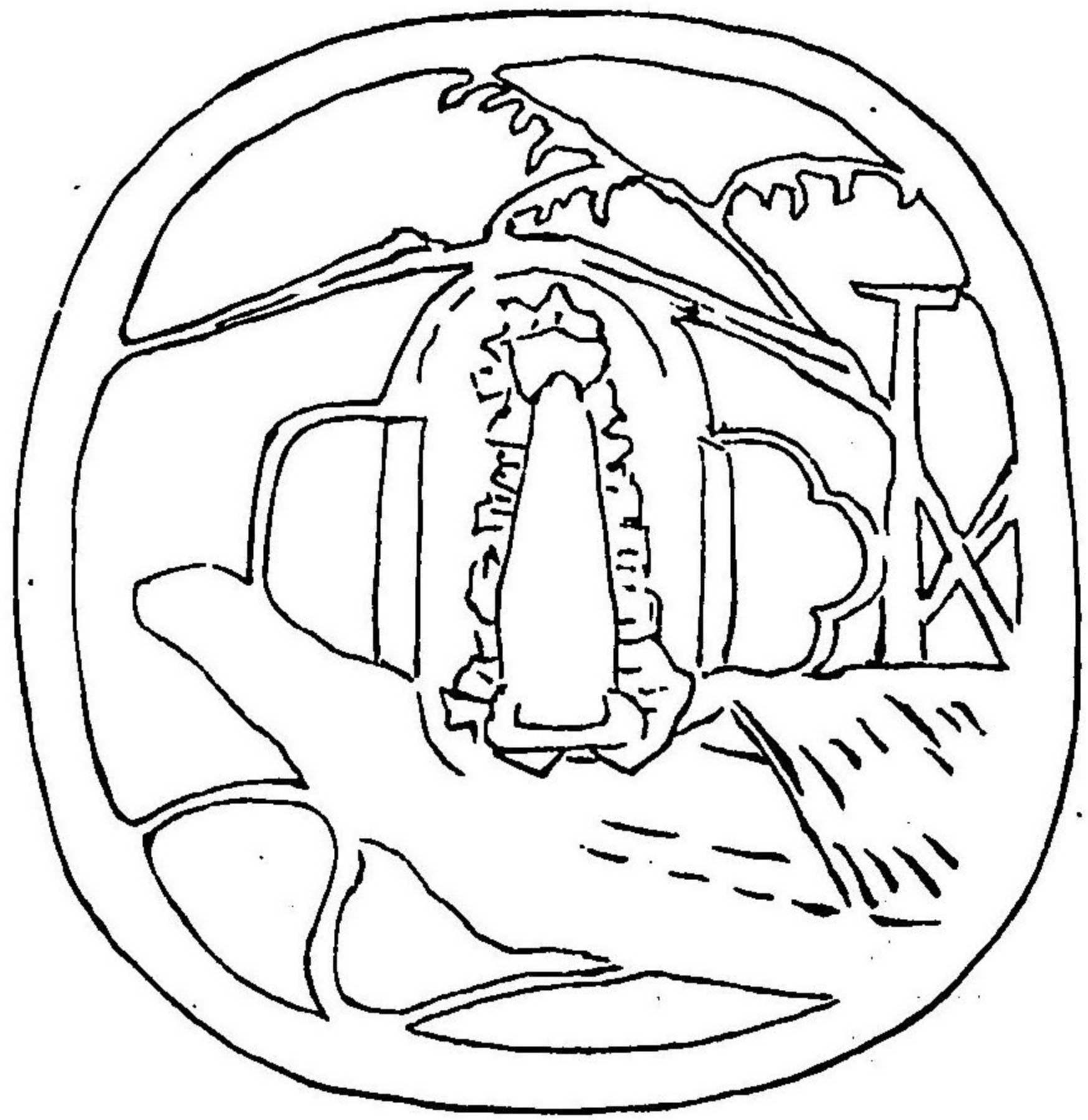
門作 真鍮  
唐人笠透芦赤銅据物



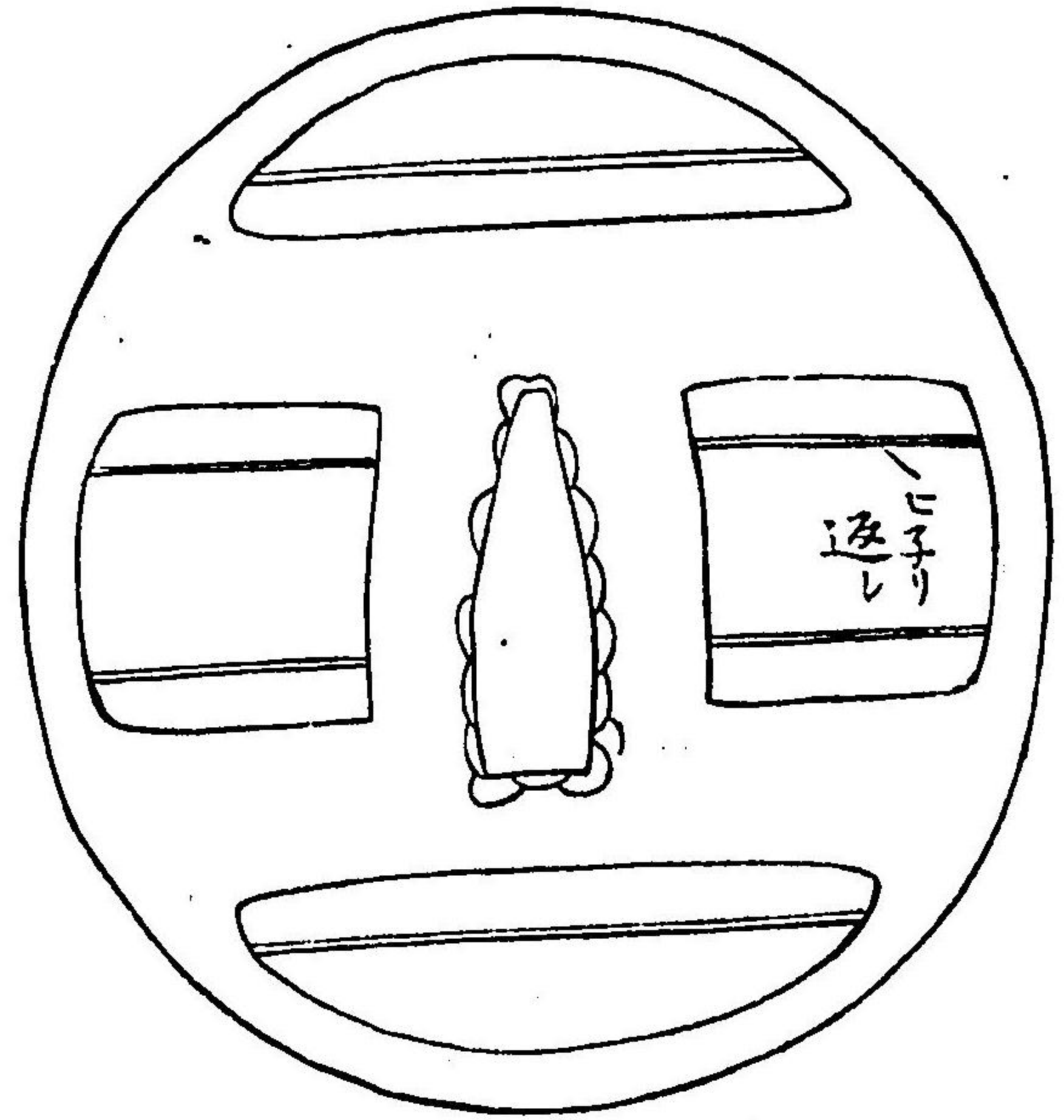
門作裏  
花銅据物其他表ニシ



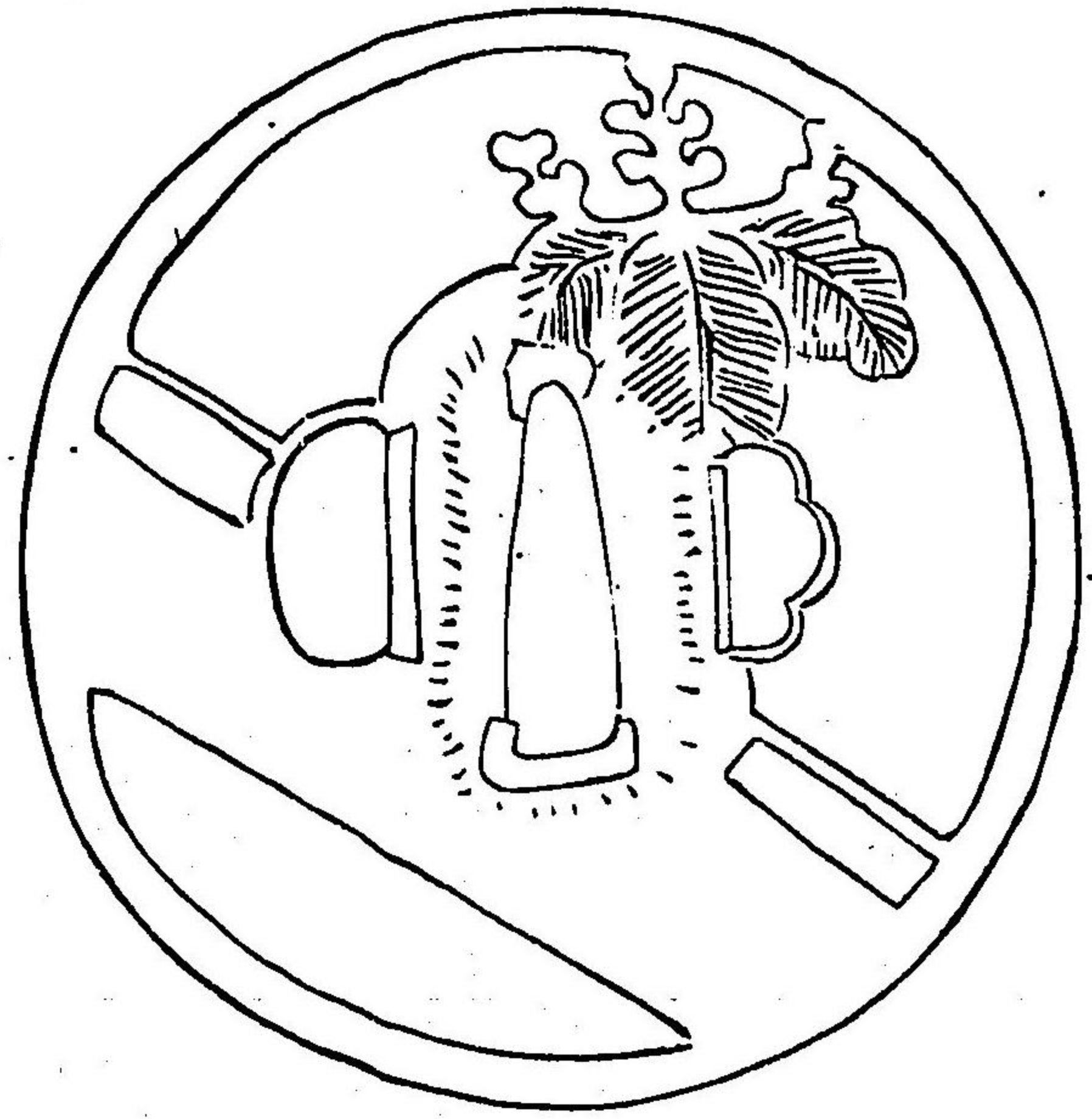
同作



同作



同作



同作

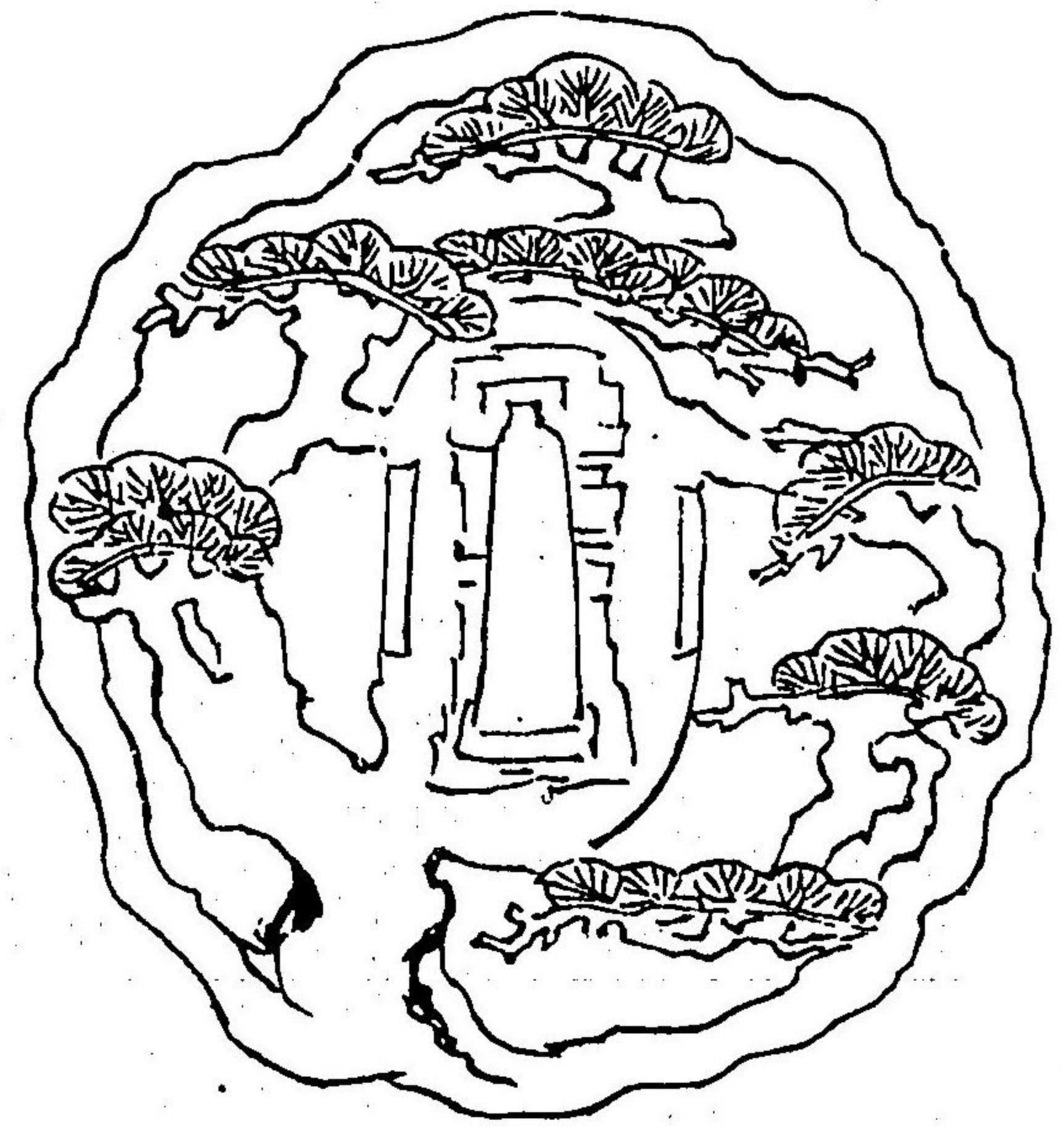


西垣二代目作

桐唐草共金象眼

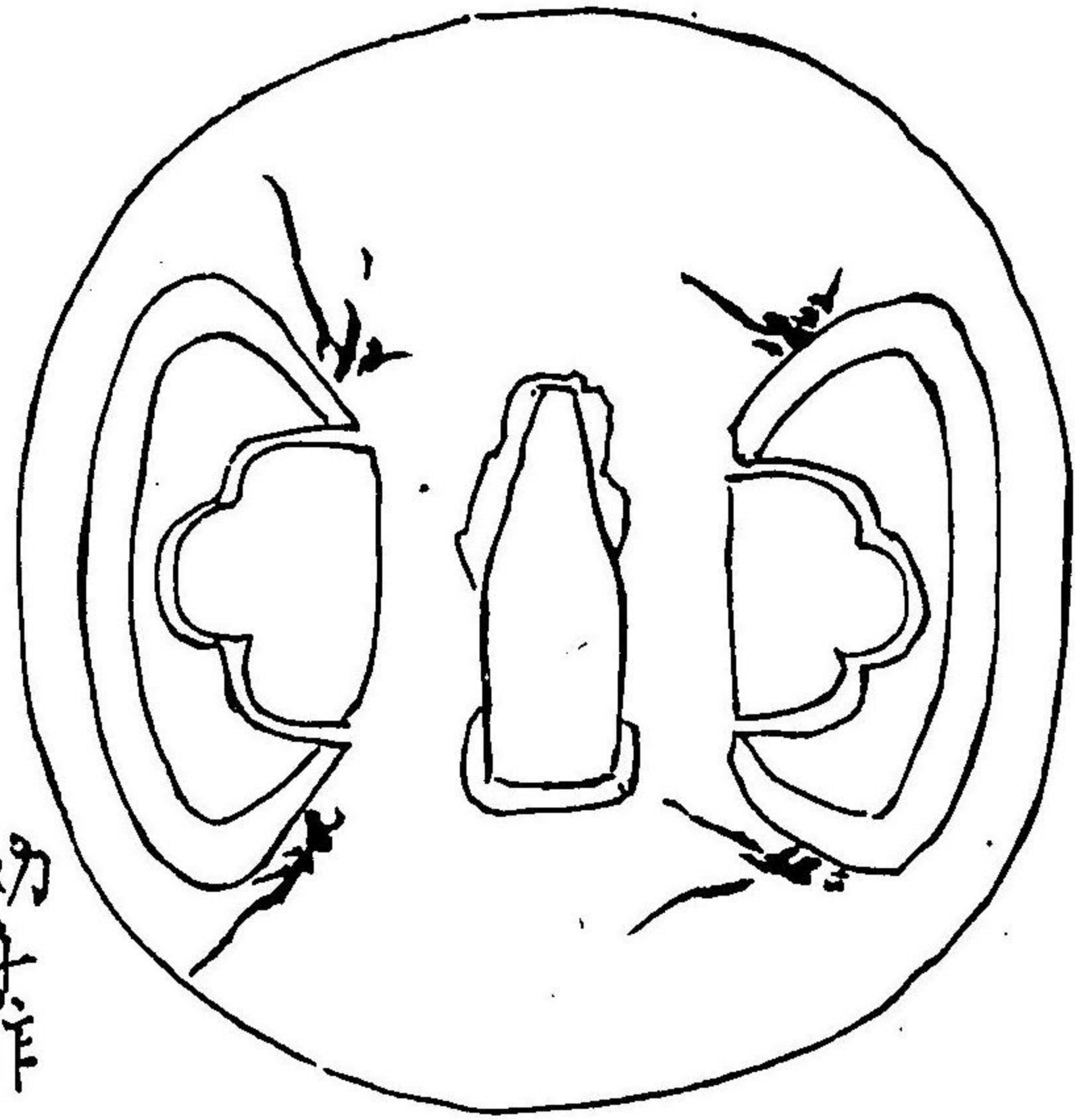


口作

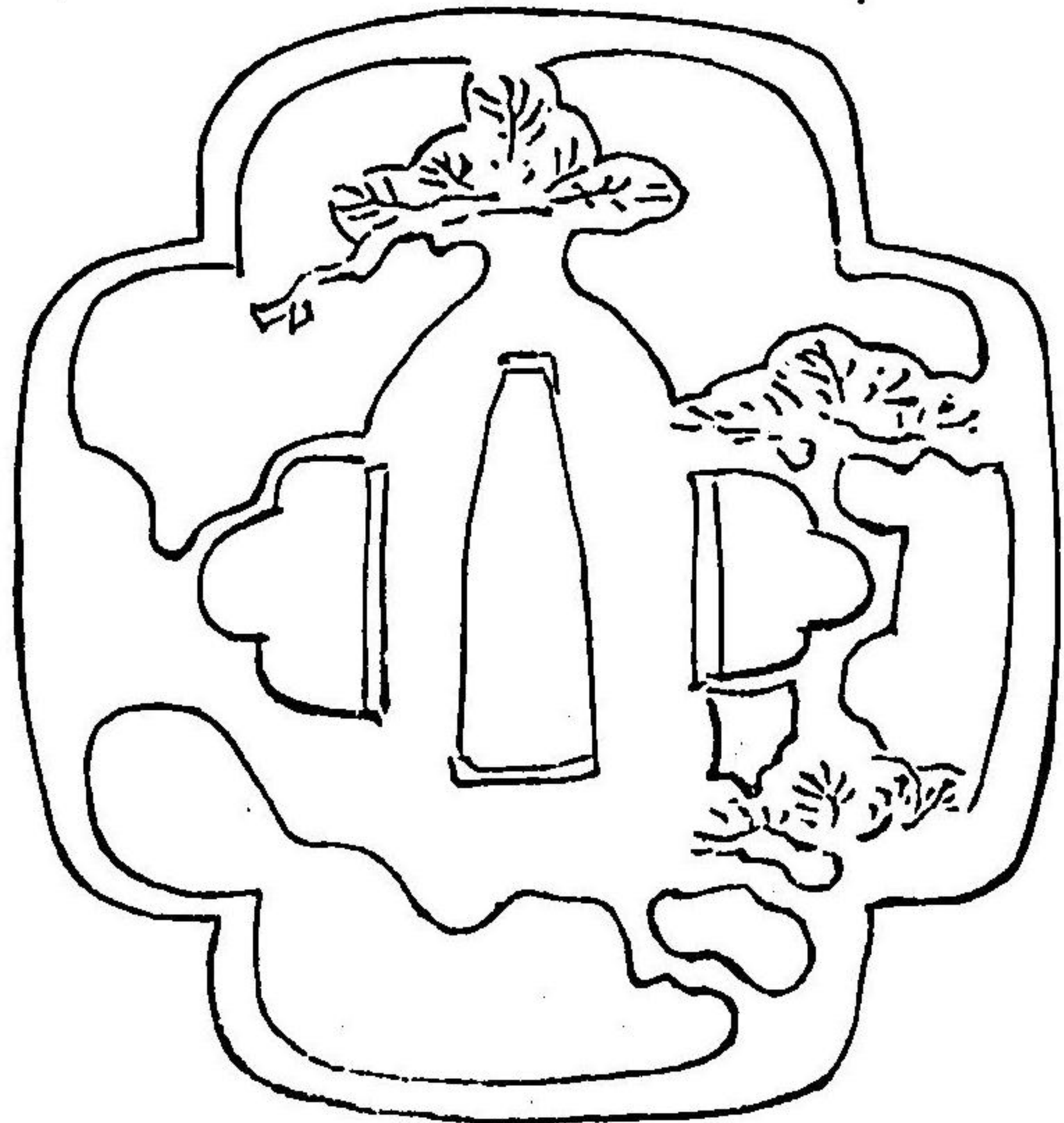


西垣勘平作

枯木金布目



口作



ウラ



勘平作



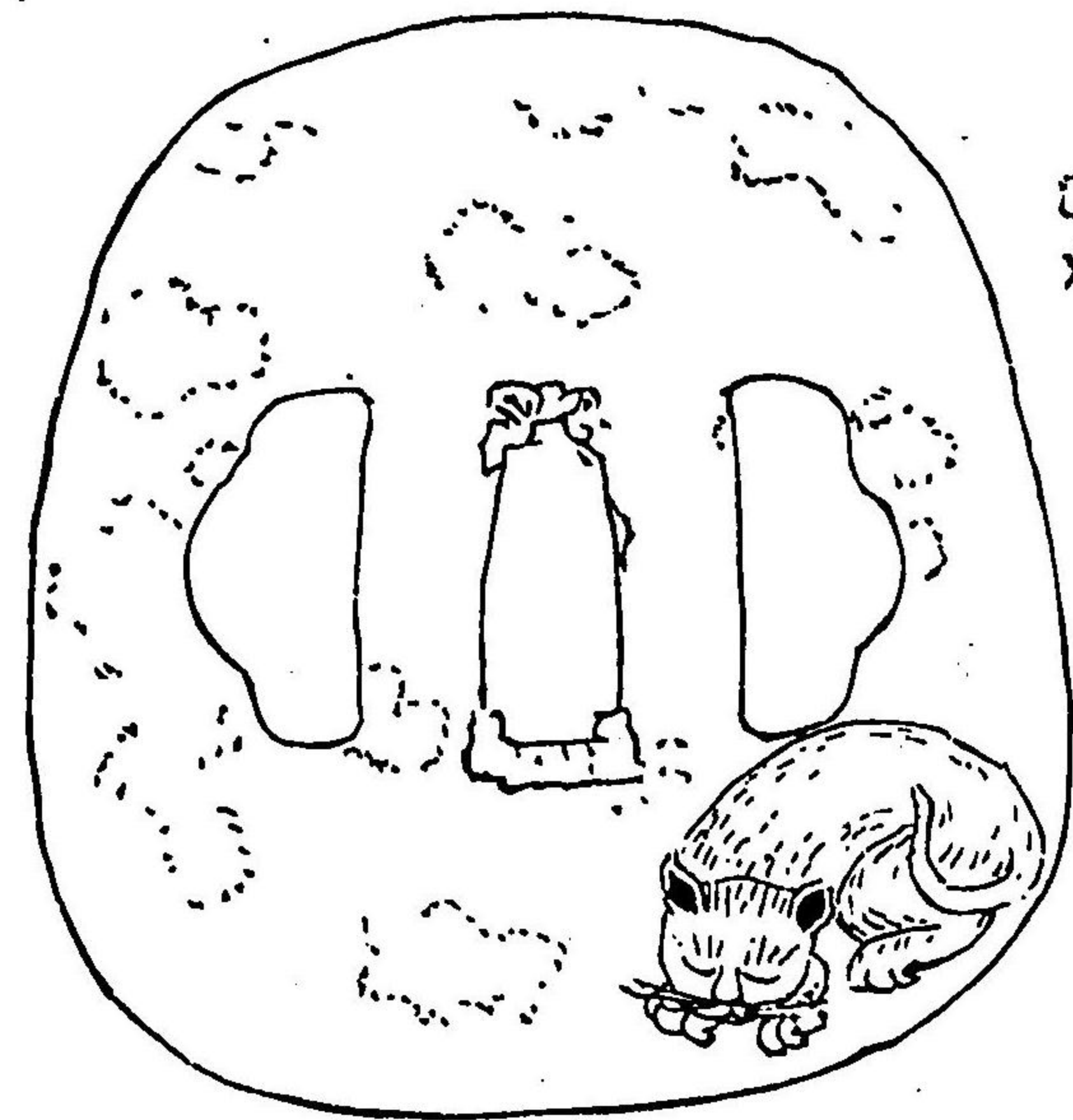
口作  
真鍮据物

口ウラ

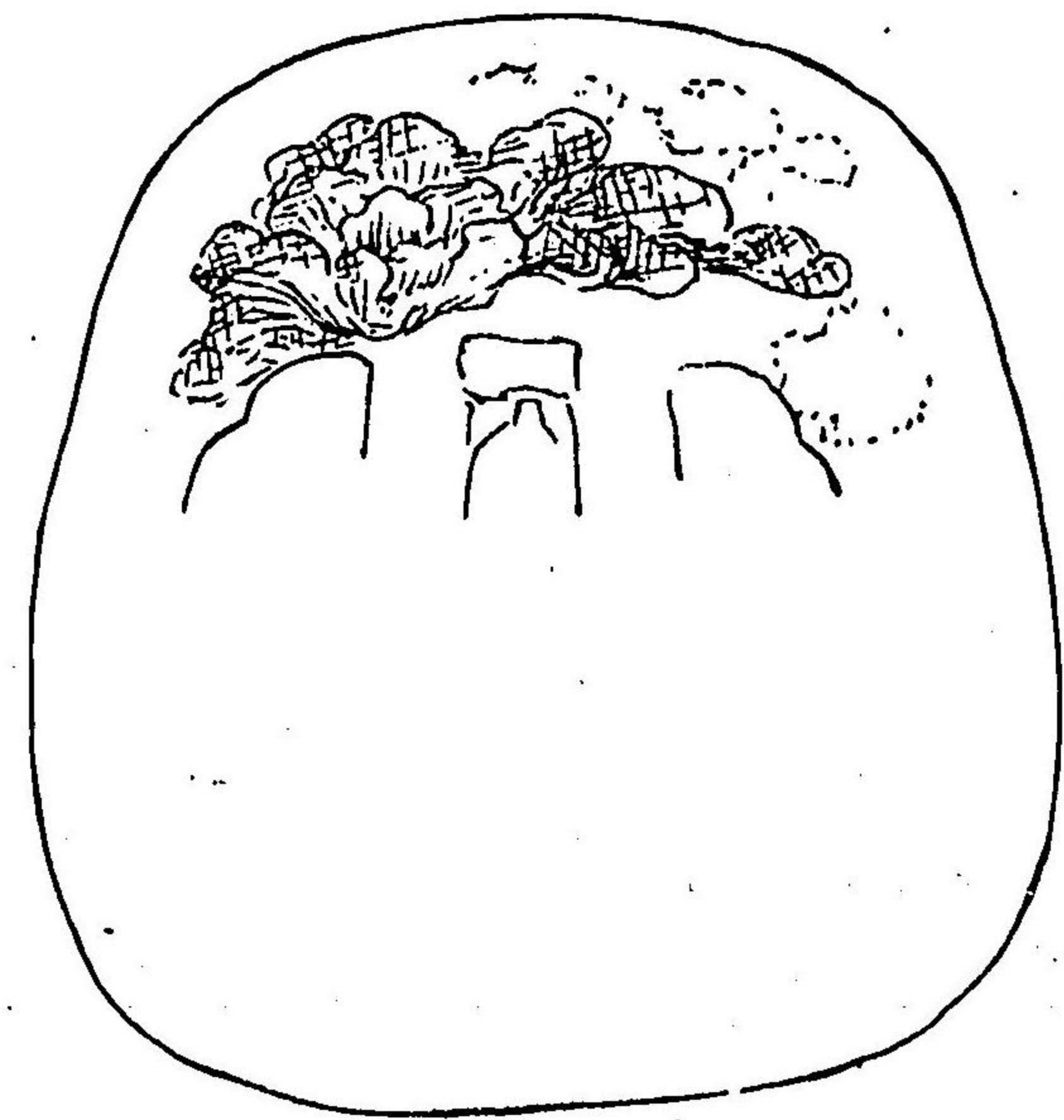


口作  
彫上  
目鼻縄共ニ真鍮

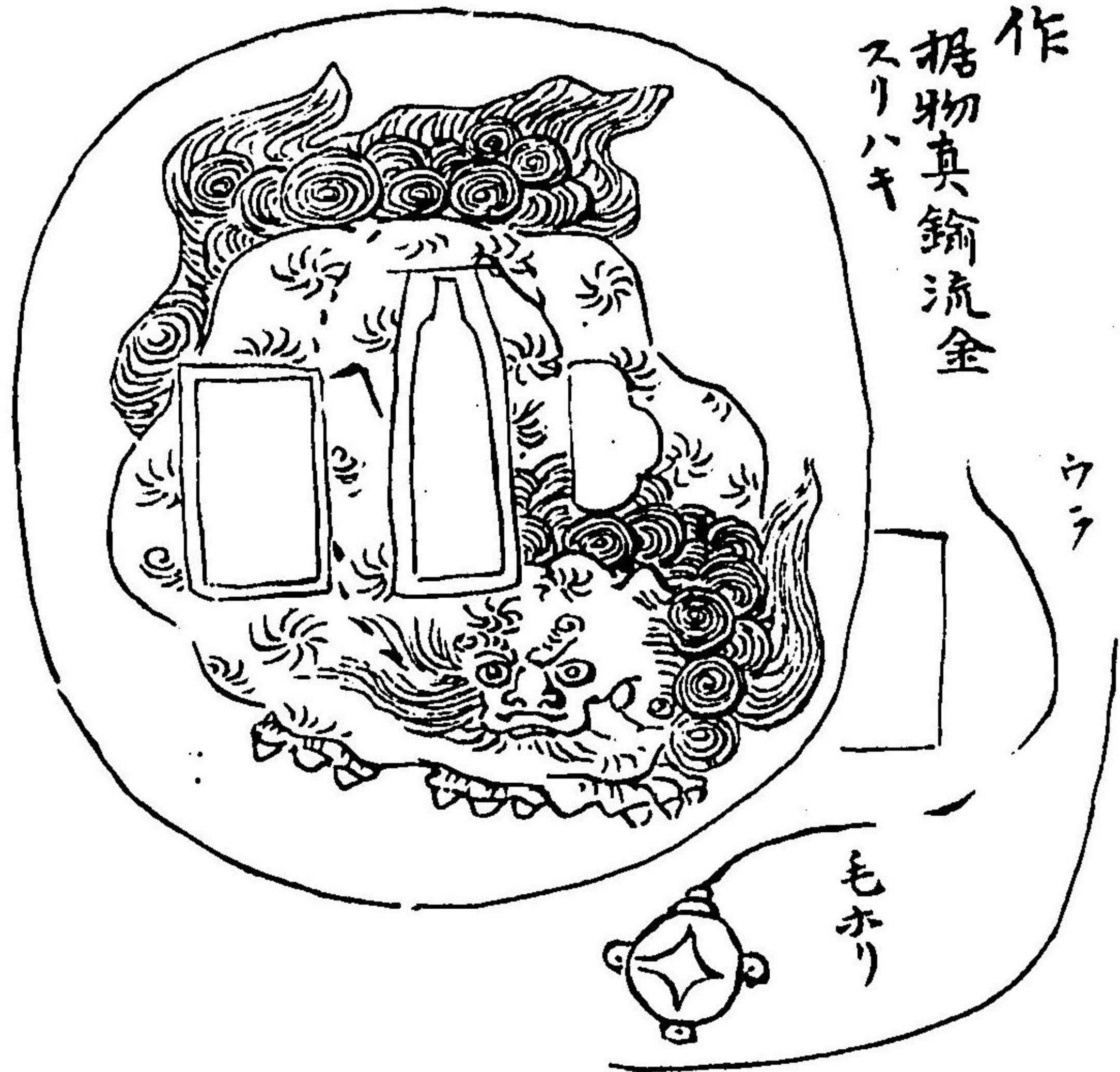
ウラ  
杵縄共ニ真鍮



八代初代作  
猫真鍮据物  
焼手ノウラニ強シ



口ウラ  
牡丹銀布目象眼



口作  
据物真鍮流金  
スリハキ

ウラ

モホリ

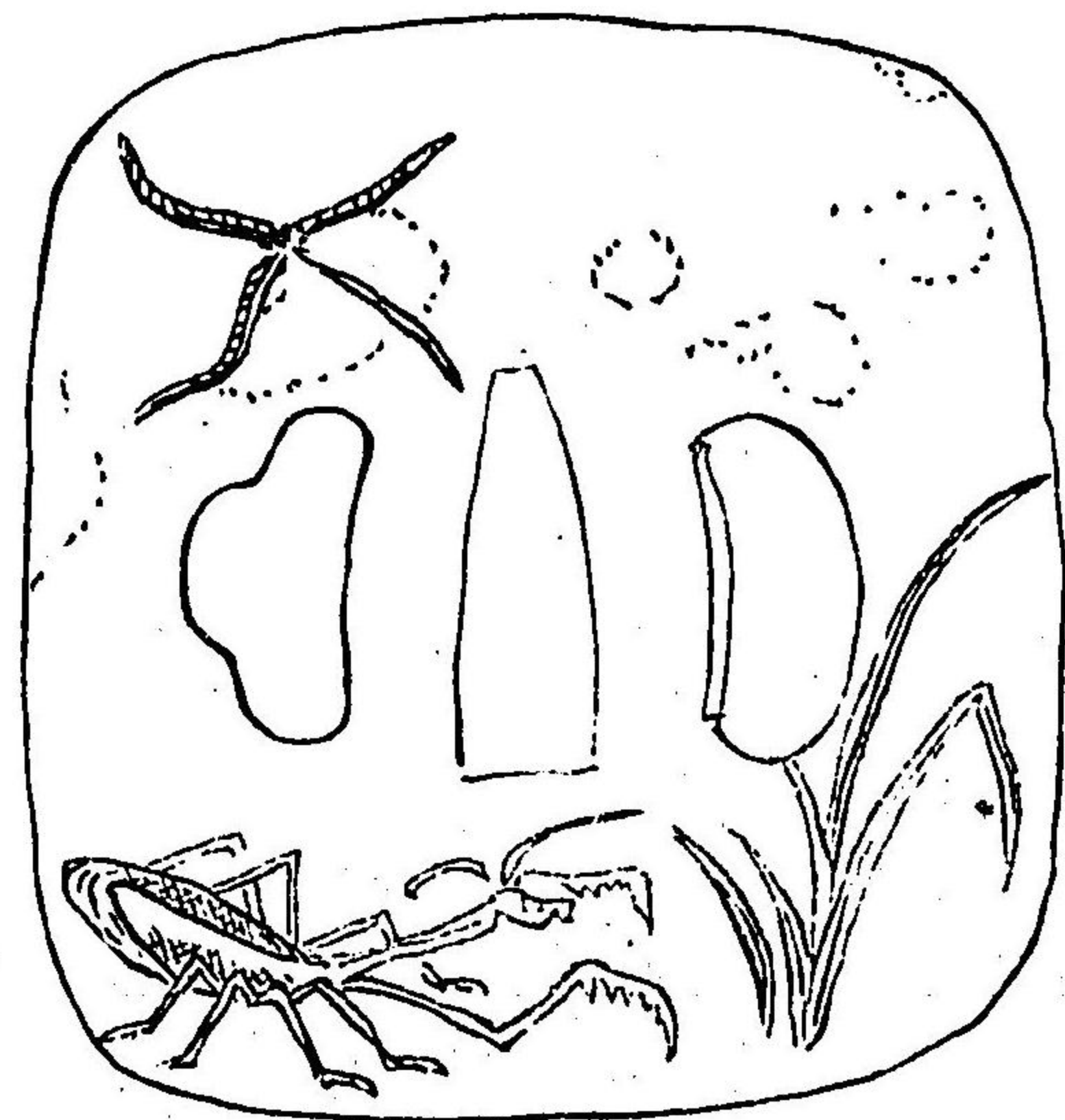
ウラ木目



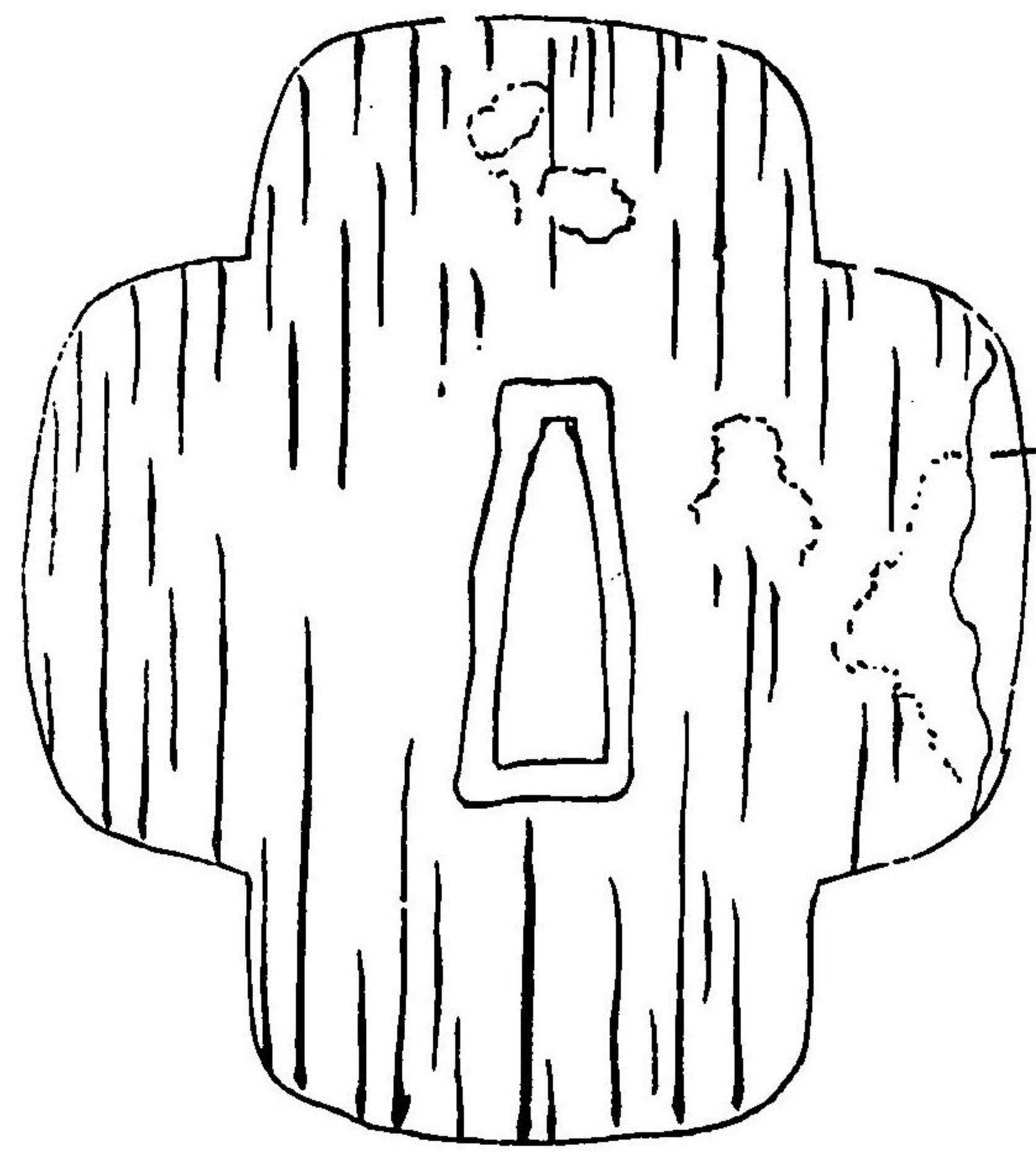
口作  
蛛真鍮据物木目彫  
深キ方  
但し片切



口作  
真鍮据物



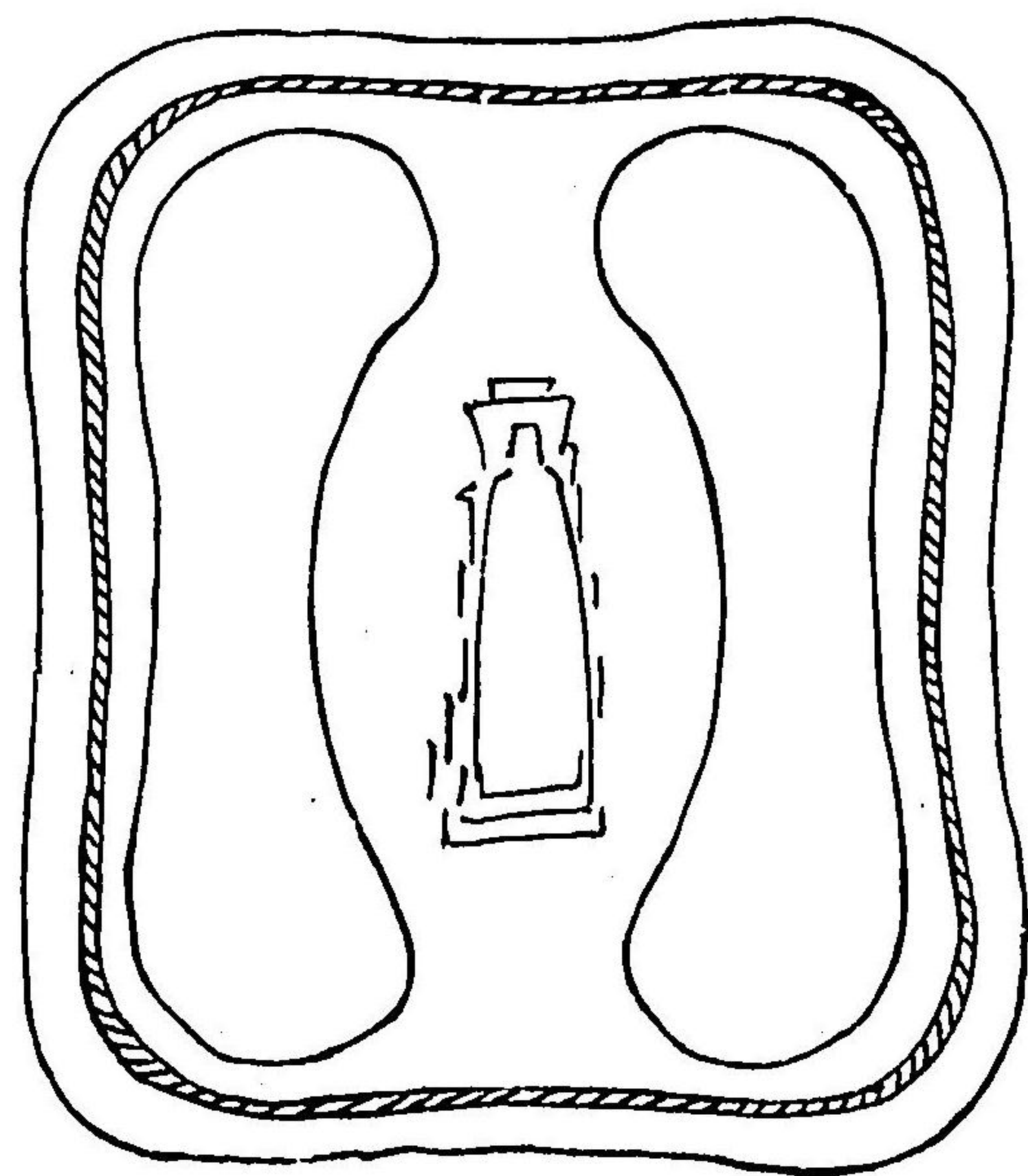
口ウラ  
口据物



時雨ホリ

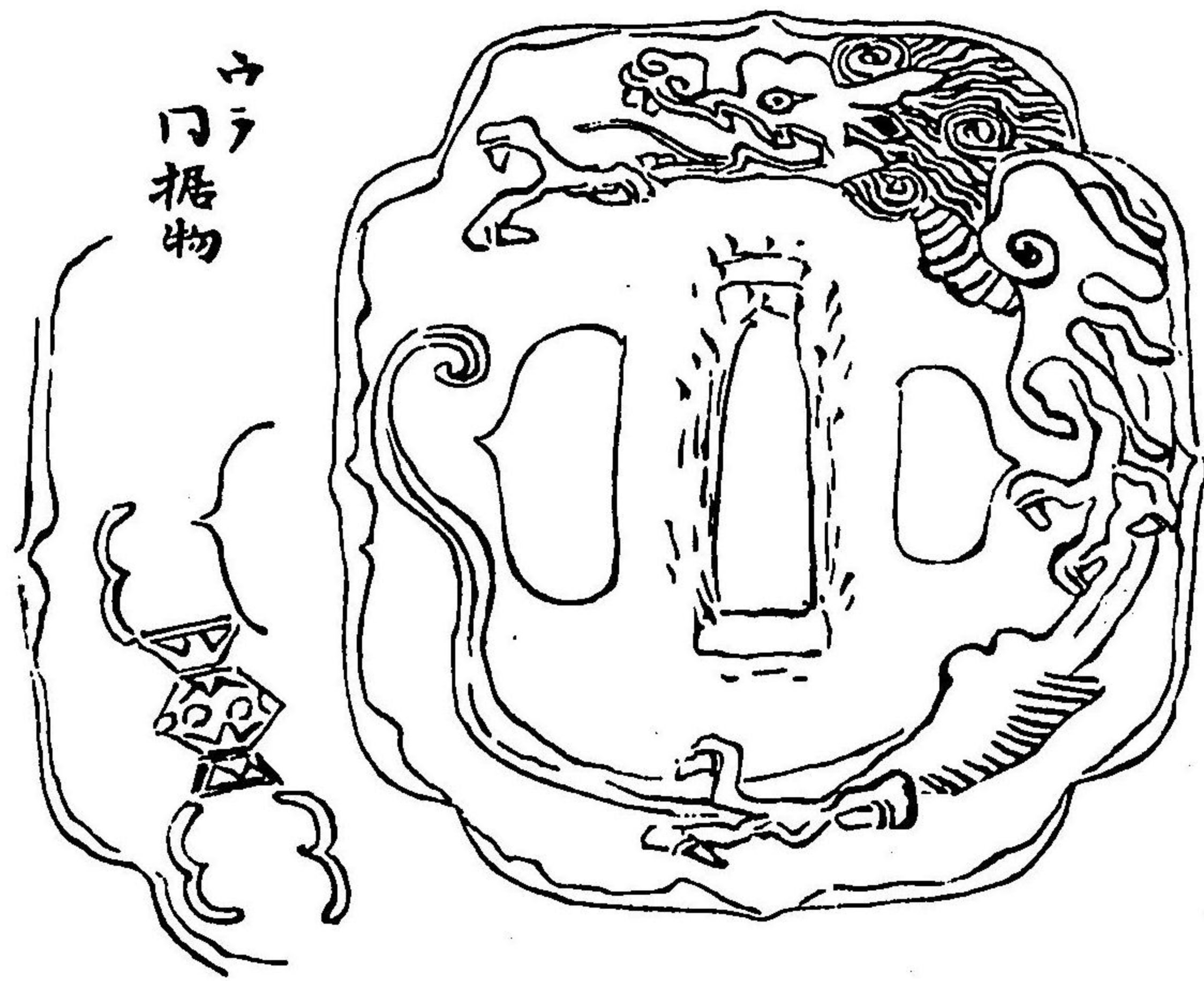
此處より強シ

口作



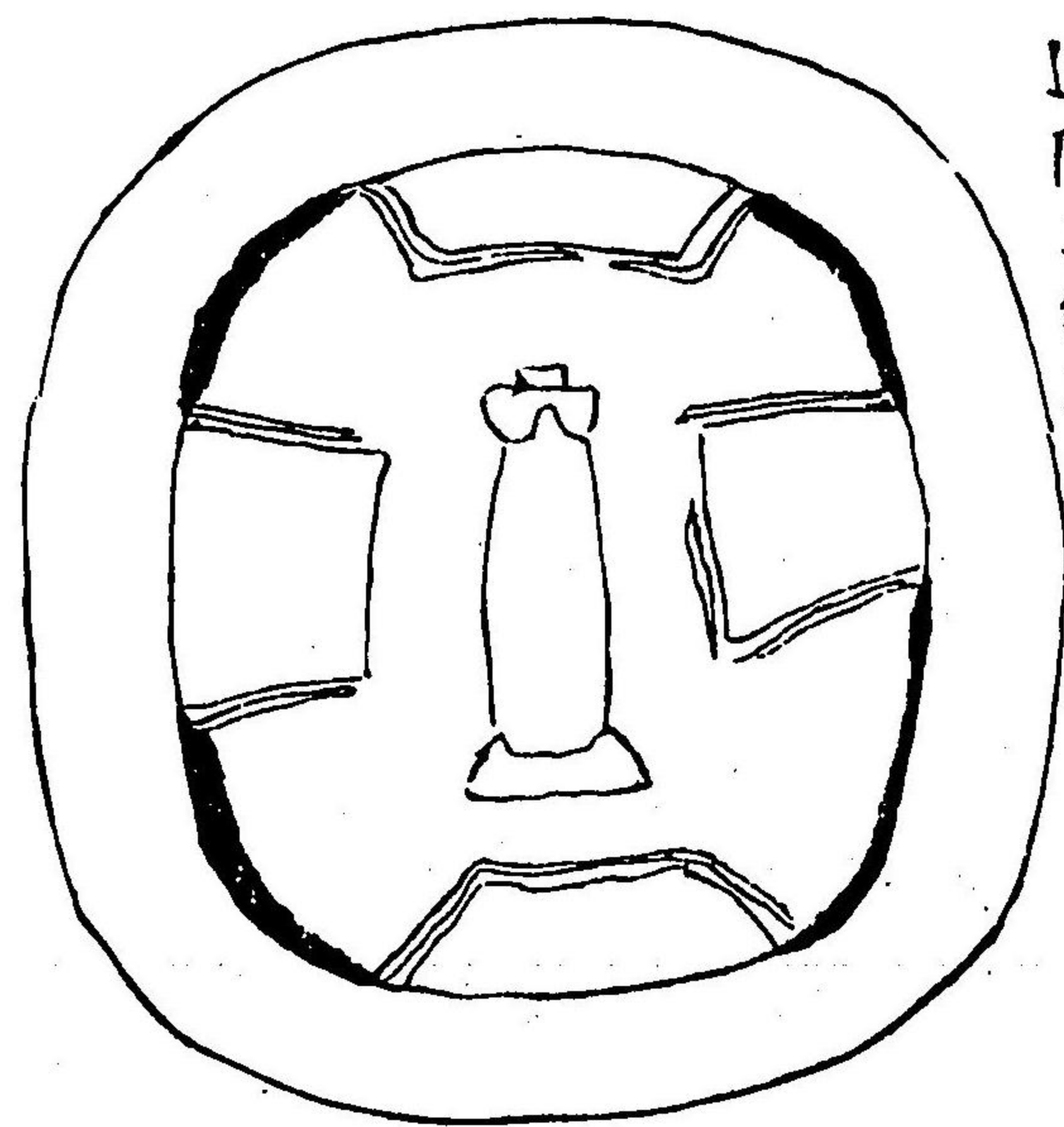
繩釘ヨリ合セ

口作



口ヲ据物

口作  
据物真鍮  
耳ヲ透但耳金布目



口作  
環耳又干下ケ  
透際真鍮張金

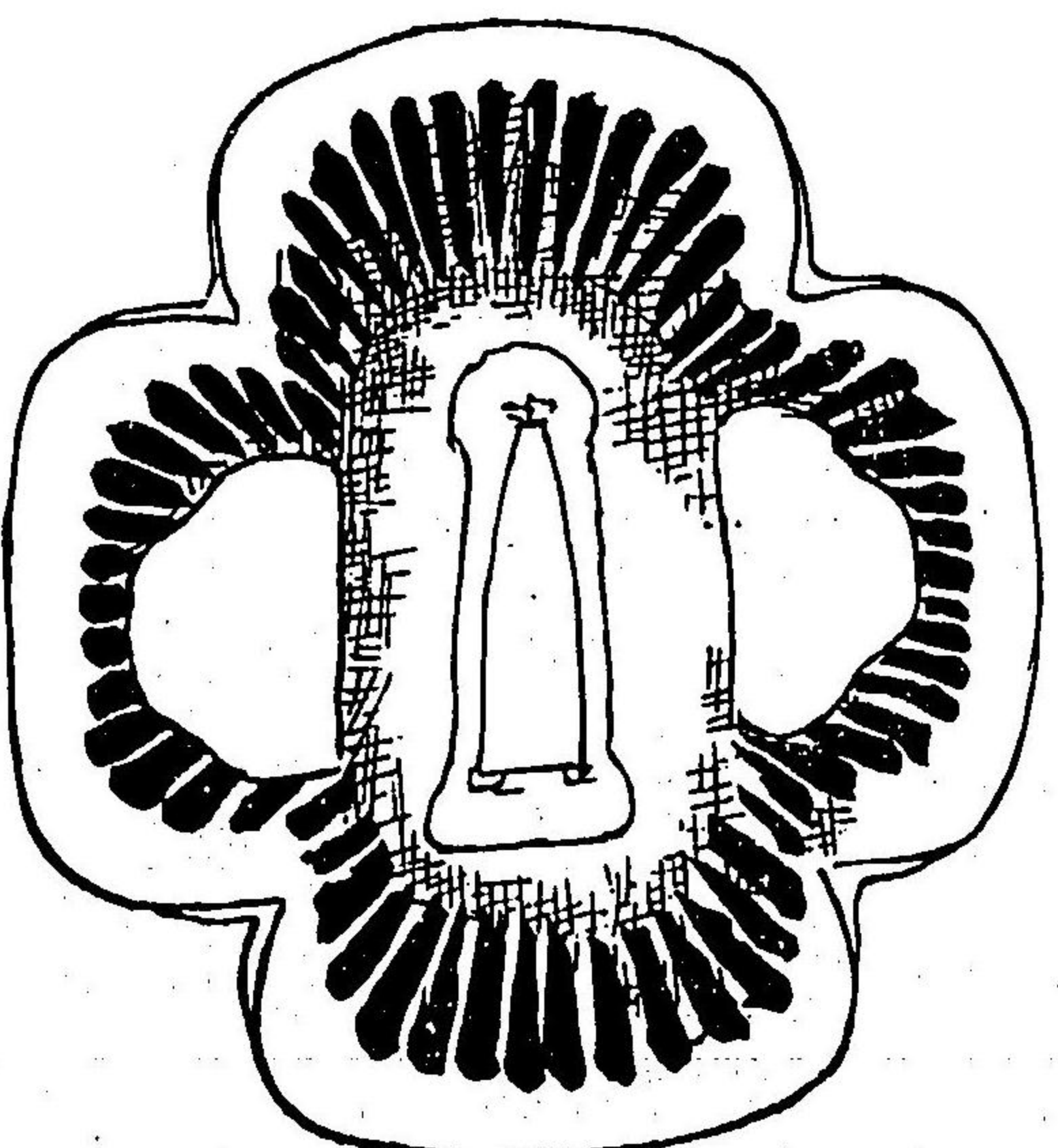
八代二代目作

環身



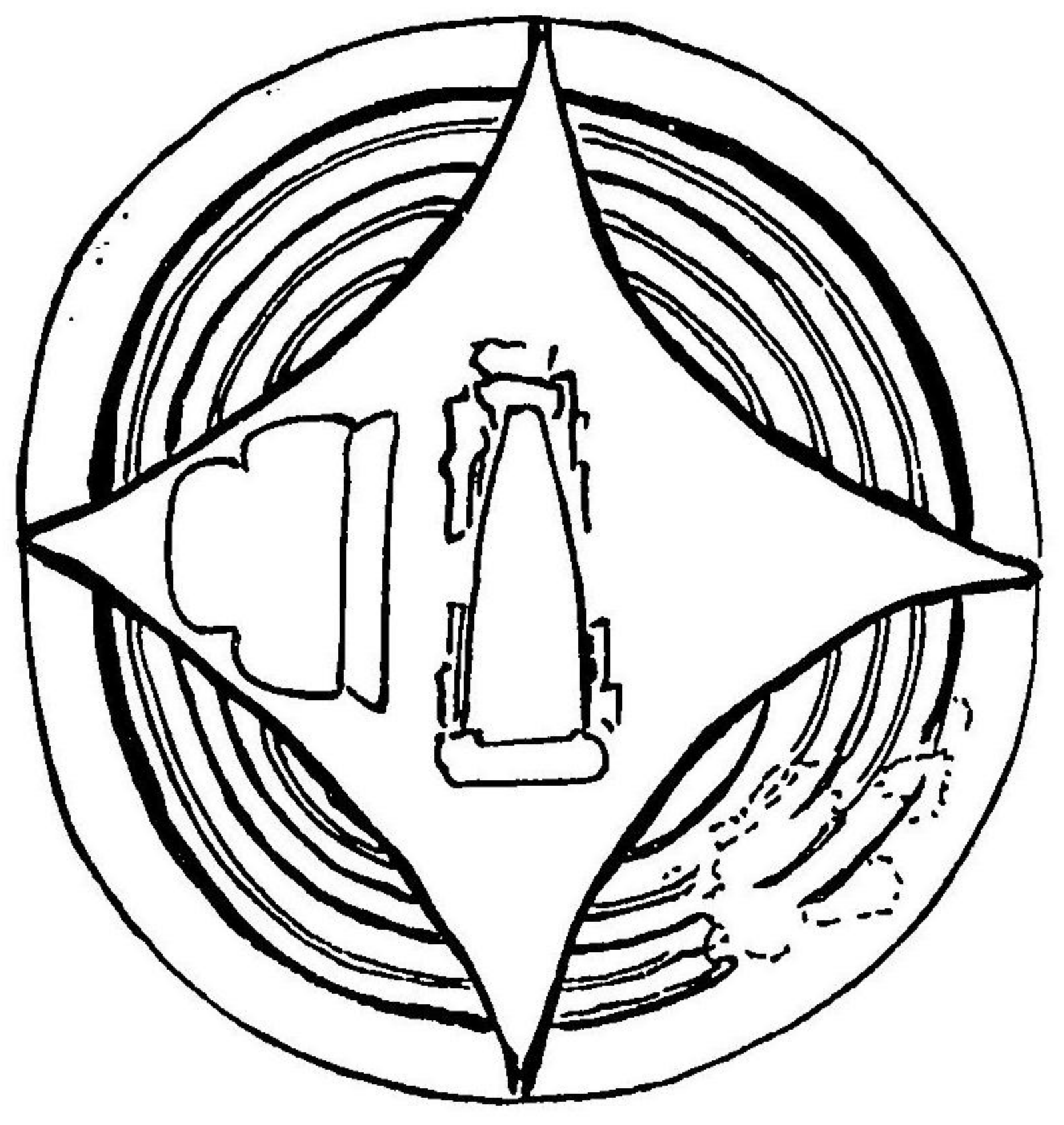
門作

スキ下々菊深彫地銀布目スリハキ

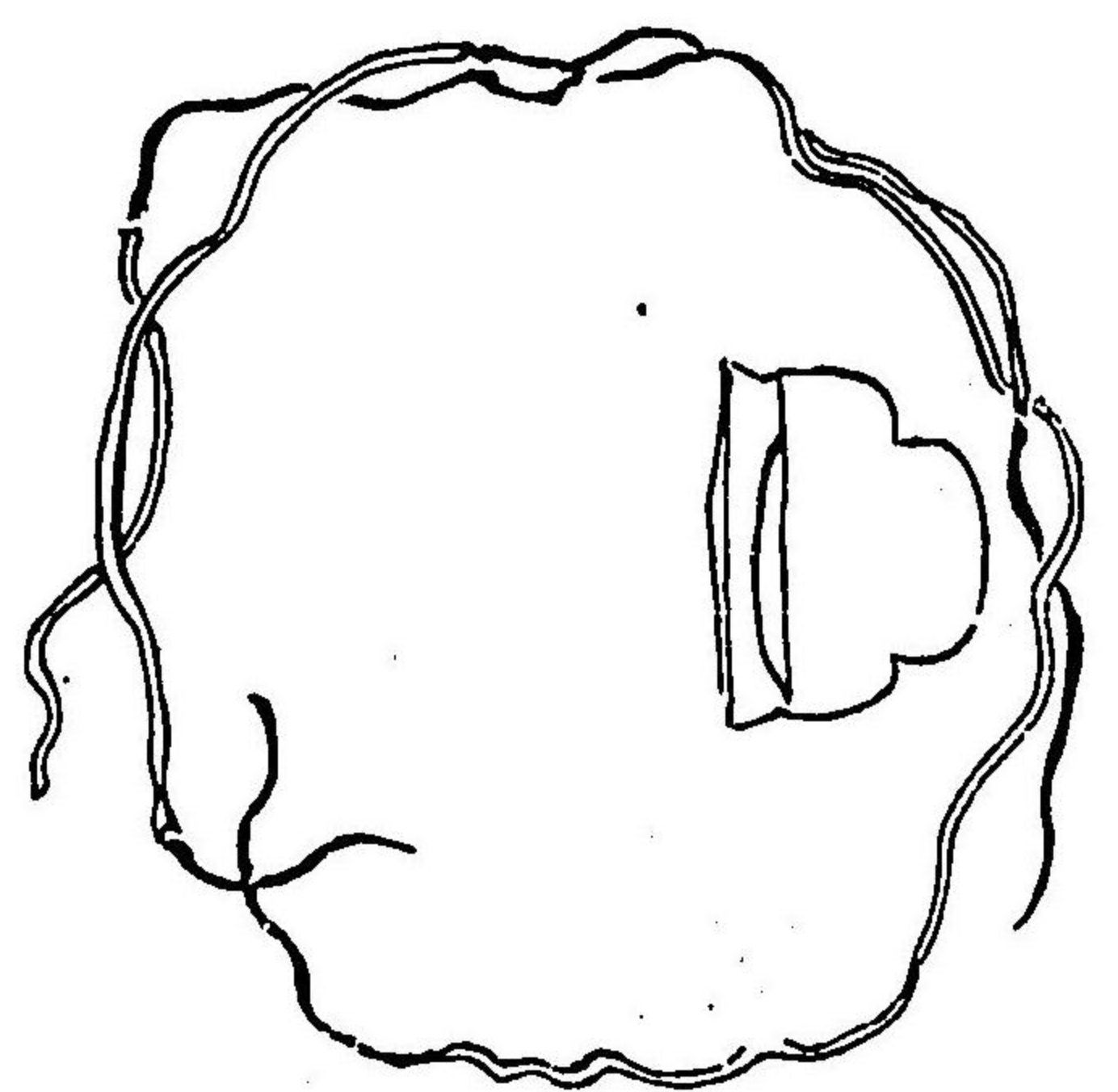


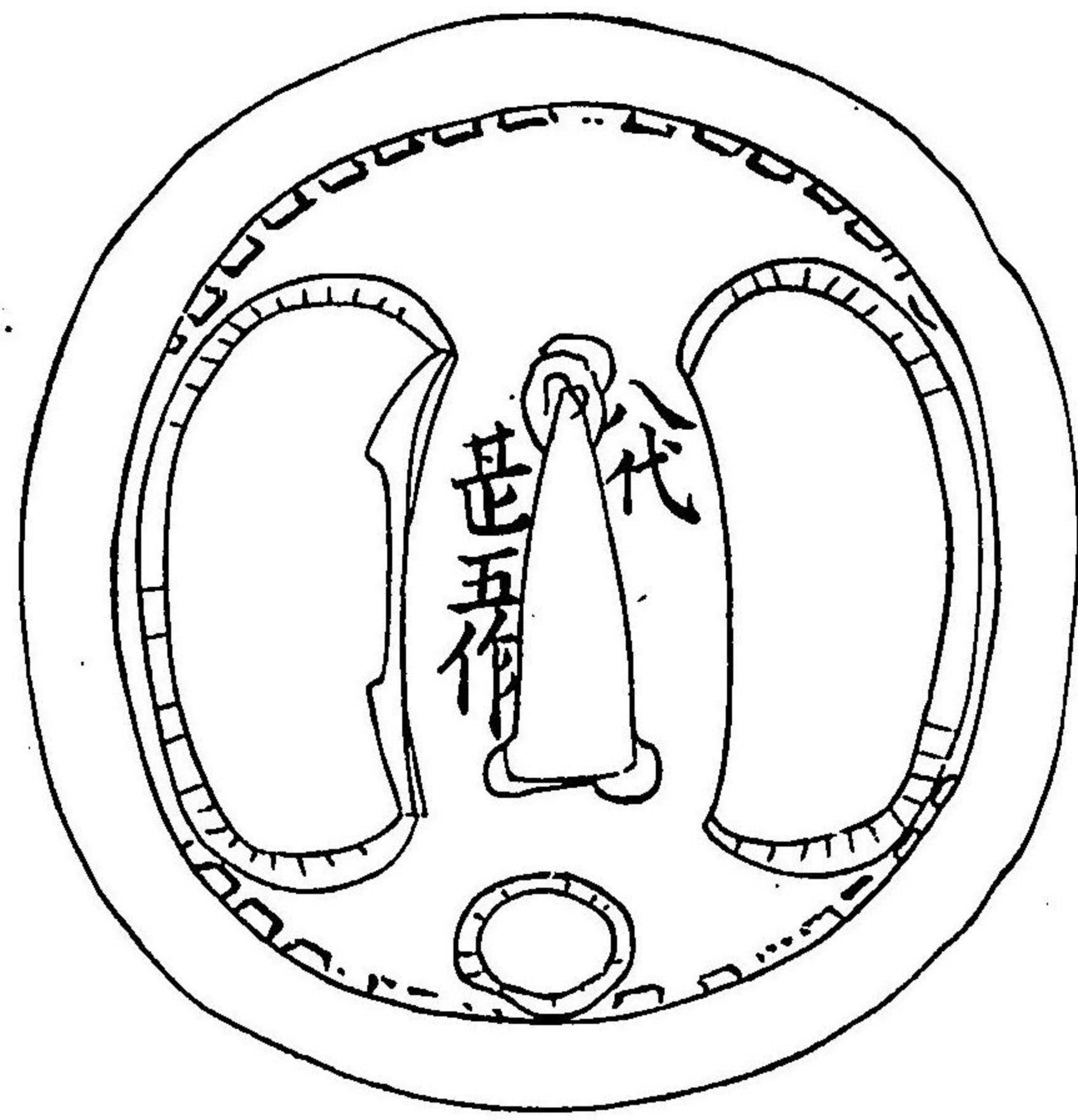
門作

環身糸莢ホリ糸真鍮張金

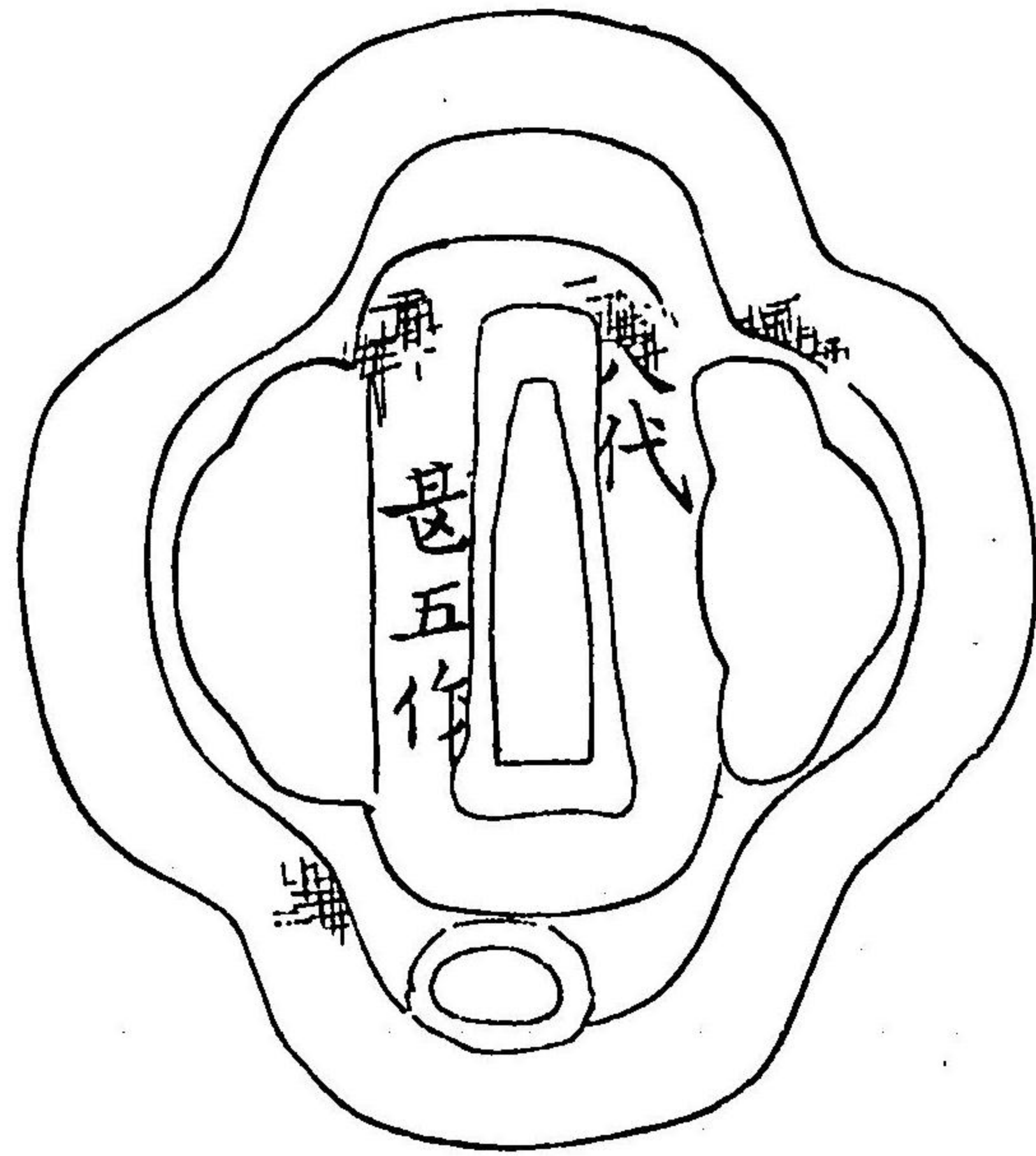


口ウラ

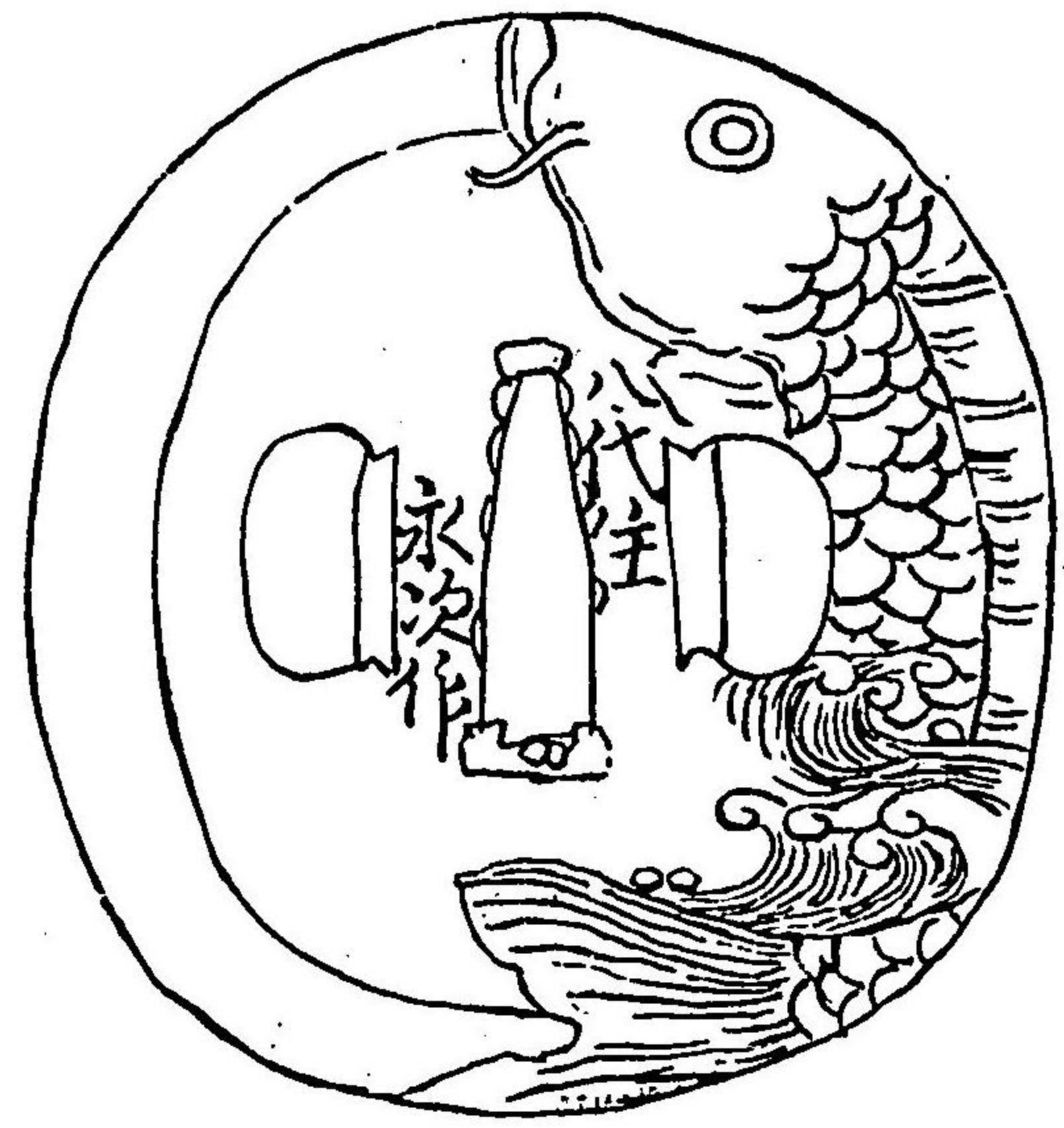




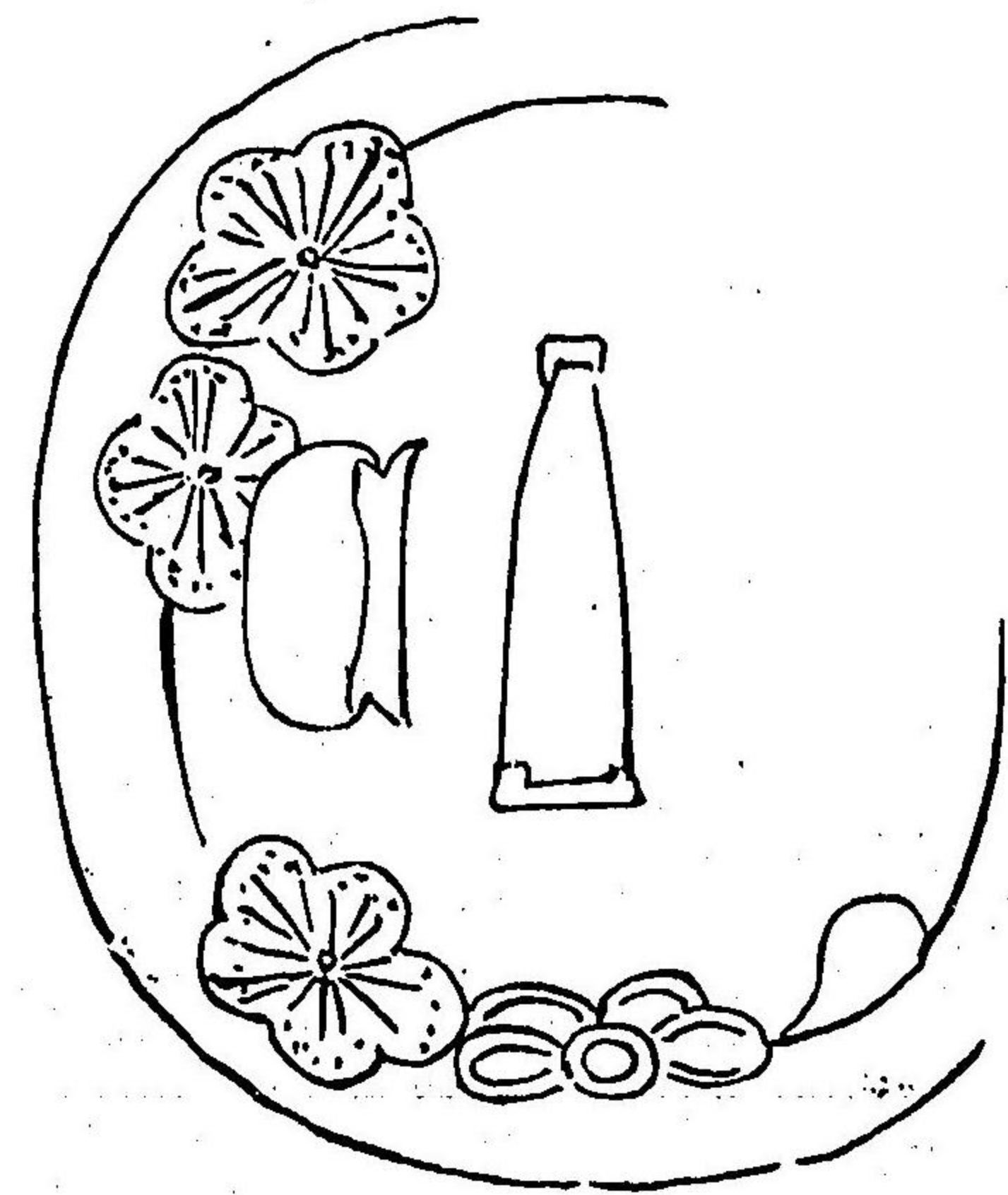
口作  
環耳下々象眼銀張金



口作  
銀布目スリハキ



口作  
彫上 銅



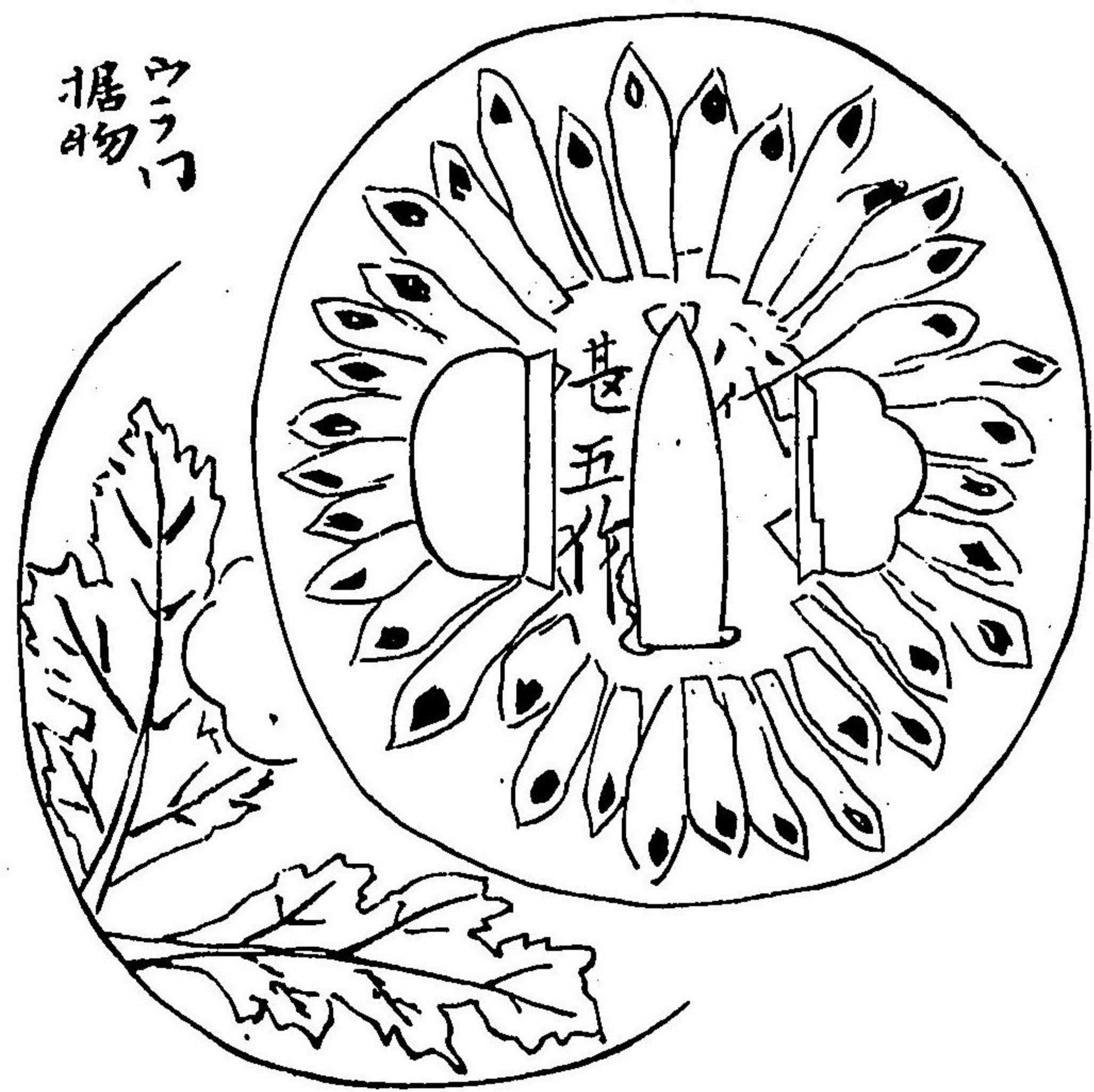
口裏  
彫口

三十一

三十一

口作

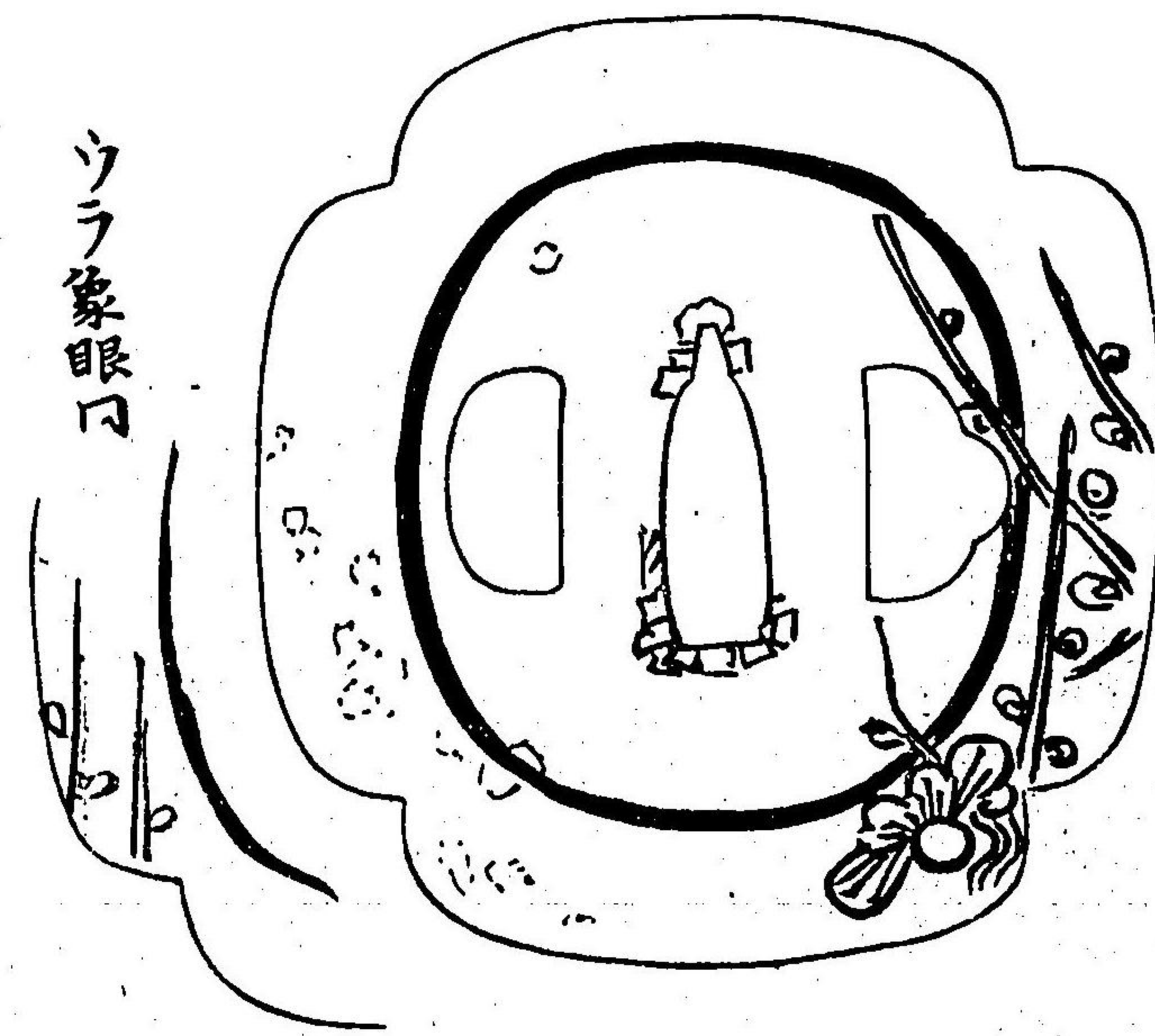
真鍮据物



口作

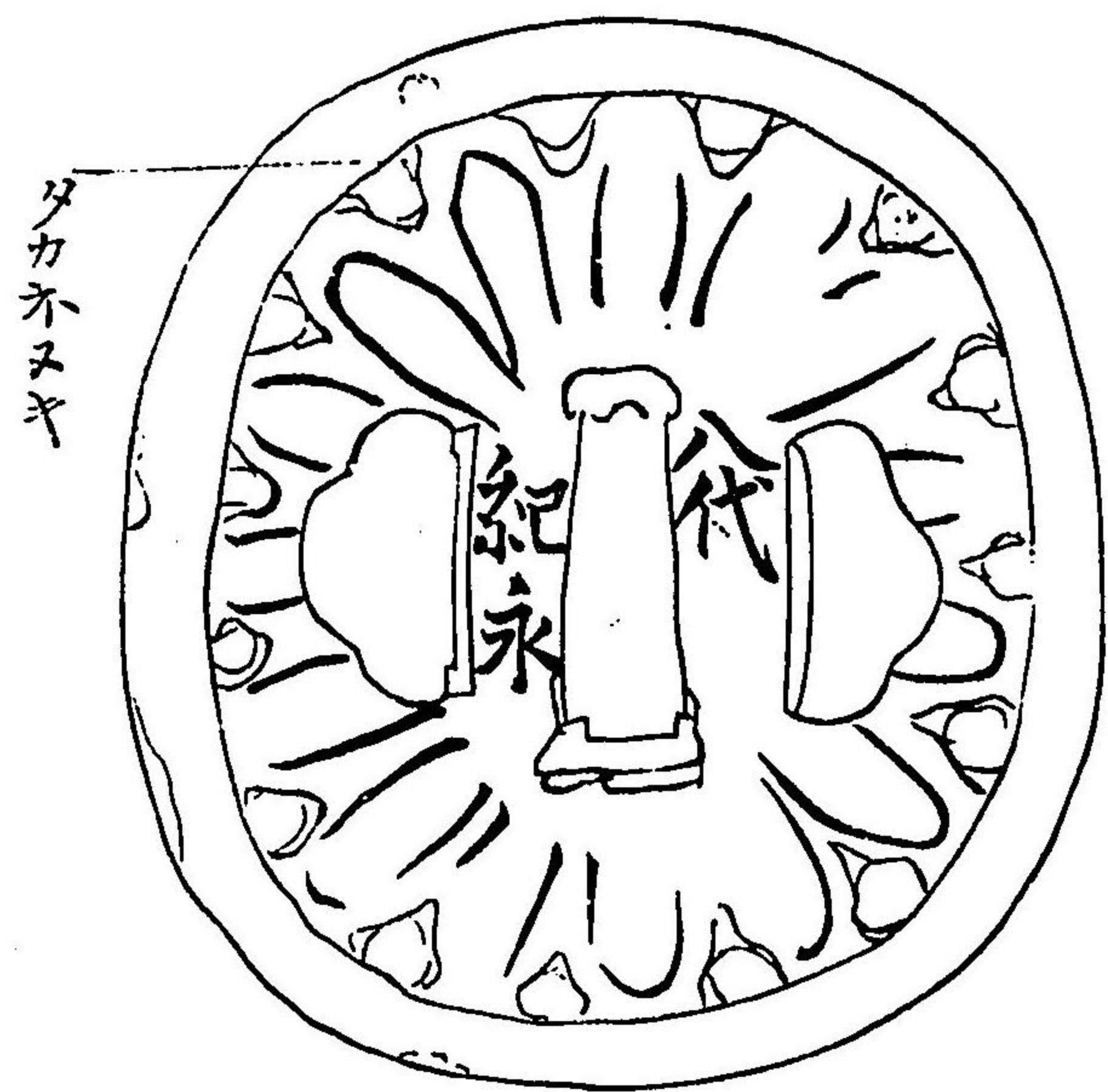
環身 金張金象眼

口作据物



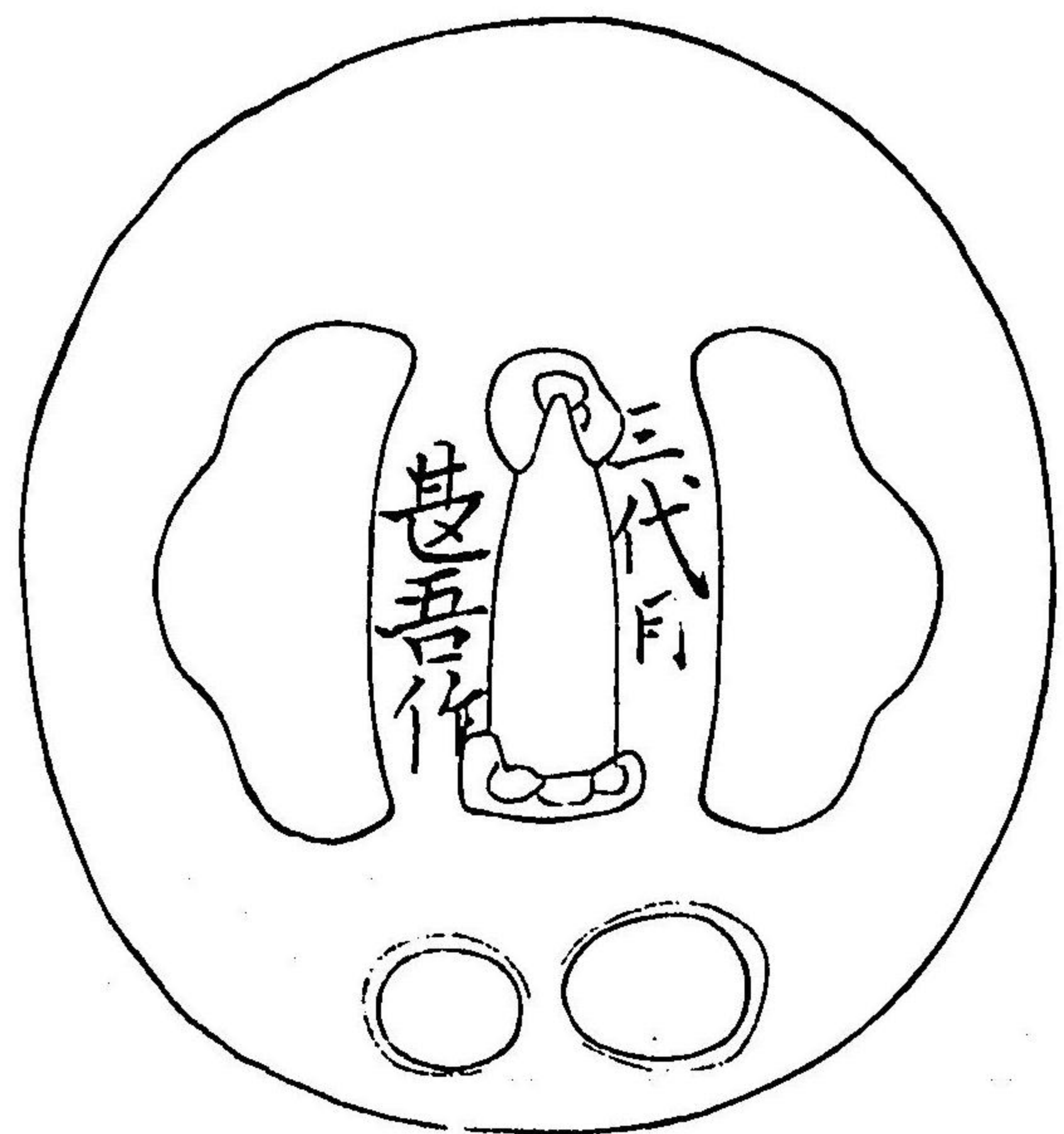
此作赤詳(二代目)

真鍮張金象眼



八代三代目作

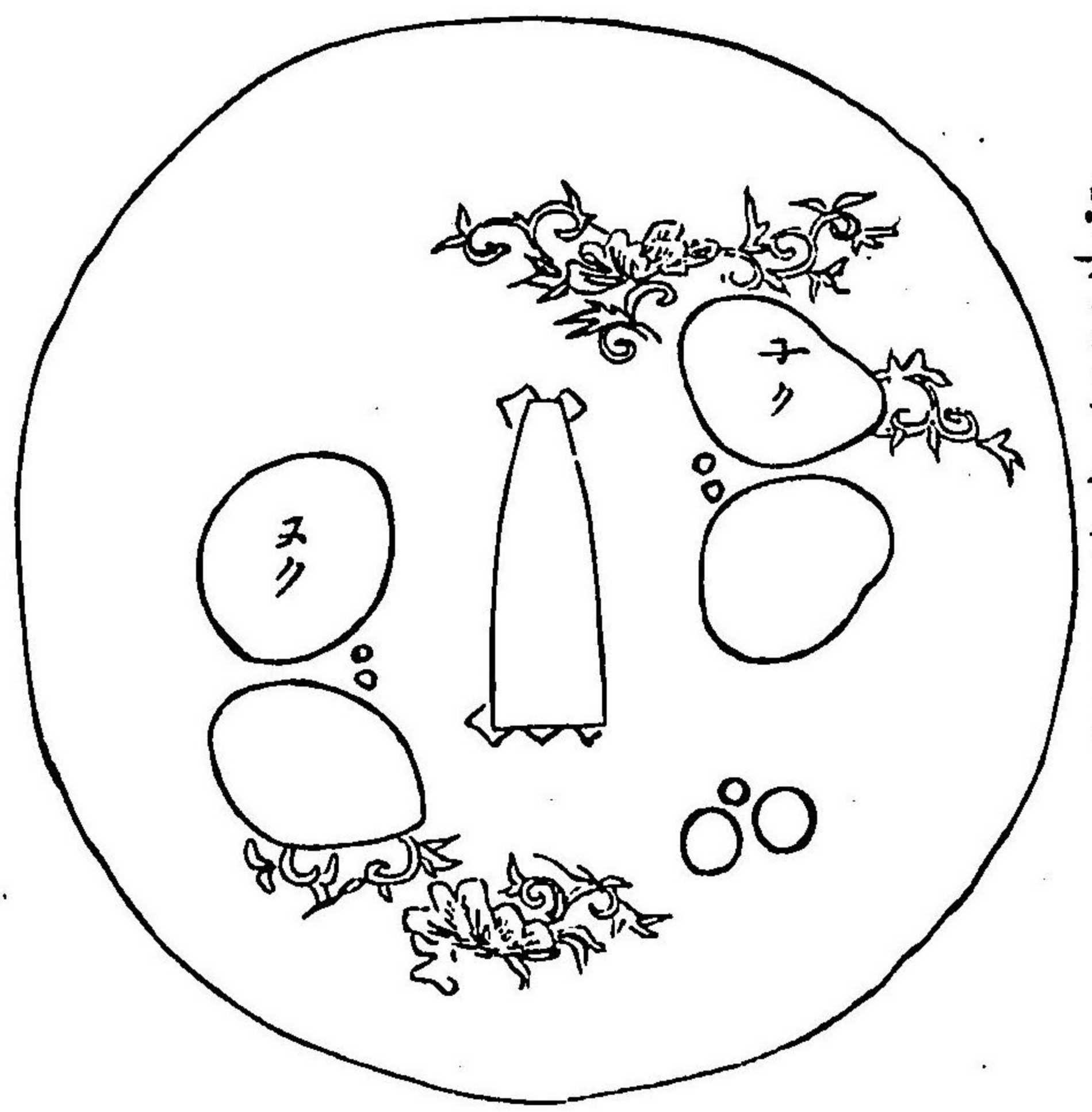
地ミカキ



口作据物

神吉樂壽作

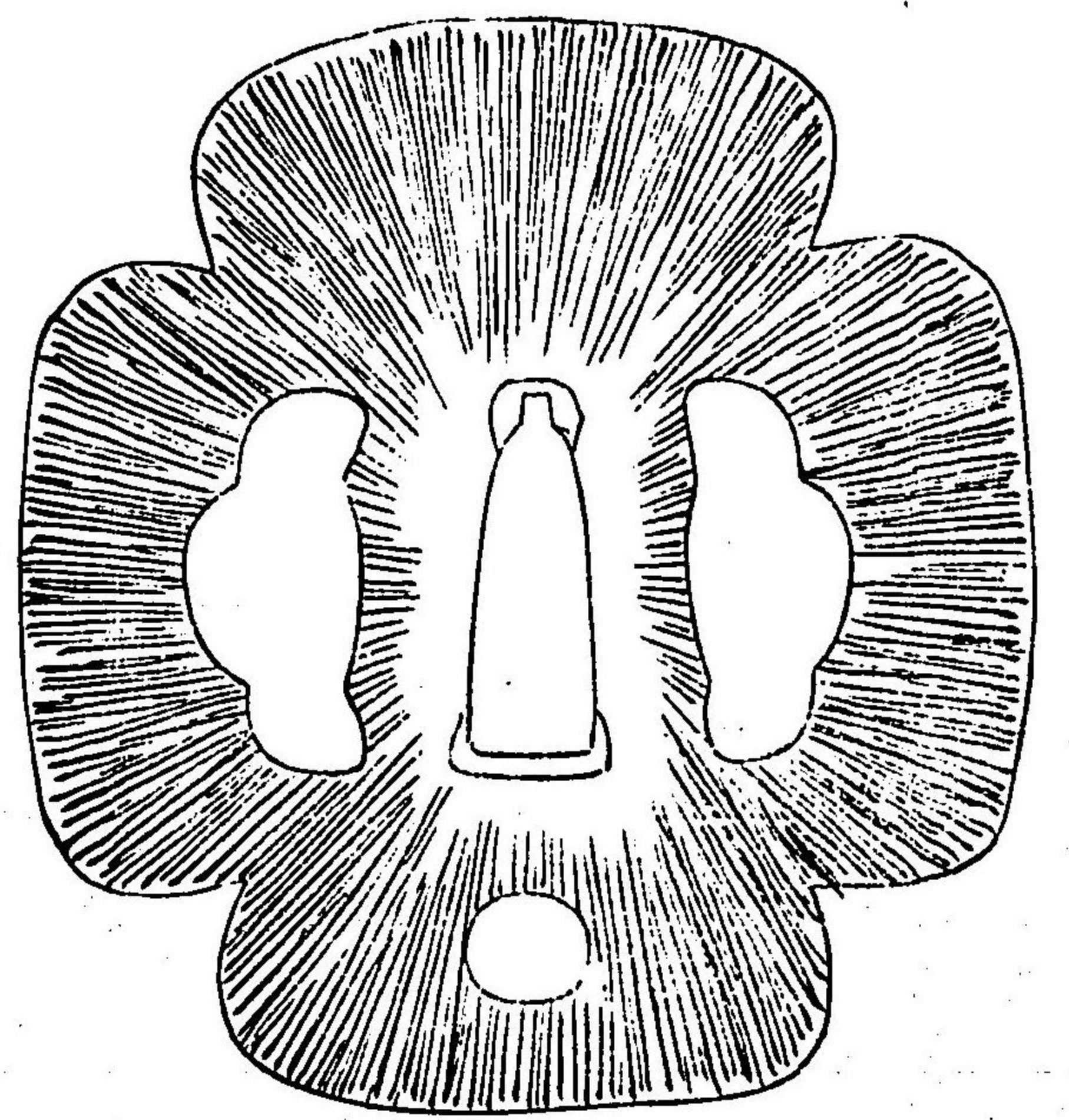
牡丹唐草金布目象眼



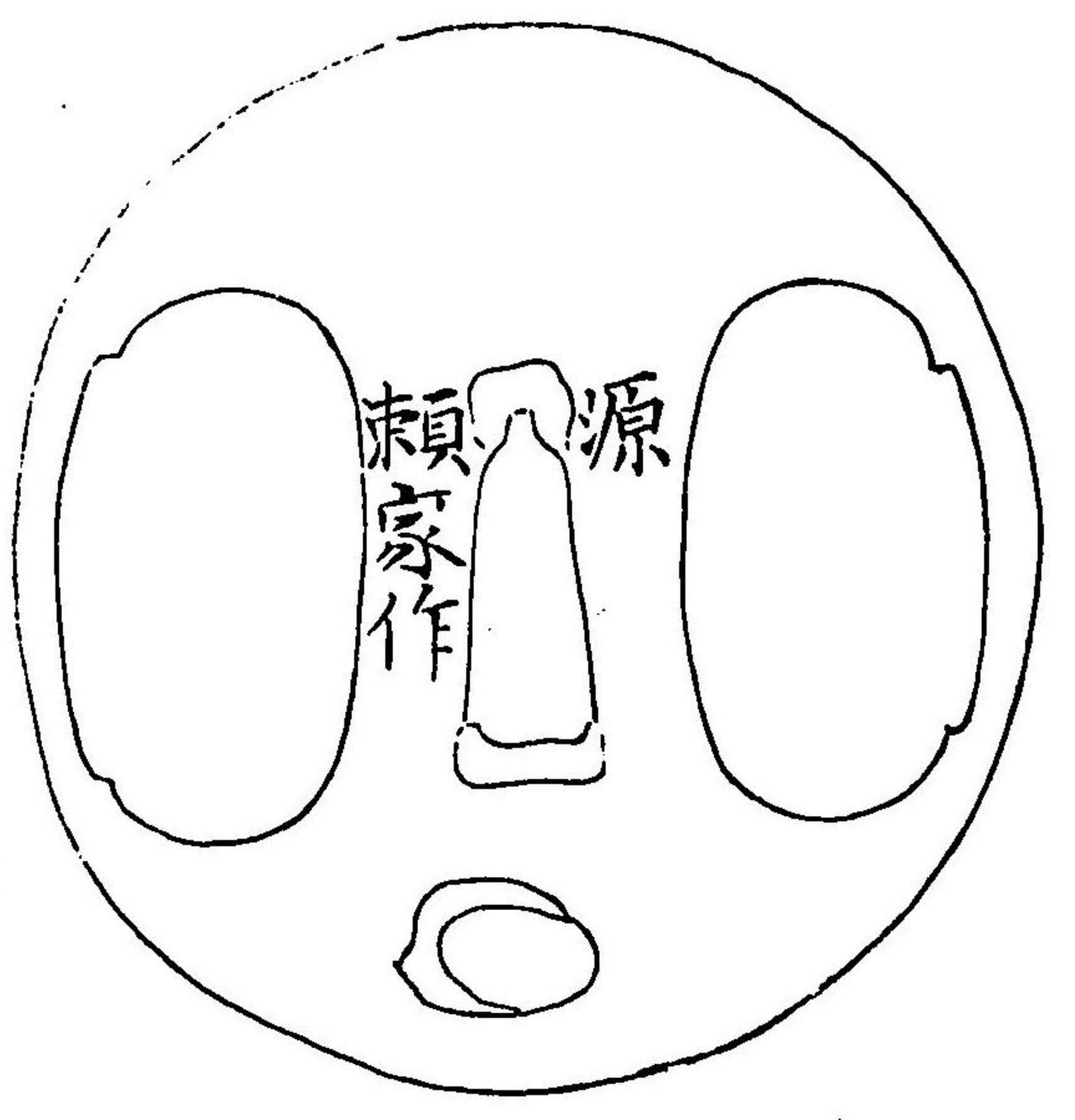
ウツ

門作

阿弥陀鈿



遠山又七作



ウツ



門頼次作

耳才迄 櫻金布目浪銀張金



ウツ象眼門





三角春信作 赤銅

環身ミカキ地ナニコ  
水禽芦花彫上但鳥目金

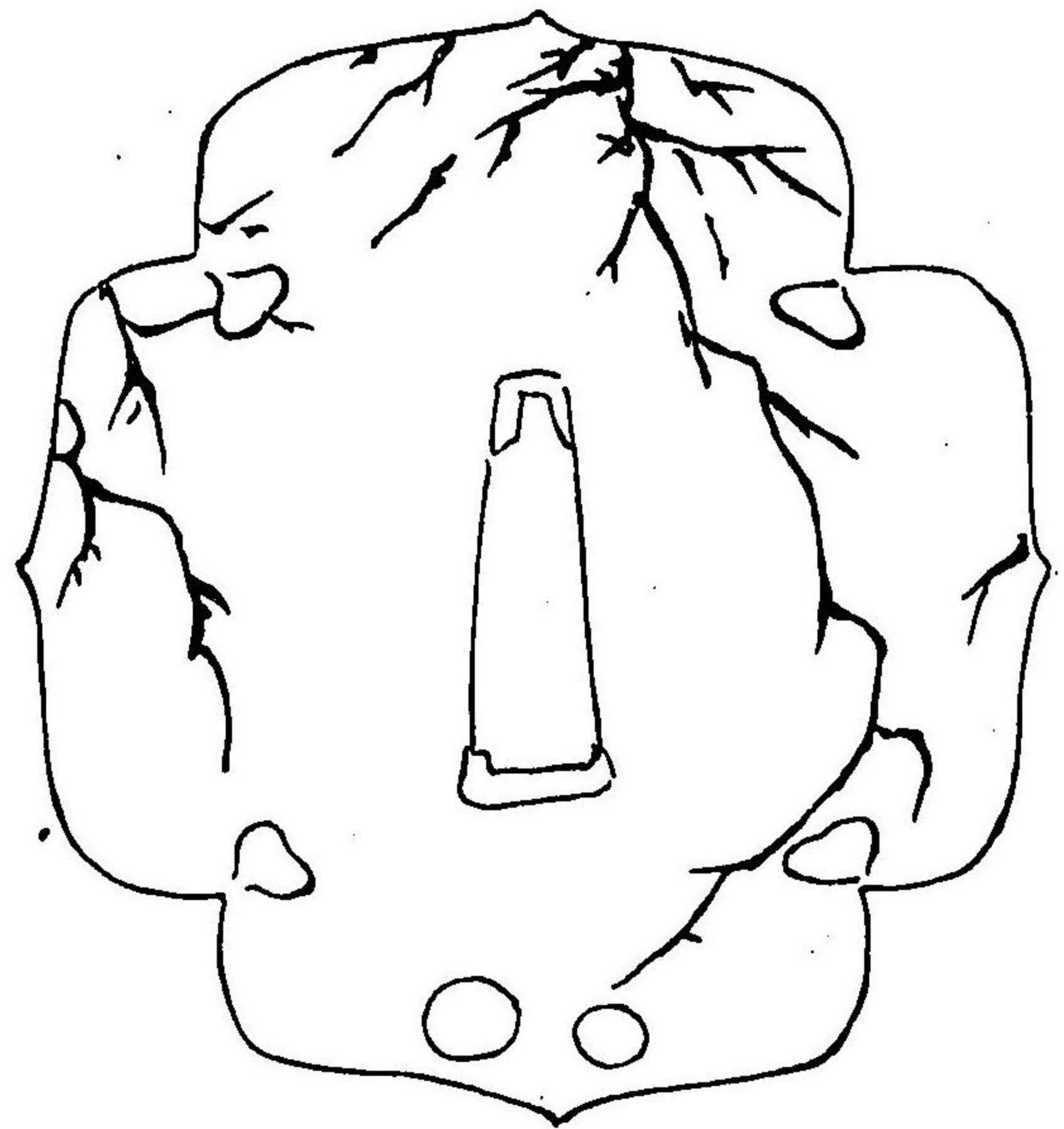


口裏



諏訪義平作

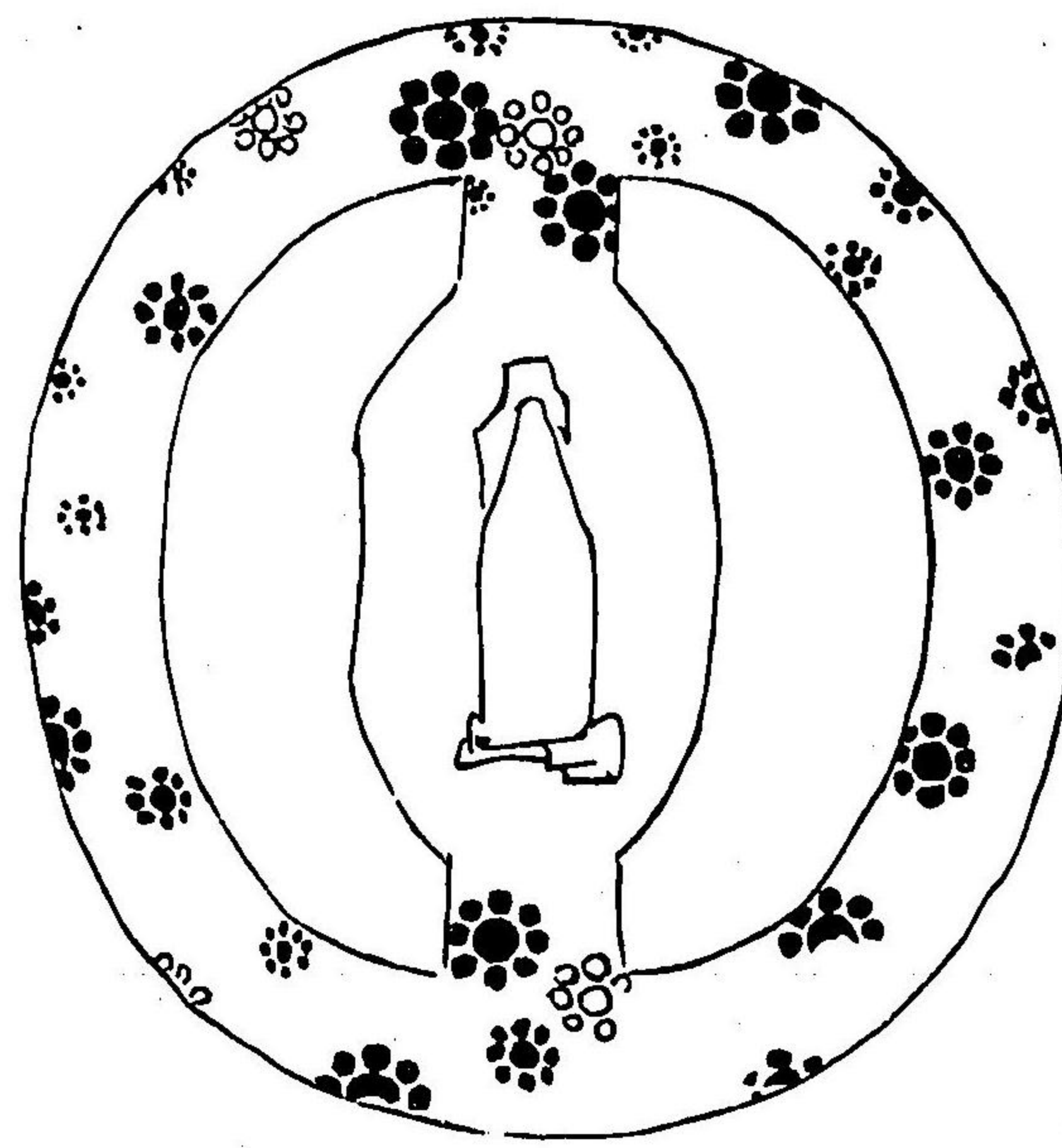
枯木金布目象眼



ウツロ

谷清兵衛作

紋金



ウツロ



明治三十五年十月一日印刷  
明治三十五年十月五日發行

著作  
所權  
有作

著者 長屋重名

印發行者兼 吉川半七

東京市京橋區南傳馬町  
一丁目十二番地

印刷所 吉川印刷工場

東京市京橋區柳町五番地

附圖終

147
157

